

---

# 薫風と一緒に

ハーブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薫風と一緒に

### 【Nコード】

N3380U

### 【作者名】

ハーブ

### 【あらすじ】

『私のマスターになって下さい！』突然現れた緑髪ポニーテールの少女『風霊使いウィン』としない男子高校生が織り成す非イ科学的なお話。

## プロローグ（前書き）

脱字を発見したので修正

## プロローグ

初夏の香りが漂う大湿原『ミストバレー湿地帯』に生命の産声が響き渡る。

「お父様、産まりました！」

「おお……ついに！」

この湿地帯に住まう『ガスタ』と呼ばれる民族の衣装を身に纏った緑髪の男性、ウィンドールがその声を聞き、椅子から立ち上がる。しばらくするとウィンドールよりも少し薄い緑色の髪を束ねた少女が揺り籠を抱え、現れる。揺り籠の中にはすやすやと眠る赤ん坊の姿。

「カーム……この娘がガスタの巫女となるのだな」

カームと呼ばれた少女は頷く。

「ええ、この娘の名前はウィンダ。私の妹……そしてガスタの巫女です」

「うむ……ガスタの神の預言通りだ」

「ですが……今日産まれた娘はウィンダだけではございません」

「何？」

予想外の報告にウィンドールは怪訝そうな表情を浮かべる。ウィン

ダ以外にも赤ん坊が産まれる話など聞いたことがない。ウィンダが双子として産まれるなどというのは尚更だ。

「こちらがその赤ちゃんのいる揺り籠です、お父様」

ウィンダールはカームの指差した揺り籠を覗き込む。そこにはウィンダと瓜二つの赤ん坊の姿があったのだ。

「……………！これは……………！」

「お父様……………」

不安そうな表情のカームを見て、ウィンダールはただ黙っていることしかできなかった。

その赤ん坊から感じたのはウィンダと似ていながらも、決定的な違いを持った力。

「この子はここに居れば……………苦しい想いをすることになるだろう。カーム、霞の谷に住まうファルコンに連絡を」

それはウィンダールにとって苦渋の選択だったに違いない。ウィンダに似たこの赤ん坊の今後を考えるのであれば、ミストバレー湿地帯ではなく別の場所で生きていかせなくてはならない、そう考えたうえでの決断だった。ウィンダールが悩みに悩んだことで導き出した答えを、カームは否定することなくただ頷いていた。

揺り籠の中で赤ん坊が無邪気に微笑んでいるのを見て、カームは心を傷める。

「この子は……………いえ、今はまだ何も考えたくはない。ごめんね……………」



## 1・そよ風、現る

『私のマスター…私のマスターはどこ？』

寂しさ故に漏らした私の歎きは誰の耳にも届かない。どんなにその存在をアピールしようとも、誰一人として見向きせず、通り過ぎていってしまう。

それもそのはず、私はカードを寄り代として宿る、言わば『カードの精霊』と呼ばれる存在。私達精霊を感じ取ることができない人にはその姿はおろか声すら届くことはない。私達を受け入れる存在が現れない限り、私達は人間の前に姿を現すことは決してない。今日も私は待ち続ける。私を受け入れてくれる人が現れるのを。

??? Side

「BF・アームズウイングでダイレクトアタック！ブラック・チャージ！」

「うわあああ！」

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果発動。そしてダイレクトアタック！ダークアームド・ヴァニッシャー！」

「ぐぬぬっ……！」

駄目だ、勝てない。俺は手に持っていたカードを机の上にはらまき、そのまま突っ伏す。

「おいおい……これで10連敗……それも同じBFを相手に」

「うるせえよ……」

対戦相手に顔を覗き込まれながら言われるが、言い返すための言葉が見つからない。

俺達が今やっているのは「遊戯王OCG」と呼ばれるトレーディングカードゲームだ。このカードゲームは数あるカードゲームのうちでもメジャーであり、多くのカードゲームプレイヤーにとって親しみ深いものとなっている。

「はあ……もう少し頑張らないとこいつにも申し訳ないな」

そうやって俺は『墓地』と呼ばれる使用したカードを置く場所に重ねられたカード達の中から、一枚のカードを取り出す。そのカードは他のカードとは異なり、白い枠のカードだ。これは『シンクロモンスター』と呼ばれ、このカードゲームにおける切り札として使用されることが多い。

「ドラグニティナイト・ゲイボルグ……龍士のフェイバリットカードじゃないか」

俺が手に取ったカードのイラストにはカードの枠と同じ白を基調とした身体のドラゴンと、それを従えた鳥人が描かれている。これこそが俺、風早龍士のフェイバリットカードである。

……そうか、自己紹介がまだだったな。俺は風早龍士<sup>かほはやしりゅうし</sup>。トレーディングカードゲームが好き नाही 男子高校生さ。

さて、俺のことでも簡単に説明しよう。

トレーディングカードゲームの好きな俺は授業を終えると真っ先に近所のカードショップに駆け込み、数少ない趣味に没頭することにしている。特にこの「遊戯王OCG」には夢中であり、小遣いの大半がカードの費用として消えていく原因もまたこの「遊戯王」だ。そんな遊戯王に興味を持ち始めたきっかけをつくったのが、先程話題にした『ドラグニティナイト-ゲイボルグ』というカードなのだ。神話に登場する槍の名を冠するそのモンスターはその名に恥じぬ力を持っており、一目で気に入ったためデッキを作ることになったのだが、いまいち勝率が良くない。

少しでも勝率を伸ばそうと今日もカードショップでデュエルに明け暮れていたのだが、ご覧の有様である。

「……………気分転換にデュエルターミナルでもやってくるか」

気分転換の方法を思い付いた俺は対戦相手に別れを告げ、カードショップの隅に置かれた『デュエルターミナル』の筐体の前に立つ。

『デュエルターミナル』はまあ言うならば『ム○キング』の遊戯王版であり、貯金箱。100円を入れることでカード1枚が出て来る…………俺達にとってはガチャガチャに近いものだ。だがこのカードの中には高価な物もあり、代表的なものでは『氷結界の龍 トリシューラ』などがあるだろうか。強さも含め非常に人気のあるトリシューラは、シークレット仕様にもなると7000円近い価値を持つお宝である。今回目当てとするものはこのトリシューラだが、デュエル中の引きにも恵まれない俺にとってトリシューラは高嶺の花なのだろうか。

とにかく100円を入れないと当たる物も当たらない、そう考え筐体に触れようとした時、足元にデュエルターミナルのカード独特の

光沢を持ったカードを見つけ、拾いあげる。普段なら目も向けないであろうカードなのだが、この日は違った。カードが何かを訴えかけてくるような奇妙な感覚を覚えながらも、俺はそのカード名を読み上げる。

「風霊使いウイン……か」

そのカードは魔法使いの少女とその使い魔が描かれた『霊使い』シリーズの1枚、『風霊使いウイン』だった。

『霊使い』シリーズは戦闘などによって裏側から表側になった時に効果を発揮する『リバーズモンスター』であり、対応する属性のモンスターを奪う効果を持っている。そう聞くと強そうな感じだが、実際はモンスターを奪い続ける条件である『表側で存在し続ける』ということと低いステータスが噛み合わず、お世辞にも強いとは言い難い。一部ではその愛らしいイラストが気に入らず批判する奴もいるため、この『風霊使いウイン』はそんな奴に捨てられてしまったのだろう。

「可哀相にな……」

罪のないカードへの哀れみ、そして先程感じた奇妙な感覚に対する興味があつてか、俺はそのカードを制服の胸ポケットに入れ、持ち帰ることにした。

その瞬間、先程感じた奇妙な感覚が再び俺に襲い掛かる。だがそれは俺に悪影響を及ぼすものではなく、ただ優しい風に身体が包まれたような感覚がするだけだ。これが屋外ならば何もおかしくはないのだが、今この感覚を味わっているのは室内であり、窓も閉まっている。冷房などでは再現できない、初夏の風に似たその発生源を探るべく辺りを見回すものの、それらしいものは見当たらない。

「おかしいな……気のせいかな？」

首を傾げながらも、デュエルターミナルの筐体に目を向ける。奇妙な感覚を味わい、妙に不安になったが大丈夫だ。今日こそはと意気込み財布に手を掛けたその時、俺の聴覚が聞き覚えのない声を捉える。

『私の……マスター……』

消え入りそうだが、聞こえた。弱々しい少女の声は確かに俺にそう言ってきたのだ。幻聴か、とも考えたがそれにしてははっきりと過ぎていく。

『あなたが……私のマスターになってくれるんですか？』

今度は背後から、しっかりと聞こえてきた。先程見回した時には誰もいなかったはず、そう思い恐る恐る後ろを振り返ると……。

『もう一度聞きます、あなたが……私のマスターになってくれるんですか？』

寂しそうな瞳をした緑髪のポニーテールの少女が俺の後ろに立っていた。

俺はその少女を前にして、目を丸くする。というのも、今少女が立っている場所には誰もいなかったはずであり、そもそも彼女はカードショップ内には今までいなかったはずである。今俺がいるカードショップはさほど広くはなく、緑髪の少女がいれば嫌でも視界に入るだろう。

「あ……」

『あ?』

「わあああああ!」

『ひゃああああ!』

突然現れた少女に対して大声を出した俺に驚き、少女も叫び声を揚げる。声を聞き付け大勢の人が俺の元にやってくるが、その視線はすべて俺に向けられており、誰ひとりとして少女に目を向けている人はいない。

「おい、どうした?」

「いきなり目の前にお…女の子が……」

声を掛けられ俺はそう答えるが、皆揃って首を傾げる。

(まさか……見えてない?こいつ幽霊?)

『……幽霊って何ですか?』

考えていることが読まれたのか、少女は言う。当然だが周りの人間には聞こえていないようだ。俺は「気のせいだったらしい」と言って大勢の人を追い返し、少女と二人きりになる。

「なあ……君は何者なんだ?幽霊かなんかなのか?」

心なしか透けている少女に、俺は問い掛ける。

『だから、幽霊って何なんですか？』

やはり言葉は通じるようだ。安心した俺はそのまま会話を広げていくことにする。

「あー、幽霊ってのはな……………この世に未練を残して死んでった奴がなるんだ」

『じゃあ違いますね。だって私、まだ死んでませんから』

少女はにこりと微笑みながら答える。

『あなたの知りたがってる答えはあなたの持っているカードにありますよ？』

「カード？」

俺の持つカードと目の前の少女に繋がりがあるものはない…………いや、一枚だけある。俺は胸ポケットの中に入れられた一枚のカードを取り出し、そのイラストと少女を見比べる。

「わかったぞ……………」

『でしょ？』

「ああ…………お前がコスプレイヤーの幽霊だつてことが！」

『がくつ！な、なんでそうなるんですか！私はコスプレイヤーなんかじゃなく本物です！』

「幽霊」はわからないが「コスプレイヤー」の意味はわかるらしい目の前の少女。冗談のつもりだったのだが、想像以上に反応が面白かったのもう少しからかうことにする。

「はあ…冗談だって。君はこの風霊使いウインのカードに宿った…」

『もう、やっとわかってくれたんですね……』

「風霊使いウインの幽霊なんだな。捨てられた恨みを晴らすべく現世に……」

「……も、もういいですよ…うっ」

からかいすぎたのか、少しいじけ始めてしまった。

しばらく拗ねていた風霊使いウイン（みたいな人）をなんとか宥め話を聞くが、どれもこれも信じがたいものだった。

「……つまり君は風霊使いウインの精霊で、本物だと」

『はい』

「で、主となりうる人物が現れるまで待っていた。そしてその主になりうる人物ってのが俺だったと」

『はい。……あの、これだけ話しておいて、私のマスターにならな

「いなんてやめて下さいね？」

訴えかけるような眼差しで彼女は俺のほうを見る。俺は彼女の頭を撫でるふりをしながら、こう答える。半透明の人相手に頭を撫でるのは無理だから仕方ない。

「……………エイプリルフルはとっくに過ぎてるんだ。冗談はほどほどにな」

「え、エイプリルフルが何かは知りませんが、冗談なんかじゃありません！」

顔を真っ赤にしながら、怒ったように彼女は言った。本人からすれば真面目に話しているつもりなのだろうが、残念なことにそのような非現実的な話を現代っ子の俺に話しても信じてもらえるわけではない。

「あなたに私のマスターになってもらわないと困るんですよ！」

「あー……………はいはい」

「ううう……………相手にもしてませんよね、それ」

冗談の相手をするくらいならさっさとデュエルトーナメントに1000円を入れる作業をするっての。一人騒ぐ「自称」風霊使いウインの精霊を無視し、俺は1000円玉を手にし、トリシューラを手に入れるための戦いを始める。

しかし2、3000円以上使ったにも関わらずトリシューラはおるかウルトラレアのカードすら姿を現さない。引きの悪さはこんな所

にまで悪影響を及ぼすらしい。

『……私の力があれば引き運もよくなるんですがね』

うなだれる俺の姿をじと目で見ながら、ウイン（みたいな人）は言う。正直そんなことを言われても信じられるわけがない。だがもし、それが本当なら……。というか幽霊でもないのに半透明で、周囲の人間に気付かれないのは何故？あらゆる思考の末、もしかしたら本当に精霊なのかもしれないという考えに至り、駄目元で信じてみてもいいのではないかと思えるようになった。それほどまでにトリシユーラに対する信念は凄まじいものになっていたらしい。ともかく俺は決意を固めた。

「お願いします、俺に力を」

『……いいでしょう。心の隅でまだ私のことを疑っているでしょうし、ここで完全に信用させてみせます』

彼女はそう言う俺の額に手の平を当て、俺には到底わかりそうにない言語で何かを呟くと、うんうんと頷く。

『これで私とあなたとの契約は完了。あなたは私のマスターとして認められました。あ、契約というのは……』

「そんなことはいいから早く俺に引き運を！」

一刻も早くトリシユーラを手にした俺はウインの言葉を遮って言う。『せっかちな人だなあ……』と苦笑しながらも、彼女はデュエルターミナルを指差す。

『ご心配なく。ちゃんと引き運は上昇してますから。ほら、早くしないと割り込まれて当たりを持ってかれちゃいますよ?』

「あ、ああ……」

ワインに促されながら100円玉をデュエルターミナルに入れる。100円の代償としてやがて姿を現したそのカードは白い枠に縁取られた、シンクロモンスターのカード。どきどきしながら取り出したカードのイラストには、3つの首を持つ「氷結界」最強のドラゴンの姿がしっかりと描かれている。それは紛れも無く俺が待ち望んでいたカード『氷結界の龍 トリシューラ』であった。しかもシークレット仕様。

驚きを隠せないままワインの方をちらりと見ると、ほらねと言いたげな表情で俺を見ていた。

「で、でも偶然だってことも……」

『そう思うならまたやってみてはどうでしょう』

目当ての物は手に入れたが、推測を確信に変えるため、再び100円玉を投入する。姿を現したカードは、ドラゴン族に革命を齎した存在と言われ、極めて封入率の低いとされているモンスターカード『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』だった。単品買いをするには3000円以上の出費は覚悟する必要があるであろうレアカードの出現に、俺の推測は確信に変わる。

「君は本物の……精霊」

『はい! やつと信じてもらえたみたいでよかったです!』

ワインもにっこり。

「そうかぁ……なんか疑っちゃって申し訳ないな」

『まあ……すぐに信じてもらえるとは思ってませんでしたから』

笑って許してくれる辺り、心が広い少女だと思える。

それにしても、カードの精霊は本当にいるものなのか。未知との遭遇、そしてトリシューラの入手と、今日はいいい日だ。何やら契約というのも……あれ？

「そついえば、契約って？」

『説明止められたから知らないままでしたね。契約というのは、マスターとなる人物が精霊と結ぶことで成されるもので、精霊はマスターに様々な恩恵を与えるなどの役目が与えられます。一方精霊のマスターとなる人物は……』

ワインは、一度説明を止めると意味ありげに微笑み、その後こう続けた。

『精霊と共に暮らす義務が与えられます』

訂正、今日はいいい日では終わらないらしい。

というわけでやむを得ずワインを連れ帰宅することになったわけだ。

帰宅後キッチンで夕飯を作っている母さんに声を掛けたが、「おかえり」といつもと変わらぬ反応であり、改めてウインの姿が他の人物には見られないということを実感することになる。

そしてついに風早家2階にある俺の部屋に到着。ある意味で人外とはいえ、女の子を部屋に連れ込むのは初めてだ。生憎毎朝起こしに来てくれる妹や異性の幼なじみはいない。強いて言えば容赦なく布団を引っぺがす母さんがいるくらいだろうか。

『……私、男性の部屋に入るのは初めてなんです！何だか楽しみで堪りません！』

おいおい、別に初めての遊園地に行くわけじゃないんだぞとツッコミかけたが、よく考えるとウインにとってはごく自然の感情なのかもしれない。人間界と精霊界とやらでは文化の違いがあるだろう。こっちでしか見られないものがあるなら興味が湧くのも無理はない。

『男性の方ってあれですよね！ベッドの下に女性には内緒のあれを隠してるんですよ、そうですね！』

そっちなかい。確かに俺は健全な男子高校生だがそのような物を買う勇氣は微塵もない。一度友人が買いに行くのに付き合ったことはあるが、あの時程周囲の視線に敏感になったことはないだろう。

まあそれはさておき、妙なことを言い出したウインを放置してさっさと部屋の中に入ることにしよう。

俺の部屋はお世辞にも広いとは言えないが、まあ居候が1人くらい居ても問題はないだろう。いや、それが異性で、しかもカードの精霊という得体の知れない存在の時点である意味問題か。

「とりあえず……ベッドの下を覗き込むのはやめなさい。君の期待するものは絶対ないから」

『むー……』

がっかりされても反応に困るといっか、なくては駄目なのか、あれ。

「で、だ。俺は居候するのは許可してもいいんだが、他はどうするんだよ」

落ち着いたところで重要な話に移ることにする。ウインが俺の精霊として居候するのはまあよしとしよう。だが俺が学校にいる間はどつするの、食事などはするの、もしするのであればそれらをどつ熟すかなど、問題は山ほどある。

「俺が学校の時もお前はついてくるのか？」

『学校！？こっちにも学校があるんですか！？』

学校という言葉だけに反応して、ウインは目を輝かせる。

『凄いです！精霊界と共通の文化、発見です！』

「いや……この世に学問がある限りは学校は必要不可欠じゃあ」

『私、こっちの世界の学校に行つて、勉強してみたいです！』

「勉強つて……」

まあ確かに人間界で勉強すれば、精霊界では身につくことのない知識が付くのかもれないのなら十分有意義だろうが、それ以前にクリアしないといけない課題が多すぎる。

「戸籍がないし、そもそもそんな半透明な状態じゃあペンも持てないんじゃないか？」

『それに関してはノープロブレムです！はっ！』

ワインが杖を構えて掛け声を揚げると、先程まで半透明だった彼女の姿が鮮明になる。すると彼女は、本来触れられないはずの俺の肩に触れながら言う。

「私、実体化できますから」

「マジかよ……それじゃあ」

「はい、人間と同様の生活を送ることも可能です！」

試しにワインの頭を撫でてみるが、確かにさらさらとした髪の毛の触感を感じる事ができる。非常によく手入れされており、ほのかに甘い香りもする。シャンプーか何かの香りだろうか。

「あ、あんまり頭撫でたりしないで下さいね……恥ずかしいし……」

子供扱いされていると感じつつもやや嬉しいのか、ワインは少し赤面しながら言う。

「……確かにこれなら人間と同じように活動できるけど、戸籍がないのは色々まずいだろう」

「……ですよねえ。こればかりはどうしようも……」

先程までの表情とは打って変わり今度はがっかりとしたような表情を浮かべる。困っている人、特に困っている女の子がいると放っておけない性分の俺は、そんな彼女を放っておくことができず、どうにかする手段を考える。

さすがにずっと精霊の状態で居させるのは彼女にとって良くないだろう。せつかく人間界に来たのだから、しっかりと異文化に触れるべきだろう。そうなるといずれは戸籍の問題が立ちはだかる。かといって俺だけの力ではどうにもならない。どうするべきかを考えた時、導き出せる答えは1つしかない。

「ウイン、俺の母さんに相談しに行くぞ」

## 1・そよ風、現る（後書き）

この小説の主人公となる風早龍士君はドラグニティ使いになるわけですが、プロローグに登場したのはガスタの方々。どういうことなの……、とお思いでも今は気にしてはいけません。

そして龍士の相棒はご存知『風霊使いウィン』。彼女がドラグニティと共存できるのか……それはまあお楽しみですよ。最終的にオリカになりそうですけど。

ちなみに彼女が実体化している時は「」、そうでない時は『』と微妙にありがちな差を付けています。

文章としてはまあこんな程度のレベルですが、よろしくお願い致します。

## 2・魔槍の竜騎士 ドラグニティナイト・ゲイボルグ！（前書き）

Dゲイザーだとモンスターの登場だとか攻撃だとかで遠慮なく街を破壊できますね。

後半デュエルあります。

テキストはWiki参照。

## 2・魔槍の竜騎士 ドラゲニティナイト・ゲイボルグ！

龍士Side

さて……俺は今、人生の内で5本の指に入るほど困難な壁に立ち向かおうとしている。何せ俺と同じくごく普通の家庭で育てられてきた母さんに、非科学的な存在『カードの精霊』であるウインの事を話さなくてはならないのだ。

恐らく信じてはもらえないだろう。だがやらねばならない。俺の背中にしがみつき、上目遣いでこちらを見てくる少女のために……。

「いくぞ……」

RPGでラスボスを目の前にしている気分だ。キッチンに立つ母さん、達子に声を掛けるべく、俺はウインと共にキッチンに繋がるドアを開ける。

「母さん、相談があるんだ」

達子Side

「母さん、相談があるんだ」

つい先程帰ってきた息子から突然相談を持ち掛けられた。長らく息子から相談を持ち掛けられることなどなかったので一瞬戸惑ってし

まうも、優しく微笑み振り返る。

「どうしたの？龍士が相談だなんて珍しい。……あら？その子……」

私は龍士の後ろから申し訳なさそうにこちらを見ている少女に気付く。先程龍士が帰って来た時には他に人の気配はしなかったし、玄関に靴はなかった。それに彼女は世界中探してもなかなかいないであろう緑の髪をポニーテールにしている。しかし大人しそうな少女がむやみに髪を染めるようなことをするとは思えないし、そもそも髪を染めることでは決して生まれない鮮やかさをその髪は持っている。龍士の相談というのは恐らく、この少女のことだろうと思う。

「これから話すことは、とても信じられないことだろうけど……でも聞いて欲しいんだ」

そう言って龍士が見せてきたのは、カードのうちの1枚『風霊使いウイン』だった。私も何度かそのイラストを見たことはあるが、これから始まる話とそれと何の関係があるのだろう。

「実は……」

龍士Side

俺は今までであった非イ科学的、かつ非イ現実的なことを包み隠さずすべて話し、そのうえでウインがこちらの世界で勉強をしたがって

いることなどを相談した。

「……………そう」

母さんは黙って頷くだけで、何も聞き返してはこない。信じているのか、信じていないのかわからない。でも俺は母さんを信じるしかない、そうすることでもしか解決できないことだから。

「カードの精霊なんてくだらない冗談…………て、言いたいところだけど」

そう言うと母さんは俺の肩に手を置きながら、こう続けた。

「私は龍士を信じるわ。だって…………あなたは私に嘘をついたこと、1度たりともなかったもの」

「母さん…………」

とりあえず信じてもらえたらしく、一安心だ。こんなことでも信じてもらえたのは、母さんが俺のことを本当に信頼してくれているということに違いない、そう考えると無性に嬉しくなった。

次に母さんは、俺の後ろに立っているワインに近づき、優しく微笑みかける。

「さてと…………あなたの名前、ワインで合ってるわね」

「ひゃ…ひゃい…………」

緊張しているのか、呂律が回っていない。

「そんなに緊張しなくても、私はあなたの味方よ？さあ、肩の力を抜いて」

「へ？あ……はあ」

ウインは深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる。

「……もう大丈夫です、ありがとうございました」

「お礼を言われるほどのことじゃないわ。それよりも、あなたのことだけど……」

ここでやっと本来相談すべき話題に移ることができた。案外そんなりと相談できて拍子抜けだったがまあそれはそれでありがたいことだ。

「まずウインちゃんがこつちで暮らすための戸籍なんだけど、これは何の問題もないわ。適当に作っちゃいましょ」

「は、はあ……」

「そんな簡単なもんかよ……なんかやだな」

作るなんて簡単に口に出して言えるもんじゃない。というかそんなこと現実に可能なのか疑問に思えてくる。

「心配しないでいいわ、私の人脈を信用しなさい」

駄目だそれ！色んな意味で信用しちゃ駄目な気がする！

「……………お願いします」

ウインもお願いしたら駄目だろ！……………でもどうやってするつもりなんだろう。単に役所に知り合いがいて、事情を話すだけならいいなあ……………だったらいいなあ……………。

「あとウインちゃんが学校に通うことなんだけど、これはちょっと厳しいわね」

「そうなんですか？」

「だって……………あなたいきなり人間の学校の中に飛び込んで、ホントに勉強できる？歴史とか、明らかにそっちの世界とは違うじゃない。進捗のこともあるし、勉強についていけない可能性が非常に高いわ」

「うっ……………確かに、そうですね……………」

母さんの言うことには一理ある。残念なことに高校では『赤点』という厄介な存在があり、勉強がついていけないということとイコールで繋がっていたりする。ウインが人間界の学校や勉強に興味があるのは承知しているが、後々苦勞することがわかると考え無しに許可できない。とはいえ、ウインの考えをリスペクトしたい俺は一応助け舟を出すことにし、口を開く。

「でもさ、ウインはこの通り人間界の勉強をしたがってるわけだしさ……………」

「誰も勉強するなどは言っていないでしょ？龍士、私の職業が教師であること、忘れてない？」

「忘れてなんか……いや、そうか、そういうことか」

説明が不足していたが、俺の母さんは俺の通う高校で教師をやっている。担当教科は国語全般で、カードゲームを盛んに行う『デュエル部』という部活の顧問も担当しているのだ。ちなみに俺も『デュエル部』に所属している。半強制的にだがな。

で、母さんが教師ということは専属の家庭教師がいるも同然であり、ウインの勉強に関しても困らないというわけだ。

「ウインちゃんの勉強は私が教えるから、大丈夫よ」

「わあ…マスターのお母様がお勉強を教えて下さるなんて、素敵です！」

「マ、マスターって……龍士、どういふことかしら？」

「……また説明事項が増えた」

事情を知らない人からすれば奇妙なことだ。とりあえず俺が1人の少女にマスターと呼ばせてみたいで気分が悪くなるのは確かだと言っておこう。というわけで仕方なく俺とウインの関係に関する説明をすることにした。

ウインSide

結局マスターのお母様が私に勉強を教えて下さることになりました。お母様が教師だなんて、マスターもいつでも授業が受けられるも同

然ですよ。ちょっと……羨ましいかな。

「ウイン？」

「ふえっ！？な、なんですか？」

「いや……なんかぼーっとしてたみたいだから」

「ぼーっとはしてません……ただ、少し羨ましかっただけです」

「ん？」

「あ……いえ、何でもないんです」

そう、何でもないこと。私には両親がいません。親代わりになる人はいましたが、血の繋がった親は私の側にはいませんでした。私の記憶には私の両親の姿はありませんが……どこかにいるのなら、いつか会ってみたいです。

「それにしても、龍士はこれから大変ね」

「大変って？」

「だって……こんな可愛い女の子を守る使命ができたんだもの。大変よね」

可愛い……女の子？守る……？私のこと、なんでしょうが。

「守るなんて、大袈裟な」

「大袈裟なんかじゃないわ。もし厄介な人間に、ウインがカードの精霊だつてことがばれたらどうすんのよ。大騒ぎになっちゃうじゃない!」

誰もそう簡単に信じないとは思いますが……。万が一のことを考えて下さっているのでしょうか。

「龍士……あなたまさか、そんな覚悟をしてないなんてこと、ないわよね?」

「なっ……そんなわけないだろ!」

「そう……それを証明する手段があるとすれば、1つしかないわよね?」

お母様がエプロンのポケットから取り出したそれは間違いない……デッキ!お母様はデュエルを通して、マスターの覚悟を確かめようとしています!

「カードの精霊を持つ者の覚悟はカードで示せてか」

「ええ、デュエルでは決して嘘はつけないって言うでしょ?」

人間界でもそういう思想があるんでしょうか。よくわかりませんが、マスターのデュエルは見てみたいです。

「おもしれえ……そんなら俺の覚悟、見せてやるぜ、母さん!」

なんというか、遊戯王お得意の『困った時はデュエル』の流れで、俺は母さんとデュエルすることになった。まあここまでならぎりぎり理解できなくもないけど、よくわからないのは……。

「なあ母さん……デュエルするのになんで庭に出たんだ？」

「理由は……これよ！」

母さんから投げられたもの、それは……。

「Dゲイザー、それにDパッド!？」

装着することでバーチャル空間を利用したりリアルなデュエルを体感することができるようになる『Dゲイザー』そしてデッキをセットし、デュエルするための『Dパッド』……。どちらも『デュエルディスク』の後継機であり、机にカードを並べるよりも盛り上がるデュエルを演出することができる。

「これから必要になるでしょ？ 私からのプレゼントよ」

「でも、これ高いんじゃない？」

「甘える時はとことん甘えなさい！これから甘えられないことなんていくらでもあるんだから！」

「母さん……」

本来ならこのDゲイザーは、欲しいからと言って簡単に手に入るものではない。それなりの金額を出して購入する必要がある。俺も前々から欲しいとは思っていただけに、この思わぬプレゼントは非常にありがたかった。

「ありがとう……」

「さあ、構えなさい！デュエルよ！」

「いくぜ母さん……デュエルだ！」

俺達の掛け声に応じDパッドが展開され、カードをセットするスペースが生まれる。

龍士    L i f e 8 0 0 0

達子    L i f e 8 0 0 0

ライフポイントは当然8000。4000では俺が今から使うデッキでは一気に削れてしまうからな。

「俺の先行だ、ドロー！」

普段悪い手札も、今は良く感じる。これも精霊の恩恵だろうか。

「俺はドラグニティ・トリブルを攻撃表示で召喚！」

俺の元に、羽根状の飛び道具を手にした鳥人が舞い降りる。攻撃力は少し頼りないものの、俺のデッキ『ドラグニティ』では重宝する能力を持っている。

「トリブルの効果！こいつが召喚された時、デッキからレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を墓地に送る！」

効果発動の宣言を終えた俺は、自動でデッキから抜き出された目的のカードを墓地に送る。

《ドラグニティ・トリブル》

効果モンスター

星1 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 500 / 守 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキからレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

「そして俺はカードを2枚セットし、ターンエンド！」

2枚の裏側のカードが目の前に現れたかと思うと、すぐに姿を消す。この2枚のカードを利用することで、相手を妨害したり自分を補助したりする。俺が伏せたカードもまた、低攻撃力のトリブルを守るカードだ。

龍士 Life 8000

手札 3

フィールド

《ドラグニティ・トリブル》

伏せカード2枚

「私のターン、ドローカード!」

俺がターンエンド宣言をした事で、母さんのターンに移る。

「私はグリーン・ガジェットを召喚!」

母さんの場に、緑の体をした歯車状のモンスターが姿を現す。召喚することで仲間を手札に呼び、後続を絶やさず使いやすい『ガジェット』シリーズの1体だ。

「グリーン・ガジェットの効果、デッキからレッド・ガジェットを手札に加えるわ」

《グリーン・ガジェット》

効果モンスター

星4/地属性/機械族/攻1400/守600

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

《レッド・ガジェット》

効果モンスター

星4/地属性/機械族/攻1300/守1500

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

《イエロー・ガジェット》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1200 / 守1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

このように『ガジェット』はそれぞれがサーチし合うことでループしていくのだ。後は豊富な畏カードで相手を除去し、途絶えないモンスターによる攻撃をしていくのみ。単純だが強力、それが『除去ガジェ』と呼ばれるデッキの特徴だ。今回の母さんのデッキはこの『除去ガジェ』か、その派生デッキだと思われる。

デッキからカードを手札に加えた母さんは、そのまま『バトルフェイズ』に移行することを宣言する。

「バトルよ！グリーン・ガジェットでトリブルに攻撃！」

グリーン・ガジェットがトリブルに殴り掛かろうと迫る。このまま攻撃が通ればトリブルは戦闘破壊され、俺は900ポイントのダメージを受けることになる。それを防ぐために、俺は伏せカードのうち1枚を発動させる。

「畏カード、くず鉄のかかしを発動！」

トリブルの前にヘルメットを被せられたかかしが出現し、グリーン・ガジェットのパンチを受け止めた後伏せカードに戻る。トリブルは無傷だ。

「くず鉄のかかしは相手モンスター1体の攻撃を無効にし、その後

再びフィールドに伏せられる！」

《くず鉄のかかし》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンスター1体の攻撃を無効にする。発動後このカードは墓地に送らず、そのままセツトする。

「ふふ、やるわね。カードを3枚伏せて、ターンエンドよ！」

母さんのフィールドに3枚のカードが伏せられる。この時を待ち、トリブルをフィールドに残しておいた俺は、くず鉄のかかしと共に伏せておいたカードを発動させる。

「エンドフェイズに罠カード、ゴッドバードアタックを発動！鳥獣族モンスター、トリブルをリリースすることで、相手フィールド上のカード2枚を破壊する。伏せカード2枚を破壊するんだ、トリブル！」

罠カードの発動に合わせてトリブルは飛び立ち、凄まじい勢いで母さんのフィールドの伏せカード2枚を破壊し、家の庭の木まで薙ぎ倒して遙か上空に姿を消した。

《ゴッドバードアタック》

通常罠

自分フィールド上に存在する鳥獣族モンスター1体をリリースし、フィールド上に存在するカード2枚を選択して発動する。選択した

カードを破壊する。

この演出もDゲイザーによるバーチャル空間ならではの。どれだけ建物を壊してモンスターが出現しようと、現実には何も影響はない。

達子 Life 8000

手札 3

フィールド

《グリーン・ガジェット》

伏せカード1枚

伏せカードを破壊し、ターンプレイヤーは俺に移る。

「俺のターン！」

Dパッドに挿入されたデッキから勢い良くカードをドローし、そのカードを確認する。

「(ドラグニティ・ドウクス……!)」

『ドラグニティ』の核を担うモンスターをドローしすぐに召喚しそうになるが、母さんのフィールドに伏せカードが1枚残されていることに気付く。

『ドラグニティ・ドウクス』は召喚することによって効果を発揮するが、伏せカードで対処された場合何もできないまま退場し、しかも基本的に1ターンに1度だけ許されている通常召喚も行っていない、それが毎ターン続くことで地道にライフポイントが削られてい

く。

「（俺の手札にはドラグニティ・レギオンもいる。こいつの効果でグリーン・ガジェットを破壊し、地道に攻めていくか……？）」「

手札の《ドラグニティ・レギオン》はある条件を満たせば相手モンスターを効果により破壊できる強力なモンスター。こちらはドウクスよりも罠に掛かりにくいいため安全だが……。

「くっ……」

「マスター！」

手札のカードを見て悩む俺の姿を見て、側で見ていたウィンが俺に声を掛ける。

「マスター、あまり引きが良くないとおっしゃっていましたが、違います！」

「ど、どういうことだ!？」

俺の引きが良くない、というのは違う?どういうことなんだ?

「マスターは…自分のカードの可能性を否定しているだけです!だから今も相手の伏せカードを恐れているのです!」

「カードの可能性?」

「恐れなくて下さい、マスター!でないと勝てませんよ!」

俺が勝てない理由……それは決してカードが弱いわけではない。ただ目の前の罠を恐れ、カードの可能性を引き出すプレイングが上手くできていなかっただけだ。「引きが悪い」などというのは可能性を否定し、言い訳をしていただけに過ぎなかったんだ。活路は常に手札の中にある、恐れてはいけない！

「俺はドラグニティ・ドウクスを召喚！」

指揮棒らしきものを手にした鳥人の男性が、先程のトリプルと同じようにフィールドに現れる。彼の表情に恐れなどなく、瞳からは並ならぬ闘気が溢れている。

《ドラグニティ・ドウクス》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守1000

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×200ポイントアップする。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

伏せカードは発動する気配を見せない。これならいける！

「ドウクスのモンスター効果！このカードが召喚された時、墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族ドラグニティ1体を装備することが出来る！さらに、ドウクスはフィールド上のドラグニティの数×200ポイント、攻撃力をアップさせる！俺はチューナーモンスター、ドラグニティ・ファランクスを墓地から装備させる！」

「トリブルの効果で墓地に送ったモンスターね」

ドウクスの後ろに2本の角が生えたドラゴン、ファランクスが現れる。このファランクス、俺のデッキにとって無くてはならない存在だ。

ドラグニティ - ドウクス

攻1500 1900

「そして、装備されているファランクスの効果！自分フィールド上に特殊召喚することができる！」

《ドラグニティ - ファランクス》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 500 / 守 1100

このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「チューナー……龍士、あなたシンクロ召喚をするつもりね」

「当然！レベル4のドウクスに、レベル2のファランクスをチューニング！」

フアランクスが2つの円に変わり、ドウクスがその中に入り込む。

「疾風纏いし魔槍の竜よ、邪を貫き天を舞え！シンクロ召喚！」

バーチャル空間にまばゆい光が発生し、その光の中から白いドラゴンに騎乗した竜騎士が姿を現す。

「薙ぎ払え、ドラグニティナイト・ゲイボルグ！」

俺がそのモンスターの名を叫ぶと、ドラゴンがそれに応えるように雄叫びをあげる。

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1100

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードが戦闘を行うダメージステップ時に1度だけ、自分の墓地に存在する鳥獣族モンスター1体をゲームから除外して発動する事ができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、ゲームから除外したそのモンスターの攻撃力分アップする。

「バトルだ！ドラグニティナイト・ゲイボルグで、グリーン・ガジエットに攻撃！ストームランス！」

騎乗しているドウクスらしき鳥人がゲイボルグをグリーン・ガジエットに迫らせ、持っている槍で貫こうとする。そこですかさず効果の発動を宣言する。

「ゲイボルグの効果発動！ダメージステップに1度だけ、墓地の鳥獣族モンスター1体をゲームから除外することで、エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力分、攻撃力を上昇させる！俺はドウクスをゲームから除外し、攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

槍に緑色の光が宿り、その力を増大させ、そのままグリーン・ガジエットを貫く。

ドラグニティナイト・ゲイボルグ

攻2000 3500

「っ……なんてパワーなの……わずか1枚の手札から攻撃力3500のモンスターで攻撃を仕掛けてくるなんて」

達子 Life8000 5900

「グリーン・ガジエット、撃破だ！」

少ない手札から一気に大ダメージを与えに行けることがドラグニティの醍醐味の1つだ。このゲイボルグもそれを実現できるモンスターの1体であり、俺のフェイバリットカードだ。

本来なら相手の反撃に備え、墓地のドウクスは温存すべきなのだが相手は『除去ガジエ』だ。出し惜しみをしていれば真価を発揮する前に破壊されてしまうので、あえて使うことにしたのだ。

「今の俺達なら負けない！この調子でいくぜ、ゲイボルグ！」

ゲイボルグは再び雄叫びをあげて応える。この勝負、このまま押し切る！

## 2・魔槍の竜騎士 ドラグニティナイト・ゲイボルグ！（後書き）

ウィン「今回の最強カードです」

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1100

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードが戦闘を行うダメージステップ時に1度だけ、自分の墓地に存在する鳥獣族モンスター1体をゲームから除外して発動することができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、ゲームから除外したそのモンスターの攻撃力分アップする。

ウィン「墓地の鳥獣族をゲームから除外することでパワーアップするシンクロモンスターです。攻撃力2000の《霞の谷のファルコン》をゲームから除外するだけであの《オベリスクの巨神兵》と並ぶ4000もの攻撃力が得られ、シンクロ素材にした《ドラグニティ・ドウクス》をゲームから除外するだけでも攻撃力は3500となり《BF - 月影のカルート》のサポートを受けた《BF - 暁のシロツコ》も勝てません。

相手ターンにも発動できるのはさりげないメリットですね。

また連続攻撃をした場合、攻撃の度に1度効果を発動できるので、工夫すればとんでもない攻撃力になるかもしれないです」

### 3・進撃、マシンナーズ・フォートレス（前書き）

ダメージ計算ミス修正。

ウィン「あつづ……度々ごめんなさい。作者さん、なんか疲れてるみたいで……あ、あの！同じベットで寝たりしたら……作者さん、元気になるでしょうか……なんであつづ、そうすると男の人は元気になるって……えっ？元気になるのは（以下自主規制）」

### 3・進撃、マシンナース・フォートレス

龍士 Life 8000

手札 3

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

伏せカード1枚（くず鉄のかかし）

達子 Life 5900

手札 3

フィールド

伏せカード1枚

龍士 Side

「ターンエンドだ！」

《グリーン・ガジェット》を槍で貫き、俺の元に舞い戻ったゲイボルグの姿を確認すると、俺はターンエンド宣言をする。伏せられたカードは前の母さんのターンに発動したくず鉄のかかし。そして墓地には《ゴッドバードアタック》のコストにした《ドラグニティ・トリプル》がいる。それは攻撃力2500までのモンスターなら対応できることを意味しているが、決して油断はできない。母さんのデッキには恐らく『あのカード』が入っている。召喚されると厄介だ。

「私のターン！」

母さんがカードをドロウする。

「私はマシンナーズ・ギアフレームを召喚するわ！」

来た！母さんのあのデッキはガジェットと《マシンナーズ・フォートレス》を主軸とした『マシンガジェ』に違いない！

「ふふっ、分かつてるとは思っけど…マシンナーズ・フォートレスを手札に加えるわよ」

母さんがデッキから1枚のカードを抜き出して見せる。俺は了承の意味を込めて頷く。

《マシンナーズ・ギアフレーム》

ユニオンモンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1800 / 守 0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

《マシンナーズ・フォートレス》

効果モンスター

星7/地属性/機械族/攻2500/守1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。また、自分フィールド上に表側表示で存在する。このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

「そして手札のマシナーズ・フォートレス2体を墓地に捨て、マシナーズ・フォートレス1体を特殊召喚！」

召喚コストとして墓地に捨てられた《マシナーズ・フォートレス》のうち1体が墓地から特殊召喚される。砲台を装着し、キャタピラで移動するその姿は要塞というよりはむしろ戦車と言っべきだろう。

このモンスター、特殊召喚のためのコストに自分が含まれていても問題ないため、手札からの場合は実質手札の機械族1体を捨てるだけで特殊召喚できる。

「さらに手札の機械族、レベル8のマシナーズ・カノンを墓地に捨て、マシナーズ・フォートレスをもう1体墓地から特殊召喚する！」

先程現れた《マシナーズ・フォートレス》の隣にもう1体マシナーズ・フォートレスが現れる。これは非常に厄介だ。

「バトルよ！マシナーズ・フォートレスでゲイボルグを攻撃！マシナーズ・バスター！」

攻撃の指令を受け、《マシンナーズ・フォートレス》が砲台を構え、ゲイボルグに向けて砲撃する。

「くず鉄のかかし、発動！」

先程グリーン・ガジエットの攻撃を受け止めたかかしが再び現れ、砲撃を受け止める。殴られても砲撃されても壊れないとは、本当にこのかかしはくず鉄でできているのか？

「攻撃はまだ終わってないわよ？2体目のマシンナーズ・フォートレスで、ゲイボルグに攻撃！マシン・バスター！」

再びゲイボルグが砲撃の対象となる。今度は防ぐ手段はない。

ゲイボルグの効果で《ドラグニティ・トリブル》を墓地から除外すれば攻撃力は2500になり、同士討ちが狙える。だがここは……。

「許せ、ゲイボルグ……」

ゲイボルグは成す術無く砲撃の餌食となり、破壊される。

龍士   Life 8000   7500

ゲイボルグが戦闘破壊されたことにより、攻撃力の差分、500ポイントライフが削られる。

「マスター、ゲイボルグの効果を何故使わなかったの？そうすれば同士討ちに持ち込めたのに」

「マシンナーズ・フォートレスには複数効果がある。1つはさつき

みたいに手札の機械族を捨てて特殊召喚する召喚ルール効果、もう一つは戦闘破壊された時相手フィールド上のカードを1枚破壊する効果を持っている。ついでにそれ以外にも、相手のモンスター効果の対象になった時、相手の手札を見てその中から1枚を選んで墓地に捨てさせる効果があるんだ。俺がもしゲイボルグの効果を使つて同士討ちを狙った場合、ゲイボルグは当然破壊され、守りの要であるくず鉄のかかしも破壊、揚句破壊したマシンナーズ・フォートレスは条件さえ整えば何度でも復活できる。一方的にアドバンテージを獲得されてしまうんだ」

仮に先程ドウクスを除外せずにキープし、フォートレスを返り討ちにできたとしてもどのみち効果でゲイボルグは破壊される。あまり変わらないのだ。まあ、その場合《くず鉄のかかし》の安全はありがたい保証されているからその点では有利か。

「大正解よ、龍士。ご褒美はマシンナーズ・ギアフレームのダイレクトアタックね」

母さんがそう言うつと《マシンナーズ・ギアフレーム》が俺に攻撃を仕掛ける。守る手段のない俺のライフポイントはギアフレームの攻撃力分、1800削られる。

龍士    L i f e 7 5 0 0    5 7 0 0

ゲイボルグで一気に与えたダメージを上回るダメージをこのターンで与えてきた。やはり母さんは……強い！

「メインフェイズ2に、マシンナーズ・ギアフレームの効果により、

自身をマシンナーズ・フォートレスに装備！ターンエンドよ、さあ来なさい！」

達子 Life 5900

手札 1

フィールド

《マシンナーズ・フォートレス》

《マシンナーズ・ギアフレーム》（装備状態

マシンナーズ・フォートレス  
対象）

伏せカード1枚

「くっ…俺のターン！」

《マシンナーズ・ギアフレーム》を装備した《マシンナーズ・フォートレス》は1度の破壊耐性を持っている。手札の《ドラグニティ・レギオン》は相手フィールドの表側モンスター1体を破壊する効果を持っているが、それだけでは足りない。《マシンナーズ・フォートレス》を完全に破壊するには、2回の破壊効果を実現できる『あのカード』を引くしかない。そんな状況で俺がドローしたカードは……。

「俺はフィールド魔法、竜の渓谷を発動する！」

俺が1枚のカードを発動すると、家の庭の風景が変化し、夕日に照らされた渓谷の風景になる。

フィールド魔法は通常の魔法、畏とは異なる場所に置くことで発動し、存在し続ける限り様々な効果を適応させることができる。

《竜の渓谷》

フィールド魔法

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

自分のデッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

「俺は竜の渓谷の効果を発動！手札を1枚墓地に捨て、デッキからドラグニティと名の付いたモンスター1体を手札に加える！俺はデッキから、ドラグニティ・アキュリスを手札に加える！」

赤い竜のイラストが描かれたモンスターカードを見せ、手札に加える。ちなみにこの時捨てたカードは《霞の谷のファルコン》。攻撃力2000の鳥獣族モンスターだ。

「そして今手札に加えたアキュリスを召喚！」

《ドラグニティ・アキュリス》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができる。モンスターに装備されているこのカードが墓地へ送られた時、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

「アキュリスのモンスター効果！このカードの召喚に成功した時、手札からドラグニティ1体を特殊召喚し、このカードを装備する！ドラグニティ・レギオンを召喚！」

アキュリスが吠えると、ドウクスとは別の鳥人がフィールドに舞い降り、拳を構える。

《ドラグニティ・レギオン》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1200 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

「カードを1枚伏せ、レギオンの効果発動！自分の魔法、罠ゾーンに存在するドラグニティと名の付いたカードを墓地に送り、相手フィールドに表側表示で存在するモンスター1体を破壊する！」

最後の手札1枚を伏せたうえで、俺はレギオンに指示する。するとレギオンは、自分の周囲を飛び回っていたアキュリスを掴み《マシナーズ・フォートレス》に向けて投げ付ける。アキュリスも、投げられた勢いを利用して猛スピードで突進していく。

「……手札がないからフォートレスの効果は不発ね。でもギアフレームが装備されていることで、フォートレスは破壊を免れるわ！」

アキュリスの突進を受けてもフォートレスはびくともしない。それを見たアキュリスは急にUターンし始め、再びフォートレスに向かっ  
ていく。

「だがそれも1度だけ！装備カードの状態で墓地に送られたことによりアキュリスの効果が発動する！相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊！俺は再びマシンナーズ・フォートレスを対象に選択するぜ！」

2度目の突進は成功し、フォートレスはアキュリスに貫かれ爆発する。

「そしてあらかじめ伏せておいた死者蘇生を発動！蘇生対象は当然……」

俺は墓地から白い縁のカードを取り出し、モンスターカードゾーンに置く。

「頼むぜ……ドラグニティナイト・ゲイボルグ！」

1度は《マシンナーズ・フォートレス》の砲撃に倒れたが、今再びゲイボルグはフィールドに舞い戻った。その闘気は蘇生される前もされた後も変わらない。『ドラグニティナイト』の名に恥じぬ風格を見せ付けている。

「いくぜ母さん、バトルフェイスだ！レギオンでダイレクトアタック！」

武器を持たないレギオンは、やはりと言うか自慢の拳で殴り掛かる

ことでダメージを与えるらしい。

達子    L i f e 5 9 0 0    4 7 0 0

「そしてドラグニティナイト・ゲイボルグのダイレクトアタック！  
ダメージステップ時に竜の渓谷のコストで捨てられた霞の谷のファ  
ルコンを墓地から除外することで、攻撃力を2000ポイントアッ  
プさせる！」

ドラグニティナイト・ゲイボルグ  
攻2000    4000

「攻撃力……4000！」

「俺の力……受けてみるよ、母さん！」

激しい光を放ったゲイボルグの槍が、母さんをつく。

達子    L i f e 4 7 0 0    7 0 0

「攻撃力4000のダイレクトアタック……凄いです、マスター！」

ウィンからの賞賛の声を聞き、自然と笑みが零れる。ここまで上手  
く決まると気持ちがいいものだ。もっとも、先程のドローで《竜の

《溪谷》を引いていなければこうもいかなかったわけで、引かなかった場合正直どうしようもなかっただろう。とにかくダメージは与えた。後は母さん次第だろう。

「龍士……あなたは凄い。よく分かったわ」

そう言うと母さんはモンスターを裏側守備表示でセットし、静かにターンエンド宣言をする。

「俺のターン！俺はドラグニティ・ドウクスを召喚！」

ゲイボルグに騎乗している鳥人と同一人物の鳥人が姿を現す。

ドラグニティ・ドウクス  
攻撃力1500 2100

「ドウクスで裏側守備モンスターを攻撃！」

ドウクスが指揮棒で攻撃をすると、裏側表示になっていたカードが表側になり、《レッド・ガジェット》が姿を現した。守備力の数値がドウクスの攻撃力を下回っているため、呆気なく破壊される。

「そしてゲイボルグで母さんにダイレクトアタック！」

ゲイボルグの渾身の一撃が決まり、母さんのライフポイントはついに0となる。

達子 Life7000

デュエルが終了し、ソリッドヴィジョンがすべて消え、家の庭の風景に戻る。

「私の負けね」

そう言っただけで母さんは始めから伏せられていたカード《リミッター解除》を俺に見せる。

《リミッター解除》

速攻魔法

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

《リミッター解除》の効果で攻撃力を倍にし、ゲイボルグやレギオンに攻撃したとしても、ライフポイントを削り切ることはできない。たとえばそれが《マシナーズ・フォートレス》であつてもだ。

「私の心配は杞憂だったようね。メインデッキではなかったとはいえ、私に勝ってしまうなんて」

「か、母さん……あれ、メインデッキじゃなかったのか？」

「そうだけど？」

そんなことより、晩御飯にしましょ、と母さんは家の中に入っていた。あれでもメインデッキでないのなら、母さんのメインデッキ

はどれほどのものだろう。気にはなるが、腹の虫が悩む暇を与えてくれないらしい。

「マスター……」

「……ウイン、お前飯は食べるか？」

「え、ええ……」

「なら行くか」

ウインの手を引っ張り、俺も家の中に入っていく。今日の晩飯は何だろうな。

ウインSide

デュエルをしているマスターの姿はとても頼りがいのあるものでした。『ドラグニティ』の戦士達を巧みに操るその実力は本物だと思います。……と言うつもりが言いそびれました。さて、人間界で初めての食事、どんな料理が見られるんでしょう。

「うめえ！やっぱ母さんの作る親子丼うめえよ！」

「ふふ……デュエルの後のご飯は格別でしょ？」

目の前にある料理は「親子丼」というらしいのですが、何故親子なんでしょう。

「マスター、何故この料理は親子丼というのですか？」

「んぐっ……ああ、それな。鳥肉と卵が使われているだろ？卵は鳥が産んだものを使うから、親子丼なんだ」

「鳥の卵？」

つまりこの料理は、親鳥から卵を奪い取った揚句、親鳥ごと調理してしまうことで生まれる恐ろしい料理……しかもそれをマスター達は美味しそうに食べている。

「マスター……酷いです！」

「ウイン！？」

数分後、私は誤解していたことに気がきますが……恥ずかしいのでこれ以上は無しで……いいです……よ……ね？

### 3・進撃、マシナーズ・フォートレス（後書き）

ウィン「今日の最強カードはマシナーズ・フォートレスです」

《マシナーズ・フォートレス》

効果モンスター

星7/地属性/機械族/攻2500/守1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。また、自分フィールド上に表側表示で存在する。このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

ウィン「近年のストラクチャーデッキ看板モンスターの例に漏れず特殊召喚が容易なモンスターです。特殊召喚が容易なわりには効果が優秀であり、除去も戦闘も熟すモンスターです。何度でも特殊召喚され、戦闘で破壊されてもモンスター効果の対象になってもアドバンテージを獲得していく様は味方なら頼もしく、敵ならうつつとうしく思えること間違いなしです。ただし《暗黒界の龍神 グラファ》は苦手であり、ハンデス効果が強制故に利用されることもあるので注意が必要です。

しかし総じて見ても非常に扱いやすいモンスターであり、初心者でも切り札としやすいでしょう」

次話のキーカード

《大皇帝ペンギン》

ウィン「ペンギンシリーズのサポートカードです。ペンギン自体数が少ないので扱いづらいのですが……」

#### 4・ナンバース現る！？ペンギンデツキ出陣！（前書き）

この小説にはナンバースの独自設定がございます。ナンバースはありますがアストラルのような存在はありません。

#### 4・ナンバーズ現る！？ペンギンデツキ出陣！

龍士Side

昨日はいろいろあつて疲れたけど、今日もそれなりに疲れた。その理由の1つ……というか1つしかないか。

『マスター、人間界の学校って凄いですね！すーがくの先生が喋ってる時みんな寝てましたし！あれ、何かの魔法なんですか？』

「あー……魔法つちや魔法だな」

『本当ですか！？私あの魔法使いたいです！』

そう、ウインのことだ。

今日の朝、学校に行こうとするとどうしても連れていけと言つので、実体化しないことを条件に許可したんだが……興奮状態のウインを鎮めるのにかなり神経を擦り減らされることになった。しかしこうも楽しそうにされると怒ることはできないし、彼女の嬉しそうな表情は非常に癒される。

「はあ……」

とはいえ疲れたことには変わりはない。当分はこの状態かと続くと余計に疲れたような気がする。

とその時、俺の本能が警鐘を鳴らし始める！これは……奴が近づいている証拠！警戒せねばやられる！

「とおおー！」

「うわっ！あぶねー！」

突如俺の背後から跳び蹴りを仕掛けてくる制服姿の少女。間一髪のところでのその攻撃を避けることには成功する。

「なーにしけっ面してんのよ龍士！」

「毎度のことだけどな……跳び蹴りはやめろって言ってるだろ、美浦」

「あたし達の仲でしょ。いいじゃんそれくらい」

「あんなあ……」

ただでさえ擦り減らされている神経をさらに擦り減らしてくるこの少女の名前は荒川<sup>あらいかわ</sup> 美浦<sup>みほ</sup>。俺の幼なじみって奴だ。美浦は隙あらば俺の背後から跳び蹴りをしてくるのだが、理由はよくわからない。ただ美浦の跳び蹴りは死ぬほど痛いということだけは言っておく。

「で、何の用だ？」

「ふふん、今日はねえ……あなたに自慢できるネタを持ってきたのよー！」

自信満々にそう言った美浦は、鞆の中からDゲイザーとDパッドを取り出して俺に見せてくる。

「月の小遣い2000円の龍士には夢のまた夢でしょ？Dゲイザー！」

「じゃあそんな美浦に質問な。これは何でしょう？」

俺が取り出したのは夢のまた夢のはずのDゲイザー。自信満々の美浦の表情は一気に驚愕したようなものになる。

「あ、あんたいつの間にな！」

「昨日母さんに貰ったんだ。デュエリストたるものこれくらいは常備ってたか？」

「ぐぬぬ……悔しい」

よほど俺に自慢したかったのか……。だが残念、それには一足遅かったらしいな。

「こうなったらせめてデュエルで龍士をぎゃふんと言わせてやるわ！」

と、美浦はそのままDゲイザーとDパッドを装着して構える。

正直今の体力でこいつの相手はしてられないんだが。

「お前じゃ相手になんねえよ。さ、帰った帰った」

「な、何よ！デュエリストなら挑まれたデュエルは受けなさ……」

文句を言う美浦の言葉が途中で途切れる。

「ん、どうした？」

「しっ！静かに！」

さっきまでバカ騒ぎしていた美浦の表情が険しくなる。何かあったのか？

『あの……マスター？』

今まで会話に混じって来なかった……というよりは混じることができなかったウインが俺に話し掛けてくる。美浦がいる今口を開いて会話するわけにもいかないので、彼女のテレパシー能力を利用して会話することにする。

「（どうした？）」

『いえ……あの方、美浦さんでしたっけ。なんか不思議な感じがします』

「（不思議？確かにあいつは異常なまでに勘が鋭いけど、普通の女子高生だけど）」

『うーん……じゃあ何でしょう、この感覚』

「あっちよ龍士！」

「うおお！？何だ！？」

突然腕を引っ張られ、どこかに連れていかれる。美浦は一体何を発

見たんだ？

連れていかれた先では大柄の少年他2人が1人の気弱そうな少年からカードを奪おうとしていた。誰がどう見てもこれは虐めの現場だよな……。

「やめてよ！それは大事なカードなんだ！」

「へっ！知るかよ！黙ってオレにそいつを寄越せ！」

大柄の少年が1枚のカードを無理矢理奪い取っていた。それを見てしまった以上、止めないわけにはいかない。

「おい、そこまでにしとけよ悪ガキ」

軽く睨みながら、俺は大柄の少年……もう悪ガキでいいか。悪ガキに近づいていく。見たところ小学生くらいのようにだが、高校生の俺が迫ってきてても一切動じない。

「あん？こいつのカードはみんなオレのもんだから、何も間違っちゃねえだろ」

「こいつ……！」

罪悪感のかけらも見せないうえに口の聞き方も良くない。カードを持っている以上腐ってもデュエリストだ。デュエルで徹底的にたたきのめして、土下座させるか……そう考えていた時、今まで黙って

いた美浦が口を開く。

「ねえ……」

「あ？」

「デュエルしなさい」

どこかの蟹をリスペクトしてか、あるいは自然と出たのか、それは置いていて……今の彼女はかなりご立腹のようだ。

「あんたみたいな腐ったガキを見ると、イラツとくるわ……。デュエルで完膚なきまでにたたきのめしてあげるから、構えなさい」

「ぐっ……言わせておけば……いいぜ！ やってやるよ！」

美浦と悪ガキはDゲイザーをセットし、向かい合う。デュエルが始まるようだ。

「デュエルよ！」

「デュエルだ！」

美浦Life8000

悪ガキLife8000

「あたしの先攻、ドロー！」

先攻は美浦のようだ。確かあいつのデッキはなかなか面白いデッキだったな。とにかく俺の怒りもあのガキにぶつけてくれよ。

『マスター、美浦さんのデッキって何ですか？』

「（まあ見てなって、なかなかいいデッキだからな）」

「あたしはモンスターを裏側守備表示でセット！さらにリバーサイドを1枚セットしてターンエンド！」

美浦のモンスターカードゾーン、魔法、罠ゾーンに裏側のカードが1枚ずつ出現し、美浦のターンは終了する。あのモンスター……美浦のデッキなら恐らくあのカードだろう。

美浦 Life 8000

手札 4

フィールド

セットモンスター x 1

伏せカード x 1

「へっ！意気がつてたわりには消極的だな！オレのターン！俺は馬頭鬼を召喚！」

ガキのフィールドに斧を手にした馬の妖怪が現れる。馬頭鬼ってことはアンデットだな。

《馬頭鬼》 十

効果モンスター

星4 / 地属性 / アンデット族 / 攻1700 / 守 800

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分の墓地からアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。

アンデット族はその名の通り墓地からの特殊召喚の手段が豊富で、相手にすると厄介なことが多い。あの馬頭鬼も墓地に送ると後々厄介な存在になる。

「馬頭鬼で裏側モンスターに攻撃だ！」

馬頭鬼は手に持っている斧で裏側守備表示のモンスターに襲い掛かる。それに反応して裏側だったモンスターカードが表側になり、タキシード服を来たペンギンが姿を現す。

《ペンギン・ナイトメア》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻 900 / 守1800

このカードがリバーした時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

《ペンギン・ナイトメア》の守備力は1800。馬頭鬼の攻撃力は

1700だから100ポイントの反射ダメージだな。

悪ガキLife 8000 7900

「ちっ……だがたかが100ダメージくらい……」

「たかが、で済めばいいわね。ペンギン・ナイトメアがリバースした時、相手フィールドのカード1枚を手札に戻す。馬頭鬼を手札に戻しなさい」

「なっ……」

馬頭鬼がフィールドから吹き飛ばされ、手札に帰っていった。

「……リバーズカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

悪ガキLife 7900

手札 4

フィールド

伏せカード×2

「あたしのターン」

「（くくく……この伏せカードの内1枚は聖なるバリア・ミラーフ  
オースだ。そしてもう1枚は奈落の落とし穴。抜かりはねえぜ！）

「

《聖なるバリア・ミラーフォース》  
通常罾

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

《奈落の落とし穴》

通常罾

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。その攻撃力1500以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

あの様子だと何か罾を仕掛けてあるのだろうが、表情を見れば丸わかりだ。

『美浦さんのデッキって、ペンギンデッキだったんですね。ということ……』

「来るか……」

「あたしはトラップ・スタンを発動！このターンすべての罾カードの効果は無効となる！」

「何!？」

「いいことを教えてやるわ。女の勘はいいものよ」

《トランプ・スタン》  
通常罠

このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果は無効にする。

「さらにあたしはペンギン・ナイトメアをリリースし、大皇帝ペンギンをアドバンス召喚！」

タキシード服のペンギンが姿を消し、代わりに巨大なコウテイペンギンが出現する。これこそ『ペンギン』デッキの切り札《大皇帝ペンギン》だ。

《大皇帝ペンギン》

効果モンスター

星5 / 水属性 / 水族 / 攻1800 / 守1500

このカードをリリースして発動する。自分のデッキから「大皇帝ペンギン」以外の「ペンギン」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する。

「な、なんだよ……でかいわりには攻撃力はたったの1800かよ。見かけ倒しだな！」

「大皇帝ペンギンの効果を発動！このカードをリリースすることで、デッキから大皇帝ペンギン以外のペンギンを2体まで特殊召喚する！来なさい、ボルト・ペンギン！」

大皇帝ペンギンが姿を消し、今度は両腕が電撃を纏った鞭になっているペンギンが2体登場する。

《ボルト・ペンギン》

通常モンスター

星3 / 水属性 / 雷族 / 攻1100 / 守 800

両腕の電撃ムチで相手をマヒさせ、首を絞めて攻撃する。

同じレベルのモンスターが2体……この意味は1つしかない。

「レベル3のボルト・ペンギン2体をオーバーレイ！」

2体の《ボルト・ペンギン》が光になり、フィールドの中央にできた光の渦に飲み込まれる。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

同じレベルのモンスターを重ね、エクストラデッキから黒いカード『エクシーズモンスター』を召喚するエクシーズ召喚。美浦が今行っているのはその召喚方法だ。

「来なさい、No.17 リバイス・ドラゴン！」

光の渦が輝きを放ち、出現したモンスターは噴水のような姿で、しばらくすると変形を始め、やがて6枚の羽を持つ青いドラゴンになる。頭の角には「17」の数字が刻まれている。こんなモンスター

……俺は見たことがない。

《ナンバーズ  
No.17 リバイス・ドラゴン》

エクシーズ・効果モンスター

ランク3 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守 0

レベル3 モンスター × 2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、このカードの攻撃力を500ポイントアップする。このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

『あ、あれはナンバーズ!? どうしてナンバーズが!』

美浦のフィールドに現れたドラゴンを見てウインは驚愕する。

「(ウイン、あいつはナンバーズってのか?)」

『はい、人の邪気や欲望を増大させる呪われたカード……この世界には存在しないはずですが、どうして美浦さんが……』

「美浦……なんでそんなやばいカードを」

俺達は不安を覚えつつも、美浦とリバイス・ドラゴンを見つめる。

「リバイス・ドラゴンのモンスター効果発動! 1ターンに1度、エクシーズ素材を1つ取り除くことで、攻撃力を500ポイントアップさせる!」

リバイス・ドラゴンは自分の周りを飛び回っていた光を1つ吸収す

ると、自身の力を増幅させる。

No.17 リバイス・ドラゴン  
攻撃力2000 2500

「まだよ……魔法カード、死者蘇生で大皇帝ペンギンを特殊召喚！効果により3体目のボルト・ペンギンとペンギン・ナイトを特殊召喚！」

今度は《ボルト・ペンギン》の隣に剣を持ったペンギンが姿を現す。

《ペンギン・ナイト》

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 900 / 守 800

このカードが相手のカードの効果によってデッキから墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するカードを全てデッキに戻してシャッフルする。

またレベル3のモンスターが2体！再びエクシーズ召喚をする気なのか？

「レベル3のボルト・ペンギンとペンギン・ナイトをオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築……エクシーズ召喚！No.17 リバイス・ドラゴン！」

『そんな……2体目のリバイス・ドラゴン！？』

「だがまだ終わらない……あいつの目がそう言っている」

「墓地の大皇帝ペンギンをゲームから除外し、水の精霊 アクエリアを特殊召喚！」

墓地の大皇帝ペンギンが除外され、フィールドに水の精霊が召喚される。要のはずの大皇帝ペンギンを自ら除外するのか……。

《水の精霊 アクエリア》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻1600 / 守1200

このカードは通常召喚できない。自分の墓地の水属性モンスター1体をゲームから除外して特殊召喚する。相手スタンバイフェイズ毎に相手の表側表示モンスター1体の表示形式を変更できる。そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

「そして手札から装備魔法、D・D・Rを発動。手札1枚をコストに、除外されているモンスター1体を特殊召喚する。大皇帝ペンギンを特殊召喚！」

3度目の登場となる《大皇帝ペンギン》。心なしか疲れているように見えるが、大丈夫だろうか。

《D・D・R》

装備魔法

手札を1枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター1

体を選択して攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

「大皇帝ペンギンの効果により、残りのペンギン・ナイトを特殊召喚！そしてこの2体をオーバーレイ！エクシーズ召喚！No.17 リバイス・ドラゴン！」

美浦のフィールドに3体のリバイス・ドラゴンが並んだ。その威圧感は大抵のものじゃない。

『3体目……どうして……』

「2体のリバイス・ドラゴンのモンスター効果！エクシーズ素材を1つ取り除き、攻撃力を500ポイントアップ！」

No.17 リバイス・ドラゴン

2体目	攻撃力2000	2500
3体目	攻撃力2000	2500

リバイス・ドラゴン3体の攻撃力はすべて2500。アクエリアの攻撃力を合わせれば合計ダメージは9100。既に初期ライフポイントを上回っている。

「さあ……覚悟なさい！アクエリアでダイレクトアタック！」

「うわあー！」

悪ガキLife7900 6300

「リバイス・ドラゴン3体でダイレクトアタック！バーストリム、3連打あ！」

「ぎゃああああ！」

悪ガキLife6300 - 1200

1200のオーバーキル。文句なしの美浦の勝利だ。

「さてと……さつさとカードを返しなさい。でないと……」

指をばきばきと鳴らしながら美浦は悪ガキに迫る。小学生が女子高生、特に美浦を相手に勝てるわけがない。悪ガキは恐ろしくなりカードを置いて逃げ帰ったが、多分それが正解だっただろう。

俺は悪ガキが置いていったカードを拾い、カードを取られた少年に渡す。

「君が取られたカードはこれで合ってるか？」

少年はカードを手に取り確認すると笑顔になり、そうですと答えた。

「そのカードは君が持ってこそ最高の輝きを見せる。大切に使うだぞ」

「はい……ありがとうございました！」

少年はそう言うと駆け出していった。と思いきや突然振り返り、俺達にお辞儀をするとそのまま去っていった。

『あの……マスター』

「（ああ……わかっている）美浦！」

少年を見送った俺は美浦のほうに振り返る。聞かなければならないことがある、そう思い口を開こうとしたが、先に美浦が口を開く。

「このカード……リバイス・ドラゴンのことでしょ？分かってるって」

リバイス・ドラゴンのカードを3枚取り出す美浦。それを見てウインは顔をしかめる。

『……ナンバーズは1枚ずつしか存在しないはずです。それなのにどうして美浦さんはリバイス・ドラゴンを3枚も所持しているのでしょうか』

「それはよくわからないのよねー」

『そうですか……ってえ！？』

会話が繋がった、ということとは美浦にも精霊が見えて、声が聞こえるのか！？

「お前……！」

「あたしにも…精霊は見えるの。だからあなたの精霊のことは見え  
てたし、声も聞こえていたわ。隠しててごめんなさい」

『じゃあ貴女も精霊に選ばれて……でも精霊がいませんね』

確かに精霊らしき姿はどこにもない。精霊は見えるが所持はしてい  
ないのだろうか。

「それは……多分この子達の影響だと思う」

美浦は持っているリバイス・ドラゴンのカードを見ながら言った。  
ナンバーズの影響を受け、精霊が見えるようになったというのか？  
ナンバーズは呪われたカードであるとウインは言っていた。だとし  
たら何かしらの力が秘められていたとしてもおかしくはないが、そ  
れが精霊を見る力だと言うのか。

「この子達……知らない間にあたしのデッキの中にいたの。気味が  
悪かったから今まで使わずにいたんだけど……さっきデュエルした  
時に頭の中に声が響いてきたの。ナンバーズを使えって」

「ナンバーズを使え？まさかりバイス・ドラゴンが？」

「わかんない。でもあたしはその声を信じてリバイス・ドラゴンを  
召喚したの」

しかし美浦自身には何の変化もなかった。邪心や欲望が増大される  
こともなく、他のカードと変わらない様子で使用していた。これは  
ウインの話と矛盾しているような気がする。

『恐らくですが……美浦さんはナンバーズの力を押さえ付けたのではないかと』

「押さえ付ける？そんなことあるのか？」

『わかりません……あくまで可能性の1つとしてですから。3枚存在する理由もわかりませんし、本当に謎ばかりです、ナンバーズは……』

「とーにかーく、あたしはナンバーズ使っても何の問題もないんでしょ？だったら別にいいじゃん」

『まあ……そうですね』

「じゃあ解決！今日はいいこともしたし、仲間も増えたしいい日だったー！」

「な、仲間？」

「決まってるじゃない。リバイス・ドラゴン達よ！デッキに入ってるんだし、仲間じゃないとおかしいでしょ？」

仲間か……。確かに呪われたカードと聞くと恐ろしいが、仲間だと思いと怖くないかもしれない。

『……私、美浦さんがナンバーズの影響を受けない理由、なんとなくわかりました』

と、ウィンが言う。

『だって……ナンバーズが増大させるような邪心が一切ないみたいですから。マイペースながらも、間違ったことには真剣に怒ることができ、良くも悪くも純粋な人みたいですし』

「ああ……確かにそうかな」

俺はすっかりご機嫌になってリバイス・ドラゴンのカードを眺めている美浦の姿を見ながら、こっそり呟いた。

#### 4・ナンバーズ現る！？ペンギンデッキ出陣！（後書き）

ウイン「今回の最強カードは……2枚？とりあえず1枚ずつ行きましようか」

《大皇帝ペンギン》

効果モンスター

星5 / 水属性 / 水族 / 攻1800 / 守1500

このカードをリリースして発動する。自分のデッキから「大皇帝ペンギン」以外の「ペンギン」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する。

ウイン「誰が予想したか、ペンギンのカテゴリー化に伴い登場したペンギンサポートです。上級モンスターですが、リリースすることでペンギンが呼べ、エクシーズ召喚に繋げることができます。またフィールドにレベル1水非チューナー、このカード、墓地にフィッシュボーグガンナーが存在し、十分な手札があればシューティングクエーサードラゴンになります。

ちなみに今のところペンギンの最高攻撃力はトビペンギンの1200、次点でボルト・ペンギンの1100です。次はこのカード！」

《No.17 リバイス・ドラゴン》

エクシーズ・効果モンスター

ランク3 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守

0

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、

このカードの攻撃力を500ポイントアップする。このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

ウィン「美浦さんが所持するナンバーズで、デッキのエースモンスターです。エクシーズ素材を1つ取り除くと攻撃力が500ポイントアップするので、実質ランク3の攻撃力2500です。2つ目の素材を取り除くと攻撃力は3000になりますが、ダイレクトアタックができなくなるデメリットが付きますのでご注意ください。攻撃名はバーストリームです。それにしてもどうして3枚あるんでしょう……」

次回のキーカード

「光と闇の竜」

「銀河眼の光子竜」

ウィン「な、なんで2枚もあるんですか！？えっと、光と闇の竜は自身の攻守をダウンさせてあらゆる効果を無効にできて、破壊されたら墓地からモンスターが出せます。銀河眼の光子竜は次弾のパッケージを飾るモンスターで、エクシーズモンスターメタらしいですけど……」

## 5・迷惑な使い魔（前書き）

米版の強謙tein缶の人氣がやばいです。完売が相次いでいるとか。個人的には強謙よりもダムルグやガイアの再録、リバイスドラゴンのシクのほうが気になります。

## 5・迷惑な使い魔

ウィンSide

今日はマスターの通う学校を見学させていただきました。実体化はすると言われたので、本当に見ているだけです……。

「すーがく」を教えている先生は魔法が使えるようで、よくわからない呪文を唱えるとみんな寝てしまいました。凄いですねー、人間界にも魔法があったなんて驚きです。確か人間界には魔法がないって教わりましたけど、嘘だったんですね。

それでその帰り道、私はマスターの友人の美浦さんと知り合いました。あの人は《No.17 リバイス・ドラゴン》を3枚も所持しているような人で、精霊も見えるみたいです。ただ精霊は連れていないみたいですし、本来1枚しかないはずのナンバーズのカードを3枚持っていますからよくわからない人です。でも悪い人じゃあなさそうですし……うーん……。

「どうしたんだ、ウィン。考え事か？」

「ふえ？わ、私そんな難しい表情してました？」

「いや、そうじゃなくて……飯に一切手を付けてないからさ」

そ、そうでした！今は帰宅して晩ご飯を頂いてる最中です！当然実体化した状態で。

「あ、あの……その……たいしたことじゃありませんから。その……」

「あ、ああ……それならいいんだ」

「はむはむ……このエビフライ美味しいですね」

エビフライ……こちらに来て初めて食べた料理ですが、とても美味しいです。

そういえばマスターのお母様の姿がありません。どうしたのでしょうか。

「母さんの作り置きを温めただけで悪いな。本当なら出来立ての飯を食べさせてやりたいんだけどな」

「お母様……忙しいんですね」

「仕事が残ってんだから仕方ないな。ああ、ワイン、テレビの電源入れてもらっていいか？」

「へ？てれび……？」

「あー……そっか。そのやたら薄い機械だ」

そう言っつてマスターは私の背後にある薄い機械を指差します。これが「てれび」？何の機械なのでしょう。スイッチの場所はだいたい検討がつくので、とりあえず押してみます。

「こんばんは、ニュースをお伝えします」

「ひゃあああ！な、何ですか！こんな薄い機械の中に人が！？」

「はは、そんなわけないだろ。それは別の場所をモニターに映し出してただけだって。中に誰もいねえって」

「へえ……この機械で」

人間界の技術……凄まじいです。精霊界にもやってこないでしょうか。

「むむ……強欲で謙虚な壺がt i n缶で再録、予約殺到で早くも完売、一部では暴動も……とんでもないな」

マスターがよくわからないことを呟きながら「てれび」を見ています。《強欲で謙虚な壺》の話みたいですけど、何でしょうか。

「マスター、強欲で謙虚な壺がどうかしたんですか？」

「あー……簡単に言うなら、強欲で謙虚な壺を巡って壮絶な戦いが繰り広げられているって感じだな。本当に超強欲な壺だよな」

「私も欲しいです……強欲で謙虚な壺」

「まー今から手に入れるのは無謀だな。俺は2枚持ってるし、それだけあれば十分だから興味ないけどな」

マスター……持ってるんだ。いいなあ、欲しいなあ。

「マスター」

「どうした？」

「強欲で謙虚な壺、交換してください」

「んなこと突然言われても……」

「何が欲しいんですか、言って下さい。カードですか、お金ですか！何なら……私でも」

「バカかぁ！俺をロリコンに仕立て上げるつもりか！それにその発言は教育上よろしくないからやめなさい！まったく……そんなこと誰に」

「お母様ですけど。男性はこういうった発言に弱いとのことだ」

「母さん……。と、とにかく、そういうのは禁止だ！」

心なしかマスターの顔が赤いような気がします。マスターに私のカード各種3枚セットで渡すと喜んでもらえる証拠ですね。

龍士Side

まったく……母さんはウインに余計なことを吹き込んでいたな。彼女は良くも悪くも純粹だから、真に受けるんだ。そういうのは止めさせたほうがいい。もし見知らぬ人間に対して言ったら……考えただけでも恐ろしい。

冗談だろ、と普通は思うが、今朝のことがあると冗談には思えない……。言えない、今朝起きたらウィンが布団の中に潜り込んでいて、天使のような寝顔ですやすやと寝ていたなんて言えない……！俺が入れたんじゃないからな！ウィンが夜中の間に入ってきたんだ！本人もそう言ってたし！

とにかく、以後そういう行動は慎むよう言っただけで聞かせねば……と思っただけで、テレビに映っているニュースキャスターが新たなニュースを伝えてくる。

「えー……今朝未明コンビニに強盗犯が立て籠もり、辺りは騒然としましたが、突如現れた謎の男によって取り押さえられました。男はDゲイザーを取り出し強盗犯にデュエルを挑み、敗れることで強盗犯を自首させました。感謝状を送るうにも男の身元や目的は不明のため、警察は男の使用したモンスター、光と闇の竜を手掛かりとして搜索を続ける模様です」

《光と闇の竜》か……なかなかのレア物を使ったんだな。というかデュエルで相手を自首させるって……やっぱデュエル万能説は本当っぽいな。

「マスター、その光と闇の竜を使ってた人って悪い人なんですか？」

「話の流れから察するに、悪い人ではないだろうけど、目的がわからない以上は良い人とは言い切れないな」

というか……強盗犯のいる所に突如として現れ、デュエルする……そんな奴をどこかで見た気がする。まさかナンバーズが関わってたりまでは……ないよな。狩らせてもらおうか、お前のナンバーズを、的なノリで。

「ごちそうさまでした、マスター」

きちんと手を合わせて「ごちそうさまと言っ通り、ワインはしっかりしているな。でも……。」

「ワイン、何杯おかわりした？」

「えっと……6杯です」

6杯……とてもじゃないがワインのような女の子が食べるような白ご飯の量ではない。だが現に炊飯器の中は空っぽ。後から帰って来る母さんの分はないだろう。

「なあワイン、いつもこれくらい食べるのか？」

「前はやや遠慮気味でしたけど、いつもはそれくらいは食べますけど？」

それがどうかしたんですか、と言いたげに首を傾げられても困る。仕草としてはかわいらしいが、正直洒落にならない。食費が余分に掛かるわけだからな。

「あ、でも私太らない体質なんで大丈夫です」

「大丈夫じゃないって、家の家計が」

太らない体質……それは女性だけでなく多くの人間に羨ましがられる体質の1つ。しかし精霊だから太らないのかもしれないが、実体化した状態では限りなく人間に近づくわけだから、太る時は太るんじゃないだろうか。

まあそんなことは些細なことに過ぎないし、それはそれでいい。太ったウインなんて見たくない。

「まあ飯食ったことだし、2階行くか」

「わかりました」

食事を終えたので、俺達は2階にある俺の部屋に行くことに。だがそこでまた厄介な問題が発生することに。

「ぬふふふ……ええなあええなあ……」

「……………」

部屋に見知らぬ小さなドラゴンが居たら、誰だろうと戸惑うはず。しかもそのドラゴン、わりとやばめの表情をしている。

「ぶ、プチリュウ！何してるのやめなさい！」

「ウイン！あんさんこんなとこで何してはるん……ああ、やめい！ワイの楽しみがあー！」

ウインが何かを取り上げるが……よく見るとその何か、俺の中学時代の卒業アルバムだ。

それよりもあのドラゴン、《プチリュウ》なのか。ウインの使い魔のはずなのに今まで姿を現さなかったから不思議に思っただけだが、何故今更。

「またプチリュウは女の子見てニヤニヤしてたの？」

「かまへんやろ！ワイはセーラー服も好みなんやから！」

……とりあえずハリセンの用意はしておくか。

「それにどうしてここに居るの？ついてこないでって言ったのに！」

「ウインのあるとこワイありや。ワイらは相思相愛…互いになくってはならん存在やからな！」

「なんでやねん！」

「あたあ！何すんねん！」

ウインは俺からハリセンを奪あ、そのままプチリュウをひっぱいた。まあ……聞いた感じ相思相愛には絶対思えないな。

「そんなこと言って……いつも私のスカートの中に潜り込んでくるでしょ！事故を装って！」

「ちやうねんちやうねん！あれはホンマに事故や！見てへんからウインのパンツの色が白なんてワイは知らへん！」

「……！この…変態！ド変態！」

「あたっ！いたっ！ちよっ！堪えてえな！」

装備カード、ハリセンを装備したウインの攻撃力は未知数。そんな彼女の連続攻撃を受けて攻撃力600の《プチリュウ》は耐えられるのか、ちよっと気になる。

にしても、ウインの素はあんな感じなのか……。記憶しておこう。

その数分後……。

「……………で、プチリュウはウインの後を追い掛けて来たってわけか」

「せやねんせやねん！ウインの力を発揮させるには使い魔であるワイが必要不可欠やからな！」

力を発揮……………《憑依装着》のことだろうか。イラストには確かにかつこよくなつたプチリュウらしきドラゴンが描かれているが、召喚コストに使用されるモンスターは風属性なら何でもいい。カードとしてなら必要不可欠ではなさそうだが、精霊としてなら話は別なのか。

「……………来なければよかったのに」

ウインはぼそつと呟く。どの程度のものなのかは知らないが、一応使い魔なのだからそこまで言わなくてもいいんじゃないだろうか。

「ウインがお宅に世話になつとるうちゆうさかい、ワイも世話になりたいんやけど……………」

「却下」

「なんでや!?!」

なんというか……………こいつを家に置くメリットがないというか、ウインにとって有害な気がする。

「ワイがおらんとウインが憑依装着できへんで！かまへんのか!?!」

「あー……必要になるのか、それ」

カードとしてなら使う機会があるだろうが、精霊のウインが憑依装着する場面があるのか疑問に感じる。戦闘力がアップするわけだが、精霊がこちらの世界で戦闘をすることがあるのか。

「ウインとしてはどうなんだ？こいつがいるのは」

「愚問です。ただ迷惑なだけです、はつきり言って」

愚問とまで言うのか。ウインの意思は変わらないらしい。

「でも……万が一、私がこちらで戦闘をすることになれば本意ながら力を借りなければならぬわけですし……なによりプチリュウをほったらかしにするのは危険かと」

確かに、よく考えると今のプチリュウは実体化している。そして話を聞く限りではかなり変態のようなので、放っておくのはやや危険だと思われる。そうなると責任重大だ。とすると、選択肢は最初からないだろう。

「はあ……仕方ねえかなあ……」

「おお、さすが話がわかるわ！よっ男前！」

「プチリュウ、調子に乗らないの」

結局ウインの他に居候が増えることになった。面倒事も増えそうだな……。

??? Side

「銀河眼の光子竜の攻撃！破滅のフォトン・ストリーム！」

《銀河眼の光子竜》が放った光線が相手のライフを一瞬にして奪い取る。

「お前じゃない……！」

デュエルの衝撃に耐え切れず倒れた相手のデッキを取り、その内容を確認するが『目的のカード』はそこにはない。

僕の求めるカード……それはこの汚れた世界を変えるには十分過ぎるほどの力を秘めている。愛する者を奪った、この世界を……。

「どこにある……ドラグニティアームズ・レヴァティン！」

必ず見つけ出してみせる……《ドラグニティアームズ・レヴァティン》を！

## 5・迷惑な使い魔（後書き）

ウィン「前回のキーカードの2枚、名前だけじゃないですか……。これから重要なカードになるってことでしょうか」

今回の最強カード（？）

《プチリュウ》

通常モンスター

星2 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 600 / 守 700

とても小さなドラゴン。小さなからだをいっぱいを使い攻撃する。

ウィン「あの2枚は名前だけの登場なので、今回は私の使い魔のプチリュウの紹介です。」

プチリュウは効果を持たない弱小モンスターですが、低レベルかつ通常モンスターなので多くのサポートが受けられます。なにげに攻撃力600と、私よりも100高いのが悔しいです……。私の使い魔のプチリュウは……その……変態です。って！だから私のスカートの中に入らないで！」

プチリュウ「ええやろ、減るもんじゃあるまいし」

次回のキーカード

「憑依装着・ウィン」

ウィン「ついに私がデュエルに登場するんですね！マスターが私を  
召喚するのを楽しみにしています！」

## 6 ・ガスタの巫女襲来！憑依装着をせよ！（前書き）

ねんがんのリバイスホ口をてにいれたぞ！

小説内で通常召喚を2度行っている場面があったので、修正しました。

## 6・ガスタの巫女襲来！憑依装着をせよ！

龍士Side

『……………なんか今日の風は不穏な空気を漂わせる風ですね』

日曜日の昼、気まぐれでカードショップを訪れるため外を歩いていた時、ウィンがそんなことを呟いた。確かに今日は曇り空で、風もあまり心地よくない。

『何もなければいいのですが……………』

「心配するな。日本は平和ボケしているとと言われるくらい他の国と比べて平和なんだ。そうそう悪いことは起きないだろうよ」

『そう……………ですよね』

ウインを納得させ、カードショップに向かおうと歩き始めたその時、突然強い向かい風が吹き始める。あまりに強い風に俺達は目を閉じ、両腕で顔を覆い土埃から顔を守る。やがて向かい風は止んだが、目を開けた俺達は驚愕する。緑の髪をポニーテールにし、薄茶色のローブを身に纏ったウィンそっくりの少女が、先程まで人ひとりいなかった道に突如として現れたのだ。

俺はその少女を知っている。その存在が明らかとなった時、ウィンそっくりであると話題になったモンスター！

「ガスタの巫女……………ウインダ」

『ご存知のようで助かったよ。自己紹介の手間が省けたわけだし』

間違いない。彼女は《ガスタの巫女ウインダ》。カードのモンスターである彼女がこの場にいるということは、精霊で間違いはないだろう。

『…………私の目的の人物も、ちゃんと連れてきているみたいね』

そうやって少女…………ウインダはウインを睨み付ける。明らかに剥き出されている敵意、話し合いできるような相手ではないだろう。

『…………わ、私が目的ですか？』

『うん、あなたが私から奪った力の一部、返してもらわなきゃいけないから』

そうやってウインダはウインに近付いていく。目的がウインなら…………考える必要はない。

「待てよ」

俺の制止の声を聞き、ウインダは立ち止まる。

「何の目的かは知らないけどな…………ウインに危害を加えるなら容赦はしない」

『それはどっちの台詞かわかってる？私の邪魔をするなら…………』

ウインダの腕が風を纏ったかと思うと、その風はやがてデュエルデイスクに姿を変える。

『デュエルよ』

「上等だ……やってやる！」

対抗して、俺もDパッドを取り出し、装着する。今回は相手がデュエルディスクなので、Dゲイザーは装着せず純粋なソリッドヴィジョンを利用してデュエルする。

「デュエル！」

龍士 Life8000

ウインダ Life8000

『私の先攻ね。ドローフェイズ、カードをドロー！』

先攻はウインダから。カードをドローしたウインダは、6枚の手札の内から1枚を抜き出し、モンスターカードゾーンにセットする。

『私はモンスターをセットして、ターンを終了』

ウインダ Life8000

手札5枚

フィールド

セットモンスター×1

ウイングはモンスターを裏側守備表示でセットしただけの簡単なプレイング。他に伏せカードがないのはこちらとしてはやりやすい。だがあのモンスター……恐らくは「ガスタ」シリーズのモンスターだろう。

「ガスタ」の下級モンスターはほとんどが破壊された時にデッキから仲間を呼ぶ「リクルーター」と呼ばれるモンスター。ガスタの「リクルーター」はどれもステータスは低めだ。とすると俺の行動は自ずと決まってくる。

「俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードを見て、俺は次の行動に移る。

「フィールド魔法、竜の渓谷を発動する！」

《竜の渓谷》が発動されると、周囲の風景が夕暮れの渓谷のものになる。効果は……前に使ったことがあるから省くが問題はないよな。

「竜の渓谷の効果により、手札を1枚捨てることによりデッキからレベル4以下のドラグニティを手札に加える。俺は風霊使いウインを墓地に捨て、ドラグニティ・フランクスを手札に加える！」

『自分の精霊を手札コストに……酷い扱いだね』

「黙って見てろ。俺はさっき手札に加えたフランクスをコストに、調和の宝札を発動する！」

《調和の宝札》

通常魔法

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

《調和の宝札》は手札に来てしまった《ドラグニティ・フアランクス》などをコストにしつつ、手札交換ができる優秀なカード。《フアランクス》を墓地に送るための手札消費も最低限に抑えられる。さて、ドロウしたカードは……んん、少し飛ばしすぎかもしれないが、やるか。

「いくぜ、俺はデブリ・ドラゴンを召喚！」

俺の場に《スターダスト・ドラゴン》をデフォルメ化したようなドラゴンが出現する。

「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる。俺が呼び出すのは、風霊使いウイン！」

『行きますー！』

《デブリ・ドラゴン》の効果により、先程手札コストにされた《風霊使いウイン》が特殊召喚される。

《デブリ・ドラゴン》

チューナー（効果モンスター）

星4 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1000 / 守2000

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。こ

の効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない。

《風霊使いウイン》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻 500 / 守 1500

リバース：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の風属性モンスター1体のコントロールを得る。

《風霊使いウイン》はリバースモンスターなので、本来は特殊召喚しても意味はない。だがそれは普通のリバースモンスターにだけ言えること。ウインと風属性モンスターがフィールドに揃った時点でウインの可能性はより広がる。

『私に力を貸して下さい……！』

「俺はフィールド上に存在する風霊使いウインと風属性モンスター、デブリ・ドラゴンを墓地に送ることで、デッキから憑依装着・ウインを特殊召喚！」

『はああああ！』

《デブリ・ドラゴン》が光になりウインに取り込まれたかと思うと、ウインの側を浮遊していたプチリュウが猛々しい姿へと成長し、ウインに憑依する。

《憑依装着・ウイン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻1850 / 守1500

自分フィールド上の「風霊使いウイン」1体と他の風属性モンスター1体を墓地に送る事で、手札またはデッキから特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した場合、以下の効果を得る。  
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「来たで来たでえ！この一体感、堪らんわ！」

と、憑依装着が完了した途端プチリュウの口からそんな言葉が発せられる。ウインが露骨に嫌そうな表情してるが大丈夫なのか？

「……………俺は手札から永続魔法、竜操術を発動。1ターンに1度、ドラグニティと名の付いたドラゴン族を自分のモンスターに装備させることができる。そしてドラグニティと名の付いたカードを装備しているモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる。俺は手札のドラグニティ・ブランディストックをウインに装備する！」

小さな青いドラゴンが、ウインの周りを飛び回り始める。《ドラグニティ・ブランディストック》がウインの装備カードとなった証だ。

《竜操術》

永続魔法

「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備した、自分フィー

ルド上に存在するモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。また、1ターンに1度、手札から「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する事ができる。

《ドラグニティ・ブランディストック》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻 600 / 守 400

このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

憑依装着・ウイン

攻撃力1850 2350

「憑依装着・ウインで、セットモンスターを攻撃！憑霊術・鎌鼬！」

『喰らいなさい！』

プチリュウの支援を受け高められた魔力を風の刃に変え、裏側のカードから現れた小さな鳥を切り裂く。あれは《ガスタ・ガルド》だな。

《ガスタ・ガルド》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 500 / 守 500

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル2以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

『ガルドのモンスター効果により、デッキからガスタ・イグルを守備表示で特殊召喚！』

「だが、自身の効果により特殊召喚された憑依装着・ウインには貫通能力がある！よってウインの攻撃力2350からガルドの守備力500を引いた、1850のダメージを受ける！」

『くっくっくっ！』

ウインダLife8000 6150

そこそこ大きいダメージを与えるも、フィールドにはまだモンスターがいる。

《ガスタ・イグル》

チューナー（効果モンスター）

星1/風属性/鳥獣族/攻 200/守 400

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからチューナー以外のレベル4以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

《ガスタ・イグル》はリクルーターでありながらチューナーでもある。放っておくのは厄介だが、問題はない。

「ブランディストックを装備しているウインは、1度のバトルフェイズに2回まで攻撃が可能だ！頼むぜ！」

『はい！さあ……退きなさい！』

再び風の刃を発生させ、《ガスタ・イグル》を切り裂く。貫通ダメージも当然与えられる。

ウインダLife 6150 4200

『ガスタ・イグルが戦闘によって破壊されたことにより効果発動！ガスタの静寂カームを攻撃表示で召喚する！』

薄い緑色をした髪を束ねた女性がウインダのフィールドに召喚される。心なしかその瞳でウインを懐かしむように見ているように思える。

《ガスタの静寂 カーム》

効果モンスター

星4 / 風属性 / サイキック族 / 攻1700 / 守1100

1ターンに1度、自分の墓地に存在する

「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

攻撃力1700……今のウインよりも低い数値だが、これ以上の攻撃は不可能。カームを破壊することはできない以上、次のターンにシンク口召喚、またはエクシーズ召喚をされることを警戒しなくてはならない。それらを難無く攻略できるカードは……。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

龍士Life8000

手札1枚

フィールド

《憑依装着・ウイン》

魔法、罫

《ドラグニティ・ブランディストック》（装備対象 憑依装着・ウイン）

《竜操術》

セットカード×1

フィールド魔法

《竜の渓谷》

手札消費は激しいが、このターン中にウインダのライフを大幅に削ることができた。後は伏せカードの発動タイミングさえ誤らなければ問題ない！

『私のターン……カードをドロー』

……何を引いた？

『私は手札から魔法カード、ハリケーンを発動。お互いの魔法、畏カードをすべて手札に戻す』

「何!？」

巨大なハリケーンが発生し、俺の魔法、畏カードを全て吹き飛ばそうとする。

《ハリケーン》

通常魔法

フィールド上に存在する魔法・畏カードを全て持ち主の手札に戻す。

手札に戻らせてはこの伏せカードの意味がない。ならばせめてこのターンのシンクロ召喚だけは妨害する!

「畏カード発動!風霊術・「雅」!自分フィールド上の風属性モンスター1体をリリースすることで発動する。相手フィールド上のカード1枚をデッキの下に送る!カームをデッキの一番下に送る!」

ハリケーンによって吹き飛ばされる前に伏せておいたカードが発動される。それと同時にウインも風となり《ガスタの静寂 カーム》をデッキの下に送る。

《風霊術・「雅」》

通常畏

自分フィールド上に存在する風属性モンスター1体をリリースし、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。選択

した相手のカードを持ち主のデッキの一番下に戻す。

一連の処理を終え、《竜操術》と《竜の渓谷》が俺の手札に戻される。

「（ウィン…すまん）」

度々コストにしてしまっているウィンに、心の中で謝罪する。

だがこれで相手フィールドはから空き。ダイレクトアタックはされるかもしれないが、シンクロ召喚やエクシーズ召喚をされることはないはず。

『フィールドはから空きだからシンクロ召喚はされない……そう思ってるのなら、甘い！』

「なっ………！」

まるで今からシンクロ召喚をしてやるとでも言っような発言……何をやる気だ？

『私は魔法カード、光の援軍を発動。デッキの上から3枚、カードを墓地に送って、ライトロードと名の付いたモンスター1体をデッキから手札に加える。私はライトロード・ハンター ライコウを手札に加える！』

《光の援軍》

通常魔法

自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送って発動する。自分の

デッキからレベル4以下の「ライトロード」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

《ライトロード・ハンター ライコウ》

効果モンスター

星2 / 光属性 / 獣族 / 攻 200 / 守 100

リバース：フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する事ができる。自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

『ライトロード』……墓地肥やしを得意とするカテゴリであり、かつてはその圧倒的なパワーで環境を支配していたほどだ。今は墓地肥やしをしやすくするためにあらゆるデッキに投入されるが多くなった。先程ウインダが手札に加えた《ライトロード・ハンター ライコウ》は特に汎用性が高い。

このライコウをセットして、体制を立て直す？だがそれではハリケーンの意味がない。ということは攻めるのか？

『そして私は速攻魔法、念動収集機を発動。墓地のクレボンス、ガスタの巫女ウインダを特殊召喚する』

《念動収集機》

速攻魔法

自分の墓地に存在するレベル2以下のサイキック族モンスターを任意の数だけ特殊召喚する。その後、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターのレベルの合計×300ポイントダメージを受ける。

《クレボンス》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / サイキック族 / 攻1200 / 守 400

このカードが攻撃対象に選択された時、800ライフポイントを払う事でそのモンスターの攻撃を無効にする。

《ガスタの巫女 ウィンダ》

効果モンスター

星2 / 風属性 / サイキック族 / 攻1000 / 守 400

このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

レベル2の2体のモンスターが現れ、ウィンダは1200ポイントのダメージを受ける。だがウィンダは動じない。

ウィンダ Life 4200 3000

『私はさらに、緊急テレポートを発動。ガスタの巫女ウィンダをデッキから特殊召喚』

《緊急テレポート》

速攻魔法

自分の手札またはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

クレボンスはチューナーモンスター。本当に……から空きの状態からシンクロ召喚を！

『レベル2のウインダ2体に、レベル2のクレボンスをチューニング。一陣の風と共に戦場を舞う乙女よ、大地の意志をその身に刻め！シンクロ召喚！ダイガスタ・スフィアード！』

1人の少女が疾風と共に舞い降りる。杖を構え、俺にその闘志を見せ付けている。

《ダイガスタ・スフィアード》……『ガスタ』の切り札に恥じないほどの強力な効果を持つモンスターだ。

《ダイガスタ・スフィアード》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / サイキック族 / 攻2000 / 守1300

チューナー+チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたカード1枚を選択して手札に戻す事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「ガスタ」と名のついたモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受ける。また、このカードは戦闘では破壊されない。

『ダイガスタ・スフィアードのシンクロ召喚成功時、墓地に存在するガスタと名の付いたカード1枚を手札に加えることができるわ。私はさつき光の援軍のコストとしてデッキから墓地に送られたガス

タのつむじ風を手札に加える』

### 《ガスタのつむじ風》

通常罫

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動する事ができる。自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体を選択してデッキに戻す。その後、自分のデッキから守備力1000以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

スフィアードが破壊された時の保険か……。

『このターン、私はまだ通常召喚を行っていない。ジャンク・シンクロンを召喚!』

《ジャンク・シンクロン》は小さな戦士だが、効果はかなり強力だ。

### 《ジャンク・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

墓地にはレベル2の《ガスタの巫女ウィンダ》がある。ジャンク・シンクロンの効果によってウィンダが特殊召喚されれば、再びチュ

ーナーとそれ以外のモンスターが揃う。

「私は墓地のウィンダを特殊召喚！レベル2のウィンダに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！薫風纏いし翼よ、その大なる羽ばたきで敵を滅せよ！シンクロ召喚！羽ばたけ、ダイガスタ・ガルドス！」

成長した《ガスタ・ガルド》に《ガスタの巫女ウィンダ》が騎乗している。その姿は俺のドラグニティナイトに類似していると言えなくもないだろう。

《ダイガスタ・ガルドス》

シンクロ・効果モンスター

星5 / 風属性 / サイキック族 / 攻2200 / 守 800

チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター  
1体以上

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

「……バトル！スフィアード、そしてガルドスでダイレクトアタック！」

「くっ……うおおおお！」

2体のモンスターの攻撃の衝撃で吹き飛ばそうになるが、なんとか堪える。だがライフは大幅に削られる。

龍士Life 8000 3800

『カードを1枚伏せて、ターンエンドよ』

ウイングLife 3000

手札1枚

フィールド

《ダイガスタ・スフィアード》

《ダイガスタ・ガルドス》

魔法、罫

セットカード×1

！ わずか1ターンの間にシンクロモンスターを2体！こいつ……強い

## 6・ガスタの巫女襲来！憑依装着をせよ！（後書き）

ウィン「今回の最強カード……これ、自画自賛みたいですよね」

《憑依装着・ウィン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻1850 / 守1500

自分フィールド上の「風霊使いウィン」1体と他の風属性モンスター1体を墓地に送る事で、手札またはデッキから特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した場合、以下の効果を得る。  
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ウィン「私が憑依装着をすることでパワーアップした姿で、攻撃力はシユラやカイクウにぎりぎり勝てる1850です。50に感謝しなくては、です。」

貫通効果を得るには私、風霊使いウィンと風属性モンスターを墓地に送る必要がありますが、デブリ・ドラゴンなら手札1枚でその状況を作り上げることができますし、シールド・ウィングのような場持ちの良いモンスターも利用できます。」

次回のキーカード

「ドラグニティナイト・ヴァジュランダ」

ウィン「装備カードを墓地に送ることで自身の攻撃力を倍にします。  
ゲイボルグと共に強烈な一撃を叩き込むモンスターです！」

## 7・雷槍、ドラゲニティナイト・ヴァジュランダ！

龍士Life3800

手札3枚（竜の渓谷、竜操術含む）

フィールド

（カード無し）

ウインダLife3000

手札1枚

フィールド

《ダイガスタ・スフィアード》

《ダイガスタ・ガルドス》

魔法、罫

セットカード×1

龍士Side

突然現れてデュエルを挑んできたカードの精霊《ガスタの巫女ウインダ》。彼女の實力はかなりのもので『ガスタ』のモンスター達を巧に使い熟している。

フィールドにいる2体のシンクロモンスターの内、特に厄介なのは《ダイガスタ・スフィアード》だ。攻撃力は2000とやや低めの数値だが、3つある効果はどれも優秀だ。1つ目はシンクロ召喚成

功時に、墓地の『ガスタ』を回収する効果。2つ目は戦闘で破壊されない効果。最も厄介なのは3つ目で、『ガスタ』のモンスターの戦闘で受ける戦闘ダメージは全て相手が受けるという効果だ。簡単に説明すれば、攻撃力3000のモンスターで《ダイガスタ・スフィアード》を攻撃した場合、本来なら1000ポイントのダメージを与えることができるのだが《ダイガスタ・スフィアード》も『ガスタ』のため、この1000ダメージはこちらが受けることになる。しかも2つ目の効果で戦闘で破壊されないので、効果で破壊や除外をしなければ倒せない相手となる。

《ダイガスタ・ガルドス》は墓地の『ガスタ』を2体デッキに戻して相手の表側表示のモンスターを破壊してくるが、それ以上に《ダイガスタ・スフィアード》の存在は厄介だ。

一応《ドラグニティ・レギオン》と《ドラグニティ・アキュリス》のコンボを利用すればどちらも効果で破壊できるが、レギオンの攻撃力は1200。3800という決して多くないライフポイントでは少し心もとない。攻撃を防ぐカードもないので、次のウィンドのターンに大ダメージを受ける可能性がある。

「（俺の手札は……）」

作戦を練るため、俺は3枚の手札のカードをそれぞれ見ていく。

《竜操術》は攻撃力の底上げができるが、今の状況ではそれは逆効果だ。手札から『ドラグニティ』のドラゴン族モンスターを装備できるが、今は手札にない。

《竜の渓谷》は手札を1枚捨てることでレベル4以下の『ドラグニティ』をサーチするか、デッキからドラゴン族モンスター1体を墓地に送ることができる。墓地には既に《ドラグニティ・ファランクス》があるので、手札を1枚捨てて《ドラグニティ・ドゥクス》をサーチしてくればシンクロ召喚に繋がられる。

そして残された1枚……2枚目の《ドラグニティ・ファランクス》。

装備カード状態から特殊召喚できるが、既に墓地にいる。恐らくこれを《竜の渓谷》のコストにして《ドラグニティ・ドウクス》を手札に加えるのが正解だろう。……もつとも、それはこれからドロースするカードによって違ってくるわけだが。

「俺のターン……ドロー！」

ドローしたカードは……《ドラグニティ・アキュリス》！

「俺は竜の渓谷を発動！効果により手札からドラグニティ・アキュリスを捨て、デッキからドラグニティ・ドウクスを手札に加える！」

俺の手札に《ドラグニティ・ドウクス》が加わり、《ドラグニティ・アキュリス》が墓地に送られた。本来ならレギオンにすべきだが、レギオンは温存しておく。伏せカードは恐らく《ガスタのつむじ風》。召喚妨害や攻撃反応ではないので攻めていく！

「ドラグニティ・ドウクスを召喚！効果により墓地のファランクスを装備。そしてファランクスの効果により、ファランクス自身を特殊召喚させる、来い！」

ドウクスの側にファランクス、『ドラグニティ』を使い続けているとお馴染みになる光景だ。

「レベル4のドウクスに、レベル2のファランクスをチューニング！」

ファランクスとドウクスがそれぞれレベル分の輪と星に変わり、一筋の光に変わる。

「英雄の雷の牙、今こそその姿を現し、仇なす者を打ち砕け！シンクロ召喚！轟け、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！」

雷と共に、女性の鳥人《ドラグニティ・ミリトゥム》を乗せたオレンジの身体の竜が姿を現す。ミリトゥムは今回デッキには入っていないが、ヴァジュランダとして共に戦ってくれる。

《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1900 / 守1200

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。1ターンに1度、このカードに装備された装備カード1枚を墓地へ送る事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

「ヴァジュランダのモンスター効果発動！このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のドラゴン族ドラグニティを装備する。ドラグニティ・アキュリスを装備させる！」

ヴァジュランダの周りをアキュリスが飛び始める。

「そしてヴァジュランダは、自身に装備された装備カードを墓地に送ることで、このターン攻撃力を倍にすることができる！アキュリスを墓地に送り、ヴァジュランダの攻撃力は1900の倍、3800となる！」

アキュリスの身体が光になり、ヴァジュランダの持つ槍に吸収されると、槍が雷を纏い始める。

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ

攻撃力1900 3800

「攻撃力3800……でもスフィアードが場にいる限りその攻撃力もデメリットでしかないはず！」

「ならばスフィアードを破壊するだけだ！墓地に送られたアキュリスは、装備カードの状態で墓地に送られた時、フィールド上のカードを1枚破壊する！俺はダイガスタ・スフィアードを破壊する！」

レギオンの時とは異なり、今回は破壊をしに行くのはアキュリスではなくヴァジュランダのようで、槍から放たれた雷が《ダイガスタ・スフィアード》を貫き、破壊する。

これで厄介なモンスターはいなくなった。後は……。

「ヴァジュランダで、ダイガスタ・ガルドスを攻撃する！ライトニング・ランサー！」

ヴァジュランダが雷を纏った槍を《ダイガスタ・ガルドス》に投げ付ける。3800もの攻撃力に耐えられるはずもなく、ガルドスは破壊され、1600の戦闘ダメージをウインダは受ける。

ウインダLife3000 1400

これでウィンダのライフポイントはわずか1400。だがあの伏せカードは……。

「ターンエンドだ」

ターンエンドしたことにより、ヴァジュランダの攻撃力も1900に戻る。

龍士Life3800

手札2枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》

魔法、罫

なし

フィールド魔法

《竜の渓谷》

「私のターン……ふふ」

不敵な笑みを浮かべるウィンダ。

「私は罫カード、ガスタのつむじ風を発動。墓地のダイガスタ・ガルドス、ガスタの巫女 ウィンダをデッキに戻し、デッキからガスタの賢者 ウィンダールを特殊召喚する！」

《ガスタのつむじ風》

通常罠

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合のみ発動する事ができる。自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体を選択してデッキに戻す。その後、自分のデッキから守備力1000以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

《ガスタの賢者 ウィンダール》

効果モンスター

星6 / 風属性 / サイキック族 / 攻2000 / 守1000

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

つむじ風と共に現れた男性《ガスタの賢者 ウィンダール》の攻撃力は2000。ヴァジュランダより100ポイント上回っている。だがそれだけなら何も問題はない。次のターン、《竜の渓谷》の効果でレギオンを手札に加え、ウィンダールを破壊。そして《竜操術》を発動し、手札のフランクスを装備すれば攻撃力は1700になり、ダイレクトアタックすれば勝ちだ！

『まだよ。私は手札から、ミラクルシンクロフュージョンを発動！墓地のダイガスタ・スフィアードとクレボンスをゲームから除外！』

あれは……シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターを融合召喚するカード！さっきのドロイーで引いたのか！

《ミラクルシンクロフュージョン》

通常魔法

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分デッキからカードを1枚ドローする。

手札1枚から強力な融合モンスターを召喚できるこのカード、融合モンスター次第ではそのまま勝利することも難しくない。今ウィンダが除外したモンスターはサイキック族のシンクロモンスターと、サイキック族モンスター……ということは呼び出されるのは「究極」のサイキックモンスター。

『融合召喚！アルティメットサイキッカー！』

悪魔に似た究極の超能力を持つモンスターがウィンダのフィールドに現れる。その攻撃力は……2900。

《アルティメットサイキッカー》

融合・効果モンスター

星10 / 光属性 / サイキック族 / 攻2900 / 守1700

サイキック族シンクロモンスター + サイキック族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。このカードはカードの効果では破壊されない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超え

ていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

『バトルフェイズ、アルティメット・サイキッカーでヴァジュランダを攻撃！サイキックショックウェーブ！』

《アルティメットサイキッカー》の強力な念波がヴァジュランダを破壊。攻撃力の差、1000のダメージを受ける。

龍士Life 3800 2800

『アルティメットサイキッカーのモンスター効果により、破壊したヴァジュランダの攻撃力分、1900ポイントライフを回復させる』

相手モンスターを破壊するだけで得られる莫大なライフアドバンテージは、ライフ消費の激しいサイキック族のデッキでは重宝する。普通のライフ回復カードよりもその数値は大きいため、何度も回復されるとあつという間にライフ差が付く。

ウィンダLife 1400 3300

『そしてウィンダールでダイレクトアタック！』

ウィンダールも念波で攻撃……と思いきや杖で殴ってきた。手加減

なの、逆に本気なのかわからない。

龍士Life 2800 800

残されたライフポイントは800、風前の灯だ。しかしウインダの場にはもう攻撃可能なモンスターはいない。このターンは凌げたらしい。

『私はモンスターをセットして、ターンエンドよ』

ウインダの手札は無くなった。だがあのセットモンスターは間違いなく《ライトロード・ハンター ライコウ》。裏側のままライコウ、そして《アルティメットサイキッカー》を破壊する方法……本来ならレギオンにアキュリスを装備させれば可能のはずだが、《アルティメットサイキッカー》には強力な効果がある。突破できるのはヴアジュランダなのだが、エクストラデッキには1枚しか存在せず、その1枚も先程戦闘破壊された。

ウインダLife 3300

手札0枚

フィールド

《ガスタの賢者 ウインダール》

《アルティメットサイキッカー》

セットモンスター x 1

魔法、罫

なし

「俺のターン…ドロー！」

『分かってると思うけど…アルティメットサイキッカーには効果破壊は通用しないよ』

「ああ……分かってる。だがこいつで全部解決だ！墓地のデブリ・ドラゴン、憑依装着・ウイン、ドラグニティ・ドウクス、ドラグニティ・ブランディストック、ドラグニティナイト・ヴァジュランダを対象に魔法カード、貪欲な壺を発動！」

『ここで貪欲な壺……！？』

### 《貪欲な壺》

通常魔法

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシヤッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

墓地のヴァジュランダを再利用可能にしつつ、カードをドローできる。よくこの場面でドローできたと思う。でもこのドローに………全て掛かっている。

「選択した5枚をデッキに戻し……ドロー！」

勢いよくデッキからカードを2枚ドローする。引いたカードを1枚一枚確認していく。《ゴッドバードアタック》………そして《ドラグニティ・ドウクス》！

「俺は竜の渓谷の効果発動！手札のフアランクスを墓地に捨て、デッキからブランディストツクを手札に加える！」

俺の手札には《竜操術》がある。これでヴァジュランダにブランディストツクを装備させれば！

「俺はドウクスを召喚、効果によりフアランクスを装備！そしてフアランクスを自身の効果で特殊召喚！」

『またこのモンスター達！』

ああ、よく言われることだ。だが『ドラグニティ』はこの2体がないと成り立たないんだから仕方ないだろ。

「レベル4のドウクスに、レベル2のフアランクスをチューニング！英雄の雷の牙、今こそその姿を現し、仇なす者を打ち砕け！シンクロ召喚！轟け、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！」

再びフィールドに姿を現すヴァジュランダ。今度はフィニッシュャーとなるがな。

「ヴァジュランダの効果により、アキュリスを墓地から装備。そして永続魔法、竜操術を発動し、手札のブランディストツクをヴァジュランダに装備させ、攻撃力を500ポイントアップさせる」

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ  
攻撃力1900 2400

「そしてヴァジュランダの効果により、装備カードのアキュリスを墓地に送り攻撃力を倍にする！さらに、アキュリスの効果でセットモンスターを破壊する！」

ヴァジュランダの槍が雷を纏い、その雷をそのままセットモンスターに向かって放ち、破壊する。

「くっ……ライコウが」

「それだけじゃないぜ」

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ

攻撃力2400 4800

『攻撃力4800の……2回攻撃！？それじゃ私のライフは……』

『ドラグニティ』を使うなら1度は決めたい《竜操術》のコンボ。相手モンスターが1体だけならそのまま1ターンキルしてしまうほどの破壊力だ。

この場面でも《アルティメットサイキッカー》に攻撃して1900ポイントのダメージ、ウィンダールに攻撃して2800のダメージを与えることができ、3300のライフでは耐え切ることなどできない。つまりこのデュエル、既に勝敗は決している！

「ヴァジュランダ！アルティメットサイキッカー、そしてウィンダールに攻撃！ライトニング……ランサー！」

ヴァジュランダは自身よりも大きい《アルティメットサイキッカー

《に果敢に挑んでいく。念波の中をかい潜り、一気に距離を詰めて  
《アルティメットサイキッカー》の胴体を貫いていく。そのまま手  
にしている槍をウィンダールに投げ付け、ウィンダールも戦闘破壊  
する。

『私の……負け？』

ウィンダLife3300 - 1400

「よし、俺の勝ちだ！」

俺がガッツポーズを決めると、ヴァジュランダも勝利の雄叫びを挙げ、消えていった。

ウィンダSide

この人……私の故郷に伝わる伝説の中に登場する竜騎士『ドラグニ  
ティ』をここまで使いこなすなんて。それにあの時の《貪欲な壺》  
のドロロー……まるでデッキが彼に惚えたかのようなだった。さすが…  
…私の『片割れ』に選ばれただけのことはあるってことかな。

「俺の勝ちだ。ウィンには手を出さないでもらおうか」

本気でウインを守ろうとする姿勢……彼なら、いや、彼らなら『ガスタ』を救ってくれるかもしれない。

『ふう……分かった。ウインには手を出さないよ。でも……1つだけ聞かせて』

「ん？」

『あなたの……名前』

「風早龍士だ」

彼は躊躇う様子もなく、名前を教えてくれた。

『伝説の竜騎士を従えし者、風早龍士……』

そうやって私は口笛を吹き、私の相棒を呼ぶ。やがてその場に現れたのは成長したガルド。私が『ダイガスタ・ガルドス』として戦う時に一緒に戦ってくれる子。

私はガルドの背中に乗りながら、龍士に別れを告げることにする。

『ガスタの里を救うにはウインの力がきつと必要になるはず。本来ならその子は……うん、言わないでおくよ。幸せなら幸せのままのほうがいいもんね』

「何が言いたい！」

『いつかまた会いましょう、龍士』

龍士の問い掛けに答えず、私はガルドに乗って空を飛んでいく。

ごめんね、でも今はまだそれを明かす時じゃない。もし明かしてしまつと……あの子が悲しんじゃうから。

?????Side

「あいつ……ドラグニティの使い手か」

何者かがデュエルをしているのを見かけ、こつそり覗いていたが…

『ドラグニティ』の使い手となれば恐らく《ドラグニティアームズレヴァティン》も手にしているはず。ならば次のターゲットは奴しかないだろう。

必ず手にしなければならぬ、レヴァティンを！

## 7・雷槍、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！（後書き）

ウィンダ「今回の最強カードはドラグニティナイト・ヴァジュランダよ！」

《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1900 / 守1200

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。1ターンに1度、このカードに装備された装備カード1枚を墓地へ送る事で、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

ウィンダ「シンクロ召喚時に装備したドラグニティを墓地に送って攻撃力を倍にできるモンスターよ。ファランクスを装備してファランクスの効果を発動して特殊召喚させればレベル8のシンクロモンスターに、アキュリスを装備すればカード1枚破壊+3800のアタッカーにできるからとっても強力！パルチザンを装備すればシンクロチューナーになれるというロマンもあるのよ。ドラグニティデッキにおける必須カードでありながら絶版だから、ドラグニティデッキを構築するうえではファランクスと共に厚い壁として立ちほだから覚悟なさい！」

ウィン「わ、私の担当を取らないでください！」

次回のキーカード

「ドラグニティアームズ・レヴァティン」

ウィンダ「ドラグニティ唯一の最上級モンスター！ドラゴンならなんでも装備できるのよ！」

ウィン「相手の効果で破壊された時、装備していたドラゴンを特殊召喚できます」

## 8・陰謀と苦痛を切り裂く剣（前書き）

ライフ計算に誤りがありましたので修正しました。

エクストラデッキのアイドル、ベビトラちゃんは現在2枚。増える  
のでしょうか。

## 8・陰謀と苦痛を切り裂く剣

ウィンSide

私、今日はマスターの命令でお留守番をしています。何度も何度も学校に連れて行ってくださるはずもなく、留守番を命じられました。

「11時……お昼ご飯にはまだ早いなあ」

人間界の生活や文化には慣れてきました。暇な時には家事を手伝ったりもしますが、失敗してしまうことも多いです。

そんな私にも心配事の1つや2つあります。昨日マスターと私の前に現れた精霊《ガスタの巫女 ウィンダ》のこと。美浦さんの所持するナンバーズのこと、そして今も争いの絶えない精霊界のこと……。私は荒れた精霊界から逃げるようにしてこの人間界にやってきた。でもいつまでもそうしているわけにはいかない。私は……「決意」があるのだから。

それは私がまだ精霊界で修行をしていた時のこと。当時はまだ人間界に行くことなど考えもしませんでした。外敵から狙われることなく、平和な霞の谷で平和に暮らせればそれでいい、そう考えていました。

ですがそんな時、突如霞の谷にある民族が乗り込んできました。邪悪な儀式を操る力を持ち、ミストバレー湿地帯の豊富な資源を求め侵略を続ける『リチュア』と呼ばれる民族です。湿地帯に隣接して

いる霞の谷の集落も資源には恵まれていたため、目を付けてきたのでしょうか。

突如進攻してきた『リチュア』に、少数部隊しか持たない霞の谷はなす術なく敗れていきました。ですがその時、霞の谷の奥底から現れた救世主がいました。

「これ以上好き勝手はさせん！この剣の錆になりたくなければ、この谷から出ていくがいい！」

「れ、レヴァテイン様！」

霞の谷、そしてその中に存在する竜の渓谷の守護神である《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》は、弱った霞の谷の住民を庇うようにして現れ、手にしている剣で次々と『リチュア』が生み出した化け物達を倒していき、それまで窮地に陥っていた霞の谷が、一瞬にしてその窮地から脱することになりました。そして残された最後の化け物『イビリチュア』の姿を見て、物影から様子をのぞき見していた私は声を揚げてしまいます。

「エ……エリアちゃん？」

化け物と一体となり、住民に襲い掛かっていたのは紛れもなく、同じ霊使いで私の親友《水霊使いエリア》でした。

考えるよりも先に止めに行こうと動く私に対しても、容赦なく攻撃を仕掛けてくるエリアちゃん。殺される、そう思った瞬間、何者かによって攻撃は止められました。

「退け……侵略者よ。退かぬのなら、この槍で貴様の邪心ごと粉碎する」

白の竜に跨がり、竜と同じ白の鎧を纏った竜騎士が、エリアちゃんの攻撃を槍で受け止めていた。《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》、マスターのフェイバリットカードです。

「あ……止めて下さい。彼女は…私の親友なんです！」

エリアちゃんが殺される、そう思った私は必死になって叫びました。先程自分を殺そうとした化け物を庇うと考えるとおかしなことです。が、私は親友を庇っている、決して化け物を庇っているのではありませんでした。その気持ちが伝わったのか、ゲイボルグさんは頷きながらこう言ってくれました。

「親友は親友が助けるしかない。彼女を本当に助けたいのであれば、親友である君が助けねばなるまい」

「私が……？」

「そうだ。どんなに化け物と一体になると、心までもが化け物に支配されていないのであれば、きっと声は届く」

「私が……エリアちゃんを……」

近づけば殺されるかもしれない。でも不思議とそんな恐怖はありませんでした。私がエリアちゃんを救わなければならない、そんな気持ちで一杯だったからでしょう。

「エリアちゃん！私の声が聞こえるなら聞いて！これ以上霞の谷の人達を苦しめないで！」

「……………」

「お願い……」

「うい……ん……た……すけ……て……」

確かにその時「助けて」という声が聞こえました。化け物になった今もエリアちゃんの心は死んではないし、助けを求めている……。エリアちゃんの声が聞こえなくなると同時に、エリアちゃんと合体していた化け物がうめき声を揚げて苦しみ始めました。恐らく彼女の心が化け物と戦っていたのでしよう。やがて化け物は力尽き、同時にエリアちゃんも意識を失ったようでした。

「くっ……リチュア・リアルが意識を失い、イビリチュア・マインドオーガスとして戦えなくなっただか……撤退するぞ！」

リーダー格の男性がそう指示すると、『リチュア』の侵略者達は霞の谷から去っていきました。

「エリアちゃん……」

彼女はあの時「助けて」と私に助けを求めてきました。親友は親友が助けるしかない、なら私は必ずエリアちゃんを助ける。あの時私はそう決意したのです。ですが、私の力ではエリアちゃんを助けるどころか化け物となった彼女の攻撃に耐えることもできません。そうして私の力になってくれる人を求め、人間界にやって来て出会ったマスター、龍士。あの人は伝説の竜騎士『ドラグニティ』を操るほどの力を持っています。もしマスターがああ『ドラグニティアームズ・レヴァテイン』でさえも巧みに操るといっているのであれば……恐らく、いや絶対にエリアちゃんを救ってくれるはずです。

最近どうも気になっていることがある。それはウインの目的だ。ウインダの様子から察するに、ウインには何かしらの力があるらしく、それはウインダ、あるいは『ガスタ』にとつて重要なものであることは間違いない。そんな力を持つているウインが人間界にやってきた目的はいまいちはずきりしない。修行という感じでもなく、かといって単に遊びに来たわけでもなさそうだ。悪い事をしようとしていいるなどとは絶対に思えないし、何より思いたくない。素直で礼儀正しい、ちょこちょこ動き回るかわいらしいあの子が悪い奴じゃないことくらい考えなくてもわかることだ。……って最近ウインのことしか考えてないな。恋？俺はロリコンじゃないんだ。とすると……庇護欲をそそられる？とにかく見てるとなんか危なっかしくてほっとけない。妹ができたみたいなものだろうか。違うなら……ペツト？

「風早、ぼーっとするな！ほら、問5の(2)、答える」

やべえ……考え事してて話聞いてなかったから答えられねえ。何々……の角度を求めよ……図形の問題は苦手なんだがな……俺が問題にてこずっていると、誰かが後ろから突いてくる。振り返ると1人の男子生徒。確か名前は……黒井壮太くろい そうただったかな。

「の角度は105°だよ」

と、こつそりと答えを教えてくれた。その厚意、甘えさせてもらうことにする。

「えつと…105。です」

授業が終わり、昼休みになる。俺はさっきのお礼をしなくてはと思いい、黒井を探したがどこかに出かけていったらしく、席にはいなかった。あまり話したことがないような俺にどうして助け舟を出してきたのかはわからないが、それに助けられたのは事実。ちゃんとお礼は言わないといけないのにな……。

「難しい顔して、どうしたの？」

俺が考え事をしていると、弁当を抱えて美浦が俺のクラスにやってきた。俺達はいつも一緒に昼飯を食べる仲だ。でもそれは幼なじみだからであって、異性として互いを意識し合ったことは1度もない。よく勘違いされるから困るんだよな。

昼飯を食べるのはいつも学校の屋上。風が気持ち良く、学校内でも訪れる人が最も多い場所だったりする。俺達のように昼飯を食べる場所として利用したり、極端な例では告白の場所にも指定されたりするとのこと。この間ウインを連れてきた時も、彼女はこの場所をえらく気に入ったようだった。風属性だけに風の気持ち良い場所は好きなのだろうか。

さて、余計な話はこのままでしておく。昼飯を食べながら俺は美浦から黒井の事を聞くことにする。余談になるが、美浦は学校有数

の情報屋とも言われるほど、情報をかき集めてくる才能がある。誰がテストで何点取ったかなどの情報まで入手してくるほどの情報網を持つ美浦なら黒井のことを何か知っているかもしれない。

「んー……黒井君ね」

「ああ、ちょっとばかし借りを作ってしまったからお礼をしようと思っただけだな。昼休みになった途端どこかに行ってしまったんだ」

「昼休みに……やっぱり本当みたいね」

そう言う美浦の表情はどこと無く暗い。

「黒井君、虐められてるみたいなのよね。理由まではわかんないんだけど」

「虐め？」

「うん。で、黒井君が中学校の時に、虐めを止めようとした妹さんがいて……その子、殺されちゃったらしいわ」

「あいつの……妹が？」

成績も優秀であり、クラスの一部の女子の間では人気もある黒井。そんなあいつに妹がいて、しかも殺されていたとは……驚いた、と一言では言い表せないほど衝撃的な話だ。

「どういった原因でそうなったかまではわかんないんだけど、過去にそういった事があったみたい。ただ……妹さんを亡くしてからも

虐めは止まらなかったらしいわ」

自分を犠牲にしてまで虐めを止めようとした妹の努力も虚しく、虐めは止まらなかった。そしてそれが今も続いているのだとしたら……。

「じゃあ昼休みにいないのは……」

「そういうこと……でしょうね」

それを知って美浦はどうして黙っていられるのだろう。正義感の強い美浦のことなのだから、意地でも現場を突き止めて、虐めの主犯格を再起不能にしそうなものだけども。

「なあ……お前は止めないのか」

思いきって聞いてみると、美浦の表情はより一層暗くなる。

「止めたいわよ。でも、止められないでしょうね。その虐めの主犯、この学校で一二を争うほどの不良だもの。教師ですらお手上げのあいつに下手に関われば……本当に殺されるかもしれない、みんなそう考えてる。当然、あたしもね」

黒井の味方は誰もいないってことかよ……。それっておかしいだろ。

「苦しんでる奴を見過ごすなんて……俺はできない」

「龍士？」

誰も味方になってやらないのなら……俺が味方になってやるしかない

い。気付けば俺は屋上を飛び出し、走っていた。

壮太Side

やっぱり……僕がこの地獄から抜け出すには竜の守護神《ドラグニ  
ティアームズ・レヴァティン》の力が必要なんだ。あの竜の力を人  
間界に持ち込めたなら……この腐った世界を変えられる。力……力  
が欲しい……！

『力ならある……ナンバーズの力が』

突然僕の目の前に、1人の『皇』が現れ、僕に呼び掛けてくる。

『ナンバーズを使え……さすれば汝の希望は叶えられる……』

僕の希望……それは僕を虐める悪を滅ぼし、レヴァティンの力を手  
に入れること。そのための力……力を僕に！

その時、僕の手元に見覚えのないカードが現れる。黒のカード……エ  
クシーズモンスター《No.39 希望皇ホープ》。僕のデッキと  
は合わない戦士族。でもこのカードがあれば……。

「できる……」

虐めの主犯を痛め付けることも、レヴァティンを手に入れることも

……。  
待ってなよ龍士君…きっと君からレヴァティンを奪ってみせるから。

## 龍士Side

結局あれからあちこちを探し回ったものの、黒井を見つけることはできなかった。授業にも姿を現さず、担当の教師も優等生が授業に参加していないことに対して不安になっていたらしい。

放課後、黒井の身を案じた俺と教師である母さんは、美浦の助けを借りながら黒井の搜索に乗り込んだ。『前例』がある以上、放っておくわけにはいかない、そう判断しての行動だと母さんは言う。しかし広範囲に渡る搜索は人間3人では困難を極める。何かいい手はないか……そう悩んでいた時、突然美浦が立ち止まった。

「どうした……!？」

振り返った俺と母さんは、美浦が手に持っているカードが光っていることに驚く。

「リバイス・ドラゴンが……何かに反応している？」

そう美浦が言った瞬間、光は俺達の頭上に広がり、やがてその光はリバイス・ドラゴンの姿そのものとなり、俺達の目の前に降りてく

る。

『主……我が主よ……』

「リバイス・ドラゴン……？」

「これは……カードの精霊ね」

母さんの言う通り、こいつはリバイス・ドラゴンの精霊！既に宿っていたのか。だとしたら何がきっかけになって……。

『ナンバーズが現れた。至急回収せねばならん』

「こんな時に厄介な奴が……！」

「嫌な予感がする……。案内して、リバイス・ドラゴン！」

『承知した……こつちだ』

俺達はリバイス・ドラゴンに案内され、ナンバーズの元へと急ぐ。美浦の言う通り、嫌な予感しかしい……急ぐぞ！

ウィンSide

さつきから胸騒ぎがします。何かあるのでしょうか。

「この感じ……ナンバーズやな」

「ナンバーズ……!？」

「ウイン、はようマスターの元に行ったほうがええんとちゃうか？」

ナンバーズの気配を感じ取ったプチリユウが、私にそのことを伝えてきます。もし本当なら、マスターに危害を加える可能性があります！

「マスター！」

私は家の戸締まりを済ませると、マスターの元へ向かいました。マスター……どうか無事で！

## 龍士Side

リバイス・ドラゴンの案内で駆け付けた場所ではデュエルが行われていた。1人はいかにも不良という感じの柄の悪い男、もう1人は……。

「黒井!？」

「やあ……龍士君。ちょっと待ってなよ。今こいつを始末するから」  
黒井の場のモンスター……見たことのないモンスターだ。

『ナンバーズ……希望皇ホープ……』

「何、黒井がナンバーズを!？」

あの剣士のモンスター……あれがナンバーズだと言うのか!

「希望皇ホープでダイレクトアタック……ホープ剣スラッシュ!」

「っ……ギャアアア!」

ホープに斬られ、その衝撃で男はビルの壁にぶつかり、気絶してしまふ。頭を打っていないければいいが……。俺達は急いで男の保護に向かう。

「こいつ……あの不良じゃない!」

美浦が男の顔を見て驚く。こいつが黒井を虐めていた奴か……。だとしたらこれは黒井の復讐か?

「そいつの顔は愉快だったよ。普段あれだけ偉そうに振る舞っておきながら自分の身が危険だと察すると半泣きになってたよ。これほど愉快なことはないね。力で力を押さえ付ける……。次は……君の番だ」

黒井がDパッドを構える。やるしかない、俺はDゲイザーとDパッドを装着すると、デュエルをするため構える。

「龍士！受け取って！」

デュエルを始めようとした時、美浦が俺に1枚のカードを投げたのでキャッチする。リバイス・ドラゴンのカードだ。

「ナンバーズにはナンバーズで対抗しなきゃ。リバイス・ドラゴン、龍士に力を貸してあげて」

『承知した……。龍士よ、我と共に彼をナンバーズの呪縛から解放つのだ』

「言われなくても分かってるっての！いくぜ！」

「デュエル！」

「デュエル……！」

黒井を救うためのデュエルが始まる。

龍士L i f e 8 0 0 0

壮太L i f e 8 0 0 0

「必ず救ってやる、俺のターン！」

ドローしたカードを手札に加え、手札の内容を見る。

《霞の谷のファルコン》

《くず鉄のかかし》

《ドラグニティ・レギオン》

《デモンズ・チェーン》

《サイクロン》

《調和の宝札》

初手でファランクスやアキュリスを墓地に送る手段はない。ここは  
一先ず《霞の谷のファルコン》を召喚して様子見だ。

「俺は霞の谷のファルコンを召喚！カードを3枚伏せてターンエン  
ドだ！」

《霞の谷のファルコン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守1200

このカードは、自分フィールド上に存在する

カード1枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

レベル4でありながら攻撃力2000のファルコンは序盤のアタック  
カーとしてかなり重宝する。そして伏せカードには《くず鉄のかか  
し》がある。攻撃力2000を上回るモンスターを召喚されても、  
防御手段はある！

龍士Life8000

手札2

フィールド

《霞の谷のファルコン》

魔法、罾

伏せカード×3

「僕のターン……手札からサイクロンを発動。フィールド上の魔法、罾カードを1枚破壊する」

《サイクロン》

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罾カード1枚を選択して破壊する。

俺が破壊されたのは同じ《サイクロン》だ。それほど問題はない。

「永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動。5体のドラゴンをデッキから墓地に送り、2ターン後に融合モンスター、F・G・Dを融合召喚扱いで特殊召喚する」

《未来融合・フューチャー・フュージョン》

永続魔法

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊

召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

《F・G・D》

融合・効果モンスター

星12/闇属性/ドラゴン族/攻5000/守5000

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。ドラゴン族モンスター5体を融合素材として融合召喚する。このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。(ダメージ計算は適用する)

《未来融合・フューチャー・フュージョン》による強力な墓地肥やしが行われたか。《サイクロン》が残っていれば、チェーン発動して破壊すればそれを封じることができたと考えると、少し痛かったか。永続魔法やフィールド魔法は、効果解決時にフィールドに存在していなければ効果が適応されないデメリットがあるんだ。

「そして僕はフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動」

周囲の景色が《死皇帝の陵墓》のものへと変化していく。

このフィールドは、アドバンス召喚に必要なモンスターをライフを支払うことで肩代わりするフィールドだ。これを発動するということは、何かしらの最上級モンスターを召喚するという事にちがいない。

《死皇帝の陵墓》

## フィールド魔法

お互いのプレイヤーは、アドバンス召喚に必要なモンスターの数×1000ライフポイントを払う事で、リリースなしでそのモンスターを通常召喚する事ができる。

「僕は2000のライフを支払うことで、このモンスターを召喚する」

黒井は手札から抜き出したカードを召喚する。

壮太Life 8000     6000

「現れる、光と闇の竜！」

陵墓の影から現れたのは、身体が白と黒に別れ、対照的な容姿をしたドラゴン《光と闇の竜》だった。このカードは全カードの中でも指折りのレア物。そう簡単に手に入る物ではない。そしてこれは以前、ニユースで聞いた謎の男が持つカードと同じ。

### 《光と闇の竜》

光   ドラゴン族     8   ATK / 2800   DEF / 2400

このカードは特殊召喚できない。このカードの属性は「闇」としても扱う。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にする。この効果でカードの発動を無効にする度に、このカードの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。このカードが破壊され墓地へ送られ

た時、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。自分フィールド上のカードを全て破壊する。選択したモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「まさか……強盗犯にデュエルを挑んだってのは！」

「知ってたのか。そう、それは僕さ。この世の汚れた魂を浄化するために、僕はデュエルをした」

「お前……！」

詳しい目的はあえて問い質さない。それをして黒井が取り乱してもしたらどうなるかわからないからな。とにかく今はデュエルを続ける！

「バトル、光と闇の竜でファルコンに攻撃、シャイニングブレス！」

攻撃力2800ではファルコンは破壊される。だが俺にはこのカードがある。

「やらせはしない、畏カード、くず鉄のかかしを発動！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「無駄だ！光と闇の竜の効果！攻撃力、守備力を500ポイントダウンさせ、魔法、罫、モンスター効果の発動を無効にする！」

「何！？」

光と闇の竜

攻撃力 2800      2300

攻撃力が2300にダウンするも、ファルコンを戦闘破壊するには十分な攻撃力だ。ファルコンは戦闘破壊され、くず鉄のかかしも墓地に送られた。

龍士 Life 8000      7700

正直迂闊だった。まさか《光と闇の竜》に強力な無効効果があるとは思ってもしなかった。これではドウクスやレギオンの効果も無効にされ、発動できない。だが突破口がないわけではない。

「どうだい、この竜の洗礼を受けて」

「んなことはどうでもいい。ターンエンドならさっさと宣言しろ」

「やれやれ、せっかちな……ターンエンド」

黒井のターンは終了される。

壮太 Life 6000

手札 2枚

フィールド

《光と闇の竜》

魔法、罠

《未来融合・フューチャー・フュージョン》  
フィールド魔法  
《死皇帝の陵墓》

今フィールドには《死皇帝の陵墓》が発動されている。この効果はお互いのプレイヤーに使用する権利がある。俺もライフポイントさえ支払えば、上級モンスターの召喚ができる。《光と闇の竜》を突破する手段はそれしかない。

「ドロー！」

ドローフェイズに引いたカードを恐る恐る確認し、そのイラストを見て安心する。これなら…大丈夫だ、と。

「俺は死皇帝の陵墓の効果を発動する！光と闇の竜が無効にできるのはカードそのものの発動のみ、効果は無効にできない！」

「ちっ……気付いていたか」

俺は先程ドローしたカードを手に取り、ライフポイントと引き換えにフィールドに召喚する。

「2000ポイントのライフと引き換えに……来い、ドラグニティアームズ・レヴァテイン！」

巨大な羽、そして巨大な剣を手にした竜《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》が俺のフィールドに現れる。

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》

効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守1200

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター1体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、「ドラグニティアームズ・レヴァティン」以外の自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。このカードが相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

召喚時の効果は今意味がない。だが、その高い攻撃力は《光と闇の竜》を倒すのに十分な攻撃力を持っている。

「やはり持っていたか……ドラグニティアームズ・レヴァティン……」

「見とれている場合か？お前の光と闇の竜の攻撃力は、レヴァティンよりも下回っているぜ！バトルフェイズ！レヴァティンで光と闇の竜に攻撃！ドラゴニックブレイド！」

攻撃宣言を聞き、レヴァティンは《光と闇の竜》に接近し、剣を奮う。《光と闇の竜》も光線を放ち応戦するも、やがて隙を突かれレヴァティンの剣に切り裂かれ、破壊される。

《光と闇の竜》は戦闘破壊した。だがその輝きはフィールドを去った後も残り続けている。それを見た黒井はニヤリと笑みを浮かべる。

「光と闇の竜が破壊された時、フィールド上のカードをすべて破壊し、墓地のモンスターを1体特殊召喚する。感謝するよ龍士君。君のおかげで僕のエースモンスターが召喚できるんだからね」

「何……!？」

《光と闇の竜》はエースモンスターを召喚するための罠に過ぎなかったというのか!

「銀河の果てより現れる……銀河眼の光子竜！」

《光と闇の竜》の残した光から現れたのは、銀河系の星々にも劣らない輝きを持った竜《銀河眼の光子竜》だった。

「さあ……銀河の輝きの前に散れ！」

## 8・陰謀と苦痛を切り裂く剣（後書き）

ウィン「今回の最強カードはドラグニティアームズ・レヴァティン  
！」

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》  
効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守1200

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター1体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、「ドラグニティアームズ・レヴァティン」以外の自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。このカードが相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ウィン「ドラグニティ唯一の最上級モンスターです。最近のストラクチャーデッキの看板モンスターらしく、自身の効果に特殊召喚効果があります。シンクロモンスター達とこのモンスター、上手く使い分けたいですね。」

このモンスターが相手のカードの効果で破壊されると、装備されていたドラゴン族モンスターを特殊召喚できます。強力な上級モンスターを装備していれば破壊されても心配ありませんね。

この小説ではかなり重要なモンスターのようですが、これからどう絡んでくるのでしょうか……」

次回のキーカード

「No.39 希望皇ホープ」

ウィン「黒井という方に取り憑いたナンバーズですが、あの方のデッキとは相性が悪いのでは……。ナンバーズはデッキは選ばないみたいですよ」

## 9・銀河の覇者

龍士Life5700

手札2

フィールド

《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》

魔法、罾

伏せカード×1

壮太Life5700

手札2枚

フィールド

《銀河眼の光子竜》

魔法、罾

(なし)

龍士Side

「銀河の果てより現れる……銀河眼の光子竜！」

《光と闇の竜》を破壊することに成功したが、残された光から現れたモンスターは銀河系の星々を彷彿させる輝きに満ちたドラゴン。その攻撃力は3000、レヴァテインよりも上だ。

《銀河眼の光子竜》

効果モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

このカードは自分フィールド上に存在する攻撃力2000以上のモンスター2体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。このカードが相手モンスターと戦闘を行うバトルステップ時、その相手モンスター1体とこのカードをゲームから除外する事ができる。この効果で除外したモンスターは、バトルフェイズ終了時にフィールド上に戻る。この効果でゲームから除外したモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力は、そのエクシーズモンスターをゲームから除外した時のエクシーズ素材の数×500ポイントアップする。

今のままではレヴァティンはなす術なく破壊される。手札は《調和の宝札》と《ドラグニティ・レギオン》。墓地には《ドラグニティ・ファランクス》も《ドラグニティ・アキュリス》もないためレギオンの効果による破壊はできない。だが攻撃を凌ぐ手段はないわけではない。

伏せてある罠カードは《デモンズ・チェーン》だ。相手モンスターの効果を無効化し、攻撃を不可能にする。これを発動すれば攻撃は止められる。

《デモンズ・チェーン》

永続罠

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化される。選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊

する。

「ターンエンドだ！」

伏せるカードもなく、通常召喚も行った。やることはないのでターンエンド宣言をする。

「僕のターン、ドロー！仮面竜を召喚！」

黒井の場に仮面のようなものを被ったドラゴンが出現する。あのモンスターはリクルーターだったな。だが攻撃表示だと？何を考えているんだ？

《仮面竜》

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「バトル、銀河眼の光子竜でレヴァティンを攻撃！破滅のフォトンストリーム！」

やはり攻撃してきたか！なら……！

「永続罨発動！デモンズ・チェーン！相手モンスター1体の効果を無効にし、攻撃を不可能にする！」

《銀河眼の光子竜》を悪魔の鎖が捕らえようとする。だがその時、  
《銀河眼の光子竜》は鎖を素早く避けレヴァティンの首を掴むと、  
共に消滅した。

「消えた!？」

「銀河眼の光子竜の効果さ。このモンスターが相手モンスターと戦  
闘を行っている時、このモンスターと相手モンスターをバトルフェ  
イズ終了時まで除外できるのさ。よって対象を失ったデモンズ・チ  
ーンは無意味にフィールドに残り続ける」

結果的に《銀河眼の光子竜》の攻撃は止められたが、俺のフィール  
ドは今ガラ空きだ!

「仮面竜でダイレクトアタック!」

《仮面竜》が火の粉を吐き、俺にダメージを与えてくる。

龍士Life5700 4300

「バトルフェイズ終了……銀河眼の光子竜とレヴァティンは再びフ  
ィールドに現れる」

効果により除外されていた2体のモンスターがフィールドに戻って  
くる。レヴァティンはフィールドに残っているが、それでも不利だ。

「僕はこれでターンエンドするよ。さあ、君のターンだ」

壮太Life5700

手札2枚

フィールド

《銀河眼の光子竜》

《仮面竜》

魔法、罠

(なし)

《銀河眼の光子竜》の効果を見る限り、《聖なるバリア・ミラーフォース》のような攻撃反応型の罠は通用せず、攻撃力3000以上のモンスターで攻撃しても逃げられる。ということは何かしらのモンスター効果で除去するか、効果そのものを無効にしようしかない。先程の《デモンズ・チェーン》を攻撃宣言時に発動したのは間違いだったか。

とにかく今は《ドラグニティ・アキュリス》を墓地に送る手段か、フィールドに意味なく存在する《デモンズ・チェーン》を再利用する手段が欲しいところだ。

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認する。《ドラグニティ・ドゥクス》を引いたが、やはり墓地にフランク스가存在しないのであまり嬉しくない。

だが逆にそれはフランクスカアキュリスをドローした瞬間に動き出せるということだ。手札には《調和の宝札》があるため、ドローしてもそのまま墓地に送ることができる。この場合、やはりアキュリスが欲しいところだ。

目的のカードを引けなかったのなら、今できることをやるだけだ。  
《仮面竜》は攻撃表示。レヴァティンで攻撃すればダメージが与えられる。

「バトルだ。レヴァティンで仮面竜を攻撃！ドラゴニックブレイド！」

レヴァティンが大剣で《仮面竜》を破壊する。

壮太Life5700 4500

だが《仮面竜》もただやられるだけでは終わらない。最後の力を振り絞り、仲間を呼ぶために吠える。

「仮面竜の効果発動。このモンスターが戦闘で破壊された時、攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体をデッキから特殊召喚する。僕はランサー・ドラゴニウトをデッキから特殊召喚する」

《仮面竜》に呼ばれ現れたのは、槍を手にした緑の竜人……といってもほとんどドラゴンだけだな。

《ランサー・ドラゴニウト》

効果モンスター

星4/闇属性/ドラゴン族/攻1500/守1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

貫通能力を持つているものの、攻撃力はたった1500。さほど脅威ではない。むしろ問題はその先だろう。

「ターンエンドだ！」

やはり伏せるカードはないため、そのままターンを終了する。《銀河眼の光子竜》を止める手段がぜひとも欲しかった。

龍士Life4300

手札3

フィールド

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》

魔法、罫

《デモンズ・チェーン》

『マスター！』

俺がターンの終了宣言を終えた途端、ウィンとプチリュウが駆け付けてくる。

『ど、ドラグニティアームズ・レヴァティン！？マスター、本当に……』

『何を驚いているんだよ、そんなに』

レヴァティンを見て驚いた様子のウインに俺は尋ねる。確かに俺にとってこいつは特別な存在ではあるが……。

「レヴァティンは精霊界では霞の谷、そしてドラグニティの住まう竜の渓谷の守護神と言われているのさ。その力は絶大なもので、あらゆるものを救世、あるいは破壊できる程らしい」

『どうして……そのことを』

黒井が精霊界のことについて語りだすと、ウインは動揺していた。それもそのはず、ただの人間が精霊界の事情を知っていることなどありえない。ただの人間、なら。

「どうして？わかりきったことさ。僕はかつて精霊界に行ったことがあってね、その時に知っただけさ。この腐りきった世界を変える力を。当然、君のような精霊も見ることにはできる」

「腐りきった世界を変える力……それがレヴァティンだったのか。んで、それを狙って俺にデュエルを挑んできたのか」

「ああそうさ。君にはレヴァティンを譲ってもらう必要がある。腐った世界を変えなきゃならないから」

ふざけんな……。

「お前、それにお前の妹のことは同情してやる。だがな……この世界は決して腐っちゃいない！」

「何故だ！何故そんなことが断言できる！それにどうして君が妹のことを！」

「後の質問に関してはこの際どうでもいい。だが前の質問に答えるなら……お前の事を心配している人がいるからだ」

「何……？」

「お前の母さんだって、担任の先生だって……死んじまったお前の妹だってお前を愛したはずだ。……それだけじゃねえ。俺達もお前のことを気にかけてるし、必要としている。人を愛する、必要とする心を持った人間がいる限り、世の中は腐りはしない、絶対にだ！」  
「そうだ、世界は腐っちゃいない。たとえわずかであっても人の心がある限り、決して腐りはしない。どんなに辛く苦しいことがあっても人の心の支えはそれを乗り越えるための力を与えてくれる。だが黒井は虐め、そしてそれが原因で妹が亡くなったことで絶望し、それが見えなくなっていった。だから世界は「腐っている」ようにしか見えなくなっていたのだろう。」

「っ……煩い、煩いよ！君に僕の気持ちなんて分かるわけない！僕のターン！僕は……ランサー・ドラゴニユートを召喚！」

黒井のフィールドにもう1体ランサー・ドラゴニユートが現れる。

『レベル4のモンスターが2体。それにどちらもチューナーじゃないとすれば……』

「来るか……」

「レベル4のランサー・ドラゴニユート2体をオーバーレイ！」

《ランサー・ドラゴニユート》達が光の渦に飲み込まれていく。エクスシーズ召喚特有のエフェクトだ。

「2体のモンスターで……オーバーレイネットワークを構築……エクスシーズ召喚！No.39 希望皇ホープ！」

フィールドの中央に現れたオブジェが変形し、やがて1体の白い剣士となる。

《No.39 希望皇ホープ》

エクシーズ・効果モンスター

ランク4 / 光属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

レベル4モンスター×2

自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。そのモンスターの攻撃を無効にする。このカードがエクシーズ素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

「ナンバーズ………！」

「こいつの気配がしてたんやな………」

ナンバーズはどんな効果を持っているかはわからない未知のカード。リバイス・ドラゴンのように攻撃力を上昇させる効果か、あるいはまったく別の効果なのかわからない。とにかく召喚されてしまった以上は警戒すべきだろう。

「バトル………！銀河眼の光子竜でレヴァティンを攻撃………破滅のフ

オトンストリーム！」

レヴァティンを標的として再び《銀河眼の光子竜》の口から光線が放たれる。レヴァティンは大剣で防御しようとするが、やがて剣は砕け、光線に飲み込まれ消滅する。

「ちっ……レヴァティン！」

龍士Life 4300 3900

「攻撃はまだ終わっていない！希望皇ホープでダイレクトアタック！ホープ剣スラッシュ！」

「ぐああああ！」

龍士Life 3900 1400

攻撃力2500のダイレクトアタックは流石にきつい。

ライフポイントはたった1400。しかもどんな壁モンスターを召喚しても《銀河眼の光子竜》に除外され、ホープでダイレクトアタックをされて負けてしまう。この状況を打破できるカード、果たしてそれを手札に呼び込むことができるのだろうか。

「ターンエンド」

壮太Life4500

手札2枚

フィールド

《銀河眼の光子竜》

《No.39 希望皇ホープ》

魔法、罨

(なし)

「俺の……ターン！」

祈るようにしてデッキからカードをドロウする。引いたカードは……  
…《ドラグニティ・フランクス》！

「俺は攻撃力500、ドラゴン族チューナーのフランクスをコストに調和の宝札を発動！デッキからカードを2枚ドロウする！」

効果でドロウしたカードは《死者蘇生》、そして《おろかな埋葬》だ。これなら十分だ！

「俺はおろかな埋葬を発動！デッキからBF-精鋭のゼピュロスを墓地に送る！」

俺が墓地に送ったのは《ドラグニティ・アキュリス》ではない。少ないライフポイントでレギオンを攻撃表示で残すのは危険だ。なら別の戦略で行く！

《おろかな埋葬》

通常魔法

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

《BF - 精鋭のゼピュロス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1600 / 守1000

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を手札に戻して発動する。このカードを墓地から特殊召喚し、自分は400ポイントダメージを受ける。「BF - 精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「墓地のBF - 精鋭のゼピュロスの効果発動！自分フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を手札に戻し、このモンスターを特殊召喚、その後400ポイントのダメージを受ける！」

今のライフなら400程度どうってことない！

龍士Life1400 1000

「さらに俺はドラグニティ・レギオンを召喚！召喚時効果により、自分の墓地からレベル3以下のドラゴン族ドラグニティを装備！さつきコストにしたファランクスを装備し、さらに自身の効果で特殊召喚する！」

ゼピュロス、レギオン、ファランクス。この3体のレベルの合計は……9だ。

「レベル4のゼピュロスとレベル3のレギオンに、レベル2のファランクスをチューニング！」

ファランクスが2つの光の輪になり、その中にゼピュロスとレギオンが入る。

「氷結の魔龍、今永き刻を経て蘇り終焉を齎せ！シンクロ召喚！」

3体のモンスターは一筋の光となり、シンクロモンスターを召喚させる。3つの首を持ち、見る者さえも凍えさせそうな氷のオーラを纏ったドラゴンがそこに現れる。

「咆哮せよ……氷結界の龍 トリシューラ！」

《氷結界の龍 トリシューラ》

シンクロ・効果モンスター

星9 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2700 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外する事ができる。

トリシューラの効果はシンクロモンスターの中でもかなり凶悪な部類で、『氷結界』デッキだけでなく様々なデッキに投入されるほどの汎用性がある。

「トリシューラの効果発動！このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド、手札、墓地のカードを1枚ずつゲーム

から除外する！俺はフィールドの銀河眼の光子竜、手札を1枚、墓地の光と闇の竜をゲームから除外する！エターナルフリーズ！」

トリシューラのブレスが《銀河眼の光子竜》、手札、墓地の《光と闇の竜》を凍らせ、ゲームから除外させる。たった1体のモンスターで相手の切り札2枚を除外し、手札も1枚にしてしまったのだ。

「くそっ……」

「いくぜ、トリシューラでホープを攻撃！ブリザードブレス！」

効果の時よりも強力なブレスがホープに襲い掛かる。

「ホープのモンスター効果！エクシーズ素材を1つ取り除き、自分もしくは相手の攻撃を無効にする。ムーンバリア！」

周囲を飛び回っていた光の球を取り込むと、自身の羽のような部分を展開し、バリアを作り出してブレスを防ぐ。ホープのモンスター効果は攻撃無効効果なのか。

「なら……カードを1枚伏せてターンエンド！」

伏せたカードは先程ゼピュロスの効果で手札に戻した《デモンズ・チェーン》だ。次のターンホープの効果を無効にすれば攻撃は通る。

龍士Life1000

手札2枚

フィールド

《氷結界の龍 トリシューラ》

魔法、罨

伏せカード×1

ホープではトリシューラの攻撃力を越えられない。トリシューラが倒されるとすれば次のドロー次第、それがもし戦闘による破壊でダメージが1000以上なら少し計算が狂う。

「僕のターン……!!」

今、黒井が不気味に微笑んだ。この状況を覆すカードを引いたというのか……？

「手札から魔法カード、サイクロンを発動。その伏せカードを破壊するよ」

伏せられていた《デモンズ・チェーン》が《サイクロン》によって破壊される。ホープの効果を無効にすることはできなくなったが、どうということはない。次のターン、レギオンをドローすればホープを効果で破壊し、《死者蘇生》で別のレギオンを蘇生、リバイス・ドラゴンをエクシーズ召喚すれば問題ない!

「そして僕は……龍の鏡を発動!」

「なっ……!!」

黒井の墓地には最初のターン墓地に送った《銀河眼の光子竜》以外のドラゴン4体と《仮面竜》、そして《ランサー・ドラゴニユート》が存在する。

《龍の鏡》

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「墓地の5体のドラゴンをゲームから除外し、融合召喚！F・G・D！」

鏡に5体のドラゴンが吸い込まれ、5つの首を持つ巨大なドラゴンが誕生する。その攻撃力、5000。

『攻撃力5000……！！』

「これじゃあたしのリバイス・ドラゴンを召喚する前に……！！」

俺の場には罨カードも何も無い。トリシューラでは《F・G・D》の攻撃を耐えることはできない。つまりこの勝負……。

「君の負けだ、龍土君。バトル、F・G・Dでトリシューラに攻撃……！！」

《F・G・D》の5つの首から放たれる光線を受け、トリシューラは破壊される。同時に俺のライフポイントも尽きた。

壮太Side

デュエルは僕の勝利で終わった。これでレヴァティンは僕の物だ。気を失っている龍土君のデッキを抜き取るうと近寄ろうとした時、僕の前に1人の少女が立ちはだかる。

「マスターには……指一本触れさせません！」

実体化して杖を構え、僕を睨み付ける少女は《風霊使いウィン》。恐らく龍土君の精霊なのだろうけど……。

「どくんだ」

「どきません、絶対に。私はマスターを守りたいんです」

自分より明らかに強い相手にも決して怯えず、何かを守ろうとする……。

「どきません、絶対に。私は……お兄ちゃんを守りたいから」

「止める……雅……！」

あの時……妹、雅は決して怯えず、僕を守ろうとした。当時僕を虐めていた奴らはそれにカツとなり、落ちていた鉄パイプで妹を何度も何度も殴り続けた。しばらくするとそこには動かなくなつた雅の姿があつた。

身勝手な人間のために命を落とした妹のことが忘れられず、そんな人間を生み出した社会に対し不信感を抱くようになった。それが善か悪かを考える余裕はなかつた。ただこの腐つた世界を改善することが、僕が雅に対してできることだと思つただけだ。

その雅と、目の前のウインの姿が重なって見える。僕は自然と背を向け、ウインにこう告げていた。

「龍士君に伝えておいてくれ。レヴァティンは預けておく、と」

それだけを告げ、僕はその場から去って行つた。

美浦 Side

『すまぬ主……我の力が及ばぬが故に……』

あたしが託したりバイス・ドラゴンを出すことなく龍士は敗北して

しまった。『ドラグニティ』ではやや出しにくいかもとは考えたけれど、ナンバーズに取り憑かれた人を解き放つにはナンバーズの力が必要だった。だから渡したのだけれども……。

「気にすることはないわ。それに……結果的に召喚するとまずいことになってたし」

黒井君の使用していた《銀河眼の光子竜》には除外効果があった。エクシーズモンスターは場を1度離れるとエクシーズ素材はなくなってしまう。エクシーズ素材をなくされると攻撃力2000でダイレクトアタックができないモンスターに成り果ててしまうので、戦況がより悪化してしまう可能性が十分にあった。

ナンバーズに取り憑かれたエクシーズモンスターキラーを持つ人……非常に厄介な組み合わせね。

『だが我は主に託された想いを繋げることができなかった。それでも我は許されるのだろうか』

「だから相手が相手だから仕方ないでしょ。それにしても……」

龍士のDパッドから1枚のカードを取り出し、首を傾げる。

「ドラグニティアームズ・レヴァティン……それほどの力がこのカードに？」

「あるわ。本当に」

と、龍士のお母さん、達子さんが言う。

「でもそれを説明するにはちょっと時間が掛かるわ。それでも……」

「構いません」

「ウイン？」

「私は……マスターが何故レヴァティンのカードを所持しているのか、どうしても知りたいのです。きっとそのお話の中に、答えがあるはずですよ」

確かに……龍士がこのカードを手にしたきっかけと、このカードの力に何かしらの関係があることは否定できない。ウインの顔は真剣だ。

「分かったわ。でもここじゃ場所が悪いから、家に行きましょう。

龍士は……私が運ぶから心配しないで」

そうやって達子さんは龍士をおんぶして運び始める。男子高校生をおんぶして運ぶなんて……達子さんはあたしの想像する以上に強い人なのかも。

## 9・銀河の覇者（後書き）

ウィン「今回の最強カードは銀河眼の光子竜です」

《銀河眼の光子竜》

効果モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

このカードは自分フィールド上に存在する攻撃力2000以上のモンスター2体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。このカードが相手モンスターと戦闘を行うバトルステップ時、その相手モンスター1体とこのカードをゲームから除外する事ができる。

この効果で除外したモンスターは、バトルフェイズ終了時にフィールド上に戻る。この効果でゲームから除外したモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力は、そのエクシーズモンスターをゲームから除外した時のエクシーズ素材の数×500ポイントアップする。

リバイス「このモンスターがいたせいで私の召喚が躊躇われたけど……解せぬ」

ウィン「テキスト判明時は残念性能だと言われましたが、除外効果が誘発即時効果であるという裁定が出たため、モンスターとの戦闘時ならミラーフォースや次元幽閉を回避できますし、ホープの攻撃無効効果も無視して除外し、エクシーズ素材を剥がせます。

エクシーズモンスターの狙い目の筆頭はやはり強力な全体強化と破壊耐性を持つガチガチガンテツでしょうか。他にも小説内で言われ

ている通り、1度除外されると2000のデメリットアタッカーになるリバイス・ドラゴン、カード効果で破壊できないティラス辺りを対象にできれば強力です。

特殊召喚の方法はレダメはもちろん、レスキューラビットの効果で特殊召喚したジェネティックワールフをリリースすることもでも楽に特殊召喚できます。通常召喚も可能なので、ミンゲイドドラゴンや死皇帝の陵墓を利用するのもあります

余談ですがホログラフィックは非常にカツコイイです！」

次回のキーカード  
なし

ウィン「今回はデュエルなしなのでキーカードも無しです」

## 10・託された武器(前書き)

今回はいつもよりかなり短めですので、ご了承ください。

……手抜き？

## 10・託された武器

ウィンSide

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》は人間界における神話に登場する剣の名前を冠しているとマスターのお母様から伺いました。世界樹を焼き滅ぼしてしまう魔の剣と呼ばれたそれに秘められた未知の力は多くの人々に恐れられたと言います。ですが《ドラグニティアームズ・レヴァティン》は自らの誇りと渓谷の民の救済の為に剣を手にする竜戦士。神話の剣とは対照的に「滅ぼす」のではなく「守る」ことで世界に影響を齎すとされています。

レヴァティンはあるドラゴンの力を借りることで不死の力を得ると言われています。それを含め、黒井という方はレヴァティンを狙っていたのでしょうか。

「いつかは……話さなきゃと思ってたんだけどねえ、このカードのこと」

机に置かれたカードはその《ドラグニティアームズ・レヴァティン》。マスターが何故このカードを所持しているのか、そして……マスターはこのカードを従えるだけの資格があり、私にとっての救世主となりうるだけの人物なのか、私はそれが知りたい。

「このカード、龍士が10歳になった時の誕生日プレゼントとして、夫が送ったものなの」

「龍士の……お父さんが？」

「ええ、龍士が今使っているドラグニティのデッキと共にね」

マスターのお父様がマスターに託されたものだったとは。お父様とはなぜかお会いしたことがないので、どういう方なのかはわかりません。

「美浦ちゃんは知ってると思うけど……夫は冒険家でね。多分このカードもどこから見つけてきたんでしょうね」

「そんな……神のカードじゃあるまいし」

『いえ……神とまではいなくても、相当の力を秘めたカードではあります』

神のカード……主に三幻神の事を指しますが、これらはこちらの世界でも幻の存在であり、いつ製造されたか、どこにあるのかすら不明。手にする者すべてが原因不明の病に倒れたりした為、今はどこか一目の付かぬ場所に嚴重に封印されているという説さえある。《ドラグニティアームズ・レヴァティン》は神よりも影響力はないものの相当の力があるため、どこかに封印されていたという可能性もあります。

「レヴァティンもまた神のカードと同様に、製造主が謎の病に倒れ、死亡したといういわくつきのカードで、たった2枚しか製造されなかった幻のカード。人々はこのカードを恐れ、封印したとしてもありえない話じゃないわ」

そういう事例があるのなら、《ドラグニティアームズ・レヴァティン》のカードには何かしらの力が眠っていると見て間違いないでし

よう。

しかしそうすると1つ謎が出てきます。

「じゃあ……なんで龍士には何の影響もないの？そんなカードならきつと……」

「影響……ね。とっくに出てるとすれば」

そう言ってお母様と美浦さんは同時に私のほうを見てきます。

『……………ふえ？私…ですか？』

「正確には龍士が精霊の存在を認識できるようになったこと、もう1つはウイン、あなたが龍士の元に呼び込まれたこと……それがこのカードの影響ね」

私がマスターの元にやってきたこと……それはレヴァテインの影響だと言っているのでしょうか。

「あくまでその可能性があるってだけの話。龍士に与えた影響が何なのかは」

お母様は《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》のカードを手にする。

「このカードしか知らないことよ」

「……………」

『……………でしたら』

私は私の疑問を口に出す。

『マスターのお父様はどういう想いでマスターにレヴァティン……  
そしてドラグニティ達を託したのでしょうか』

「たしかに……そんな危険なカードを息子に考えなしに渡すなんて  
考えられないわね。でもあの時あの人は言ったわ」

龍士Side

「龍士、これは俺からの誕生日プレゼントだ」

「ありがとう、父さん！」

………！これは夢？父さんがいて、誕生日………そうか、これは俺の  
10歳の誕生日！確か俺は父さんから1つの箱を貰ったんだった。  
それでその中に入ってたのが……。

「わぁ………デツキだ！えっと……どらくにてい？」

そう……『ドラグニティ』のデツキ、そして《ドラグニティアーム  
ズ・レヴァティン》のカードだった。

「ドラグニティはな、大切なもののために武器を手にした竜騎士な

んだ。このレヴァテインもだ」

「大切な……もの？」

「いいか龍士、大切なものはとことん守れ。誰かが苦しんでたり、辛い想いをしているのを絶対に見過ごすんじゃないぞ。こいつらもそれを望んでるんだからな」

「はっ………！」

今のは……いや、それよりもここは俺の家？そうか、確か黒井とのデュエルに負けて、それから……。

「そうか……あいつを守ってやれなかつたんだな」

黒井は1人で苦しんでいる。それを救い出してやらなきゃいけないのに……。

「大切なもののために……武器を手にする、か」

何故あの時父さんがあんなことを言ったかはわからない。『ドラグニティ』達が大切なものを守り続けることを望んでいる、それが父さん、そして『ドラグニティ』達の意志なら……！

「父さん……俺、大切なもの……守ってみせる」

ウインSide

『お父様は……マスターに大切なものを守れとおっしゃったのですか』

「何を暗示しているのかはわからないけれど……あの人のした事に意味がなかったことは1度もない。夫がは龍士にドラグニティを託したのもきつと……」

「達子さん。もし龍士がその言葉を覚えてるのなら、あいつの行動は1つしかないわ」

『?』

私が美浦さんの言葉に首を傾げていると、誰かが階段を駆け降りてくる音がしました。

「ウイン、美浦！あいつを……黒井を助けにいくぞ！これ以上……あいつが苦しんでいいわけがないんだ！」

『マスター、目が覚めたんですね！』

私がマスターに言うと、頷いて答えて下さりました。

『ならば……再び我が協力しよう。ホープの気配は覚えているからな。すぐに見つかるだろう』

「リバイス・ドラゴン!?……に、しては随分デフォルメされちゃったわね」

美浦さんの肩の上には小さくなっているリバイス・ドラゴンの姿がありました。さすがに室内ですから、元のサイズではまずいんでしようね。

「頼むぜ、リバイス・ドラゴン」

『承知した。だが良いのか龍士よ。負ければ今度こそ汝はレヴアテインを失うことになるぞ』

確かに、さっきは大丈夫でしたけど、次はないかもしれせん。それでも……マスターは行くのでしょうか。

「……やる前から負けた時のこと考えてどうするんだ。俺は……勝つて黒井を救つてやるんだからな」

『……良い覚悟だ。その覚悟があるのであれば我もこれ以上止めはしない』

「ありがとう、リバイス・ドラゴン」

私達はリバイス・ドラゴンの後を追ひ、黒井さんの元へと向かいます。そしてそこで……マスターの意志を見せてもらいます。

ウィンダSide

私が人間界から戻った後も精霊界での争いは止まらない。それどころか、奇妙な虫型の悪魔まで戦争に乱入して来始め、さらに激しさを増した。

『ガルド！急上昇！』

悪魔を引き付けるべくガルドに上昇するように命じる。悪魔はままと私の策に嵌まり、ガルドを追い掛けていく。しかし突然巨大な剣に切り裂かれ、悪魔達は墜落していく。

『良い策だったぞ、ウィンダよ』

『レヴァティン様こそ、ナイス！』

『褒められて悪い気はしないな……だが』

レヴァティン様は空を見上げながら呟く。

『戦争はより激しさを増している。あの方の言う救世主はいつ現れるのであるつか……』

## 10・託された武器（後書き）

ウィン「この小説の精霊界ではガスタもドラグニティも共存している通り、通常のターミナル世界とは異なります。つまり……」

ウィンダ「わわっ……これ以上はネタバレだつて」

ウィン「ふええ！？私大変なことしちゃいました!？」

ウィンダ「口に出してないからセーフだよ……」

ウィン「……えっと、次回予告でもします?」

ウィンダ「最強カード紹介がないところもスペースを持て余すなんて……。えっと、今回は龍士と黒井の2戦目!デュエルの決着が着いたその時……!」

ウィン「これ、また2話くらい掛けて執筆しますよ」

ウィンダ「というか今回の話3000文字にも達してないって何」

ウィン「さいてーです」

ウィンダ「ほんとに」

次回のキーカード

「風霊使いウイン」

ウイン「私を見た時の黒井さんの反応、気になるんですよね」

ウインダ「その短いスカートがめくれる瞬間を狙ってるに決まってる！ほら、早くスパッツに……」

ウイン「私はスカートのほうが……」

プチリュウ「ぬふふ……ええなあ」

ゲシッ

ウイン「……スパッツ貸して」

ウインダ「うん」

## 11・そよ風に感じる面影（前書き）

霊使い、特にウィン強化されなんでしょうか……。デブリが制限に行ったらデジャドルを恨むしか……。

## 11・そよ風に感じる面影

ウィンSide

もしマスターが黒井さんを救えたとして……今度は私も救ってくれるのでしょうか。私は求めています、私を……私の親友を守ってくれる「騎士」となる人物を。

「見つけたぜ、黒井！」

「へえ…まさかそつちからまた会いに来てくれるとはね」

嘘だ。その不気味に笑った顔、まるでマスターが始めから再び現れることがわかっていたような様子だ。確かに「レヴァティンは預けておく」と言っていました……彼にとってマスターの今の行動も計算の内だったのでしょうか。

「黒井、もう馬鹿な真似はやめろ。復讐は何も生まない。傷付けて傷付けて……絶対に間違っている！」

「復讐……か。それが間違いであったとしても、僕は構わない。僕が強くなり続けられない限りは、妹は…雅は安心できないんだ！」

「そんなもん……強さでもなんでもねえ！」

マスターの叫び声、それを聞くだけでどれだけ黒井さんを助けようとしているかよく分かります。

沈黙が続き、やがて黒井さんはすつとDパッドを構える。

「やはり君とは分かり合えない。デュエルでたたきのめし、君のレヴァティンは今度こそいただく」

「上等だ……こっちこそ、今度こそお前の目を覚まさせてやる！」

「いくよ……デュエル」

マスターと黒井さんの2回目のデュエルが始まってしまった。

龍士Life8000

壮太Life8000

「俺のターン！」

マスターがカードをドロウする。引いたカードは……。

『私の……カード』

《風霊使いウイン》。そう、私自身のカード。

……………そうだ、このカードなら。

『マスター、私の話を聞いて下さい。このデュエル、黒井さんを救うのなら私のカードを使って下さい』

「どづいことだ？」

首を傾げるマスター。ですが……私は感じました。あの時の、あの人の感情を。

『私を見た黒井さんは、動揺した様子でした。それがどういうものかまではわかりませんが……もし彼の心に呼び掛けるのであれば、私が行く必要があると思います』

あの時の黒井さんの感情、どこか懐かしむような、しかし悲しみに溢れた感情。彼の心の闇を動かしているものがそれなら、その隙を突いて彼の心に呼び掛ける必要があるに違いありません。

マスターはドロートした《風霊使いウイン》のカードを見ながら、私のほうを見て頷きました。

「俺はモンスター、そしてリバーズカードをセットしてターンエンドするぜ」

セットモンスター、そしてリバーズカード。これは少し相手次第に感じますが……。

龍士Life8000

手札4枚

モンスター

セットモンスター×1

魔法、罫

伏せカード×1

「僕のターン！」

黒井さんのターンに移りました。どう動くつもりでしょうか……。

「ランス・リンドブルムを召喚」

《ランス・リンドブルム》……攻撃力1800の貫通能力持ちのドラゴン、しかしその属性は風。

《ランス・リンドブルム》

効果モンスター

星4/風属性/ドラゴン族/攻1800/守1200

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「ランス・リンドブルムでセットモンスターに攻撃！」

《ランス・リンドブルム》が槍を手にセットモンスターに襲い掛かる。ですがその前にマスターが動きました。

「畏発動！和睦の使者！このターン戦闘ダメージは0になり、モンスターは破壊されない！」

《和睦の使者》

通常罫

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

数人の女性達がセットモンスターに力を与え、破壊から守られるようにします。彼女達が消えた瞬間、セットされたモンスターはその姿を現しました。

「……………!?!」

「セットモンスターは風霊使いウインだ！守備力は1500で本来なら破壊され、貫通ダメージを受けるところだが、和睦の使者の効果が適応された今それはない」

私は《ランス・リンドブルム》の槍を杖で受け止めます。普段なら受け止めることはできないのですが、今は大丈夫です。

戦闘で破壊されなかった、そして相手の場に風属性モンスターが存在する、チャンスです。

「風霊使いウインのリバーズ効果発動！このカードが表側表示で存在する限り、相手フィールド上の風属性モンスター1体のコントロールを得る！頼む、ウイン！」

『はい！さあ……………私の元に来なさい！』

私が杖に魔力を込めて呪文を唱えると、《ランス・リンドブルム》がゆっくりとこちらのフィールドにやってくる。これで《ランス・リンドブルム》はこちらのモンスターになりました。

「……………ターンエンド」

黒井さんはセットする罫カードがなかったようで、そのままターン

エンドしました。これは……またチャンスです！

壮太Life 8000

手札5枚

フィールド

(なし)

魔法、罾

(なし)

壮太Side

少し迂闊だったようだ。まさかセットモンスターが《風霊使いウイン》とは考えもしなかった。手札はモンスターしかいないため、罾を用意することはできない。次のターン、ダイレクトアタックを受けるのは確実だ。

《風霊使いウイン》……あのあどけない表情も、あのポニーテールも……雅にそっくりだ。唯一違うところがあるとすれば髪の色くらいだ。

「お兄ちゃん」

あいつは……いつだって僕を慕ってきてくれた。早くに両親を亡くした僕達だったけど、それでも兄妹で生きてこられたのは互いが互いに支え合っていたからだ。

「どうした、雅」

「最近顔色が良くないけど……学校で何かあったの？」

そうやって不安げに尋ねてくる雅の頭を、僕は何度も撫でながら「大丈夫、心配するな」と言っていた。でも本当は大丈夫なんかじゃなかった。度重なる暴行、罵倒、嘲笑、それらを受け続けた僕は精神的に疲労していた。それでも妹には心配をかけたくない、そう思つて僕は微笑み続けた。

そんな時、ついに妹が僕に対する虐めに気が付き、現場にまでやってきたのだった。きっかけはもう忘れてしまったけど、妹がどれだけ衝撃を受けたかは想像に難くない。

「……お兄ちゃんには、指一本触れさせません」

「どきな。どかねえと怪我じゃすまねえぞ」

「どきません、絶対に。私は……お兄ちゃんを守りたいから」

「止める……雅……！」

相手は自分よりも大きな体格の男。それでも雅は臆せず、睨み続けていた。

「この……アマあああ！」

虐めっ子は落ちていた鉄パイプを手に取り、何度も雅を殴り付けていた。その時の記憶は曖昧だけど……気が付いたら僕は雅を抱き抱えていたことは覚えている。

「……ねえ……お兄……ちゃん」

弱り切った雅が、弱々しく俺に話し掛けてきた。

「きよ……うの晩ご飯……ね……お兄ちゃんの大好きな……チーズグラタン……なの……」

「そんなことより……！」

「でね……作ってる時に火傷しちゃった……私って……ドジだから……」

「いいから……もう……喋るな……」

雅の話すことは、本当に日常的なことだった。死ぬ間に晩ご飯の話など馬鹿げていると思う人もいるだろう。でも僕は何度も頷いて、その話を聞いていた。

「……私……もっとお兄ちゃんに……いっぱい料理作ってあげたり……お兄ちゃんといっぱい遊んだりしたかった……」

両親がいないため僕はバイトに励まなくてはならず、あまり雅の相手をしやれなかった。そのことを後悔した。僕は妹に何をしていた？ 兄として、妹を愛せたか？ そう尋ねる声が頭の中に響いてきた、そんな気がした。

「でもね…私、お兄ちゃんのこと……だ……い……」

「雅……？雅！」

声が途切れ、それから二度と彼女の口から声が発せられることはなかった。

「俺のターン！」

「！？」

今……あの時のことを思い出してしまった。少し頭が痛む……でも痛むのは頭だけではない、心も痛む。

『黒井……さん？』

「ワイン……お前の攻撃で、あいつの心を救ってやってくれ」

『……わかりました。なら憑依装着を』

「だな。俺は風霊使いワインと風属性モンスターを墓地に送り…

……」

墓地に……送り？

「止める……」

「何？」

「止めるおおおお！」

僕は無意識の内に叫んでいた。雅の姿と重なって見えた《風霊使いウイン》が、「墓地」に置かれるのを考えたくもなかったからだろうか。とにかく僕は必死に「止める」と叫んでいた。

「そのカードを……風霊使いウインを墓地に送るなあああ！」

「黒井……」

『マスター……私は……』

「……ウインを攻撃表示に変更する」

『マスター！』

「攻撃だ、ウイン。あの反応……理由はわからないが、あいつにとってお前は特別な存在に違いない。だとしたら、あいつを救えるのはレヴァテインでもナンバーズでもない……ウイン、お前だけだ」

『……わかりました。行きます！』

ウインが杖を構え、攻撃の体制に入る。

「バトル……風霊使いウインでダイレクトアタック！」

風の魔法がウインの杖から打ち出され、僕を攻撃する。500ポイントのダメージ、たったそれだけなのに……とても……重い一撃だ。

壮太Life 8000 7500

次は《ランス・リンドブルム》の攻撃が来る……！

「俺は…バトルフェイズを終了する」

「なっ……」

「なんですって!?!」

『マスター!?!』

攻撃力1800のモンスターでダイレクトアタックをせずにバトルフェイズを終了するだ……?何を考えているんだ、龍土君は……。

「カードを3枚伏せてターンエンドだ」

龍土Life 8000

手札3枚

フィールド

《風霊使いウイン》

《ランス・リンドブルム》

魔法、罫

伏せカード×3

龍士君……君は……。

「どうした、お前のターンだ」

一体、何を考えて……。

龍士Side

あいつの……黒井の心を開かせるにはただ単にライフポイントを0にするだけではいけない。あいつにとって特別な存在であるはずの《風霊使いウイン》の攻撃だけが、あいつの目を覚まさせることができる。なのでこのデュエル……俺はウイン以外でダイレクトアタックはしない！何度でもウインの攻撃を受けさせ、黒井を救うためにも！

だがウインの攻撃力はたった500。きちんと守ってやらなければ呆気なく倒されてしまう数値だ。そのために俺は3枚のカードをセツトした。これでウインを守りつつ、攻めるしかない。

「僕のターン……ドロー」

『マスター……あの、大丈夫ですよ？私、攻撃力500ですよ？下手すれば大ダメージを受けるのに……』

「お前は……どうなんだ？怖いか？」

『私は……正直怖いです。もし私のせいでこのデュエル、負けてしまったら……』

負けてしまったら、か。いざ攻撃表示になってみるとモンスターも不安を抱くもんなんだな。

「言っただろ。負けた時のことを考えてどうするって」

『マスター……』

そつだ。負ける事を考えた時、人間は臆病になる。臆病になった人間に、誰かを救う力などない。誰かを救いたければ、臆病な自分を捨て、勇気を持たないと駄目だ。俺、そしてウィンは、その勇気を示してみせる！

「お喋りは済んだかい？ならいくよ……！」

こちらの準備は万全だ。黒井が何をしようと、俺は全力でウィンを守り抜く！

「僕はアックス・ドラゴニートを召喚！」

黒井の場に斧を手にした竜人が現れる。その容姿、名前共に《ランサー・ドラゴニート》を彷彿させるものであるところを見ると、何かしらの関係があるのだろうか。

《アックス・ドラゴニート》

効果モンスター

星4 / 閻属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1200

このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

「こ……攻撃力2000!? マスター、大丈夫なんですか?」

心配そうにこちらを見るウィンだが、彼女を守るカードはきちんと伏せてある。

「畏カード、奈落の落とし穴を発動! 召喚、反転召喚、特殊召喚された攻撃力1500以上のモンスターを破壊し、ゲームから除外する!」

《アックス・ドラゴニート》が地上に降り立った瞬間、足元に落とし穴が出現し、そのまま落とし穴に落ち姿を消していった。

《奈落の落とし穴》

通常罠

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。その攻撃力1500以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

「ふええ、助かったあ」

「心配はいらねえって言っただろ?」

『もう……心臓に悪いです』

自分より攻撃力の高いモンスターが召喚されるだけでプレッシャーになるもんなのか？だとしたらウインには申し訳ないかもしれない。でもこのデュエルのキーカードは間違いなくウイン。頑張ってもらわなければならない。

「カードを1枚伏せてターンを終了……」

壮太Life 7500

手札4枚

フィールド

(なし)

魔法、罨

伏せカード×1

ターンプレイヤーが俺になる。伏せカードはあるものの、黒井のフィールドにモンスターはいない。もう1度ウインのダイレクトアタックを決める！

「俺のターン、ドロー！」

ドローカードは《竜操術》。手札には《ドラグニティ・ブランディストック》。ウインの攻撃力を1000に上昇させつつ、2回の攻撃を可能にできる。ウインの攻撃を通して黒井の心を救うのであれば、又とないチャンスだ。迷う必要はない。

「手札から永続魔法、竜操術を発動！その効果により、手札のドラ

グニティ・ブランディストックをウインに装備！そしてドラグニティを装備したウインの攻撃力は、竜操術の効果により500ポイントアップする！」

『が…頑張ります！ブランディストック、行くよ！』

ウインの側にブランディストックが飛来し、ウインを背中に乗せて飛び立つ。

風霊使いウイン

攻撃力500 1000

『わあ、なんだか竜騎士になった気分です！』

ブランディストックの背中に乗って無邪気に微笑むウイン。負けられないデュエル中なのに、本当に……無邪気だ。

「……………」

そんなウインの姿を何も言わずに見つめる黒井。やはりウインに対して何か感じることもあるのだろうか。先程のウインを墓地に送ることを必死に制止する様子、あれはただ思い入れがあるだけではない。何かもつと深い事情があつて……ん？「墓地に送る」……？

「……………バトルだ！ウインでダイレクトアタック！」

『てやあー！』

ブランディストックを操り、ウインは黒井にダイレクトアタックを仕掛ける。伏せカードは発動されず、ダイレクトアタックは成功する。

「……………」

黒井Life 7500 6500

無表情、しかしその奥には悲しみの感情が眠っているに違いない。

「ブランディストックを装備したウインは、2回の攻撃が可能だ。もう1度ダイレクトアタック！」

『わわっ…2回もごめんなさい!』

黒井Life 6500 5500

2回目の攻撃時も伏せカードは発動しなかった。あれはブラフか、それとも……。いや、それよりも。

「黒井、お前は妹とウインの姿を重ねて見ているんじゃないのか。だからウインを墓地に送ることを必死に制止した。ウインが墓地に送られると、妹が死んだ時のことを思い出す、だから止めたんだろ」

「……………!」

『ま、マスター！？黒井さんは私のことを……』

確信を持てるだけの根拠はない。でもそうでなければ、あの時の黒井の行動の意味がわからなくなる。

「……ああ、そうさ。彼女は……ウインはあまりに雅に似過ぎてい  
る。その無邪気な笑顔も、少し臆病な性格も、髪も、背も、何もか  
もが！妹に……雅に似過ぎていいるんだ！」

「黒井……お前は」

「ウインの2回連続のダイレクトアタック……あれを受ける時に雅の  
声がした。僕を呼び止める声が！」

黒井がうつすらと涙を浮かべている。それほど妹に対する想いが強  
かったのか。

「雅は臆病だけど……それでも僕をずっと支えてくれた。あの時だ  
って、僕を守ろうとしたんだ。勝ち目はない、下手をすれば自分が  
危険なのに……本当は、臆病なはずなのに」

『……………』

「僕は……雅を守ってやらなきゃ駄目だったのに……そんな後悔を  
今までずっと引きずってきた。だからせめて……雅のような可哀相  
な子がいなくなるようなそんな世界を作りたかった。それでしか償  
いがないと思っただ。でもウインのダイレクトアタックは……  
……まるで雅が僕を止めようとしているように感じられた。それが間  
違った……そう言っているように」

黒井は本当に妹のことを想っていた。それ故に過ちに気付けずにしたのかもしれない。

「そんなウインが墓地に送られるのを、僕は許せなかったんだ。あの時のことを思い出して……辛くなるんだ。だから……」

「黒井……さん」

俯く黒井の前に、ウインが立つ。よく見ると実体化しているようだが……俺は何も言わない。はつきりしたからだ、黒井の心はウインにしか救えないということが。ならばウインに任せるべきだろう。

「私、理由はよくわからないんですけど、頭を撫でてもらうのが好きなんです。私じゃ妹さんの代わりにはなれないかもしれませんが……」

「……っ！ごめん、ごめんよ……！」

大粒の涙を流しながら、黒井はウインの頭を撫でている。多分、あいつは妹の頭を撫でるのが好きだったに違いない。そして妹を彷彿させるウインを妹に見立て、昔のことを思い出しているのだろう。黒井の心の闇は、妹を守ってやれなかった後悔が作り出したものだったらしい。でもそれで起こした行動が間違いであると知ったあいつは、もう2度と同じことは繰り返さないだろう。

「黒井君……ありがとう」

気が付くと黒井がデッキの上<sup>サレンダー</sup>に手を乗せていた。これは降伏を意味する行動だ。

ウィンSide

黒井さんがサレンダーしたことでデュエルは終了しました。本当なら釈然としないところですが、私達の目的はあくまで黒井さんの心を救うこと。決してデュエルで負かすことではなかったので問題ありません。

それにしても……マスターはよく黒井さんの心理を読み取ることができましたねえ……。すごいです。本当ならそんなこと考えもしないです。

「ウィン……」

「はい、なんでしょ……っ!?!」

黒井さんに声を掛けられ、振り向いた途端抱きしめられました。あまりに突然の出来事だったので、私は混乱してしまいます。

「ごめん……しばらく……」つさせほし

「あ……」

黒井さんの暖かさ……どこか懐かしさを感じさせるような……。

「今日は……お兄ちゃんの大好きなチーズグラタンにしようかな。それで……あのカードを渡せば、きつと喜んでくれるよね」

「（えっ……？）」

何……今の。私そっくりの女の子が1枚のカードを……。

「ウィン……どうして泣いているんだ？」

「ふえ……？マスター、何言ってる……」

そう言いつつも、頬を涙が伝っているのを感じていた。

「あれ、なんででしょう……涙が、涙が止まりません……」

自分の意思に反して涙を流す私の頭を、マスターは撫でてくださっています。

「頭撫でてもらうの、好きって言ってたな。じゃあ……お前が泣き止むまで、俺がお前の頭を撫でてやるよ」

「ひぐっ……ますたー……」

「結構泣き虫なんだな、ウィン」

黒井さんは空気を読んでか、私を抱くのを止め、泣き続ける私を黙

って見ていました。その間もマスターは私の頭を黙って撫でていました。

## 11・そよ風に感じる面影（後書き）

ウィン「今回は珍しくサレンダーによるデュエル終了ですが……サレンダーって不完全燃焼になりやすいです。

さて、今回の最強カードは私、風霊使いウィンです！」

《風霊使いウィン》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻 500 / 守 1500

リバーズ：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手フィールド上の風属性モンスター1体のコントロールを得る。

ウィン「リバーズ効果、表側で存在する限り、低ステータスと色々噛み合いませんが、風属性モンスターのコントロールを奪う効果を持っています。

和睦の使者や威嚇する咆哮などで守り、効果を使いたいところですが、狙い目はスターダストドラゴン、シューティングスタードラゴン、ドラグニティのモンスター、ガーディアンエアトス等です。

また攻撃力が500なので、デブリドラゴンの効果で蘇生すればレベル7シンクロもしくは憑依装着が可能です」

次回のキーカード

「転生の予言」

ウィン「このカードの意味、そしてあのヴィジョン……私は……」

## 12・そよ風は夢を見るか(前書き)

超展開は遊戯王にはよくあること。しかし12話で超展開はなかなかありません。

## 12・そよ風は夢を見るか

ウィンSide

夢を見ています。1人の女の子が男の子と一緒に歩く夢。幸せそうだと感じる一方で…どこか懐かしいような感じのする夢を、このところ毎日見えています。あの時マスターと黒井さんのデュエルの時から……。

「……でさ、お父さんったら研究用のカードを無くしちゃってさ。ほんっとドジよねえ」

「美浦の親父さんは真面目そうどこか抜けてるからな。いい人なのはわかるけど」

翌朝マスターが美浦さんと一緒に登校し、2人で楽しく会話している間も私は悩んでいました。

『（私……どうしてあんな夢を見るんだろ。記憶にないはずのことなのに、どうして懐かしく思えるんだろ……）』

「ウィン、どうした？そんな深刻そうな顔をして」

『ふえ？私、そんな難しい顔してました？』

マスターに話し掛けられ、私は必死にごまかそうとする。でもこんな悩み、1人で悩んで解決できるようなことはありません。相談しよう、私は決意します。

『あの……マスター。実は相談したいことが』

龍士Side

ワインから突然相談された事は、正直俺にもよくわからない事だった。

夢の中で見た光景が自分の記憶にないにも関わらず、既視感がある。しかもその風景にはワイン自身は関わっていないらしく、まるで別人の記憶のようだと言う。

「というかそれ以前に……精霊つてのは寝るもんなんだな」

『体力を消耗するのは人間も精霊も同じですから、休息は必要ですよ。それよりも私は……』

「……お前がそういう夢を見始めたのは、黒井とのデュエル後からって言ってたな」

俺の勘が間違ってたければだが、ワインの妙な夢の謎を解く手掛かりを入手するには、黒井と接触する必要があるだろう。どう困

果関係があるかは見当が付かないが、きっかけとなっている以上は何かしらの関係があるに違いない。

「……………で、僕の家に行きたいと」

放課後、席が後ろなことを良い事に真っ先に黒井に話し掛ける。善は急げ、こういうことは早めに手を打つのが得策だろう。

『マスター、黒井さんの家に行つてどうするんですか？』

「お前の記憶……………俺の勘なら……………」

「ワインの記憶か……………とにかく詳しい話をするためにも、1度僕の家に来たほうがいいかもね」

詳しい話……………ということは黒井は何か知っているのか。だとしたらこれほどありがたいことはないな。優等生は伊達じゃないらしい。

『……………』

しかし当のワインは浮かない表情だ。せつかく自分の夢の謎がわかるっていうのにな。

そういうわけで、黒井の家にやってきた。両親も妹もおらず、長い間1人暮らしをしている黒井の家は、1人で暮らすにはやや広いが、庶民的な家だ。とはいえ俺の家よりは大きいので、ワインも喜ぶだ

ろうと考えたんだが……ウインは家の門から先に進もうとしない。

『ま……ますたー……少し……いいですか』

そう言うと返答を待たずに実体化して俺に抱き着き、制服に顔を埋め始める。

「お……おい……」

「ごめんなさい、ますたー。でも……この家に着いた時から……苦しくて。こうしてると楽になるんです」

顔を上げて俺に目を合わせて言うウイン。その瞳は涙で潤んでおり、彼女が今どういう心境なのかが察することができる。

「龍士君……君はなんて羨ましいことを」

「黒井お前……そういう問題じゃねえだろ」

黒井が恨めしそうに俺とウインを見るが、気にするところは明らかにそこじゃない。問題なのはウインが何故泣いているか。彼女と黒井の家には何の接点もないはずなのに、何故彼女は黒井の家に着いた瞬間泣き始めたのだろうか。

「とにかく中に入ろうか。ここじゃ一目に付いてしまう」

「ああ……ウイン、大丈夫か？」

「大丈夫……です。行きましょう」

大丈夫とは言っているが、今もウインは俺に抱き着いたまま。今の彼女を突き放すのも可哀相なので、抱き着かせたまま黒井の家の中に入る。ご近所の方が見ていたらどう思われるか不安で仕方ない。だが家に入った途端、抱き着いていたウインは突然俺から離れ、家の階段を上がっていくとある部屋の前で立ち止まった。

「この部屋、黒井さんの部屋ですよね」

後から上がった俺達に向かって、ウインは突然そんなことを言う。

「……た、確かにここは僕の部屋の前。でも……」

啞然としながらも黒井はウインの指した部屋が自分の部屋であることを明かす。しかし……妙だ。

「なんでウインが僕の部屋の場所を……。でたらめにしては迷いかなかった……」

「へ？あ、あれ……？何ででしょう……」

初めて家を訪れたはずなのに、ウインは黒井の部屋の場所を当ててしまった。でたらめ、そう言うにはウインには迷いがなかった。これがどれほど妙なことか、誰でもわかるはずだ。

そんな疑問が生まれた瞬間、突然ウインが頭を抱えて座り込んでしまう。

「頭が……痛い！」

「ウイン、大丈夫か!？」

「うう……マス……ター……」

そうしてウインはそのまま意識を失ってしまふ。頭が痛い、そう言っていたが……。

「……とにかくウインは寝かせておこつ。……雅の部屋に、ね」

そう言つて黒井はウインを背負い、自分の隣の部屋に運び始める。扉を開けると、そこはきちんと手入れされた女の子らしい部屋だった。既に部屋の主を失っているとは思えないほど綺麗で、埃すら見当たらない。まさについてこの間まで誰かがいたようだった。

「雅が死んだのは悪い冗談でそのうちひよっこり帰つて来るんじゃないか、そんな気がして僕はずつと雅の部屋を掃除してるんだ。変な話だろ？」

変なはずがない。それだけ黒井が妹のことを考えていたということであり、この部屋を見ているとそれが嫌というほど伝わってくる。本当に妹さんが愛されているということの証明だ。

「とにかくウインをベットに寝かせよう」

背負っていたウインをベットに寝かせると、黒井はため息をつく。

「こうして見ると……雅が帰って来ているように錯覚してしまつ」

「黒井……」

「龍士君……生まれ変わりを信じるかい？」

黒井が発した言葉は、非現実的で信じがたいことだった。

「生まれ変わり？」

「そうさ。その実例は多く知られており、認めている人もいるくらい。今回のことはその実例と共通していることが多い。ウインは知るはずのないことを知っていたこともその1つだ。僕の部屋の位置、そして夢の内容……聞く限りではどれも僕の記憶にある出来事だ」

「つまり…何が言いたい」

わざわざ遠回しに言う必要はないかもしれないが、確認の意味も込めて黒井に尋ねる。

「ウインは……雅の生まれ変わりかもしれない」

黒井はベットで眠るウインを見ながら、そう言った。

「それはお前の願望じゃないのか？妹にそっくりなウインが妹の生まれ変わりであってほしい、という」

「そうかもしれない……いや、心のどこかでは間違いなくそう思っている。僕と共に過ごした雅の記憶を、この子が受け継いでいるかもと考えるだけで嬉しくなる」

根拠はないわけではない。先程ウインが泣いていた理由も、それではなければ説明が付かないだろう。それにウインが見た風景は、黒井とその妹が過ごした時のものであることは黒井が認めている。嘘だとは思わない。真剣な表情でそのことを語る黒井を疑うことができるだろうか。

しかしそういう結論を出すには色々不十分だ。それにもしウィンが雅の生まれ変わりだったとして……黒井はどうするつもりなのだろうか。

「黒井、お前……」

「……！あ、いや……馬鹿な事を言ってしまったみたいだ。今の事は忘れてくれ。当然、ウィンにも内緒にしてもらいたい」

当然だ、こんな妙なことを言っただけでウインを余計に混乱させるのはまずい。

「ああ……言わないでおく」

「ありがとう……」

礼を言われるほどのことではないんだが、黒井は俺に礼を言ってきた。

「う……」

そうしている内に、眠っていたウインが目覚めます。

「ウィン！目が覚めたか！」

「……！？ま、マスター！近い、近いです！」

目を覚ましたウインの顔を覗き込むと、彼女は突然顔を赤くして、ガバツと起き上がるようにする。

「いつ！ウイン！そのままだと」

制止する俺の声を聞かずに起き上がるうとするウイン。そしてそのまま勢い余って…その…なんだ。顔を覗き込んでたわけだから、察してくれ。

「あ……」

「龍士君……」

「ふええ……わ、私…マスターと…その…チュウを…しかも…  
同士で……」

一応言っておくがこれは事故。決して狙っていたわけではないぞ。

「……で、もう大丈夫なのか？」

「ええつと…その…大丈夫です、多分」

ウインはまだ少し顔を赤くしている。事故とはいえ……ショックだろうな。

「あ、そういえば私、また夢を見ていましたよ」

「夢？」

「一体どんな夢を？」

身を乗り出してワインに尋ねる黒井だが、あまり期待しないほうがいいんじゃないだろうか。

「えっと……確か」

「確か？」

「……」

「……」

「………忘れました」

「おおい！？なんでそこで忘れるのさ！」

「マスターとの……その……チュウのショックで」

「龍士君！君って人はあ！」

「がっ………やめ……首絞まつてる……」

必死になる余り黒井は俺の首を掴んで身体を前後に揺らし始める。首絞まつてるんだけど……な。

「わああ！やめてください、マスターが死んじゃいます！」

「………あっ」

やっと気付いて、首から手を離してくれた。後少し遅ければどうなっていたか……。

元々夢の内容なんてものは鮮明には覚えていられないもの。それが何らかのショックで忘れたとしても何もおかしくはないが、少なからず責任を感じてしまう。

「ただ……やっぱり懐かしい感じはしました。私が経験したことじゃないのに」

「……なんか黒井の仮説があなたが間違いとは言い切れなくなってきたような気がする」

他人の記憶を植え付けるなど、いくら精霊界の技術でも出来そうにない。できるとすればそれはもはや洗脳の類でしかない。しかし人間界の、しかも既に亡くなった人間の記憶を植え付けることが、果たして可能なのか。

「何か手掛かりになるものがあれば……そうだ」

何か思い付いたのか黒井は立ち上がり、窓際に置かれた机の棚から1冊のノートを取り出した。表紙には丁寧な字で「日記帳」と書かれてある。

「ウイン、夢の中の出来事で、日付が明確な出来事はあるかい？」

なるほど。夢の中の出来事と日記帳に記された出来事が一致すれば、それがそのまま手掛かりとなる。可能性としてはなくもないので、試してみる価値はある。

「日付まではまだ見えてません。日記ではなかなか……」

「そうか……」

日付がわからないのなら、日記帳から手掛かりを得るのは困難だ。しかし後々日付までわかるようになれば……この日記帳は役立つかもしれない。

「なあ黒井、この日記帳貸してくれないか？」

「日記帳を？」

「ああ。ウインはこれからも記憶に関する夢を見るかもしれない。そんな時に手掛かりとなり得る物が側にあつたほうがいいだろ」

「なるほど、それなら貸しても構わないよ。ただし雅の日記帳だから、決して無くさないようにしてほしい」

「分かっているさ。……でももしウインがこれ以上の詮索を拒絶するようなら詮索はしないようにしたい」

そう言つて時計を見ると針は既に5時を指している。これ以上の長居は良くない。

「マスター、そろそろ帰らないと」

「ああ、そうだな。じゃ、そろそろ俺達は帰るな」

「……龍士君」

帰ろうとする俺達を、黒井は呼び止める。

「僕と……友達になつてほしいんだ」

友達、な。

「俺はとっくにお前を友達と見ていたんだけどな。お前は…違ったか」

「……………いや、それならいいんだ」

デュエルをして、和解した仲だ。友達でないはずがない。

『あの……黒井さん。私、また来てもいいですか？ご迷惑をおかけするかもしれませんが』

既に精霊の状態に戻ったウィンも、振り返って黒井に尋ねる。来てすぐに俺に泣き付いてきたような場所に、もう1度来ていいかと尋ねているのだから驚きだが……やはり黒井の家には何かあるらしい。

「ああ……いつでもおいで」

『ありがとうございます』

ウィンが行きたいと言うなら付き合ってやろう、それがこの子のマスターとしてできることだ、俺はそう決意し、黒井の家を後にした。

『マスター』

帰り道、突然ウィンが話し掛けてきた。

『私の中の誰かの記憶が蘇ったら、私はウインじゃなくなるんじゃないか……』

今のウインのような状況に陥った時の感情など、到底想像が付きにくい。でも彼女の表情を見て不安そうだということはわかる。

俺も不安だ。今までのウインの様子を見る限りでは単なる記憶喪失でもなく、洗脳や催眠術の類でもなさそうで、本当に黒井の妹が生まれ変わったかと思わせられてしまう。もしそれが本当で、黒井の妹、雅としての記憶を取り戻したら……ウインは雅として生きることを選び、俺の元から離れてしまうのではないか。そう考えると不安で不安で仕方なくなっている。でも……。

「お前にどんな記憶があるかと、俺にとってウインはウインだ。それは絶対に変わらない」

『マスター……ありがとうございます』

例えウインが別人になってしまおうと、俺がウインのことを忘れなければ……少なくとも俺の中では彼女はウインであり続ける。そう考えると怖くはないし、寂しくもない。

「そういえば俺とお前が初めてあった時、幽霊はわからなかったけどコスプレイヤーには反応したよな」

『そういえば……そうですね。何ででしょう』

精霊界にコスプレの概念はないはずとウインは言う。ならどうしてウインは知るはずのない「コスプレイヤー」という言葉を知っているのだろうか。

仮にウインが誰かの生まれ変わりとして、その人は「コスプレ」に

何かしらの縁があったのだろうか。それが印象深いものであり、ウインとして誕生した後も記憶にあったのか。

『これって……手掛かりになりませんか？』

「いや、どうだろうな」

しかしそれだけでは人物を特定することはできない。何か決定的な手掛かりがない限りは、どうしようもない。

「まあ、とりあえず今は帰ろう。道端で話し合っても仕方ない」

『そうですね…行きましょう』

家路を急ぐため、走ろうとしたその時だった。突然目の前に巨大な鳥が墜落してきたのだ。あまりに突然の出来事なので唾然としていたが、その背中に乗っている人物を見て思わず声を揚げる。

「お前は……ウインダ!？」

『くっ……龍士、ということとはここは人間界？』

傷付き、疲労しているが幸い致命傷にはならない程度の傷だった。鳥のほうも墜落してきたわりにはそれほどダメージを負っていないようだ。

『マスター、早くこの子を家に!』

「ああ…そうだな。ウインダ、この鳥を連れて俺の家まで行けるか？」

『う、うん…多分大丈夫』

鳥の様子を見ながらウィンドは頷いて答える。それなら問題はない、俺達はウィンドを家まで案内し、傷の治療を行うことにした。

## 12・そよ風は夢を見るか（後書き）

ウィンダ「ウインは抱き着いたり頭をなでなでしたりといい感じの  
ペット系」

ウイン「ち、違います!」

ウィンダ「泣き虫で甘えん坊」

ウイン「違うもん……」

ウィンダ「でもドジな子」

ウイン「違いますよお……ふえくん……」

ウィンダ「あらら……泣いちゃった」

次回のキーカード

「異次元からの帰還」

ウィンダ「前回も今回も、キーカードというよりはキーワードだよ  
ね」

ウイン「ぐすん……かーどとしては除外ぞーんからもんすたーを特  
殊召喚するかーどです……」

ウィンダ「ワインは泣いてるとカタカナがひらがなになるんだね」

ウィン「ますたぁ……」

13・竜騎士に選ばれた者（前書き）

薫風の短編書くと間違はなく暴走するなど実感。

### 13・竜騎士に選ばれた者

龍士Side

「左肩を打撲してはいるが……それほど大きな怪我じゃないな」

ウインダの左肩に、湿布を貼って治療を終える。幸い対した怪我もなく、俺のできる範囲での治療で済んだので良かった。ワンピースのような服を身につけているので肩が露出しており、ローブを着ていなければ少し目立つかもしれないが仕方ないだろう。

「あ……ありがとうございます……」

人間界の湿布を貼るので当然実体化をしてもらったわけだが、こうして見ると本当にウインにそっくりな感じがする。服装に微妙な違いはあるが、統一させれば区別が付かなくなるかもしれないというレベルだ。

『でもびっくりです。どうして突然空から……』

「それは……その……精霊界から逃げてきたというか……」

「逃げてきた？」

俺が尋ねると、ウインダは頷いて答えた。

「今精霊界は多数の種族による戦争が起こり、混沌に包まれている。あなたの従えているドラグニティをはじめとした連合軍と、封

印から解放された魔轟神、地上の侵略を目的としたインヴェルズ、その争いに突如介入し始めてきた神々、ヴァイロン……それらの種族が今も戦争を繰り返しているの」

「魔轟神」「インヴェルズ」「ヴァイロン」……どれも聞いたことのある名前だ。しかし「ドラグニティ」や「魔轟神」は《氷結界の龍トリシューラ》によって滅ぼされたという設定なのだが、何故「インヴェルズ」や「ヴァイロン」と共存しているのか。単なる生き残りなのだろうか。

「なあ、なんでドラグニティや魔轟神はその戦争に参加してるんだ？ 確かあいつらは……」

「本来ならトリシューラによってその魂ごと凍り付けにされたはず、それは間違いないよ。でも……もし何者かによって解放されたとしたら？」

なるほど、トリシューラによって凍り付けにされたとはいえ、死んだ訳ではない。こちらの世界でいう「冷凍」された状態でその姿を保ち続けていたというわけか。あるいは生き残りが子孫を残し、種族として復活できたか、そのどちらかだろう。

「……ドラグニティも魔轟神も、どうやって復活したんでしょう？」

「……そっか、知らないんだよね、あなたは」

「？」

「うっん、なんでもない。ドラグニティや霞の谷はガスタの民が発見したのよ。そこだけ時が止まったみたいで恐ろしかったらしいわ。」

魔轟神は私達と敵対している種族、リチュアが発見したみたい」

『リチュア……』

「リチュア」という名前を聞いた瞬間、ウインの表情が暗くなる。嫌いだというものではなく、それ以外に何かあるような表情だ。

「混沌に包まれ深刻化した戦争の最中、私とガルドは次元の裂け目を通って、再びこの世界に来たというわけ」

そうウインダは言うが、偶然俺達の前に現れたとは考えづらい。何かしらの目的があって俺達の前に来たのだろう。

「……で、俺達に何をしてほしいんだ？」

「察がいいね。単刀直入に言わせてもらおうと……あなたにガスタの里を救ってほしいの、龍士」

「俺に？」

訳が分からない。何の力もない普通の男子高校生が、1つの種族、しかも精霊界の種族の何を救えると言うのか。

「おいおい……俺はただの人間だ。ガスタを救うことなんて」

「できるよ」

そう言ってウインダは俺の鞆を漁り始め、中から俺のデッキケースを取り出す。

「あなたはドラグニティにも、私の片割れにも選ばれた人間でしょ？」

「選ばれた覚えが……それに片割れって……」

「はいはい、1度に2つも質問しない！」

「お、おう……」

見た目では年下の相手に注意されるのは屈辱的な気がするが、この  
際にしないでおこう。それ以上に先程のウインダの話が気になる  
のだ。

「まず…ドラグニティに選ばれたというのは」

『レヴァティン、でしょ？』

ウインが突然立ち上がりウインダの隣に移動し、俺を見ながら話し  
始める。

『マスターの持つカード、ドラグニティアームズ・レヴァティンは  
凄まじい力を持ったカード。常人が持てばその力に耐えられず、最  
悪死を迎える。それをマスターは平然と使っていました。それが何  
よりの証拠です』

「私は龍士が実際に使ったのを見たわけじゃないけど、以前デュエ  
ルした時に感じたの、レヴァティン様の力を。それにあの時のデュ  
エル、まるでデッキが…ドラグニティ達が勝利を導いてきたかのよ  
うなドロ―だったもん」

「こいつらが…俺を？」

デッキケースの中から《ドラグニティアームズ・レヴァティン》を取り出し、そのイラストを見ながら俺は呟く。

「……それで、片割れっていつのは？」

「そうよね。教えないと」

ウィンダはちらりとウィンを見る。

「片割れっていつのはこの子、私の双子の妹の風霊使いウインのことよ」

『のが多いです……って、ふええっ！わ、私！？』

「そこお前も驚くのな」

『だ……だって私初耳だもんそんなこと！や、やだなあウィンダ、確かに私達似てはいるけどそんな……』

「私がそんな嘘付くと思う？」

以前出会った時に意味深な言葉を残してはいたが、そのことだったのだろうか。それにしてもウィン、パニックになりすぎて俺に対してもウィンダのようにタメ口になってるな。これ以上似ると余計に双子説が濃厚になるだろうに。

「でも知らないのも無理ないよ。だってウインは生まれた後しばらくしたら霞の谷に移り住んじゃったからね」

『じゃあ私は……』

「そ、生まれはガスタの里。なんか巫女が双子なのはダメらしいから仕方なく里から離すことになったみたいけど」

『はわわわ…ま、マスター……私これからウインダをお姉ちゃんと呼ばないとダメみたいです』

「いや、気にするのはそこじゃないと思うぞ」

正直双子なら名前呼び合ってもいいと思う。どちらにせよウインのその思考はどこかズれているように思える。それは俺だけじゃないはず。

それにしても双子か…何となく分かってはいた。

「ということは以前にこっちに来たのは……」

「双子の妹に取られちゃった力を返してもらったために来たってわけ。あ、だから双子はダメなのかな」

「本来備わるべき力が分散されるから？」

「そうそう。力が半分の巫女って何だか頼りないでしょ」

それならウインにもガスタの巫女の力があるわけか。引き運が良くなったのは巫女の力かなんかなのか？

『ふええ…じゃあ私、一応ガスタの巫女の力持ってるんだ……』

「本当なら返してもらわなきゃダメなんだけど、返してもらおうなら…ウイン、死ななきゃダメだから」

『そうなんですか？』

「うん。でも…あなたが龍士と一緒にいる姿を見ると幸せそうだったから、止めたの」

ウインダも優しい心を持った少女なのだろう。でもそれじゃあ彼女は巫女としての使命を果たせないんじゃないだろうか。当然、ウインを失うのは俺は嫌だが、ウインダは困らないのか。

「誰かを犠牲にしてまで巫女としての役割は果たしたくないからね。それで巫女を名乗っても意味ないもん。それなら私…ウインと力を合わせていったほうがいい」

ウインとウインダに巫女の力が分かれているなら、2人が協力すれば問題ないというわけか。それなら誰も犠牲にならずに済むな。そこまでの気持ちがあるのなら、彼女の手助けはしてやりたいと思える。ましてや俺やウインの力が必要だと言うなら、力を貸してやるべきだ。

「よし、俺にできることがあるなら力を貸すぜ。ウインもいいだろう？」

『はい！私が力になれるなら喜んで協力します！』

「龍士…それにウインも…ありがとう」

結局ウインダに協力することになった俺達だが、どうやって精霊界に行くのだろうか。ウインダが人間界と精霊界を行き来していたので、何かしらの手段があるに違いない。それこそ人知を越えた方法なのだろう。

「本当なら今すぐ行きたいんだけど……」

ウインダは顔をしかめる。負傷した状態で精霊界に帰るのは危険なのだろう。回復するまで人間界で過ごすしかないらしい。

『回復するまでマスターの家に滞在してればいいよ。構いませんよね、マスター』

「そうだなあ……ウインの双子の姉だと言えば母さんも納得するだろうし、大丈夫だろ」

『えへへ……さすがはマスターです！』

ウインはそう言つと急に俺に抱き着いてくる。感謝を込めて抱き着いているのだろうか……なんか恥ずかしいな。

「お前抱き着くの好きだな……」

『ダメですか？』

「いや……ダメっていうんじゃないけど」

あまり言いたくはないが……胸、さっきからウインの胸が当たってくる。男の俺からすればもう少し恥じらいを持ったほうが、と思う

んだが……。

とにかくこのままだとウインダに見られ続けて恥ずかしい。

「あ、あー、そういえば腹が減ったなー。母さん今日は遅いから飯作らないとなー」

『わ、私が！私が作ります！』

前々から「私料理したいです！」と張り切ってたからな。これを利用しないと離してくれそうにないから利用した、後悔なんてない。

「お前も腹減っただろ、ウインダ。飯食うか？」

「へっ……あ、うん。せっかくだしご馳走になるのかな」

張り切ってキッチンに立つウインの姿を想像しながら、俺とウインダは1階に降りていく。

「ま、マスター……」

「おい」

「ウイン……何それ」

キッチンに立つエプロン姿のウイン、料理をするのだからまあそれはいいだろう。しかし……。

「おい、何で裸なんだ」

「お、男の人はこういうのを好むんだってお母様が……」

「アホかぁ！服着る服！」

「わ、私ガルドに餌あげてくる！」

ウインの大胆な行動を見てウインダは逃げるようにして庭に出ていった。残された俺とウインの間に気まずい空気が流れる。

「ぶ、プチリュウがいなくてよかったよな……」

「ぶちりゆうは里帰りしてますから……それよりもますたー、ますたーは喜ばないんですか……？」

やばい、ウインが涙目でこちらを見ている。刺激すれば泣いてしまっうかもしれない。刺激しないように、ウインを落ち着かせるには……。

「わ、わーい、裸エプロンだー」

「ま、ますたーが…マスターが喜んでる！」

こうせざるを得ない。許せ、ウイン。

とりあえずウインに服を着せた後、なんとか料理を作ってもらって

もらい現在に至る。ウィンダもきちんと椅子に座り、ウインの作った料理を見つめている。

「おっ…これは肉じゃがだな」

「はい。女性は肉じゃがを作らないとダメらしいです」

恐らくまた母さんの影響だろう。肉じゃがはいいが、あまり余計なことをウインに教えないでほしいと思う。裸エプロンとか。

「へえ……これが…肉じゃが？」

「ウィンダは初めて見るのか？」

「う、うん。人間界の料理は特徴的だね」

「肉じゃがは昔の人がびーふしちゅーという料理を作ろうとしてできた料理だそうです。間違いから生まれた料理って何だか素敵です！」

「それで…精霊界にはどうやって行くんだった？」

ウインの言葉を露骨にスルーし、ウィンダに尋ねる。

「うっ……ますたーひどいです」

「このカードを鍵にして次元の裂け目を開くんだけど……」

そう言ってウィンダが取り出したのは1枚の罫カード。

「異次元からの帰還か……。今のウィンダにぴったりのカードだな」

「このカードを使って別世界に行き来できるから、精霊界に行く時はこのカードを使って行くよ。あと…ガルドのコンディションも考えると、最低でも1週間は様子を見たほうがいいかも」

「そうか。じゃあしばらくは家で過ごさないと」

いい加減肉じゃがを食べないと冷めそうなので、そろそろ食べようと箸を手にすると、ウィンダも箸を手にする。

「あっ…食べる前に」

「なんででしょうか」

「……いただきます」

「あ……はい、召し上がって下さい！」

ウィンダの今日1番の笑顔を見ながら、俺は肉じゃがのジャガ芋を口に運ぶ。

さて…これから大変そうだな。

### 13 竜騎士に選ばれた者（後書き）

ウィン「さすが15禁です。暴れ放題ですね」

ウィンダ「私達って……やっぱり何でもない。それよりもウィン、最近妙に積極的になったよね」

ウィン「あ、そういえば……なんででしょうか」

次回のキーカード  
なし

ウィン「デュエルしないんですね」

ウィンダ「だからキーカードないんだ」

・教えてウィンちゃん

ウィン「えっと……何ですかこのコーナー。何々……ご存知だとは思いますが、この小説のトップに拍手があります。そこでウィンに対する質問を受け付けているので是非ご参加下さい……って何ですかこれえー！」



## 14・ウィン、初めてのペット（前書き）

まだ…まだ何の変哲もない日常を……！

この話、本編にする必要があるんでしょうか……？

## 14・ウィン、初めてのペット

ウィンSide

「ふふふん」

今日私は実体化をして外を散歩しています。マスターも「それくらいはいいんじゃないか、別に」と許可をしてくれましたし、人間界に合った服装をすれば問題ありません。髪の色は……気にしません。今日の風は気持ちいいです。突然精霊界に帰る話になったりしましたが、今はそんなことを気にせず散歩したい気分になります。

そうしてしばらく歩いてみると、私は道端にダンボール箱がぼつんと置かれているのを発見しました。人間界では極めて高い汎用性を誇るダンボール箱、ある時は物資の輸送に、またある時は身を隠すための道具に使用されます。あ、後のはマスターが見ていたテレビに写ってたものです。手元で何かガチャガチャやってましたけど、関係ないですよ。そんなダンボール箱が道端に落ちていたので気になり、私はその中を覗き込んでみました。

「あ……わんちゃん」

そこには尻尾をカールさせた茶色い小さな犬の姿がありました。きゅんきゅんと寂しそうに鳴くその子の境遇に自分と近いものを感じたのか、気が付くと私はその子に入ったダンボール箱を抱え、走っていました。

「……で、現在に至ると」

「はい」

やれやれ、とマスターは呆れた様子で私と子犬を交互に見ています。

「あのなあ……犬を飼う余裕はないって、知ってるだろ？精霊界に行ってる間どうするんだよ」

「うっ……」

衝動的に連れて来たわけですが、よく考えるとそうです。精霊界に行っている間子犬はほったらかしになるわけですし、今はそんな場合じゃありません。でも私には決して譲れない訳がありました。

「……この子の境遇が私に似てると思ったからつい……」

「似てる？」

「もし私が見つつけてなければ、この子はずっと寂しい想いをするこ  
とになってたはずですよ。私だって、あの時マスターに見つけてもら  
ってなければ……」

今も寂しくマスターを求めていたかもしれない、そんなことを考え  
ると、この子犬もあの時の私と同じに思えてきました。だから私は  
この子を放ってはおけなかったのです。だから……

「お願いします、マスター。私、この子を助けてあげたいんです。あの時マスターが私を拾って下さった時のように」

「……そうか。この犬の気持ちは、お前にしかわからないのかもな」  
マスターは腕組みをしてしばらく考えるそぶりをすると、言いました。

「ワイン、そいつ風呂で洗ってやれ。とりあえず話はそれからだ」

「マスター……」

龍士Side

ああ言われると捨ててこいなんて言えないし、それでなくてもワインの気持ちはよくわかる。子犬を思いやる心は、彼女にとって良いきっかけを与えてくれるに違いない。ならそれを無下に扱うわけにはいかないだろう。

『まあね、気持ちは分かるよ。あの子、優しいもん。でも……私を無理矢理連れてきて買い物ってどういうこと？』

「決まってるんだろ。犬に飲ませるミルク、後はトイレシートとかを揃えるための買い出しだ」

『人手がいるならそう言えばいいのに。それになんだかんだ言って、一番乗り気なの龍士のほうなんじゃない？』

「うるせえ。いいから実体化して荷物持て荷物」

『ふう……はいはい』

まあ乗り気じゃないと言えば嘘になる。いずれは犬でも飼ってみたいとは思っていたし、ワインに人間界の動物と触れ合わせるのも彼女にとっていい刺激になるはずだ。悪いことじゃない。

「やっぱドッグフードとかのほうがいいのか？」

「子犬専用の餌とかあるんじゃない？人間で言う離乳食みたいなのとが」

「そうだな……」

色々と買い揃えている最中、俺が商品を手に取るうとした急に手を止めたので、ウィンダは首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや……ワインも俺に何か求めてたりするのかと思ってな」

捨てられた子犬と自分の境遇は似ている、とワインは言っていた。拾われた後も子犬が求める物はいくらでもある。温もりだとか、餌だとかは問わずそれらは1つではないはず。ならワインもまた、俺に対して何か求めるものがあるのではないだろうか。ただの考えすぎか、それとも……。

「そこまではわからないけど……何か求められたら、できる限り協力すればいいんじゃない？」

無論そのつもりではあるが、ウインにはまだ打ち明けていない悩みがあつたりしないのか、それが気になる。優しさなのか、ウインのマスターとしての義務なのかは分からない。ただウインが声にならないメッセージを発している可能性を考えると、彼女が1人で悩んでいるのではないかと不安になる。

「それよりも、早く買い物済ませちゃわないと困るんじゃない？ウインだつて待つてるかもしれないし」

「あ、ああ。そうだな。急ぐか」

買い物かごをレジに持って行き、店員に諭吉を渡す。お釣りを受け取り財布に入れるとウインダと協力して荷物を持ち、家路を急ぐ。何となくだが、今はとにかくウインの喜ぶ顔が見たい、そんな気になつた。

ウインSide

「シャンプーはないけど、あつたかいお湯で洗ってあげればいいよ

ね……?」

お風呂場に子犬を連れていき、洗ってあげようと試みるもなかなかじっとしていてくれず、苦戦しています。

「じつとしてねー」

少し押さえ付けながらもなんとかあったかいお湯で洗ってあげるこ  
とができました。このわんちゃん、お湯嫌いなんでしょうか……。

洗ってあげると、拾ってきた時とは比べものにならないくらい綺麗  
になりました。毛並みも整えてあげたいのですが、ブラシは……。

「あ、マスターのブラシ。………ちょっとだけならいいよね?」

そうやって私はマスター愛用のブラシで子犬の毛並みを整えてあげ  
ました。心なしかわんちゃんも嬉しそうです!

「えへへ……マスターのブラシ、さすがです!」

「ああ……ホントにさすがだよ」

「ですよねー……ってあれ?私の後ろにいるのは……。」

「ふええ……ま、マスター……。」

「人の大事なブラシを勝手に使って犬の毛並みを整えてる悪い子は  
誰だー、んー?」

「ふえええ……ごめんなひゃい……」

マスターに頼つぺたを引つ張られています。やっぱり駄目だったんですね……。

「んで、名前とかは決めたのか？」

「名前ですか？」

お腹を壊さないようあっためたミルクを美味しそうに飲んでいる子犬を見ながら、マスターは私に尋ねます。

「ほら、飼うんなら名前を付けてやらないと可哀相だろ。いつまでも犬って呼ぶのは」

「あ、確かにそうですね……えっと……わんちゃん？お名前は？」

「バカ、聞いても喋るわけないだろ」

「ふえ？わんちゃんって喋らないんですか？」

『ウイン、犬は喋らないよ？テレビの見すぎだよ』

「ううー……わんちゃんは喋らないんですか。これじゃ名前が分からないです」

「いや、だから名前付けるんだろ」

と、マスターはおっしやっています、もしちゃんとした名前があるならその名前で呼んであげないと可哀相じゃないですか。でも喋れないなら名前が聞けないし……。

『あー……ほら、赤ちゃんが産まれたらその親が名前を決めるでしょ？それとおんなじで、その子はウインが拾ってきて世話をするんだから、ウインが名前を付けていいのよ』

「いいんですか？」

『そっこのほうがこの子も喜ぶでしょ？』

抱いているわんちゃんを見ながら、私は考えます。名前を付けていいと言われれば、付けませんがありません。とびつきりいい名前を付けてあげたいです。

しばらく考えて、1つだけ思い付きました。

「ペンジャミン1世……？」

「ま、まるで意味がわからんぞ！」

『どつやったらそういうネーミングになるの……？』

あまり反応が良くないみたいです……。

でも私としては、これ以上の名前は思い付かないのでいいんですが……。

「ウイン、お前は自分の名前がペンジャミン1世だったら嫌だろ」

「嫌です」

「犬だつて嫌だろつよ。もう少し馴染みやすい名前のほうが、犬も覚えるだろ」

「馴染みやすい…名前ですか？」

馴染みやすい名前が良いと言われ、もう少し悩んでみることにしました。とりあえずペンジャミン1世を超える素晴らしい名前を考える必要があるみたいです。

「ポチとかどうでしょう」

「安易過ぎるな…よその犬と名前被つてそつだ」

「ジョンは？」

「それも安易なネーミングだ」

「ケルベロス」

「なんか恐ろしいな…こいつ、明らかに日本犬だし」

「お、お父さん……」

「なんか聞いたことあるぞ、それ」

「ペンジャミン2世……とか」

「1世と何が違つんだ？」

次々とダメだしされていく私の案。正直納得がいきません。

「うー……じゃあマスターが決めて下さいよ。文句ばかり言うなら」

ダメだしばかりするマスターのことですから、何かいい案があるに違いありません。もし案がないのなら……私、怒ります。

「ん……そうだな。ウインのペットらしく風のイメージを持たせて、フウとかどうだ？」

「フウ……ですか？」

何の捻りもない名前かもしれませんが……フウという名前にはペンと来るものがありました。

「フウ……？」

抱いていたわんちゃんにそう呼び掛けてみます。すると自分のことだと理解したのか、ワンとはつきり吠えました。

「えへへ……あなたの名前はフウね」

『よかったね、ウイン』

私のペット……フウちゃん、大切に育てます！

ウィンダSide

ウィンがフウを拾って来てから2日が経った。彼女は積極的に世話をしているわけだけど、どんなしつけをするつもりなんだろう……。

「わん」

「ふええ……フウちゃん賢いです、そんな戦術を編み出すなんて」

フウがウィンとデュエルしている……手札を表にして、使用するカードは前脚を置いて示し、カードもきちんと動かしている……。

「ウィン……何、やってるの？」

「何って……フウちゃんにデュエル教えてる」

「確かにしつけは大事だけど……でも……」

何か違うような……。

「フウちゃん、デュエル犬としてテレビに出られるかなあ……」

#### 14・ウィン、初めてのペット（後書き）

ウィン「私にもペットが！」

プチリュウ「ウィン…ワイのこともたまには思い出してくれや」

ウィン「まあ犬のほうか賢いからね。そういえば、フウがどんな犬か知ってるの？」

ウィン「柴犬っていう、犬の中ではポピュラーな犬種ってマスターが」

ウィン「ただの柴犬がデュエルを……？」

次回のキーカード

「No.61 ヴォルカザウルス」

ウィン「カード化が確定したばかりのナンバーズが早速登場ですね。マグマツクスウ！」

15・唸れマグマックス！No.61 ヴォルカザウルス！（前書き）

ヴォルカザウルスは早く使ってみたいですねえ。イラストはアニメよりもかっこよく描かれていますし、楽しみです。

15・唸れマグマックス！No.61 ヴォルカザウルス！

龍士Side

「マスター、フウちゃんのお散歩に行つてきます！」

我が家に柴犬のフウがやって来てから3日経つた。ウインは夢中でフウの世話をしている、今も張り切つて散歩に連れていこうとしている。拾つて来た当初と比べても元気になったフウだが、1番の驚きはデュエルを始めたことだ。チンパンジーが人間の勉強を理解することはあつても犬がデュエルをし始めることはあるのか非常に疑問だ。

さて、余計な事は考えずに、今はデッキの調整にせつせと取り組むことにしよう。

これから精霊界に行く時、唯一武器となりうるのがデッキであるとウインダに教えてもらった。直接的な武力だけでなく、デュエルによつて相手を倒すのまた重要となる。下手をすればその勝敗がそのまま生死すら分けることもあるかもしれない。特別な力も武器もない俺にとつて頼りになるのはデッキしかない、なら調整は念入りにしなくてはならないだろう。

まず手札事故は致命傷では済まされない。多少のスピードは犠牲にしても安定性を重視しなくてはならないだろう。今まで活躍してくれた《竜操術》も手札事故の元になるのであれば、デッキから外すべきだろう。代わりに《盗賊の七つ道具》のようなカウンター罠を増やして妨害されにくくするのも一考か？

《盗賊の七つ道具》

カウンター罠

1000ライフポイントを払って発動する。罠カードの発動を無効にし破壊する。

『ドラグニティ』は召喚を成功させられないと厳しいため、こういつた妨害対策のカードは必須となる。でなければ何もできずに敗北してしまうのだから仕方がないだろう。

「とすれば回転を速くするためにこのカードを採用して……」

1枚1枚慎重に選び、デッキに投入していく。普段ならこれほど楽しい瞬間はないのだが、今回はやはり楽しんではいられない。

「あつ……」

ふとした拍子に崩してしまったカードの山。その一番上に置かれたカードに目を向ける。そのカードは『ドラグニティ』とは全く別のカテゴリに属すモンスターカードだが、特定のカードとのコンボが成立する、所謂「コンボカード」だ。所詮はコンボ専用と思われるそうだが、カードの特性上無理なく取り入れられるコンボであることを考えると採用してみてもいいかもしれない。

「ありっちゃありだよな、これ」

手に取りじっくりと見ながら更なるデッキの構想を練る。このカードを活かしたプレイングは理解しているつもりだ。しかし決定的なものがない。それはシンクロ素材に指定のないレベル8のシ

ンクロモンスター。今持っているシンクロモンスターのほとんどがチューナーに指定があるため、このままではチューナーであるこのカードは活かすことはできない。

「レベル8か……難しいなあ」

レベル8のシンクロモンスターともなると強力なモンスターが多く、なかなか手にすることができない。なのである程度妥協しなくてはならなくなるのは仕方ない。

しかしレベル8のシンクロモンスターがないと言えどまったく使えないわけではない。相性の良いカードは他にもある。俺はそのカードをデッキに入れ、一先ず完成させることにした。

美浦 Side

普段と変わらないよく晴れた日。でもなんだか落ち着かない感じがするのはどうしてだろう……。

『主よ、聞こえるか』

「何、リバイス？」

ついこの間精霊として姿を現したリバイス・ドラゴンがあたしに話

し掛ける。

『ナンバーズの気配がする。それもかなり強力な気配だ』

「何ですって……?」

ナンバーズが絡むとろくなことがないのはわかってる。だからこそ無視はしてられない。Dゲイザーとデッキを手にするとあたしは家を飛び出し、リバイス・ドラゴンの案内の元ナンバーズを追うことにした。

『ここだ』

「ここって……デュエル博物館じゃない。どうしてここにナンバーズが?」

リバイス・ドラゴンが案内した先は、カードの歴史やその歴史上に名を残すカード達を展示する「デュエル博物館」。一見するとナンバーズとは何の関わりもなさそうな場所だけど……。

「君、ここは危険だ!早く逃げなさい!」

警官の制服に身を包んだ男性があたしの元に来て言う。

「博物館内のカードを狙った強盗が立て籠もってるんだ。相手は拳

銃を持っている。危険だから……っておい！」

せつかくの男性の忠告も無視してあたしは博物館の中に乗り込んでいく。危険だからって逃げてちゃ『仕事』ができないでしょ？

『主、今回はあのデッキを使うのか？』

「当然。仕事の時のあたしは本気よ」

そうやってペンギンデッキとは別のデッキを取り出し、Dパッドにセツトする。

「さあて、一狩り行きますか！」

博物館の奥で強盗犯を見つけると、装着しているDパッド目掛けて縄を投げ付ける。突然飛び出してきた縄に捕われ、動揺する強盗犯の前に立つ。

「な、なんだお前は!？」

「あなたに名乗る名前はないわ。まあ……強いて言うならナンバーズハンター……ってところかしら」

「ナンバーズハンターだと？」

そう、あたしの『仕事』とは人々にとって悪影響を及ぼすカード、ナンバーズを回収する『ナンバーズハンター』。怪しい事件の現場に出向き、ナンバーズが関わっていると判断すれば仕事を始める、それがこの仕事の流れよ。

「あなたの持つナンバーズ……狩らせてもらおうよ」

「なっ……」

「隠しても無駄。その首筋に浮かぶ刻印が何よりの証拠よ」

そう言つて強盗犯の首筋に浮かぶ「20」の数字を指差す。ナンバーズを所持している人間の身体には皆そのナンバーズの冠する数字が浮かび上がる。それを見てあたしはナンバーズを所持しているかどうかを判断する。

「さあ、逃がしはしないわ。あたしにナンバーズを差し出しなさい」

「ぐっ……そう簡単に渡して堪るか！こいつがあれば何だってできるんだからな！」

「さあ……デュエルよ！」

ナンバーズを奪い取る方法はただ1つ、デュエルに勝利すること。故にあたしの今のデッキは……本気よ。

美浦Life8000

強盗犯Life8000

「せめてもの情けよ。先攻は譲るわ」

「後悔すんなよ……俺様のターン！」

あえて強盗犯に先攻を譲る。

「俺は切り込み隊長を召喚！こいつが召喚された時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる！俺様はもう1体、切り込み隊長を特殊召喚する！」

強盗犯の場に2人の戦士の姿。そのレベルはどちらも3。

《切り込み隊長》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守 400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「いくぜえ…俺様はレベル3の切り込み隊長2体をオーバーレイ！エクシーズ召喚、No.20 蟻岩土ブリリアント！」

《No.20 蟻岩土ブリリアント》

エクシーズ・効果モンスター

ランク3 / 光属性 / 昆虫族 / 攻1800 / 守1800

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

エクシーズ召喚の末、強盗犯のフィールドに現れたのは巨大な蟻のモンスター《No.20 蟻岩土ブリリアント》。ナンバーズのモンスターよ。

「ブリリアントの効果！エクシーズ素材を取り除いて自分フィールド上のモンスターの攻撃力を300ポイントアップさせる！」

No.20 蟻岩土ブリリアント  
攻撃力1800 2100

効果は全体強化みただけど、この状況ではリバイス・ドラゴンよりも弱い能力ね。使い方が甘いわ。

「ターンエンド！ナンバーズさえいればこっちのmond！」

強盗犯Life8000

手札4枚

モンスター

《No.20 蟻岩土ブリリアント》

魔法、罫

(なし)

伏せカードも何もなし、ナンバーズの力を過信してるわね。そんなんじゃ……あたしには勝てない！

「あたしのターン！ドロー！……ふふっ」

ドローしたカードを見て、思わず笑みを零してしまう。

「な、何がおかしい！」

「だって……せっかく自信満々に召喚したナンバーズが1ターンで退場だなんて、あまりに愉快だったから」

「なっ……」

「手札から魔法カード、フォトン・リードを発動。手札のレベル4以下の光属性モンスター1体を特殊召喚するわ。来なさい、プロト・サイバー・ドラゴン」

あたしの場に機械の竜が現れる。

《フォトン・リード》

速攻魔法

手札からレベル4以下の光属性モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚する。

《プロト・サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 機械族 / 攻1100 / 守 600

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。

「さらにプロト・サイバーが特殊召喚に成功したことでこのカードが発動される……速攻魔法、地獄の暴走召喚！」

「なっ……」

「攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時、そのモンスターと同名のモンスターを可能な限り特殊召喚できる。その代わりに相手も自分のモンスターを好きなだけ特殊召喚できるけど」

### 《地獄の暴走召喚》

#### 速攻魔法

相手フィールド上に表側表示モンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体の特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名カードを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手フィールド上のモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名カードを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

「ちっ…ブリリアントはエクシーズモンスター…この効果で特殊召喚はできない」

一部の例外を除き正規の手順を踏まなければエクストラデッキからモンスターが特殊召喚されることはない。その穴を突いたコンボなんだけど…《地獄の暴走召喚》の真骨頂はここからよ。

「ならあたしは……デッキから3体のサイバー・ドラゴンを特殊召

喚！」

あたしの場に特殊召喚されたのは《プロト・サイバー・ドラゴン》よりも精密に作られた機械の竜達サイバー・ドラゴンだった。

《サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星5 / 光属性 / 機械族 / 攻2100 / 守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「おい、そいつらはプロト・サイバーとは違うじゃねえか！」

「プロト・サイバーには、自身をサイバー・ドラゴンとして扱う効果がある。だから地獄の暴走召喚で特殊召喚されるのは同名カード……つまりサイバー・ドラゴンになるわ」

フィールドに並ぶ4体の機械竜……うち1体は効果によるものとはいえそれらはすべて《サイバー・ドラゴン》に違いない。

「さて……あたしはレベル5のサイバー・ドラゴン2体をオーバーレイ！」

4体のうち2体が光の渦に飲み込まれていく。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築、エクシズ召喚！No.61 ヴォルカザウルス！」

光の渦の中から巨大な溶岩が出現したかと思うと、その姿を恐竜のものへと変化させた。これがあたしのもう1体のナンバーズ、ヴォルカザウルス！

《No.61 ヴォルカザウルス》

エクシーズ・効果モンスター

ランク5 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻2500 / 守1000

レベル5モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を発動するターン、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

「な……ナンバーズ……」

「ヴォルカザウルスの効果発動！1ターンに1度、エクシーズ素材を取り除くことで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを与えるわ！」

ヴォルカザウルスが自身の周囲を飛び回る光を吸収すると、ブリリアント目掛けて光線を放つ。

「喰らいなさい…マグマックス！」

「ぐわあああ！」

ブリリアントが光線の餌食となり、その余波が強盗犯に襲い掛かる。

強盗犯 Life 8000 6200

「お…俺様のナンバーズが……」

ナンバーズが破壊されたことで完全に戦意を喪失したようだけど…  
…あたしは決して容赦はしない。

「まだ終わりじゃないわよ。手札からプロト・サイバー・ドラゴンを召喚…そして魔法カード、パワー・ボンドを発動！場に揃った3体のサイバー・ドラゴンを融合させる！」

《サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン》として扱われている2体の《プロト・サイバー・ドラゴン》が融合し、3つの首を持つ巨大な機械竜が誕生する。

「現れなさい、サイバー・エンド・ドラゴン！」

《パワー・ボンド》

通常魔法

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。（この特殊召

喚は融合召喚扱いとする)

《サイバー・エンド・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星10/光属性/機械族/攻4000/守2800

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「あ……あ……」

「パワー・ボンドで融合召喚されたモンスターの攻撃力は、元々の攻撃力の倍……」

サイバー・エンド・ドラゴン

攻撃力4000 8000

理不尽なまでの攻撃力、それがこの『サイバー』デッキの醍醐味。でもまだまだこんなものじゃ済まない。あたしの手札はまだ1枚残っている。

「悪いわね……手札が良すぎた。サイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！そして速攻魔法、リミッター解除を発動！サイバー・エンドの攻撃力はさらに倍となる！」

《リミッター解除》

速攻魔法

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

《サイバー・エンド・ドラゴン》の攻撃力は現在8000。その倍となると……。

サイバー・エンド・ドラゴン  
攻撃力8000 16000

「ぎゃ ああああー！」

強盗犯Life6200 - 9800

「本当に……ありがとうございます」

「あ、あはは……ちょっとやり過ぎたかもしれませんけど」

事件は解決し、博物館の館長に何度もお礼を言われるけど、あたしはオーバークイルされて魂が抜けたようになってしまった強盗犯のことが心配だった。ナンバーズはしっかり回収させてもらったけど……さすがにやり過ぎたかしら。

「お礼と言ってはなんですけど……是非我が博物館自慢のカード達をご覧になってはいかがでしょう」

「自慢のカード達？」

「はい、こちらです」

館長が取り出してきたのは6枚のシンクロモンスターのカード。しかしどれも絵柄が描かれてなく、枠の色も合わさり本当に真っ白のカードだった。

「これは？」

「こちらは赤き竜と呼ばれる伝説の竜の化身達のカードです。今はその姿を我々に見せてはいませんが、その竜が主に相應しいと認められた人物が現れた時、初めてカードの絵柄やテキストが浮かび上がると言われております」

「そんなカードが……」

試しに6枚のうち1枚を手に取ってみるけど、何の反応もない。どうやらあたしは主に相應しくはないみたい。

「夜空の星屑の煌めきを持つ竜、王者と呼ぶに相應しい力を持つ悪魔竜、黒薔薇のように舞う竜、妖精のような優しい光を放つ古代竜、

その身ですべてを受け止める黒い羽を持つ竜、生命の輝きを持つ黄色い竜……それらが赤き竜の化身だと言われております。もしカード達が主を見つけたなら、その時は竜達の真価が発揮されることでしょう」

「主……か」

その力はナンバーズすらも凌駕するほどなんだろうか……。もしそうなら、それはあたし達人間にどんな力を及ぼすんだろう……。

## 15・唸れマグマックス！No.61 ヴォルカザウルス！（後書き）

ウィン「今回の最強カードはNo.61 ヴォルカザウルスです」

《No.61 ヴォルカザウルス》

エクシーズ・効果モンスター

ランク5 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻2500 / 守1000

レベル5モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を発動するターン、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

ウィン「エクシーズ素材を使用して擬似破壊輪を発動させる強力なエクシーズモンスターです。発動したターンの制約もダイレクトアタックができないだけなので、上手くいけばこのモンスター単体で2体のモンスターを処理できます。素材はレベル5のモンスター2体と少し厳しいですが、サイバー・ドラゴンやバイス・ドラゴン、クイック・シンクロンを駆使すれば召喚自体は難しくありません。元々レベル5を並べやすい暗黒界やゼンマイでなら十分な活躍が期待できます。

効果名はマグマックス。「マグマックスウー！」と叫ぶのが病み付きになった人もいるのではないでしょうか」

次回のキーカード

「スターダスト・ドラゴン」

ウィン「ついに精霊界に乗り込んだ私達、しかしそこに待ち受けていたのは……」

## 16・精霊界と星屑

美浦 Side

「うーん……」

博物館から戻って来たあたしがひたすら見つめているのは6枚の真っ白いカード。あの後館長から「これも何かの縁でしょうから」と預かってきたわけだけど……どうしてあの人はあたしにこのカード達を託したのかがいまいち理解できないでいた。カードに認められたわけでもないあたしにあえてこのカード達を託したのには何か理由があるはず。あたしはそれがどうしても気になった。

「ああ、もう！わかんない！」

考えるのがめんどくさくなつたあたしがベットの上で寝転ぼつとしたそんな時に、携帯電話が鳴り始める。こんな時に電話を掛けてくるような輩を確かめようと手に取った携帯電話のディスプレイに表示された名前は「風早龍士」。普段あたしに電話なんてしてこない龍士が携帯電話に掛けてくるなんて……何かあったのだろうか。通話ボタンを押し、電話に出る。

「もしもし……?」

精霊界に向かうための準備に追われる俺。外国に旅行に行くのとはレベルが違う、そのため荷物はなるべく少なくしたほうがいい。特に重要なのはあちらの世界で俺にとっての武器となりうるデッキ。こちらの世界では普通なら40枚の薄い紙の束に過ぎないが、あちらの世界ではこのデッキの存在は重要であるとウインダから散々言われている。どんなことがあっても失うわけにはいかない。

「よし、こんなもんかな」

荷物をナップサック1つにまとめ、準備を終わらせた俺はウインダの待つ庭に向かう。

庭に出ると、いつでも行けると言わんばかりに鳴くウインダの相棒、ガルドの姿があった。当然それなりの大きさで目立つので精霊の状態でだが。

『準備できたの?』

庭に来た俺を見たウインダがそう問い掛けてきたので、頷いて答える。

『マスター、荷物の準備はできてももう1つしなければいけないことがあるんじゃないですか?』

「ん？」

『ほら……お友達への挨拶とか』

「ああ……その必要はないだろ」

母さんにはフウの世話を頼む時にきちんと話しておいたが、美浦には一言も話していない。あいつのことだから、一緒に行くと言い出しそうだな。あいつを巻き込むのは嫌だからそうなる前にさっさと行ってしまいたいと思ったんだ。

「それよりも早く出発しようぜ。こついうのは早いほうがいいんだ」

『そうですか……』

『……なんか納得いかなさそうだけど、出発するよ』

ウィンダはそう言つと、ガルドに飛び立つよう指示する。それと同じに彼女は《異次元からの帰還》のカードを掲げ、庭の上空に次元の裂け目を作り出す。精霊界へ移動する為の道はカードによって作り出すものらしい。

裂け目を確認したガルドは羽ばたきを始め、飛び立とうとする。しかしその時、何者かの制止する声が聞こえた。

「ちょっと……待ちなさいよ！」

「美浦……！？」

制止する声の主は、呼んだはずのない美浦の物だった。

「精霊界に行くだなんて……どうしてあたしに話さなかったの!？」

「……っ! どうしてそれを」

美浦は俺が精霊界に行くことを知らないはず……なのはどうして知っているのか。

「達子さんに電話で聞いたのよ。あんたがあたしに黙って精霊界に行くって」

「母さんが……?」

「達子さん、わざわざあなたの携帯電話から掛けてただけど……気付かなかった?」

俺の携帯電話で母さんが美浦に電話しているはずがないだろう、そう思い携帯電話の履歴を確認すると、確かに身に覚えのない美浦の携帯電話との通話記録が残されていた。母さん……俺の知らない間にそんなことを。

「そんなことよりも……幼なじみのあたしに黙って危険な場所に行こうなんて……許されるわけないでしょ!」

「でも俺はお前と一緒に行くと言いそうで……」

「当たり前でしょ! 幼なじみが危険な場所に行こうとしてるのに、知らんぷりできる人がどこにいんのよ!」

美浦を傷つけないよう気配りをしたつもりだった。でもそれはあい

つの気持ちを無視したものであり、結果的に傷つける事になってしまった。俺の判断は正しかったと言えるのか……？いや、言えないかもしれない。

「悪い。その…お前の気持ちを無視するような事をしてしまった」

「……いいわよ。でもその代わりにこれを持って行きなさい」

美浦はそう言いながら3枚のカードを俺に渡してきた。2枚のカードは普通のカードだが、残りの1枚はイラストも名前も書かれていない真っ白いカード。カードの枠から察するにシンクロモンスターのようだが……。

「美浦、これは……」

「あたしからの饞別、そしてお守りよ。そのカード達はきっとあなたの力になってくれるわ。一緒に行くと足手まといかもしれないから、せめてこんな形でも協力させて」

俺は手にしたカード達をベルトに装着したデッキケースに収める。どういふ形であれ美浦が俺と一緒に戦ってくれる、そう考えると勇気が湧いてくる。

「……サンキュー、美浦！」

俺がそう言うと同時にガルドが飛び立ち、上空にできた次元の裂け目に向かって羽ばたき始めた。

「……成り行きで渡しちゃったけど、多分大丈夫だよな」

次元の裂け目の中の様子は、SFアニメでよく描写されるワープ中の風景によく似ていた。まあ俺達は今精霊界に向かって空間の歪みの中を進んでいるので似ているのは当然なのかもしれない。

『あつ…もつじき着くみたい』

空間の先に光を見つけ、ウィンダが言う。どうやらその光が出口らしい。

無事到着しそうだ、と安心したその時、突然ガルドが苦しそうに悲鳴を上げた。

『くつ……こんな時に……』

『えっ？な、なんですか？』

あまりの突然の出来事にウインは困惑している。俺も少し困惑するも冷静に状況を判断しようと試みる。

見るとガルドを取り囲むようにして3体の黒い蜂型のモンスターが飛んでいて、攻撃している。

「こいつは…インヴェルズの先鋭か!？」

《インヴェルズの先鋭》……『インヴェルズ』のモンスターの1体であり、フィールドの儀式、融合、シンクロモンスターを破壊する効果を持った厄介な奴だ。成長したガルドに乗ったウィンダは《ダイガスタ・ガルドス》というシンクロモンスターだ。放置していると危険だろう。

《インヴェルズの先鋭》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1850 / 守 0

自分フィールド上に存在するこのカードが墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在する儀式・融合・シンクロモンスター1体を選択して破壊する。

必死にガルドを操るウィンダには攻撃する余裕がない。かといって奴らを追い払う武器も持っていない俺では戦うことはできない。

「くそっ… どうすれば」

「私が… やります」

そうやって立ち上がったのはウィン。しかしたった1人で3体ものモンスターを相手にするのは無謀だ！

「待て、ウィン！ お前じゃ駄目だ！」

「マスター、サポートをお願いします。あなたの持つデッキから、モンスターを召喚してください」

「モンスターを？」

「早く！」

「わ、わかった！」

ウインに言われるがまま、デッキからカードを1枚抜き取りDパッドにスキャンさせる。

「ドラグニティ・アキュリスを召喚！」

俺の前にお馴染みとなった赤いドラゴンが現れる。しかしこのアキュリスは普段見るアキュリスとは異なりよりリアルだ。これは…実体化、いや…本物か!?

『アキュリス、力を貸して!』

ウインの呼びかけに応え、アキュリスは背中にウインを乗せて先鋭に近付く。

『ていつ……やあっ!』

アキュリスの素早い動きで相手を翻弄させ、一瞬の隙を突いてウインは持っていた杖で勢いよく敵を殴打していく。力尽きた先鋭達はそのまま異空間の中へと消えていった。

『ふう……ありがとう、アキュリス』

ウインをガルドの背中に降ろしたアキュリスはそのまま消えていく。

「モンスターの実体化……どうやら精霊界、あるいは精霊界に近い世界では言葉通りモンスターを召喚できるみたいだな」

『そう。私がデッキが大切だって言ったのはそういう意味もあったの。いざとなれば武器になつてくれるし』

「なるほどな……」

ウィンダの言葉の真意を身をもって実感させられた気がする。

俺ができる事は、デュエルディスクなどのシステムを利用してモンスターを呼び出し戦わせること、精霊のサポートを行うことだ。当然デュエルによる戦闘も可能らしい。そう考えると意外と色々なことに貢献できるようだ。

『さてと…そうこうしてるうちに到着したみたい。行くよ!』

空間の先にある光の中に、俺達は突っ込んでいった。

『着きましたー……って、あれ?』

異空間を抜けた途端、ガルドは羽ばたきを止める。

『ガルド……体力の限界だったみたい』

「という事は……?」

『うん……墜落する』

先鋭達の攻撃によるダメージが大きかったせいで、ガルドは力尽きたようだ。今俺達は空中、つまり真つ逆さまである。幸い低い位置からの墜落だったので怪我はなかったが、土埃を巻き上げるほどの派手な墜落ではあった。

『なんやなんや、騒々しい』

聞き覚えのある口調で俺達の元に誰かがやってくる。あれだけ派手な墜落だったのだから当たり前前といえば当たり前だが……。

『あつ……』

『ワイン…それに龍士はんも!? 一体何事や!?!』

そこにいたのはワインの使い魔でワイン曰く現在里帰り中のプチリユウだった。

『なんや……そんな事情やったんか』

「ああ。おかげで初っ端から災難だ」

『まあ当分はワインちに泊まるとええで。どうせ1人やかな、遠慮はいらんで』

「ああ…助かる」

当分の活動拠点ができたことで、一安心の俺。しかしそれとは対照的にワインは浮かない表情だ。

『マスター…ホントにプチリユウの家に泊まるんですか?』

「でないど野宿になるだろ? 見知らぬ世界で野宿は正直かなり危険だと思っぞ」

『……じゃあ、今晚私と同じ布団で寝て下さいよ？絶対に』

そう言うウインの目は妙に真剣だった。理由はだいたい察しがつくが、だからと言って俺と一緒に寝たいというのはどうだろう。いくらなんでも良くないような……いや、今に始まったことではないか。

「ところで……だ。ここはガスタの里か？俺達はそこに向かってたはずなんだ」

『何を言うか。ここがガスタの里なわけあらへん。ここは霞の谷南部の何もあらへん田舎や』

「……ウインダ」

『……！あ、あー、ここから私別行動ね！先行かなきゃ駄目だから』

自分のミスが咎められるのを避けるようにして、ウインダは外に飛び出しガルドに乗ってどこかへ行ってしまった。

「……逃げたな」

あまりにわかりやすい行動を見て思わずそう呟いてしまう。

『ま、まあこれも不幸中の幸い……こんな田舎やけどおもしろいもんは見られるぞ』

「面白いもの？」

『見たいんならついてきな』

プチリュウに言われるがまま、俺とウィンは家から出てその面白いものとやらを見に行く。

やはり人間が珍しいのか、村人からの視線を何度も感じながら俺は村の中を歩く。そうして数分ほど歩いた先にあったものは1つの石像。

「この石像は……」

『スターダスト・ドラゴン。伝説の赤き竜の化身と言われるドラゴンの1体や』

赤き竜……そういえばそんな話を小さい時に聞いたような気がする。とはいえその話はお伽話でしかないわけだが。これはその赤き竜の化身と言われるドラゴンを象った石像らしい。この全てを包み込んでしまいそうなくらい大きな羽で飛んでいたのだろうか、そう考えると是非その姿を拝んでみたくなる。

『この石像はスターダスト・ドラゴンを祭る為に作られたもんや。田舎には不相应なもんやろ？』

この地にゆかりがあるにしろ、何も無い田舎に伝説のドラゴンの像があるのは確かに違和感がある。

『さ、観光はこの辺にしてそろそろ帰って飯や、飯』

「観光だったのか！？少ねえ！」

『言ったやろ。ほんまに何も無い田舎やて。さ、帰るで』

何もない、というのは本当だったらしい。いや、石像があるので何も無いわけではないか。とにかくした覚えのない観光を終えた俺達はプチリュウの家に戻るうとする。しかしウインだけはその場に立ち止まったまま動こうとしない。

「ウイン？」

心配になった俺はウインに呼び掛けてみる。が、反応はない。

「ウイン？ウイン」

『……はうつ！？ふえ…マスター、呼びました？』

この反応……寝てたか？

『ね、寝てませんよ！ただその…ちょっと頭がぼーっとして…目を閉じて休んでただけです！』

「それを寝ているって言うんだ！」

『ひゃうつ……！ごめんなさい』

怒られてしゅんとした様子のウイン。勉強熱心なウインがこんな時に立ったまま居眠りとは、よほど疲れたのだろうか。

「ほじ」

『えっ……』

ウインのほうに背中を向けてしゃがんでやる。

「おんぶしてやるから、寝な。疲れたんだろ？」

『あ、あの……』

「あ、実体化とか必要か？」

『精霊界にいるんでその必要はないんですけど……えっと……』

「遠慮はいらない。これから大変になるんだから今は甘えていいんだぜ？」

『じゃ……じゃあ……お願いします……』

少し顔を赤らめながらもウインは俺の背中に抱き着く。なんか照れ臭いが気にしないようにする。

『えへへ……マスターの背中、あったかいです』

「恥ずかしいからそういう台詞はなしだ」

『恥ずかしがり屋さんですね、マスター！』

その夜、食べ慣れない食材を使った料理を食べて寝ることになったわけだが。

「眠れない……」

生憎俺は枕が変わると眠れないタイプの人間で、隣ですやすやと眠るウインとは対照的に全く眠れないでいた。

「あれだけ寝てまだ眠れるのか……羨ましいよ、本当」

よく食べてよく眠る…実はかなり自由な子だと思え、本当に羨ましくなる。

その時、さっきまですやすやと眠っていたウインが突然起き上がり、そのまま黙って家の外に出て行ってしまふ。ウインのことだから黙って外に出ることはないだろうし、それに今は真夜中。精霊界といえど少女が1人で出歩くには危険過ぎる。俺はウインに気付かれないように後を追うことにし、こっそりと外に出ていった。

## 16・精霊界と星屑（後書き）

ウィンダ「今回はデュエルなしだから最強カードもなし!」

ウィン「せっかくだからウィンダのスリーサイズでも……………」

ウィンダ「わー!わー!」

ウィン「……………どうしたんだろう」

ウィン「次回のキーカードもスターダスト・ドラゴンですか?」

ウィンダ「うん、そうみたい」

ウィン「……………手抜きですね、多分」

17・飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！（前書き）

EXP4にタッグフォース6……9月は遊戯王だらけですね。

## 17・飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！

ウィンダSide

龍士とウィンと別れ、1人先にガスタの里へと向かう。ガスタの里は「リチュア」と「インヴェルズ」の2つの勢力に狙われている状態が続いているので、一刻も早く戦線に復帰しないといけない。1人ではまた返り討ちかもしれないけど、龍士が里に着くまでなんとしてでも粘らなきゃ。

『スピード上げて、ガルド！』

ガルドに指示し、速度を上げる。みんな……無事でいて！

龍士Side

深夜、突然起き出したウインの後を追ってたどり着いた場所は、昼間プチリュウに案内されてやってきた《スターダスト・ドラゴン》の石像のある場所。こんなところに何の用があるのか。

石像の前に立ったウインは振り返る。まるで後から来ている俺を待ち構えるように。気付かれたのか、それなら遠慮なく問い詰めることができる、そう思い口を開きかけたが、俺よりも先にウインの口

が開かれることになる。

『来たか……白きカードを手にした若き者よ』

「っ！」

ウインの喉から発せられたウインの声、しかしその口調はウインのものとは掛け離れたものだった。

『警戒はするな。私は君の敵ではない』

「ならお前は誰だ」

余計なこととは言わない、ただ疑問だけを突き付ける。敵ではないなら何者か、何が目的か、それを知らなければならぬ。

『私の名はスターダスト・ドラゴン……と言ってもこれでは納得はしてもらえそうにないが』

「スターダスト……！」

驚くことに目の前でウインの口を借りて喋っているのは《スターダスト・ドラゴン》だと言うのだ。当然信じられないことだが……。

「目的は何だ？それに何故ウインの口を借りて話している？」

『私達赤き竜の化身はそのままでは会話をすることすらままならぬ。今はこの娘の身体を依り代とすることで君との会話を成立させているのだ。そしてその目的は、君の持つカードにある』

「俺の持つカード？まさかとは思うが、こいつのことか？」

そう言つて俺は美浦に貰つた真つ白いカードを、念のため付けてきたデッキホルダーから取り出して見せると、ウインの姿をした《スターダスト・ドラゴン》は頷く。

「そのカードは真に私の依り代となるもの。君の実力が認められ、私とそのカードに宿ればそのカードに絵柄が現れる。私はそのカードの存在を察知し、この場に君を招いた」

「つまりお前の目的は……」

俺が言いかけると、それを遮るように《スターダスト・ドラゴン》の前にカードの形をした石版が降ってくる。

「そつだ、君の実力をデュエルで示してもらつ」

精霊界では精霊はこの石版をカードとして使用するのだろうか。そうなら既に準備は整えられていて、逃げることはできないな。もつとも、逃げるつもりは毛頭ない。Dゲイザーをセットし、Dパッドに収納されたデュエルディスクを展開。オートシャッフル機能でよくカットされたデッキの上から5枚を抜き、手札にする。

「『デュエル！』」

赤き竜の化身を相手にした精霊界での初のデュエルの幕が、今切つて落とされた。

龍士Life8000  
スターダストLife8000

『先攻は私が貰う。構わないか?』

「いいぜ、先攻はやるよ」

本来なら『ドラグニティ』は先攻の方が有利なデッキ。しかし相手のデッキを探る為にあえて先攻を譲るのも悪くはないだろう。先攻である『スターダスト・ドラゴン』の前にカードの石版が降ってくる。ドローはこうして行われるらしい。

『悪いが…一気に行かせてもらおうか。手札のダンディライオンを墓地に送ることで、手札からクイック・シンクロンを特殊召喚する』

スターダストの場にガンマン風のロボットが姿を現す。

《クイック・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星5/風属性/機械族/攻 700/守1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

『さらに墓地に送られたダンディライオンの効果。綿毛トークン2体を特殊召喚する』

《クイック・シンクロン》の隣に2つの綿毛のモンスターが出現する。モンスター効果によって発生する、カードではないがモンスターカードとして扱われる存在、それがモンスタートークンだ。トークンもシンクロ素材として使用することができ、その汎用性は高い。《ダンディライオン》の効果で発生したトークンは綿毛トークン。風属性、植物族、レベル1と応用の効く優れたステータスを持っている。

### 《ダンディライオン》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

『レベル1の綿毛トークンに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング』

《クイック・シンクロン》の前方に数枚のカードが出現したかと思うと、その内の1枚を手に行っている銃で撃ち抜く。撃ち抜かれたカードは《ドリル・シンクロン》。

『集いし力が大地を貫く槍となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！砕け、ドリル・ウォリアー！』

《ドリル・シンクロン》の代わりとなった《クイック・シンクロン》と綿毛トークンがシンクロ素材となり、現れたのは右手にドリルを装着した戦士、その名は《ドリル・ウォリアー》。

《ドリル・ウォリアー》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 地属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守2000

「ドリル・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にこのカードの攻撃力を半分にし、このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。また、自分のメインフェイズ時に1度だけ、手札を1枚捨ててこのカードをゲームから除外する事ができる。次の自分のスタンバイフェイズ時、このカードの効果で除外したこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。その後、自分の墓地に存在するモンスター手札に加える。

「1ターン目から攻撃力2400のシンクロモンスター……しかも通常召喚の権利をまだ残しているのか」

「そうだ、これで終わりではない。私はチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚する」

《スターダスト・ドラゴン》をデフォルメ化したようなドラゴン。俺も使ったことのあるチューナーモンスターだ。

「デブリ・ドラゴンの効果発動。このカードの召喚成功時、自分の墓地の攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚す

る。ただし、この効果で召喚されたモンスターの効果は無効化される。私は先程クイツク・シンクロンの召喚コストで墓地に送られたダンディライオンを特殊召喚する』

スターダストの場にたんぽぽに似た姿のライオンが召喚される。ダンディライオンとダンディ、ライオンを掛けた名前で、なかなか面白い名前だ。

『レベル3のダンディライオンとレベル1の綿毛トークンに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング……集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ……シンクロ召喚！』

シンクロ特有の演出と共に飛び出した「星屑」がフィールドに舞い降りる。

『飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！』

星屑の煌めきを身に纏った白いドラゴン……それこそが《スターダスト・ドラゴン》の本来の姿だ。

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「これが……スターダスト・ドラゴン……」

2体の高攻撃力のシンクロモンスターを先攻1ターンで展開するタクティクスもだが、《スターダスト・ドラゴン》のあまりの美しさに驚きを隠せない。見る人が見れば一瞬で心が奪われるほどだろう。人間界で伝わる絵などでは、これは伝わらない。本物を目の前にして初めてわかる美しさだ。

『これが私…スターダスト・ドラゴンの姿だ』

「こんなモンスターを早々に相手できるなんて……ワクワクしてき  
たぜ！」

精霊界での初デュエルの相手にとって不足ないモンスター、そう思うと本当にワクワクしてきた。未知のモンスターを相手にするという不安は微塵もなかった。

『ふっ……ダンディライオンが墓地に送られたことで綿毛トークンを2体特殊召喚。そしてドリル・ウォリアーの効果発動。手札を1枚捨て、次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外する』

ドリルで地面に穴を掘ると《ドリル・ウォリアー》は地中へと潜りその姿を消す。一時的にゲームから除外された《ドリル・ウォリアー》を除去できるカードはそう多くはない。残念だが除去することは困難だろう。

『ターンエンドだ』

《スターダスト・ドラゴン》だけをフィールドに残し、ターンが終了される。伏せカードは無し、あまりカードを伏せないデッキだろうか。

スターダストLife 8000

手札3枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

綿毛トークン×2

魔法、罨

(なし)

「俺のターン！」

デッキからドロウしたカードを見ながら考える。《スターダスト・ドラゴン》……その効果はわからないが、どんなに強力なモンスターでもこのカードなら怖くはない。

「ドラグニティ・アキュリスを召喚！召喚時効果により、手札のドラグニティ・レギオンを特殊召喚し、このカードを装備する！」

『アキュリス……なるほど、私を効果で破壊するつもりか』

「わかってるなら……レギオンの効果発動！魔法・罨ゾーンに存在するドラグニティを墓地に送り、相手フィールド上の表側表示のモンスター1体を破壊する！俺が破壊するのは……スターダスト・ドラゴン！」

レギオンがアキュリスを捕まえ、《スターダスト・ドラゴン》目掛けて勢いよく投げ付ける。よく考えるとこれ、アキュリスが可哀相に見えるな……。何はともあれこれで《スターダスト・ドラゴン》を破壊できる、俺はそう思ったが、スターダストが余裕の笑みを浮かべたのを見るとそうは思えなくなつた。

「その判断は正しい……だが私はそれを上回る！スターダスト・ドラゴンの効果を発動！フィールド上のカードを破壊する効果を、このカードをリリースすることで無効にし、破壊する！ヴィクティム・サンクチュアリ！」

スターダストが光の粒子になると同時に、破壊効果を発動したレギオンはその力を奪われ、破壊されてしまう。破壊効果を無効にする効果だつたとは……。しかしリリースされたことで結果的に墓地へは送られた。それにまだアキュリス自身の効果がある。

「装備カード状態で墓地に送られたアキュリスの効果により、綿毛トークン1体を破壊する！」

存在するだけで壁となる綿毛トークンは残しておくとは厄介だ。1体でも少なくはしておきたいので嬉しいところだ。

とはいえ俺のフィールドにはモンスターは残されていない。このままでは大ダメージを受けてしまうので、伏せカードで対処しなくてはいけない。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

2枚のカードの内1枚は《聖なるバリア・ミラーフォース》だ。攻撃してくればこのカードで破壊できる。

『このターンのエンドフェイズ、自身の効果によってリリースされたスターダスト・ドラゴンは再びフィールドに舞い戻る』

「何っ!？」

リリースされ光の粒子となったはずの《スターダスト・ドラゴン》が再びフィールドに現れ、咆哮する。効果破壊を無効にエンドフェイズに復活する……《スターダスト・ドラゴン》には実質的な効果破壊耐性があると言っていていいだろう。非常に厄介なモンスターだ。こいつが存在する限りあらゆる除去カードが無効なのだから。

「くっ……ターンエンドだ」

効果を知らなかったとはいえ今の戦術は安易過ぎたか、俺は少し後悔しつつターンエンド宣言をする。

龍士Life8000

手札2枚

モンスター

(なし)

魔法、罨

伏せカード×2

俺は自分のフィールドを見て舌打ちをする。

2枚の伏せカードがあるとはいえ壁となるモンスターはいない。しかもその伏せカードのうち1枚《聖なるバリア・ミラーフォース》は《スターダスト・ドラゴン》の前では無力。次のターンのスタンバイフェイズに自身の効果で除外されていた《ドリル・ウォリア

ー』が帰還し、《スターダスト・ドラゴン》と共にダイレクトアタックをしてくと俺のライフポイントは削られてしまう。《スターダスト・ドラゴン》の攻撃は《聖なるバリア・ミラーフォース》を無効にさせ、場から離すことで回避できるため問題にはならない。だが《ドリル・ウォリアー》の攻撃を止める手段はないため最低でも2400は削られるだろう。

『私のターン！』

あれこれ考えているうちにスターダストのターンに移行され、上空から石版が降ってくることで手札が補充される。

『スタンバイフェイズに、前のターン自身の効果で除外されたドリル・ウォリアーは特殊召喚される！』

地面に穴が空き、その中から先程ゲームから除外された《ドリル・ウォリアー》が特殊召喚される。それと同時にその穴から石版が飛び出し、スターダストの手札に加わる。

『この効果でドリル・ウォリアーが特殊召喚された時、墓地からモンスターカード1枚を手札に加える。私はクイック・シンクロンを手札に加える』

効果の発動コストを補う回収効果まであるのか。《スターダスト・ドラゴン》も強力だが《ドリル・ウォリアー》はそれ以上に厄介な存在かもしれない。

《ドリル・ウォリアー》で回収されたのは《クイック・シンクロン》だ。特殊召喚にコストが必要とはいえ高レベルのチューナーなので場に残された綿毛トークンだけでシンクロ召喚ができる。大ダメージは確実だ。

『ふむ……私は墓地のヴォルカニック・バレットの効果を発動。ライフポイントを500払うことで、同名カードをデッキから手札に加えることができる』

「ヴォルカニック・バレット……？そうか、ドリル・ウォリアーの効果の時に墓地に！」

『その通りだ』

《ヴォルカニック・バレット》

効果モンスター

星1 / 炎属性 / 炎族 / 攻 1000 / 守 0

このカードが墓地に存在する場合、自分のメインフェイズ時に500ライフポイントを払う事で、自分のデッキから「ヴォルカニック・バレット」1体を手札に加える。この効果は1ターンに1度しか使えない。

スターダストLife 8000 7500

再び上空から石版が出現し、手札が増える。ただ手札が増えただけでなく《クイック・シンクロン》の召喚コストや《ドリル・ウォリアー》の効果の発動コストがたった500のライフコストで補われたことになる。

『そして先程手札に加えたヴォルカニック・バレットを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚。レベル1の綿毛トークンに、レ

ベル5のクイック・シンクロンをチューニング」

《ドリル・ウォリアー》のシンクロ召喚の時と同じように数枚のカードが出現し、《クイック・シンクロン》がその内の1枚を銃で撃ち抜く。撃ち抜かれたのは《ターボ・シンクロン》だ。

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！シンクロ召喚！轟け、ターボ・ウォリアー！」

手に鋭い刃を装着した赤い身体ターボ・ウォリアーの戦士が颯爽と現れる。

《ターボ・ウォリアー》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守1500

「ターボ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがレベル6以上のシンクロモンスターに攻撃する場合、攻撃対象モンスターの攻撃力を半分にする。このカードはレベル6以下の効果モンスターの効果の対象にならない。

スターダストのフィールドに並ぶ3体のシンクロモンスター。しかもそれだけ召喚しておきながら手札は4枚残されており、通常召喚は行われていない。デッキの構築力、それを上手く回すためのタクティクスは俺なんかよりも遥かに上、赤き竜の化身を名乗るだけありその実力は本物だ。

「これで終わりではない……さらに私はジャンク・シンクロンを召喚」

以前ウインダがデュエルで使用したチューナーが召喚される。

《ジャンク・シンクロン》は召喚時、自分の墓地からレベル2以下のモンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚する効果がある。この効果で墓地の《ヴォルカニック・バレット》が特殊召喚されれば再びスターダストのフィールドにチューナーとそれ以外のモンスターが揃う。既に3体のシンクロモンスターを並べておきながら、まだシンクロ召喚をするつもりらしい。

「ジャンク・シンクロンの効果により、墓地からヴォルカニック・バレットを守備表示で特殊召喚。いくぞ……レベル1のヴォルカニック・バレットにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング、シンクロ召喚！アームズ・エイド！」

スターダストの場に現れたのは腕のような姿をしたモンスター。その効果も装備カードとなる効果だが、単体でもそれなりに高い攻撃力を持っているので今回は単純に総ダメージを増やす為に召喚されたのだろう。それにしても、このモンスターは珍しく前口上がないようだ。今回のデュエルで既に3回も前口上を聞かされているので、なんか不憫に思えてくる。

### 《アームズ・エイド》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1800 / 守1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊し

たモンスターは攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

このモンスター達の攻撃を全て受ければ2400 + 2500 + 2500 + 1800の計9200ダメージを受ける。《聖なるバリア・ミラーフォース》で《スターダスト・ドラゴン》の攻撃を防いだとしても6700のダメージと馬鹿にならない。本当ならこんな早い段階で使いたくはなかったが、もう一枚のカードを使わざるを得ないらしい。

「バトルだ！スターダスト・ドラゴンでダイレクトアタック！シューティングソニック！」

「畏発動！和睦の使者！このターン、全ての戦闘ダメージを0にする！」

俺の前に数人の女性が現れ、魔法で発生させたバリアで《スターダスト・ドラゴン》の攻撃を防ぐ。その後もそのバリアは残り続け、スターダストがバトルフェイズの終了を宣言したと同時に消滅した。

「4体のシンクロモンスターの攻撃からライフポイントを守ったか……」

「そう簡単にやられちゃ堪んねえからな。防がせてもらったぜ」

確かにライフポイントは守ることができたが、スターダストの場には4体のシンクロモンスター、並大抵のカードではこれらを越えるのは不可能だろう。越えらるとするならば、まずは《スターダスト・ドラゴン》から対処しなければならぬ。その為にも次のターン、攻撃力2600以上のモンスターを召喚したいところだ。

『ならば2枚目のヴォルカニック・バレットの効果により再び同名カードを手札に加え、ドリル・ウォリアーの効果の発動コストで捨てる。ドリル・ウォリアーは再び地中へと身を隠す』

スターダストLife7500 7000

ドリル・ウォリアーが再び除外されるが、これで3枚目の《ヴォルカニック・バレット》が使用された。デッキに戻らない限りは再び効果を使用されることはない。

『カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。さあ、ここから逆転してみたまえ』

スターダストLife7000

手札2枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

《ターボ・ウォリアー》

《アームズ・エイド》

魔法、罫

伏せカード×1

逆転してみたまえ……その言葉は俺を試そうという思考の表れにも思える。一見逆転が困難な場に見えるが、スターダストは俺が逆転してくると思っっているのだろうか。

「俺の…ターン！」

「ドローしたカードは…：《未来融合・フューチャー・フュージョン》  
《！このカードを使えば…：！

「俺は永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！  
選択するモンスターは…：F・G・D！融合素材となる5体のドラゴ  
ン族モンスターをデッキから墓地に送る！」

デッキから《ドラグニティ・フアランクス》《ドラグニティ・ブラ  
ンディストック》《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》《レッ  
ドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》《ドラグニティ・アキュリ  
ス》の5枚のドラゴン族モンスターを墓地に送る。2ターン後のス  
タンバイフェイズに《F・G・D》が特殊召喚されるがそれが目的  
ではない。重要なのは墓地に送られたモンスターのほうだ。

「さらに俺はドラグニティ・ドウクスを召喚！」

《ドラグニティ・フアランクス》が墓地になれば本領が発揮でき  
ない為困っていたが《未来融合・フューチャー・フュージョン》の  
おかげで解決された。

「ドラグニティ・ドウクスのモンスター効果発動！召喚成功時、自  
分の墓地からレベル3以下のドラゴン族のドラグニティを装備でき  
る！俺はフューチャー・フュージョンの効果で墓地に送ったドラグ  
ニティ・フアランクスを装備させ、さらにフアランクス自身の効果  
により、特殊召喚！」

これで俺の場でもシンクロ召喚の準備が整った。

「レベル4のドウクスに、レベル2のフアランクスをチューニング！魔を打ち破る赤槍、騎士と共に戦地を翔ける風となれ！シンクロ召喚！いでよ、ドラグニティナイト-ガジャルグ！」

疾風と共に飛来したのは背中にレギオンを乗せた赤いドラゴン。ゲイボルグやヴァジュランダと同じ、俺の頼もしい仲間だ。

《ドラグニティナイト-ガジャルグ》

シンクロ・効果モンスター

星6 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守 800

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。自分のデッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を手札に加え、その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を捨てる。

「ガジャルグの効果発動！デッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を手札に加え、その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスター1体を捨てる。俺はデッキからBF-精鋭のゼピュロスを手札に加え、そのまま墓地に捨てる！」

ガジャルグの効果処理の順番の関係で、単なるサーチだけでなく専用の墓地肥やしとしても活躍できる。非常に頼もしいカードだ。

「さらに手札から魔法カード、死者蘇生を発動！俺の墓地から…レツドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

汎用性の高い蘇生カードで特殊召喚したモンスターは黒い鋼鉄の身体をしたドラゴン……《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》。ウインと出会った時に《氷結界の龍トリシューラ》と共に手に入れたカードだが、初めて召喚した相手が外見だけとはいえウインとは何かの皮肉か。

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》  
効果モンスター

星10 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2400

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果発動だ！手札または墓地のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する！来てくれ、ドラグニティアームズ・レヴァティン！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の咆哮を聞き、巨大な羽を羽ばたかせながら《ドラグニティアームズ・レヴァティン》が現れる。手にした大剣を構え、その闘志をスターダストに見せ付ける。

「レヴァティンが召喚、特殊召喚された時、墓地のドラゴン族モンスター1体を装備できる。俺はファランクスを装備させ、ファランクスを自身の効果で特殊召喚する！」

1ターン中2度目の特殊召喚となるファランクス。

「そしてフューチャー・フュージョンを手札に戻し、墓地のBF・精鋭のゼピュロスを特殊召喚する！ただしその代償として特殊召喚後、400ポイントのダメージを受ける」

龍士Life 8000 7600

「レベル4のゼピュロスにレベル2のファランクスをチューニング！疾風纏いし魔槍の竜よ、邪を貫き天を舞え！シンクロ召喚！薙ぎ払え、ドラグニティナイト・ゲイボルグ！」

ガジャルグの隣にドウクスを乗せた白いドラゴンが現れる。

2体のドラグニティナイト、攻撃力2800の《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》、そしてレヴァティン……こいつらを並べることが今の俺の限界だ！

「ほう……ドラグニティナイト…そしてレヴァティンすらも従えているとは」

感心したようにスターダストは言う。やはりレヴァティンは特別な存在らしく、カードを手に行っているだけでも珍しがられる。

「いくぜ……バトルだ！ダークネスメタルで、スターダスト・ドラゴンに攻撃！ダークネスメタルフレア！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の口から放たれた炎

が《スターダスト・ドラゴン》を飲み込む。

スターダストLife 7000 6700

「レヴァテインでターボ・ウォリアーを攻撃、ドラゴニックブレード！」

レヴァテインの振るった大剣が《ターボ・ウォリアー》を切り裂き、破壊する。

スターダストLife 6700 6600

「ガジャルグでアームズ・エイドを攻撃！トルネードスピア！」

ガジャルグは回転しながら《アームズ・エイド》を槍で突き、大きな穴を開けて破壊する。

スターダストLife 6600 6000

「ゲイボルグでダイレクトアタック！ストームランス！」

ゲイボルグが槍を構えてスターダストに向かっていく。少しでもダメージを増やすため俺はゲイボルグの効果発動を宣言する。

「ゲイボルグの攻撃力は墓地から鳥獣族モンスターを除外することでエンドフェイズまでその攻撃力分アップさせることができる！俺はドウクスをゲームから除外し、ゲイボルグの攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

ドラグニティナイト - ゲイボルグ  
攻撃力 2000 3500

『ぐっつ……！』

ゲイボルグの一撃を受け、スターダストは吹き飛ばされそうになるも何とか持ちこたえたようだ。背後には石像、ウインの身体に怪我させることがなくてよかったと俺は安心する。

スターダスト Life 6000 2500

このターンのうちになんかダメージを与えることができた。自分のライフポイントにも十分過ぎるくらいの余裕がある為一安心だ。

『……見事な攻撃だった。わずかにターンでここまで私を追い詰めるとは』

賞賛の言葉を戴いたが、声が聞き慣れたウインのものではないまい。有り難みを感じられないような気がする。

『だが…私もこれで終わりはしない。畏発動、奇跡の残照！この夕

ーン戦闘で破壊されたモンスター1体を墓地から特殊召喚する！私  
は…スターダスト・ドラゴンを特殊召喚！」

「なっ……」

せっかく戦闘で破壊した《スターダスト・ドラゴン》が復活してき  
た。だがこのままではガジャルグ以外のモンスターには勝てない。  
どうするつもりなのだろう。

### 《奇跡の残照》

通常罫

このターン戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られたモンスター  
1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚  
する。

「……俺はこれでターンエンド」

龍士Life7600

手札0枚

モンスター

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

《ドラグニティナイト・ガジャルグ》

《ドラグニティアームズ・レヴアティン》

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》

魔法、罫

伏せカード×1

『私のターン……ドリル・ウォリアーの効果で自身を特殊召喚。さらに墓地からダンディライオンを手札に加える。その後、ダンディライオンを捨て、ドリル・ウォリアーをゲームから除外。綿毛トークン2体を特殊召喚する』

2度目の帰還を果たした《ドリル・ウォリアー》だが綿毛トークンを残して再びゲームから除外される。恐らくスターダストの狙いはこの綿毛トークンにあるはずだが……。

『ここまで私を追い詰めた褒美だ、特別に私の力の片鱗を君に見せよう。私は救世竜 セイヴァー・ドラゴンを召喚!』

スターダストが召喚したのは小さなピンク色のドラゴン。攻撃力も守備力も0のこのモンスターにどんな力があると言うのか。

《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 0 / 守 0

このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

『レベル8のスターダスト・ドラゴンとレベル1の綿毛トークンにレベル1のセイヴァー・ドラゴンをチューニング!』

「スターダスト・ドラゴンをシンクロ素材に!?!」

恐らく《スターダスト・ドラゴン》は切り札のモンスターのはず…

…それを何の躊躇いもなくシンクロ素材にしてしまうほどのモンスターがいるのだろうか。

《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》が巨大化したと思うと《スターダスト・ドラゴン》と綿毛トークンを体内に取り込んでしまう。

『集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！  
シンクロ召喚！』

まばゆい光が降り注ぎ、そのモンスターは現れる。その輝きは《スターダスト・ドラゴン》よりも激しく、暖かい。その身体は《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》の面影を感じさせる。そのドラゴンは……。

『光来せよ、セイヴァー・スタードラゴン！』

《セイヴァー・スタードラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10/風属性/ドラゴン族/攻3800/守3000

「救世竜 セイヴァー・ドラゴン」+「スターダスト・ドラゴン」

+チューナー以外のモンスター1体

相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし、相手フィールド上のカードを全て破壊する。1ターンに1度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター1体の効果を無効化できる。また、無効化したモンスターに記された効果をこのカードの効果として1度だけ発動できる。エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

「攻撃力3800……！」

効果を使ってゼピュロスを除外したゲイボルグ以上の攻撃力を持ったモンスターが召喚されるとは予測できなかった。このままでは恐らく突破は困難だろう。

「セイヴァー・スタードラゴンの効果発動！相手フィールドの表側表示のモンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にし、その効果をこのカードの効果として1度だけ発動することができる！その対象は……レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！」

「そんな……相手モンスターの効果を利用だと！？」

「サブリメーション・ドレイン！」

《セイヴァー・スタードラゴン》の輝きが《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の能力を奪い取ってしまう。

「ダークネスメタルの効果をコピーしたセイヴァー・スタードラゴンの効果により、スターダスト・ドラゴンを墓地から特殊召喚！」

《セイヴァー・スタードラゴン》の生み出した光の中から《スターダスト・ドラゴン》が飛び出す。

「バトル……スターダスト・ドラゴンでゲイボルグに攻撃、シューティングソニック！」

「残念だが、ゲイボルグの効果は相手ターンでも発動できる！レギオンを除外し、攻撃力を1200ポイントアップさせる！」

ゲイボルグの槍に風が集まっていく。が、その様子を見てスターダストは笑みを浮かべた。

『ここでセイヴァー・スタードラゴンの効果を発動する！』

《セイヴァー・スタードラゴン》の輝きはより一層強まり、やがて何本もの光の矢となりフィールドに降り注ぎ、ゲイボルグ、ガジャルグ、レヴァティン、ダークネスメタル、伏せカードのミラーフォースを貫き破壊する。

『相手が魔法、畏、効果モンスターの効果を発動した時、自身をリリースすることでその発動を無効にし……相手フィールド上のカードを全て破壊する！』

「そんな……！」

たった1度の効果発動を無効にされただけで一瞬にしてモンスターも伏せカードも吹き飛んでしまった。これが《セイヴァー・スタードラゴン》の力なのか！

「スターダスト・ドラゴンの攻撃は終わったわけではない……そのままダイレクトアタックだ！」

《スターダスト・ドラゴン》のダイレクトアタックを防ぐカードは残されていない。2500のダメージをまともに受ける。

「くっ……油断した」

ライフポイントを大きく減らしたせいで油断していたようだ。不意な効果発動で逆に不利になってしまうことになるとは想像もなかった。

『……私はこれでターンエンドだ』

攻撃を終えたスターダストは何もカードを伏せず、そのままエンド宣言をする。

スターダストLife 2500

手札2枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法、罫

(なし)

スターダストの手札は2枚、フィールドには《スターダスト・ドラゴン》がいる。対する俺はモンスターも伏せカードも手札もない。ライフポイントでは有利だが実は何ひとつ勝っているとは言えない。この状況…果たして俺は勝てるのだろうか。

## 17・飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！（後書き）

ウィン「今回の最強カードは私自身、スターダスト・ドラゴンだ」

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ウィン「自身をリリースして効果破壊を無効にするレベル8のシンクロモンスターだ。自身の効果でリリースした場合エンドフェイズに墓地から特殊召喚されるため自身が戦闘で破壊されたりしない限りは何度でも無効にできる。派生モンスターも多く、人気のあるカードだ……ってこの演技疲れます！」

ウィンダ「（演技だったんだ……）」

スターダスト「（私はこつちだからな……）」

## 18・星屑の煌めき（前書き）

前回のおさらい

ウィン「えつと……私の身体を使ってスターダスト・ドラゴンさんがマスターとデュエルを始めて……ってスターダストさん！私の身体で無茶しないで下さい！ああ、今スカートめくれた！マスターはマスターで何凝視してるんですか！えつ、白？私今黒じゃありませんでしたっけ……って何言わせるんでしゅか！」

ウィンダ「今舌嚙んだでしょ」

## 18・星屑の煌めき

龍士Life5100

手札0枚

モンスター

(なし)

魔法、罫

(なし)

スターダストLife2500

手札2枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法、罫

(なし)

龍士Side

シンクロモンスターを巧みに操り、ライフがたった2500でありながら着実に俺を追い詰めているスターダスト。伝説の赤き竜の化身を名乗るだけありやはりその実力はかなりのものだ。

……つと、感心してる場合じゃない。俺にはモンスターも、伏せカードも、手札も残されていない。ライフポイントは5100。《スターダスト・ドラゴン》の攻撃だけなら耐え切れるライフポイント

だが、まだ《ドリル・ウォリアー》とそれによって墓地から回収されるモンスターがいる。このドロウで逆転できなければ、俺の負けは確定する。

「俺の……ターン」

ドロウしたカードは《ドラグニティ・レギオン》。除去効果は《スターダスト・ドラゴン》の前では無力だが、俺の墓地には《ドラグニティアームズ・レヴァティン》がいる。レヴァティンは『ドラグニティ』を装備したモンスターをフィールド上から除外することで手札が墓地から特殊召喚することができる。攻撃力2600のレヴァティンなら《スターダスト・ドラゴン》を戦闘破壊でき、後から帰還する《ドリル・ウォリアー》にも負けない。

「俺はドラグニティ・レギオンを召喚！」

『ほっ……』

「召喚成功時、自分の墓地からレベル3以下のドラゴン族ドラグニティを装備することができる！俺はこの効果で……」

対象を宣言しようとしたその時、スターダストの手札の石版から青い髪の女の子が出現し、レギオンに光を浴びせる。何事もないかと思いきや、その後レギオンが何度ドラゴンを呼び寄せようとしてもドラゴンが出現しない。

「これは一体……」

『君のレギオンの効果にチェインする形で、手札のエフェクト・ヴェーラーの効果を発動させてもらった。エフェクト・ヴェーラーは

対象に選択したモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする』

《エフェクト・ヴェーラー》は相手ターン中に手札から効果を発動する珍しいモンスター。たとえ伏せカードがなくともこれらのカードがあれば相手の行動を妨害することができる。相手からは見えないう手札からの発動だけに、不意打ちの一手になりやすく極めて強力だ。

《エフェクト・ヴェーラー》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

効果を無効にされ、フアランクスやアキュリスを装備できなくなつたレギオンはただの攻撃力1200のモンスター。そしてそれを補うための手札も今はない。

「……ターンエンド」

何もできずただターンエンドの宣言をするしかなかった。

龍士Life5100

手札0枚

モンスター

《ドラグニティ・レギオン》

魔法、罾

(なし)

次のターン《スターダスト・ドラゴン》と《ドリル・ウォリアー》に加え、他のモンスターの攻撃を受ければ勝ち目はない。仮に耐え抜いたとしても3体のモンスターを相手にたった1枚の手札で立ち向かえるとは思えない。

『私のターン……スタンバイフェイズに、ドリル・ウォリアーが特殊召喚され、墓地からエフェクト・ヴェーラーを手札に加える』

手札に戻る《エフェクト・ヴェーラー》……。これで仮に《ドラグニティ・ドウクス》をドローしたとしても逆転ができなくなった。しかし何故や《ジャンク・シンクロン》<sup>デブリ・トラクション</sup>を手札に戻さなかったのか。それらのカードでシンクロモンスターを召喚し、攻撃すれば勝つことができただろうに。エクストラデッキにレベル4のシンクロモンスターやレベル7ドラゴン族シンクロモンスターがないのか？

『……………バトルだ。ドリル・ウォリアーでレギオンを攻撃する。ドリル・ランサー！』

《ドリル・ウォリアー》は自身の腕に装着されているドリルを回転させ、レギオンを貫く。端から見ればかなり痛そうな攻撃だ。

『スターダスト・ドラゴンでダイレクトアタック！シューティング・ソニック！』

「うおっ！」

《スターダスト・ドラゴン》のダイレクトアタックの衝撃で吹き飛ばされそうになるも何とか踏ん張る。残りライフポイントは1400。何とか持ちこたえたがもはや風前の灯だ。

『手札を1枚捨てることでドリル・ウォリアーを再び除外し、ターンエンドだ』

スターダストLife 2500

手札3枚（エフェクト・ヴェーラー含む）

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法、罫

（なし）

「俺の……ターン」

カードをドローしようとしてデッキの1番上に指を置くが、手はぶるぶると震えている。《スターダスト・ドラゴン》の力に圧倒されているから？負けるのを恐れているから？恐らくどちらもだろう。だがそれを乗り越えなければ、得られないものがある。それが……

「……………ドロー！」

……それが勝利だ！

「俺は…星屑のきらめきを発動！」

『それは……！』

「星屑のきらめきは、自分の墓地のドラゴン族シンクロモンスター1体と同じレベルになるように墓地からモンスターを除外することで、そのドラゴン族シンクロモンスターを特殊召喚する！俺が選択するのは……ドラグニティナイト・ゲイボルグ！」

墓地からレベル6の《ドラグニティナイト・ガジャルグ》を取り出し、腰のデッキケースに仕舞うことでゲームから除外する。それが認識されると、今度は墓地から《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》が抜き出される。特殊召喚が成功した証だ。

《星屑のきらめき》

通常魔法

自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターのレベルと同じレベルになるように選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

光の粒子の中からゲイボルグが現れ、咆哮する。

『くっ……まさかシンクロモンスターを直接特殊召喚されるとは……だが！私の手札にエフェクト・ヴェーラーがあることを忘れたわ

けではあるまい！エフェクト・ヴェーラーの効果発動！ゲイボルグの効果をエンドフェイズまで無効にする！」

ゲイボルグの効果が無効化され、《スターダスト・ドラゴン》を越えることができなくなった。だがそれはあくまで「エンドフェイズまで」だ。スターダストのターンではゲイボルグの効果は有効となり、また《エフェクト・ヴェーラー》の効果が発動できるのは俺のメインフェイズのみ。《スターダスト・ドラゴン》や《ドリル・ウオリアー》だけではゲイボルグを越えることはできない。

「ターンエンドだ！」

龍士Life1400

手札0枚

モンスター

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

魔法、罫

(なし)

「私のターン！スタンバイフェイズにドリル・ウオリアーは特殊召喚され、エフェクト・ヴェーラーをその効果により手札に！」

今のスターダストにとっては《エフェクト・ヴェーラー》が命綱だ。あれがなければゲイボルグの効果が発動し、《スターダスト・ドラゴン》が戦闘破壊されることになる。

「……土壇場でのドロウは再び驚かされることになった。確かにこの2体ではゲイボルグを倒すことはできず、手札にも直接破壊する

ようなカードはない。だが……それなら君自身を直接狙えばいい。  
ドリル・ウォリアーは自身の攻撃力を半分にすることで、ダイレク  
トアタックを可能にすることができる!」

「ダイレクトアタックを可能にする効果!？」

ドリル・ウォリアー

攻撃力2400 1200

『ゆくぞ!ドリル・ウォリアーでダイレクトアタック!ドリル・シ  
ュート!』

《ドリル・ウォリアー》は地中に潜り、ゲイボルグを無視して俺に  
ダイレクトアタックを決めてくる。攻撃力は1200になっている  
のでなんとか生き残ったが、次のターンもダイレクトアタックをさ  
れるのだからピンチには変わらない。

龍士Life1400 200

『手札を1枚捨てドリル・ウォリアーを除外。ターンエンドだ』

スターダストLife2500

手札3枚(エフェクト・ヴェーラー含む)

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法、罨

(なし)

先程と変わらない行動。だが《ドリル・ウォリアー》は除外されている限りは破壊できない。仮に効果で破壊できるとしても、自身をリリースすることでそれを無効にし、エンドフェイズに復活する《スターダスト・ドラゴン》、戦闘で破壊できるとしてもゲイボルグの効果は無効にしてくる《エフェクト・ヴェーラー》ドリル・ウォリアーがいる以上を破壊するのは不可能だ。次のターンを乗り切るには、破壊以外の方法で《ドリル・ウォリアー》の攻撃を無効にする手段を用意しなくてはならない。そのカードはデッキには投入されてはいるが、たった1枚しか投入されていない。《星屑のきらめき》をドロウしたことで自体が奇跡だというのに、さらにそのカードを次のドロウで引くことができるのだろうか。

「……ドロウ！」

引いたカードを見ると、迷わずそれを魔法、罨カードゾーンにセットする。

「カードを1枚伏せる」

『メインフェイズ終了時、エフェクト・ヴェーラーの効果でゲイボルグの効果を再び無効だ』

「ターンエンドだ」

すべての希望は今伏せたカード1枚に込められた。これを破壊されたのならおしまいだ。

龍士Life 200

手札0枚

モンスター

《ドラグニティナイト・ゲイボルク》

魔法、罫

伏せカード×1

『私のターン……ドリル・ウォリアーが特殊召喚され、墓地からエフェクト・ヴェーラーを手札に加える。そしてドリル・ウォリアーの効果発動。攻撃力を半分にし、ダイレクトアタックを可能にする』

ドリル・ウォリアー

攻撃力2400 1200

1度フィールドを離れたことにより、元に戻った攻撃力を再び半分にする。しかしダイレクトアタックをして俺のライフポイントを削り切るには十分な数値だ。

『バトル！ドリル・ウォリアーでダイレクトアタック！これで終わりだ！』

再び地中から《ドリル・ウォリアー》がダイレクトアタックを仕掛けてくる。この攻撃が通れば終わり……だがその攻撃をヘルメットを被せられたかかしが受け止める。

「くず鉄のかかし。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、その後再びセットされる。これでドリル・ウォリアーの攻撃は無効だ！」

『……………！こつも危機を脱するドローが続くとは……………！これはもはや偶然と呼ぶには相応しくはない……………そうか、やはりこの者が』

《ドリル・ウォリアー》のダイレクトアタックは止められ、このタインのバトルフェイズに行くことは何もなくなったのか、スターダストは《ドリル・ウォリアー》を除外させ、タインエンド宣言をする。

スターダストLife 2500

手札3枚（エフェクト・ヴェーラー含む）

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法、罫

（なし）

「俺のタイン…ドロー！俺はドラグニティ・ドゥクスを召喚！」

『くつ……………エフェクト・ヴェーラーでドゥクスの効果を無効だ』

そう、そうせざるを得ないのだ。ドゥクスからフアランクスを装備、特殊召喚されレベル6のシンクロモンスターを出されては防ぎきれない。どのみち変わりはないが、こうしなければ状況は悪化するのだ。

「いくぜ……………バトルだ！ゲイボルグで、スターダスト・ドラゴンを

攻撃！ストームランス！」

先程まではずっと《エフェクト・ヴェーラー》に無効にされ続けていた効果も今なら使える。

「ゲイボルグの効果発動！BF・精鋭のゼピュロスをゲームから除外することで、攻撃力を1600ポイントアップさせる！」

ドラグニティナイト・ゲイボルグ

攻撃力2000 3600

ゲイボルグが自らの力を高め突き出した槍が《スターダスト・ドラゴン》を突き破り、破壊する。その余波がスターダストに襲い掛かり、ダメージを与える。

スターダストLife2500 1400

「ドウクスで…ダイレクトアタックだ！」

ドウクスの攻撃力は1500。残りライフポイントが1400のスターダストに引導を渡すには十分な攻撃力だった。

スターダストLife1400 -100

『……見事なデュエルだったぞ……』

デュエルが終了すると同時に、スターダストの前に出現していた石版は消滅し、ゲイボルグもそれと同時に消滅する。

『私のデュエルタクティクスを超越するその実力……白きカードを持つに相応しい』

スターダストがそう言った途端、デッキケースの中からひとりで白いカードが飛び出し、俺の前を浮遊し始めた。スターダストが念じるとその白いカードに絵柄とテキストが浮かび上がり、1枚のシンクロモンスターとなった。そのカードに刻まれた名前は《スターダスト・ドラゴン》。

『そのカードは私の依り代……それを持つ君は私を従えることを許された。そのカード……スターダスト・ドラゴンは君の物だ』

「これを…俺が？」

信じられなかった。本来俺のような庶民は到底手にすることができない伝説の赤き竜の化身のカードを、俺が手にすることになるのだ。もちろん嬉しさもあったが、それ以上に驚いていた。

『さて……この少女の身体をいつまでも借りるわけにはいかない。私はそのカードに宿らせてもらう。……だがその前に君に教えておかねばならないことがある』

「それは？」

『……この少女の記憶の事だ』

「ウインの記憶!？」

ウインの記憶の事、その言葉を聞き思わず身を乗り出す俺。そんな俺を見ても表情一つ変えず、スターダストは淡々と語る。

『この少女の身体を借りる際、龍士、君の事を知るため失礼だが記憶を覗かせてもらった。だがその中で私も見る事ができなかった記憶がある。まるで何かに封印されたような感じだった』

「封印……もしかしてそれはウインではない誰かのか!？」

『それはわからない。だがこれがもし意図的に封印されているものだとなれば、この少女は本人も知らないうちに何かとてつもないものを背負ってしまったっているかもしれない』

その言葉を最後に、ウインの身体は倒れ、その際現れた光が《スターダスト・ドラゴン》のカードに宿る。恐らくこの光が《スターダスト・ドラゴン》自身なのだろう。それよりも……。

「ウイン!」

スターダストが離れ、倒れたウインを抱き抱える。心配したが、ウインの気持ち良さそうな寝息を聞いて安心した。どうやらスターダストが身体を借りている間も、ウイン本人は眠ったままだったらしい。

それにしても……ウインの記憶はもしかしたら俺の想像を超えるくらいとんでもないものかもしれないのか。だとしたら、それは知らなくてはならないのだろうか。

『…………マスター…………』

「っ！？……………って寝言か……………」

赤ん坊のように俺の服をぎゅっと掴んで眠るウインの寝顔を見ているうちに俺は改めて決意した。たとえウインの背負うものがどんなものであったとしても、俺が守ってやる。柄にもない事かもしれないが、俺ができるのはそんなことくらいしかない。

ウインの頭を優しく撫でてやり、起こさないよう抱き抱えてプチリユウの家に帰る。

## 18・星屑の煌めき（後書き）

ウィン「今回の最強カードは星屑のきらめき………今日は演技しませんよ？」

《星屑のきらめき》

通常魔法

自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体を選択して発動する。そのモンスターのレベルと同じレベルになるように選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

ウィン「自分の墓地からレベルを合わせてモンスターを除外することでドラゴン族シンクロモンスターを蘇生するカードですね。ドラゴン族シンクロモンスターが主力となるドラゲニティではもちろんスクラップ・ドラゴンを主力とするスクラップでも活躍できます。ただしいずれにせよ墓地アドバンテージを失うのは痛いのでよく考えて発動しましょう。」

ちなみにこのカードはスーパーレア。同じパックで収録された禁じられた聖槍とは魔法、スーパーレアという点で共通しているので、後ろから2番目が魔法でもこのカードの可能性があるので注意です！」

ウィンダ「ところでウィンの寝顔を隠し撮りしたんだけど」

ウィン「ふええっ!?!?いつの間に?」

次回のキーカード

「霞の谷のファルコン」

ウィン「霞の谷にたどり着いたマスターと私……あとついでにプチリユウはファルコンさんと出会います。そこで明かされる私の過去とは……?」

ウィンダ「前回このコーナー忘れてたよね」

ウィン「ふえ……?何の事ですか?」

## 19・霞の谷

ウィンSide

気持ちの良い朝です。精霊界も人間界も、朝は清々しい気分になるはず……なんですが身体が妙に怠いです。夜更かしもしてませんし……何ででしょう。

『……そういえば昨日はマスターと同じ布団で……』

プチリュウの家ということもあり、身の危険を察した私はマスターの布団に潜り込むという手段で身を守っていました。……それはそれで危険……ですか？何故だかマスターと同じ布団で寝ることに抵抗はありませんから。

『……いい加減起きないと』

少しだけ布団に残ったマスターの温もりは名残惜しいですが、いつまでも布団の中にいるわけにはいきません。それにお腹も空きましたし……。

『なんやて！？スターダスト・ドラゴンのカードを手に入れた！？』

1枚のカードを見て驚愕しているのはプチリュウ。無理もありません

ん。何故か一晩のうちに赤き竜の化身のカードを手に入れていたのですから。  
スターダスト・ドラゴン

「ああ。ちょっと訳ありだな。それよりも聞きたいことがあるんだ」

『お、おう……なんや。ワイにわかることなら何でも答えるで』

わざわざプチリュウに尋ねなければならぬことって……マスターは一体何を尋ねるつもりなのでしょう。

「質問は2つ。まずは……お前はウインの過去について何か知っているか？」

私の……過去？

『……それを知ってどうするつもりや』

「ウインの記憶にはウイン自身が絶対に思い出せない……言うならば封印されている記憶がある、と聞いた。その理由がウインの過去にあるんじゃないかと思ってな」

記憶……？封印……？私のことなのに私がよくわかりません。心当たりがあるとすれば……あの記憶のことでしょうか。

『……確かに長年ウインの使い魔をやっとるけど、さすがにそこまではわからんわ』

「そうか……」

『ただ……ウインの育ての親ならわかるかもしれへんで。なんせウ

インがまだ赤ん坊だった頃から知つとるわけやからな』

私の育ての親……それに当て嵌まる人物は当然1人しかいません。

『そいつは霞の谷に住む、ファルコンという男や』

龍士Side

ファルコン……俺のデッキでも活躍していて、馴染みのあるモンスターだ。以前ウインダから、ウインは生まれはガスタの里だが育ちは霞の谷だと聞いたが、誰が育てたかまでは聞いていなかった。まさかそれがファルコンだとは考えもしなかったな。

そういうわけで俺とウインは霞の谷に向かうことになったわけだが、ウインの表情が不満そうだ。理由はウインの側を飛んでいる小さなドラゴンを見ればだいたい察しがつくと思う。

『道案内はワイに任せろ。ここからファルコンの住んどる霞の谷中心部への道は複雑やからな』

「あ、ああ……助かる」

『マスター……プチリュウの道案内は』

『ようし、早速進んでいくでー!』

ウィンが何か言いかけていたようだったが、プチリュウに遮られるとそれ以上は何も言おうとしなかった。

『迷った!』

数分後、俺達は森の中ですっかり道に迷ってしまっていた。

『だからプチリュウの道案内は嫌だったのに……………』

さっきウィンが言おうとしたこと、それは「プチリュウは方向音痴だから道案内をさせては駄目」ということだったらしい。しかし迷ってしまった後ではもう遅い。

「……………で、俺達はここで野垂れ死にか?そんなわけないよな?お前が道案内は任せろって言ったんだもんな?」

『お、思い出した!思い出したで!確か霞の谷の中心部からは冷たい風が吹いてるんや!それを感じれば方向がわかるはず……………やから!逆さにするんはやめてえな!』

俺が尻尾を持つことで逆さ釣りになったプチリュウは、必死になって霞の谷への手掛かりを思い出す。冷たい風……………その風が吹いて来ている方向を知ることができればいいのか。

『風の方向……………なら私にお任せ下さい』

そう言つてウインが自分の髪の毛を一本抜いて風に靡かせる。風に吹かれた髪の毛は当然倒れ、倒れた方向に向かって風が吹いているのが分かる……わけだが。

『さすが風霊使いウインや！風のことなら何でもこいやな！』

『えへへ……』

褒めたたえるプチリュウに照れるウイン。そこに俺が容赦ない言葉を投げ掛ける。

「それ……髪の毛や紐さえあれば誰にでもできるよな」

あ……というような表情をした後、涙目になるウイン。やっぱり地雷だったか。

「……………俺が悪かった」

とりあえず謝つて、そのうちフルーツパフェでも奢る約束をしてどうにか機嫌を直すことはできたが……分かっていながらウインにとつての地雷を踏むのは絶対に止めようと思つた。

何はともあれ目的地の方向が分かり、森からも抜け出すことができた俺達は一安心……と思いきや、またしても壁が立ちはだかる。

「……………崖だな」

『崖……ですね』

俺達の前にそびえ立つ高い崖。この上から風の流れを感じるの  
目的地はこの崖の上であることは確かだが……。

「プチリュウ、お前はこの崖の存在は知っていたはずだよな。何せ  
道案内を……」

『すまんすまん。霞の谷の連中は皆羽のあるような奴らやからな。  
いちいち整備しないでいいから登りやすくせんのだ』

「んなこた分かってる。ただお前が事前にそのことを知らせておけ  
ばそれなりの装備ができたはずだよ」

何の装備もなくこの崖を登るのは危険だ。だがその為の装備を俺達  
は持っていない。装備の有無に関わらず、崖の存在を知っていれば  
それなりの対策を練ることはできただろうに。

心配する俺とは対照的に、プチリュウのほうは余裕そうだ。自分は  
楽々上に行けるからか？

『心配いらへん。龍士はんにはカードがあるやろ？』

「カード？」

確かにデッキは持っているが、それが何に……なるほど、そういう  
ことか。

「モンスターを召喚して、上に連れていってもらおうのか！」

精霊界でデュエルディスクを利用してモンスターを召喚した場合、  
そのモンスターは実体化する。それは戦闘だけでなく移動手段とし

でも使えることは考えもしなかった。ん……ということとは？

「このままモンスターに連れていってもらったほうが……いや、そもそも最初からそうしていれば………」

この瞬間までそのことを忘れていたことを後悔した。

まあ今からでも連れていってもらえれば楽だ。というわけでモンスターを召喚するためDパッドのデュエルディスクを展開し、カードを取り出す。

「スターダスト・ドラゴン、召喚！」

昨晚仲間になったばかりで申し訳ないが、早速召喚させてもらうことにする。……移動手段として。

『ふむ………初陣かと思っただが』

少し不満そうにしているが、律儀に光の粒子を散らしながら俺達の前にスターダストが現れる。カードに宿るまでは実体を持っていなかったが、カードに宿った後はきちんと実体化している。

「悪いな、スターダスト」

『気にするな。何であれ主の頼みだ。聞かぬわけにはいくまい。そんなことよりも、少しウインと話をさせてほしい』

主か……本人に言われると改めて俺がスターダストの主となったことが信じられなくなるな。とりあえずウインと話したいと言っなら、少し話をさせておこう。

『君がウインか。……なるほど、純粋な眼をしている』

『ふええ……あの、はじめまして。私、ウインっていいいます。あの、その、握手してください!』

相手はドラゴン、握手なんてできるのか?と心の中でツッコむ。

『マスター!私今ドキドキしてます!目の前に伝説の赤き竜の化身がいますから!』

その伝説の赤き竜の化身は昨日お前の身体を乗っ取っていた、といえはとうなるのだろうか。幻滅は……するだろうか。

『……ウイン。君に言わなければならないことがある』

興奮状態のウインを見つめ、静かに語りかけるスターダスト。

『どんなに辛いことがあっても、決して逃げてはならない。いいな?』

『……それ、どういうことですか?』

スターダストの意味ありげな発言に、ウインは首を傾げてそう尋ねる。スターダストはウインの記憶について何か感じ取ったはず……それに関わることなのか?

『今知らなくともいずれ分かる時が来る。さあ、話は終わりだ。私の背中に乗るのだ』

釈然としない表情のウインだったが、それ以上の追求はせず黙って

スターダストの背中に乗っていた。俺とプチリュウもスターダストの背中に乗り、目的地である霞の谷中心部へと一気に飛んで行った。

スターダストに乗って飛行すれば目的地までの距離もたいしたことなく、あっという間に着いてしまった。わざわざスターダストを召喚した意味がわからなくなりそうだったが、この際気にしないことにした。

霞の谷中心部の集落の中に入ろうとするが、短剣を装備した《霞の谷の戦士》に呼び止められる。

『待て、貴様らは何者だ！』

「別に怪しい者じゃない。この集落に住んでいるファルコンに会いたい」

『ファルコン様にだと？得体の知れない者をファルコン様に近づかせるわけには……』

「得体の知れない……なあ。ならこいつらで証明できたりは？」

なかなか通してくれそうにない雰囲気の《霞の谷の戦士》に、2枚のカードを見せ付ける。《スターダスト・ドラゴン》、そして《ドラグニティアームズ・レヴァテイン》、この2枚を所持していると分かれば、それだけで認められそうなものだが……。

『そのカード達は……！……いいだろう、入れ』

レヴァティンは俺にはよくわからないので何とも言えないが、スターダストのカードを見れば、俺がスターダストに選ばれた人物であることくらい察しがつく。《霞の谷の戦士》の反応まですべてが俺の予想通りだった。集落に入ることができたのなら、後はファルコンに会うだけだ。

『マスター、ファルコンさんの家はこっちですよ？』

ウィンが示した方向は俺が行こうとした方向とは真逆。よく考えればウインはこの集落で育ったんだな……。ここではウインを頼りにするのが1番だろう。

『着きました！ここがファルコンさん……そして私の家です！』

ファルコンとウインは同じ家で暮らしているようだ。独立していたとしても何もおかしくはなさそうだが、やはりそもいかないんだろうか。

人間界ではそう見られない藁の屋根のある木造住宅の扉をノックし、家の主の応対を待つ。やがて扉が開かれ、中から白髪の男性が姿を現す。背中の翼が霞の谷の住人であることを証明している。

『……何か用か？』

『ファルコンさん、ただいま！』

怪訝そうに俺を見るファルコンに気付き、ウィンが突然ファルコンに抱き着いていく。

『ウィン！！？』

『ファルコンさん、この人は私のマスター、龍士です！怪しい人じゃないんです！』

『わ、分かった！分かったから早く離れなさい！』

ファルコンはウインを離れさせ、咳ばらいを1つすると俺に対して握手を求めてきた。

『先程のご無礼、お許しいただきたい。オレはファルコン。この集落の長を務めている者であり、ウインの面倒を見ていた者です』

ファルコンは頭を下げる。精霊界に突然人間が尋ねてきたのだから警戒するのは当然のはずだが、ファルコンにとっては客人に対して無礼だったのだろうか。

『一先ず中へ。立ち話は疲れるでしょうから』

「ああ、そうだな」

ファルコンに案内され、俺は家の中に入る。

玄関から応接間まで建築されており、藁屋根の木造住宅としてはかなり広い造りに少し戸惑う。

『あまり居心地はよろしくありませんが、お座り下さい』

「ありがたい。少し道に迷っていたものだから、ゆっくり座って休みたいと思っていたところだった」

そう言いつつ少し遠慮しながら、藁でできたソファに腰掛ける。想像以上に坐り心地は良い。

『ウインは久々に自分の部屋でも見てきたらどうだ？一応掃除はしておいたが、念の為にな』

『はい、そうさせてもらいます。行こ、プチリュウ』

ウインはプチリュウを連れて応接間から出ていき、自分の部屋に向かっていく。それを見届けるとファルコンは話を始める。

『まずは、ウインが世話になった事に対してお礼申し上げます』

「は、はあ……ご丁寧にどうも」

どうやらファルコンはかなり礼儀正しい性格のようで、ウインが真面目で礼儀正しいのは恐らくファルコンの影響だと思われる。

『あの子は随分辛い想いをしてくれてね……。ほら、我々霞の谷の住人は翼がありますが、あの子には翼がなく、限りなく人間に近いでしょう。それだけにこの集落では浮いた存在で、いつも独りでした。ですから突然人間界に行くと言い出した時は心配になりました。もしかしたら人間界でも孤独なんじゃないかと』

確かに鳥人の部族と思われる霞の谷の住人の中ではウインは浮いた存在にはなるだろう。だがそれでもあのウインが、人懐っこくて真面目で、無邪気にはしゃいでいるウインがずっと独りだったとは信じられない。

『でも安心しました。あの子には良いマスターが見つかったようですから』

「良いマスター……か。そうでもないさ。現に俺はウインのことを全然知っていないんだからな。あいつがずっとひとりぼっちだっただなんて考えもしなかった」

『それでもあの子が選んだんですから、少なくともあの子にとって  
は良いマスターのはずです』

「そうだといいんだけどな」

ウインが俺の元にやって来たのは、今考えれば不思議なことだ。俺  
じやなきや駄目だったのか、ただの偶然なのか。どちらにせよ本当  
にウインにとって良いマスターであるために俺がウインにできるこ  
とは変わらないのだが。

『ところで……あなたはウインが人間界に来た理由はご存知でしょ  
うか』

「いや……そういえば知らないな」

思い当たるのは出会った時、マスターとなった人間に様々な恩恵を  
与える、と言ったことくらい。しかしそれはあくまで精霊としての  
役割であって、ウインの目的自体は何も聞いていない。

『まだ話していないだけか、それとも機会を伺っているのか……ど  
ちらにせよあなたはできるだけ早く知るべきです、ウインの目的、  
ウインの覚悟を……』

ファルコンによって話されたウインの目的、それは彼女にとって苦  
しいものだった。『リチュア』によって化け物にされた親友を救う  
ため、そしてそれに協力してもらえ人間を捜すため……どちらに

せよ変わり果てた親友を想つての行動であり、決して簡単なものではなかった。孤独だった自分の初めての親友を救いたい、そんな想いが強かったのがよく分かった。

『あの子は……自分の守りたいものは守り抜こうとする、優しくして勇気のある子なんですよ。それだけにウインを人間界に行かせるのは不安だった。誰にも気付かれず、ただ親友への想いが踏み込まれるだけかもしれないと考えると、どうしても……』

「……………」

『お願いです。どうかウインの力になってやって下さい……！』

そう言うと俺に向かって土下座までして頼み込むファルコン。やはりウインのことを誰よりも考えている。だが……少し大袈裟だ。

「何当たり前のことを頼み込んでるんだよ。俺はウインの力になってやるつもりでいる」

『それは…何故ですか』

「愚問だな。あいつの……ウインのマスターだからだよ」

本当に愚問だ。ウインのマスターとしてウインの力になってやることは当然だと考えている、だからそのことに何の抵抗もないし、むしろそうしてやらないと彼女がただ傷付くだけだ。そんなことは俺が絶対に許さない。

『ありがとうございます』

「礼もいらぬ。俺にとつては当然のことなんだから。その代わりに教えてほしいことがある」

ウインの力になる前に明かしておかなければならないことがあるのを忘れてはいない。ウインの記憶についてファルコンから聞き出す必要がある。俺は人間界での出来事からスターダストから教えてもらった記憶についてのことまでファルコンにすべて話した。するとファルコンからは思わぬ返答が。

『そついえば……ウインが突然妙な事を言い出すことはありません』  
「と、いうと？」

『ええ……あれはウインが物心がついた頃でした。突然自分の兄は何処だ、助けないと、と言い始めて』

「兄……？」

『はい。後々聞いたのですが、ウインには兄はいないはずだとか』  
いないはずの兄を助けようとする……よくわからないな。

『恐ろしくなつた我々はウインを軽い記憶喪失にしてあるはずのない記憶だけを封印する決意をしました。ですから恐らくスターダストの言う封印された記憶というのはそれでしょう』

記憶を封印してしまえるような技術のほうが俺は恐ろしく思うんだが……というのはいわゆる、ただその封印された記憶について考えていた。その時確かに封印されていた記憶が今になって少しずつ蘇っているのはどういふことか、それ以前に本当に封印しなくてはなら

ないような記憶だったのだろうか。

「その決断を下したのは誰だ？恐らくその人物がウインの記憶の秘密を知っているはずだ」

『ガスタの里の…ウインダー殿です』

ガスタの里……ちょうどいい。ウインだけでなくもう1人協力しなければならぬ人物がそこにいて、俺達を待ち侘びているはずだからな。

「……………ありがとう、ファルコン。助かったよ」

『もう行かれるのですか？』

「ああ」

手掛かりが掴めたから、というのもあるが、できるだけ早くウインと話をし、行動に移したかったのだ。あまり長い間ウインに色々抱えさせるのはよくないだろう。

『ウインの部屋に案内しましょう。その先は……オレは何も言いません』

そう言うファルコンは何を考えているのか……わからない。ただ止める気はないのは分かる。本当ならもう少しウインと一緒にいたいだろうに、彼は文句一つ言わなかった。

「ワイン、出発するぞ」

部屋に入り、ワインに声を掛ける。

『はい、わかりました』

ワインも文句を言わずに立ち上がり、俺の側へと歩いて来る。

『マスター』

「何だ、ワイン？」

『あの……がんばりましようね？色々大変ですけど』

ワインは微笑む。だがワインの過去を少しでも知ってしまった今では、その微笑みも見るだけで心が傷む。そうしているうちに気が付けば俺はワインを……抱きしめていた。

『ふええっ？なんですかマスター……普段なら私を抱きしめたりなんて』

「ワイン、お前がどんなに辛い時でも……俺と一緒にいてやるからな……！」

辛い想いだらうと受け止めてやる自信はある。ワイン、精霊のマスターとなる人間は精霊と共に暮らす義務があるって言ってたよな。ならマスターとしての俺の役割はたった1つだろう？

## 19・霞の谷（後書き）

教えてウィンちゃん

ウィン「えっと……拍手のコメントに送られてきた質問を私が答えます！ちなみに送られてきた文をそのまま掲載しますので悪しからず！」

○トリシューラによる全滅・一周後ということはブリューナク、グングニールも封印されたままなんでしょうか

ウィン「トリシューラはもちろん、ブリューナクもグングニールも活動しているなんて聞いたことありませんし……恐らくまた封印されたか、自ら眠りにについているかでしょうね」

○単刀直入に、ウインは龍土が異性として好きですか？

ウィン「マスターはマスターですから、マスターとしては大好きです！異性として好き……というと？」

ウインダ「まあ……男女の仲？最終的には結婚とか？」

ウィン「結婚……マスターと……結婚！？わ、私精霊だし……モンスターだし……マスターを異性として愛するなんて……できません……」

次回のキーカード

「ガスタの静寂 カーム」

ウイングダ「私達のお姉ちゃんに当たる人物。とっても優しく、美人なんだけど……………」

ウィン「静寂って言うくらいだから……………」

## 20・静寂（前書き）

一度悪ノリを始めると自分でもわけがわからなくなるまで続ける病  
気です。

前回のおさらい

ウィン「マスターが抱きしめてくれました」

ウィンダ「その一言で終わらせちゃおさらいになんないよ……」

この間は柄にもなく恥ずかしい事をしてしまったことを軽く後悔している。まあそれはどうでもいいことだが。

現在俺達は霞の谷の中心部の集落を離れ、霞の谷と氷結界の領地の間にある『ミストバレー湿地帯』へと向かっている。そこにウィンダ達『ガスタ』の里があるのだとか。氷結界といえばトリシューラをはじめとした強力なドラゴンがいるカテゴリ。こちらの世界では部族と言うのが相応しいだろうか。トリシューラが暴れたせいで今ではわずかに生き残りがいるだけらしいが、霞の谷に住まう民族、そしてガスタの民族との交流はあるらしい。ということはこの辺りでデュエルした時にトリシューラを召喚すれば情報が伝わり氷結界がパニックになったりするかもしれない……。機会があったとしても召喚は控えた方がよさそうだ。

霞の谷を抜ける際再び森に入り、木々の間を抜けることになった。この前はプチリュウのせいで道に迷ったが、今回はファルコンに正確なルートを教えてもらっているので問題はない。

『この辺りは風が気持ちいいですね』

森の中を歩きながらウィンが言う。霞の谷から吹き付ける冷たい風でもなくじめじめとした鬱陶しい風でもない、心地の良い風が森の中を吹き抜けている。

『ガスタの里が近い証拠やな。あそこの風の性質とよう似とるから

な』

「おいおい…今度は本当だろうな」

『風は嘘をつかへん。ワイらには常に正直や』

なるほど、珍しくプチリュウが良い事を言っている。ウインヤプチリュウのような風属性モンスターにとって風は何よりも信頼できるものなのだろう。

ガスタの里が近いのなら、一刻も早く到着したい。のんびり遠足気分で精霊界を歩いていては間に合うことも手遅れになる。そんなことを思っている内に森の出口にたどり着く。森を抜ければそこにあったのは1つの集落、どうやらプチリュウの言ったことは本当だったらしい。

「ここがガスタの里なのか？」

『その通り、ここがワイらの目的地、ミストバレー湿地帯にあるガスタの里や』

歴史の授業に出てきた古代の日本のものに似た住居が立ち並ぶそこは確かにガスタの里らしい。

しばらく集落を見て回っている内に、前方に見慣れた緑のポニーテールの少女が現れた。

「ウインダ！」

『りゅ、龍士！？意外と早かったね！』

俺が声を掛けると、少し慌てた様子でウインダは振り返る。

「何かあったのか？」

『ああ……えっと、その……………ごめんなさい！』

突然謝られてちんぷんかんぷんの俺をほったらかしてウィンダは喋りだす。

『私がドジだから手間を掛けさせたし、そもそもガルドにきちんと指示してれば墜落なんてせずに済んだだろうし、ああもう、全部私が悪かったんだよ！』

「ああ……………そんなことか」

『へっ？』

「誰にでもミスはある。気にすんなよ」

『あ、ええっと……………うん……………』

今の俺はウィンダのミスを咎めるよりはむしろ感謝したいと思っている。回り道したおかげで色々な物を見れたし、得ることもできた。それを怒るのはおかしな話だろう？

『そ、そんなことより、疲れたでしょ。私達の家で休んだらどう？成長したウインの顔をお姉ちゃんに見せると喜ぶと思うよ？』

「お姉ちゃん？お前……………いや、お前ら姉がいたのか？」

わざわざ「お前ら」と訂正したのはウィンダの姉はウインの姉でも

あるため。

それよりもウィンとウィンダにも姉がいるとは……一体どんな人物なのか。

『ガスタの静寂カーム……覚えてるでしょ？私が龍士とのデュエルで召喚したことあるし』

なるほど、《ガスタの静寂カーム》ならウィンダと姉妹の関係にあっても納得できるな。

『でも私、確かガスタの里では禁忌の存在って言ってたけど……』

『あー……でも大丈夫。私があんとかごまかすし、それにお姉ちゃんはその風には思ってないよ……多分』

「なんだよ多分って」

『……とにかく、私の家に向かうよ？』

半ば強引に話を打ち切り、ウィンダは俺達を自分の家に案内しようとして歩きだす。何か重要なことを聞き逃しているような気はしたが、それを聞く余裕は与えてくれそうにない。仕方なく俺達はウィンダの後を着いていくことにした。

周囲の家よりもやや広めの家に案内された俺達。やはり巫女の住む家だから優遇されているのだろうか、詳しいことまではわからない。そういえばファルコンの家もそれなりに広かったな……この世界では家の広さが身分の高さでも表しているのか？

『じゃあ私は野暮用で留守にするから、何かあったらお姉ちゃんに言ってね』

「わかった……のはいいが、その姉はどこに？」

『……マスター、あの方では？』

ウィンが指差した方向を見ると、扉の隙間からこっそりそこちらを見ていた女性の姿。以前見た姿と一致するためカームであるのは間違いないさそうだが、何故扉の隙間からこっそりと？

『……じゃあ私は出かけるね？』

『あ、私もちよつと散歩に……』

『ワイも行くわ。ウィンになんかあったら大変やからな』

カームの様子を見たウィンダ達はわざとらしくカームのいる方から部屋を出ていった。ウィンダはともかく……何故ウインは散歩になんて、それにプチリュウ、何かありそうな時はお前が絡んでそうな気がするぞ。そしてカーム、何故扉が開いたからってびっくりして隠れる。

1人部屋に取り残された俺は、今のままでは落ち着かないのでとりあえずカームに声を掛けることにする。

「なあ……」

『……な、なんでしよう？』

びくんとなった後、顔を少し赤らめながら俺の前にやってくるカーム。極度の恥ずかしがり屋なのか？

『ああ……お紅茶でも……』

「あ、お構いなく」

お構いなく、と言っているにも関わらず、丁寧に紅茶と和菓子を用意したカームは顔を赤くしたままそそくさと部屋から飛び出していた。一体何なんだ？

カームSide

どうしよう……あの人が龍士……さん？ウィンドから話を聞いてはいたけどまさかあんな素敵な方だなんて……お話したい……ああでも恥ずかしい。口数が少なく引込み思案な私ではあの方とは……。

「なあ……」

『（びくつ）……な、なんででしょう？』

ああ……突然声を掛けられてびくつとなってしまうたわ……それよりも突然どうしたのかしら？はうあっ！？私ったらお客様にお茶の

1つも出さないで何をしているの!?

『ああ……お紅茶でも……』

「あ、お構いなく」

動揺した私を気遣うような返事……優しいのね、ますます素敵……じゃなかった私。早くお茶を用意しないと……台所は……どっちだったかしら。やだ私ったら、自分の家の間取りをど忘れするなんて……これが……恋? ( 違います )

『はあ………』

取って置きの高級な和菓子に煎れたての紅茶、それにお父様のお給料数ヶ月分ほどの高級なティーカップ……私が持て成すことができる最高の物を用意したつもり。でもこれであの方は満足されるでしょうか……。怖くなった私は龍士さんの前の机にさっと紅茶と和菓子を置くと逃げるように台所まで走っていった。走るなんて戦闘以外では何ヶ月ぶりかしら……。

『お……落ち着く……落ち着くのよカーム。私は静寂の名を冠するガスタの民族。決してこんなことで動揺しては……』

『お姉ちゃん、いるー?』

『はうあっ!?!?……ってウインダじゃないの』

妹のウインダが台所に来ただけでここまで驚くなんて……私もうガスタの静寂なんて名乗れない!

『お、お姉ちゃん……？何手首に包丁を……？やめてー、お姉ちゃん！』

『止めないでウィンダ！ガスタの静寂を名乗れなくなった私は福神漬けの付いてないカレー同然！静寂を失うのなら、死ぬしかないじゃない！』

『止めて！早まらないでー！』

私の手にしている包丁はとうとうウィンダの超能力によって弾き飛ばされ、壁に刺さったまま抜けなくなった。ああお母様、あなたの所に逝くのはもう少し先になりそうです。

『……………それで、龍士を見て一目惚れ……………ねえ』

台所で妹に正座させられる姉、その光景はさぞシユールなことでしょう。しかしこのカームにとってそれはシユールじゃ済まされないこと……………。

『妹よりも胸がないことを悩み続けて早数年…ついにお姉ちゃんにも春が来たんだね……………』

『……………うるさい』

今のは本気で怒りそうになった。いくら妹よりはないと言っても、ちゃんと胸はあるのよ！？

『でもそれと静寂とは関係ないんじゃない……………』

『紅茶も飲めないお子ちゃまには一生わからない悩みよ』

『……ねえお姉ちゃん。その脚、突いていい？』

『駄目よ、痺れているから』

痺れているとわかってて脚を突くなんて……妹ながらかなりの鬼畜  
……！

『まあいつか。それよりも……このままじゃ困るよね』

それには一理ある。このままともに龍土さんと会話できないので  
は問題しかない……でもあの方を前にすると今まで感じたことな  
い何かが込み上げてきて平常心を保てない……。

『いつそ告白しちゃう？私はあなたの事が好きです一生デッキに入  
れて下さいって』

『そんな……唐突過ぎて』

『じゃあラブレターから入る？すぐそこにいるのに書くのは変だけ  
ど』

ラブレター……それなら口下手な私も思いをそのまま伝えることが  
できる！さすが私の妹！

……というわけで紙とガルドスの羽ペンを手に龍土さん宛てのラブ  
レターを書くことにした私、ただし台所で。待ってて龍土さん……  
！必ず私の想いを伝えてみせる……！

『……………で、お姉ちゃんは龍士と決闘でもしたいの？』

『馬鹿ね。ラブレターを送る相手と決闘するわけないじゃない』

『果たし状なんて書くラブレターがあるわけないでしょ！』

ラブレター……………いや、恋は恋は難しいわね……………。

私はカーム。龍士さんに恋してます。

## 20・静寂（後書き）

ウィン「今回の最強カームはガスタの静寂 カームです」

ウィンダ「最強カーム……？」

《ガスタの静寂 カーム》

効果モンスター

星4 / 風属性 / サイキック族 / 攻1700 / 守1100

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ウィン「ガスタにおける優秀な下級アタッカー兼無限ループ要員です。メンタルマスターの効果でこのカード2枚をリリースしつつ3枚目で効果によりカーム2枚をデッキに戻しドロー……これの繰り返しで無限にカードをドローできます。……というのは過去の話。メンタルマスターが禁止カードとなった今ではガスタのリクルーターを補充しつつドローできるだけのカードになりました。

薫風でのカームさんは静寂の名に反して意外と軽い感じのお姉ちゃんキャラです。でも美人だから好きな方も多いでしょうね。私も美人になりたいなあ……」

ウィンダ「吹き荒れるウィンっていうカードがあるけど……あれはウインの大人の姿だよな？イラストの感じは異次元の女戦士に近い雰囲気だけど、美人なのかな？」

次回のキーカード

「サイバー・ドラゴン」

リバイス・ドラゴン「精霊界での話は少しお預けた。次回は我が主、美浦がデュエルをするようだがその相手は……？」

## 21 光子竜VS機械竜（前書き）

前回までのおさらい

ウィン「前はガスタの里に着いて……カームという人に会ったんですけど……ふええ……台本に書いてあることがよくわかりません」

## 21・光子竜VS機械竜

美浦Side

龍士が精霊界に向かってから早2日。連休を見計らって出発したため授業のほうに支障はないみたいだけど、あたしはそれ以上に龍士自身の心配していた。何せ精霊界はあたし達からすれば想像のつかないような世界、何があるかわからない。

「大丈夫かな……」

『龍士達の事か？』

あたしの呟きが聞こえたのか、リバイス・ドラゴンが話し掛けてくる。

「そう。龍士の事だからどうにかしてそうだけど、危険な目に遭ってないか心配で」

『主が心配するのも無理はない。精霊界は今危険な状態にあるのだから』

「どついついことよ」

『精霊界は種族間の争いが絶えない。龍士は危険を覚悟のうえで……いや、むしろその争いを止めるのが目的で精霊界に行ったのだから』

精霊界の戦争……それを龍士は止めに行つたのだろうか。わからないけど、そうだとしても納得はできる。龍士は変に正義感の強いところがあるし、ウインの故郷が危険だと知れば黙っちゃいなうと思つても何かとんでもないことをしようとは思つたけど……まさかそんな大規模な物を相手にしようとしていたなんて考えもしなかつた。そのことを知つてしまったあたしは、無意識の内に立ち上がり、家の玄関に向かつて歩いていった。

『主よ、何をやる気だ』

「行くのよ」

『何？』

「行くつて言つてるのよ、精霊界に！あいつだけにそんなとんでもないこと、させられるわけないでしょ！？」

『主は自分が行つても足手まといだと龍士に言ったのではなかつたのか？』

「うぐ……」

確かにあの時はそう言ったけど……龍士の目的を知つた今ではそんなことは関係なく、ただ龍士1人で戦わせたくはないと思つていたのであつた。あたしは精霊界に乗り込もうとしていた。

それに……今こそナンバーズの力を正しく使う時なんじゃないかと思つたのよ。

『……だが主が行くと言つたのであれば、我は止めはしない。我は主

に従うのみ……決してその意思は変わらぬ』

「……最初からそう言いなさいよ」

『ふふ……からかい甲斐のあるのも父親譲りか、面白い』

リバイス・ドラゴンがそう言ったのを聞いて、思わず腰に付けたデツキケースを外し、にぎりしめてしまう。

「……あたしにこのサイバーデツキを託して死んじゃったけど、お父さんも応援してくれてるよね」

『……すまない、少し配慮に欠けていた』

「ううん、気にしないで。それよりも精霊界に行く方法を知ってるな人にこれから会わないといけないでしょ」

龍土の他に精霊界と縁のある人物は、たった1人だけど心当たりがある。あの時さりげなく言った言葉も、あたしは聞き逃さない。

そういうわけであたしが来たのはそのある人物の家。以前場所を聞いておいてよかったと今思う。家に居てくれればいいんだけど……そう思いながら呼び鈴を鳴らす。

やがて姿を現した人物は、つい最近あたし達と知り合った人物。

「突然押しかけて悪いわね、黒井君。少し協力してもらって構わない？」

壮太Side

以前家の場所を覚えておいたからか、荒川さんが家にやって来た。しかしその様子から察するに遊びに来たわけではなさそうだ。

とりあえず玄関で立ち話をするわけにはいかないので、家の中に案内することにし、詳しく話を聞くことにした。

「で、僕に協力してほしいことって？」

「精霊界に行きたいのよ」

……………何を言い出すかと思えば。

「悪いけど僕は龍土君や君と変わらない普通の人間。精霊界に送ったりは」

「嘘。あんた精霊界に行ったことがあるって、龍土とデュエルしていた時に自分で言ったじゃない」

やれやれ…そこまで覚えられていると、言い逃れはできそうにないな。

「……………確かに精霊界には行ったことがあるし、その行き方も知ってはいる。でもそれを教えるわけにはいかないんだ」

「どうして？今こうしている間にも龍士は戦ってるかもしれないのに」

「……どうして龍士君の名前がここで出るのか、理解ができないな。僕の知らないところで何が起きているんだ？」

「あつ……」

説明不足に気付いた様子の荒川さんが、1つ1つ丁寧に事情を説明してくれたおかげで、僕も精霊界の現状を知ることができた。

龍士君が戦争を止めるべく精霊界に乗り込み、荒川さんはそれを手助けしようと精霊界に行こうとしている。状況も、荒川さんの気持ちもよくわかる。でも精霊界に行く方法を教えるわけにはいかない。

「……ある精霊との約束だね。精霊界に来たのが必然であれ偶然であれ、その方法を他の人間に漏らさないでほしいと言われたのさ。事情はどうであれ、僕はその精霊との約束を破るわけにはいかないんだ」

「……でもあんたしか頼れないのよ。どうにかなんないの？」

そうは言われても約束は約束。あの精霊がわざわざ僕にそう言ったのは何かしらの事情があつてのはず、そう簡単には教えられない。でももし……その精霊が納得できるよう荒川さんが力を示せば……。

「……わかった。デュエルで決めよう。カードの精霊なら、デュエルでその約束をどうするか決めても怒りはしないさ、多分ね」

「言ったわね。あたしが勝てば、ちゃんとその方法を教えてよ？」

「一言はないさ」

さて、荒川さんは『彼女』が納得できるほどの実力者か、見せてもらうことにしよう。

Dゲイザーをセットし、デュエルディスクを展開し互いに構え、デュエルを開始する。

「デュエル！」

美浦Life8000

壮太Life8000

「先攻は譲るわ」

「ならありがたく行かせてもらおうよ…僕のターン！」

デッキの1番上からカードを引き抜き、手札に加える。主軸となる上級モンスターも、優秀な下級モンスターもいる…まずまずの手札だ。

「僕はモンスターを裏側守備表示でセットして、ターンエンド！」

先攻としてはよくある動き…問題は無い。

壮太Life8000

手札5枚

モンスター

セツト×1

魔法・罾

(なし)

「伏せカードはなし……大嵐でも警戒？」

「さあ…どうだか」

つい先日まで禁止カードとなっていた《大嵐》というカードは、フィールド上の魔法・罾カードを全て破壊してしまう強力なカード。考えなしにカードを伏せていては危険になったというわけさ。

### 《大嵐》

通常魔法

フィールド上に存在する魔法・罾カードを全て破壊する。

「ま、伏せカードがないなら遠慮せずに攻められるからいいけど。あたしのターン！」

荒川さんがカードをドローする。一体どんなデッキなんだろうか。

「相手フィールド上のみモンスターが存在する時、このモンスターは特殊召喚できる、来なさい！サイバー・ドラゴン！」

フィールドに現れたのは自身の効果として特殊召喚する効果を持つ『半上級モンスター』と呼ばれるモンスターの代表格サイバー・ドラゴン。なかなか貴重なモンスターだ。

「サイバー・ドラゴン……君はサイバー流かい？」

「あたしは確かにサイバー流継承者。このサイバーデッキはそれを証明するデッキ……知っているなら一目見れば分かるはずよね」

サイバー流……《サイバー・ドラゴン》とその派生モンスター達を巧に使いこなす流派らしいけど、まさか荒川さんがそのサイバー流だったなんてね。わざわざ後攻を選んだ理由がわかるよ。

《サイバー・ドラゴン》は相手フィールド上のみモンスターが存在していれば手札から特殊召喚できるため、先攻ではどうしても手札から特殊召喚できない。なのでいきなり特殊召喚を狙う場合は後攻のほうが有利だったりする。

「あたしはサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！」

《サイバー・ドラゴン》の隣によく似た形状の機械竜が現れる。こっちは普通の下級モンスター。通常召喚されたというわけだ。

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1500 / 守1000

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、このカードのカード名はエンドフェイズ時まで「サイバー・ドラゴン」として扱う。また、このカードが墓地に存在する場合、このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

「いくわよ…バトル！サイバー・ドラゴン・ツヴァイでセットモンスターを攻撃！エヴォリユーション・ツヴァイ・バースト！」

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》の口から光線が放たれ、裏側から表側になった《仮面竜》を襲う。

「ツヴァイが攻撃しているダメージステップの間、攻撃力を300ポイント上昇させるわ！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ  
攻撃力1500 1800

守備力を大きく上回る攻撃力で攻撃され、《仮面竜》は呆気なく破壊される。しかし《仮面竜》は戦闘で破壊されることでその効果を発揮する。

「戦闘破壊された仮面竜の効果により、攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体をデッキから特殊召喚する！2体目の仮面竜を守備表示で特殊召喚！」

「ならサイバー・ドラゴンで攻撃！エヴォリユーション・バースト！」

2体目の《仮面竜》も《サイバー・ドラゴン》の前では無力。やはり呆気なくやられる。

「再び仮面竜の効果発動！デッキからミンゲイドラゴンを特殊召喚

！」

《ミンゲイドラゴン》

効果モンスター

星2 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻 400 / 守 200

ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、このモンスター1体で2体分のリリースとする事ができる。自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場合には発動できない。この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

《仮面竜》に代わって現れたのは珍妙な容姿をした小さいドラゴン。もう少し攻撃力の高いモンスターを召喚すればと思うかもしれないけど、これでいい。このモンスターにはとても優秀な効果が備わっているからね。

「厄介なモンスターを残しちゃうわね……カードを2枚伏せてターンエンド」

2枚のリバースカードを伏せ、荒川さんのターンは終了する。

美浦 Life 8000

手札2枚

モンスター

《サイバー・ドラゴン》

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》

魔法・罫

伏せ×2

機械族主体のデッキを相手にする場合、注意しなければならないのは《リミッター解除》。たった1枚のカードで機械族モンスターの攻撃力を一気に倍にしてしまう厄介なカード。エンドフェイズに機械族モンスターは破壊されるとはいえ、発動して一気に攻めて来られると厳しい。一瞬でも油断はできない。

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは《銀河眼の光子竜》。《ミンゲイドラゴン》の効果を利用すれば召喚できるカードだけど、ここで召喚するのはこのカードじゃない。

「手札の銀河眼の光子竜を墓地に捨て、魔法カード、トレード・インを発動！デッキからカードを2枚ドローする！」

最上級モンスターが多い僕のデッキでは手札交換カードはとても優秀なカード。《トレード・イン》はレベル8のモンスターを手札から捨ててカードを2枚ドローできる。

《トレード・イン》

通常魔法

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「……ミンゲイドラゴンはドラゴン族モンスターの召喚のためにリリースする場合、2体分として扱うことができる。ミンゲイドラゴンをリリースし、光と闇の竜をアドバンス召喚！」

僕のエースモンスターの1体、《光と闇の竜》の召喚に成功できた。しばらくはこのモンスターでフィールドを制圧できるはず。

「2000のライフポイントをコストにカウンター罫、神の警告。光と闇の竜の召喚は無効、破壊してもらおうわ」

#### 《神の警告》

カウンター罫

2000ライフポイントを払って発動する。モンスターを特殊召喚する効果を含む効果モンスターの効果・魔法・罫カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

カウンター罫はスペルスピード3、スペルスピード2の《光と闇の竜》では無効にはできない。翼を広げ咆哮する前にカード効果で破壊されてしまう。

美浦Life8000 6000

「くっ……でも破壊されたことで光と闇の竜の効果は発動する！墓

地から銀河眼の光子竜を特殊召喚！」

《光と闇の竜》の効果の発動条件は破壊され墓地へ送られること。たとえ召喚が無効にされようとも破壊されれば効果は発動する。

《光と闇の竜》が残した光から姿を現す《銀河眼の光子竜》。その攻撃力は3000と《光の闇の竜》を上回る。

「神の警告を使ったのはプレイングミスだったね。バトル！銀河眼の光子竜、サイバー・ドラゴンを攻撃！破滅のフォトンストリーム！」

《銀河眼の光子竜》の光線が《サイバー・ドラゴン》に向かっている。攻撃力3000と攻撃力2100では勝敗は目に見えている。

しかし突然の背中に羽が生え、攻撃を耐え切ってしまう。サイバー・ドラゴン

「手札からオネストの効果を発動。ダメージステップ時にこのカードを手札から墓地に送ることで、エンドフェイズまで自分の光属性モンスターの攻撃力は戦闘している相手モンスターの攻撃力分上昇。サイバー・ドラゴンの攻撃力は銀河眼の光子竜の攻撃力分、3000ポイント上昇して5100よ。振り返ちにしないで、オネスティ・エヴォリユーション・バースト！」

サイバー・ドラゴン

攻撃力2100 5100

《オネスト》の力を受け攻撃力が上昇した《サイバー・ドラゴン》が《銀河眼の光子竜》を振り返ちにす。《銀河眼の光子竜》の効果はダメージステップには発動できない。除外して破壊から守るこ

とはできないんだ。

《オネスト》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1100 / 守1900

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在する。このカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

壮太Life8000 5900

「銀河眼の光子竜が……！」

「あんたはさつきあたしが神の警告を使ったことをプレイングミスだと言った。でも光と闇の竜が居たらオネストの効果は無効にされるし、何よりその後召喚される銀河眼の光子竜に対処できなくなる。どちらかと言えば光属性を相手するのにオネストを警戒していなかったあんたの方がプレイングミスをしたのかもね」

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

確かに僕の読みが甘かったのは否定できない。何故《光と闇の竜》に《神の警告》を使ったのかをよく考えれば決して軽い気持ちで攻撃はしなかった。

でも過ぎたことは仕方ない。伏せたカードは《リビングデッドの呼び声》。このカードで再び《銀河眼の光子竜》を召喚できる。逆転のチャンスはまだあるはずだ。

### 《リビングデッドの呼び声》

永續罫

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

壮太Life 5900

手札4枚

モンスター

(なし)

魔法・罫

伏せ×1

「1ターンでエースモンスターが2体も破壊された割には、余裕そうね」

ドローフェイズにデッキからカードをドローした荒川さんが僕の顔を見ながら話し掛ける。

「その伏せカードによっぽど自信があるといった感じね」

「どうだか」

伏せカード1枚で怖じけづくほど荒川さんは弱くはない。下手をすればこのターン決着を付けにくるかもしれない。

「あたしのターン、ドロー」

『サイバー』デッキの真骨頂はここから、一瞬にして高攻撃力のモンスターを召喚することも造作ないことだ。

「手札から強化支援メカ・ヘビーウェポンを召喚！さらにこのカードを対象に魔法カード、機械複製術を発動！攻撃力500以下の機械族モンスターを複製するわ！」

荒川さんの場に召喚された《強化支援メカ・ヘビーウェポン》が魔法カードによって3体に増える。

《強化支援メカ・ヘビーウェポン》

ユニオンモンスター

星3 / 闇属性 / 機械族 / 攻 500 / 守 500

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は500ポイントアップする。（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

《機械複製術》

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する攻撃力500以下の機械族モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターと同名モンスターを2体まで自分のデッキから特殊召喚する。

「レベル3のメカ・ヘビーウェポン2体を、オーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！  
No.17 リバイス・ドラゴン！」

「ナンバーズ……！」

荒川さんの場にエクシーズ召喚されたのはナンバーズの内の1体……！

「リバイス・ドラゴンの効果発動！エクシーズ素材を1つ取り除き、攻撃力を500ポイント上昇させる！」

No.17 リバイス・ドラゴン  
攻撃力2000 2500

リバイス・ドラゴンが自分の周囲を飛び回っているエクシーズ素材を喰らうことで攻撃力を高める。

「さらにメカ・ヘビーウェポンの効果発動！このカードを場の機械族モンスターに装備する！メカ・ヘビーウェポン、サイバー・ドラゴンに装着！」

メカ・ヘビーウェポンが分離したかと思うと、装備カードとして《

サイバー・ドラゴン》に装着され攻撃力を上昇させる。

サイバー・ドラゴン

攻撃力2100 2600

「バトル！サイバー・ドラゴン・ツヴァイでダイレクトアタック！  
エヴォリューション・ツヴァイ・バースト！」

全てのモンスターのダイレクトアタックを通すと負けてしまう……  
だから通すわけにはいかない！

「永續畏、リビングデッドの呼び声を発動！蘇れ、銀河眼の光子竜  
！」

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》の前に復活した《銀河眼の光子  
竜》が立ちはだかる。攻撃力では到底敵わないと悟ったのか《サイ  
バー・ドラゴン・ツヴァイ》は攻撃を止める。

「……ターンエンドよ」

攻撃で敵うモンスターがいないため、荒川さんはバトルフェイズを  
終了しターンエンド宣言をする。

美浦Life6000

手札1枚

モンスター

《サイバー・ドラゴン》

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》

《No.17 リバイス・ドラゴン》

魔法・罾

伏せ×1

《強化支援メカ・ヘビーウェポン》（装備対象 サイバー・ドラゴン）

美浦Side

再び姿を現した《銀河眼の光子竜》。あのカードに除去カードの類の罾でも高攻撃力のモンスターでも倒せない。倒すならさっきみたいに返り討ちにしないとイケない。

『銀河眼の光子竜……気をつける、奴は主の想像以上に厄介なモンスターだ』

攻撃力はあたしのどのモンスターのものを上回っている。すぐに戦闘破壊されるかもね。

「僕のターンだ！……いくぞ、銀河眼の光子竜でリバイス・ドラゴンを攻撃！そして……効果発動！自身と攻撃対象をバトルフェイズ終了時まで除外する！」

「えっ!?!」

普通に攻撃すれば勝てる相手に対して効果を使うなんて……どういうこと!?

「攻撃力が勝ってるモンスター相手に効果を使うなんて……間違い?」

「間違いなんかじゃない。その証拠を今見せてあげるよ。バトルフェイズを終了、除外された2体のモンスターはフィールドに戻ってくる」

1度除外された《銀河眼の光子竜》とリバイス・ドラゴンが帰還する。でもリバイス・ドラゴンのエクシーズ素材はゲームから除外された時になくなってしまうた。

「リバイス・ドラゴンはエクシーズ素材がないとダイレクトアタックができない……これが狙い?」

「それだけじゃない。銀河眼の光子竜がエクシーズモンスターを除外した場合、除外する前に存在していたエクシーズ素材の数×50ポイント攻撃力をアップさせる!」

銀河眼の光子竜

攻撃力3000 3500

リバイス・ドラゴンの周りを飛び回っていたはずのエクシーズ素材が空中に現れると、《銀河眼の光子竜》に吸収されてしまう。ただ除外するだけの効果じゃなく、エクシーズモンスター対策としても

その効果を発揮するなんて……。

「ただリバイス・ドラゴンの弱体化するだけじゃない。その力を糧に銀河眼の光子竜はパワーアップするのさ。エクシーズ素材が2つなかったのは残念だけどね」

「くっ……」

上昇値は微々たるもの。でもそれがエースモンスターを無力化させるものなら馬鹿にできない。相手にしてわかる……このモンスターがいかに手強いモンスターだったことが！

「カードを1枚伏せてターンエンド。さあ、君のターンだ」

壮太Life 5900

手札4枚

モンスター

《銀河眼の光子竜》

魔法・罫

伏せ×1

《リビングデッドの呼び声》

「あたしのターン！」

手強い相手だけど……あたしは負けられない。勝って精霊界に行く方法を聞かなきゃなんないのよ！



## 21・光子竜VS機械竜（後書き）

リバイス「今回の最強カードはサイバー・ドラゴンだ」

《サイバー・ドラゴン》

効果モンスター

星5/光属性/機械族/攻2100/守1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

リバイス「相手フィールドにのみモンスターが存在すれば特殊召喚できる扱いやすい上級モンスターだ。主の使うサイバーデッキの主力であり、なくてはならない存在だと言えよう。強力な融合モンスターの素材だけでなく高めの攻撃力によるビートダウン、レベル5であることを活かしてシンクロやエクシーズのサポート、さらにはあるカードと組み合わせるの機械族メタなど汎用性はモンスターカードの中でもトップクラスだろう。攻撃名はエヴォリューション・バースト。多くの派生モンスターのいるこのモンスターならではの技名だな」

次回のキーカード

「サイバー・エルタニン」

リバイス「サイバーデッキの切り札の1体だ。非常に強力な効果を  
持っているな」

## 2.2・竜の頭の名を持つ機械竜（前書き）

前回のおさらい

ウィン「美浦さんと黒井さんがデュエルしてるんですね！サイバー流と銀河眼の光子竜達ドラゴン族モンスター、高い攻撃力がぶつかり合うデュエルを制するのは……？とところでサイバー流って何ですか、マスター？」

## 22・竜の頭の名を持つ機械竜

美浦Life6000

手札1枚

モンスター

《サイバー・ドラゴン》

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》

《No.17 リバイス・ドラゴン》（エクシーズ素材なし）

魔法・罫

伏せ×1

《強化支援メカ・ヘビーウェポン》（装備対象 サイバー・ドラゴン）

壮太Life5900

手札4枚

モンスター

《銀河眼の光子竜》（効果により攻撃力を500ポイントアップ）

魔法・罫

伏せ×1

《リビングデッドの呼び声》

美浦Side

「あたしのターン、ドロロー！」

気合いを入れ直す為、勢い良くカードをドローする。ドローしたのは《サイクロン》、フィールド上の魔法か罠カードを1枚破壊するカード。《銀河眼の光子竜》は《リビングデッドの呼び声》の効果により蘇生されたけど、自身の効果で1度フィールドを離れている。この時点で2枚のカードの関係は無くなっている為、本来なら《リビングデッドの呼び声》を破壊して間接的に《銀河眼の光子竜》を倒す事ができたのができなくなってしまっている。ただリバイス・ドラゴンが無力化しただけでなく、そこまで考えていたなんて……

彼はあたしの考えていた以上に用心深い人のようなね。  
あたしのフィールドにはエクシース素材が無くなりダイレクトアタックができなくなったりバイス・ドラゴン、《強化支援メカ・ヘビ―ウエポン》を装備した《サイバー・ドラゴン》、そして《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》の3体のモンスターと1枚の伏せカード。《サイクロン》を含めた2枚の手札と組み合わせることができる事は限られている。どうにかしてもう1度《銀河眼の光子竜》を除外されられたなら上昇した攻撃力を戻せ、少しは楽になるんだけど、そう都合良くはいかない。逆転の手が見つかるまで耐えるしかなさそうね。

「3体のモンスターの表示形式を全て守備表示にした後、カードを1枚伏せてターンエンドよ」

伏せたのはさつき引いた《サイクロン》。せめてブラフになつてくれればいいんだけど。

美浦Life6000

手札1枚

モンスター

《サイバー・ドラゴン》

《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》

《No.17 リバイス・ドラゴン》（エクシース素材なし）

魔法・畏

伏せ×2

《強化支援メカ・ヘビーウェポン》（装備対象 サイバー・ドラゴン）

「パワーアップした銀河眼の前では為す術無し、といった感じだね。だけど勝負である以上容赦はしないよ。僕のターンだ！」

「為す術無し、と言われると反論できない。でもきつと抜け道はあるはず、後はそれをどれだけ早く見つけられるかの問題よ。」

「バトル！銀河眼の光子竜で、サイバー・ドラゴンを攻撃！破滅のフォトンストリーム！」

《銀河眼の光子竜》の光線に飲み込まれた《サイバー・ドラゴン》。でも破壊されたのは装備していたメカ・ヘビーウェポンだけ、《サイバー・ドラゴン》は破壊されずに済んだ。

「装備カードとなっているメカ・ヘビーウェポンを代わりに破壊する事でサイバー・ドラゴンは破壊から免れるわ。まあ装備が解除されたから攻撃力は下がっちゃうけど」

サイバー・ドラゴン

攻撃力2600 2100

結局攻撃力では勝てないとはいえ、上級モンスターがフィールドに残るのは有り難い。逆にそれが後々面倒になるから先に攻撃されたいんだらうけどね。

「……ターンエンド」

壮太Life5900

手札5枚

モンスター

《銀河眼の光子竜》

魔法・罫

伏せ×1

《リビングデッドの呼び声》

伏せカードの追加もなく、変化は手札が増えただけみたい。でもそれだけで手札差はどんどん広がる。

「銀河眼の光子竜……かぁ」

黒井君のフィールドのモンスターは《銀河眼の光子竜》のみ、伏せカードも1枚しかない。たった1枚のカードでも形勢が逆転しかないというのに、あの余裕は何なの？

「……この銀河眼は」

戸惑うあたしの心情を見透かしたように、突然黒井君は語り始める。

「この銀河眼は僕の最も信頼するカード……どんな時でもこいつと

なら戦える、そう信じているの」

カードを信じている……その言葉にあたしははっとする。余裕と言つても、それは黒井君がカードを信賴しているからこそその物。あの余裕は銀河眼への並ならぬ信賴の表れだということらしい。でも……。

「そこまで信賴するなんて……相当な思い入れがあるってこと？」

「思い入れも何も、こいつは妹の形見だから」

妹の……。

「……まあそれは今話すことじゃない。デュエルの続きをしようか」

「そ、そうね」

事情はどうであれ、黒井君が銀河眼を信用して立ち向かってくるのなら、あたしもあたしの信賴するカードで迎え撃つだけ！

「あたしのターン、ドロー！」

ドローしたカードはモンスターカード、召喚条件もクリアしているし何よりこのカードなら《銀河眼の光子竜》を攻略できる！

「このモンスターカードは、フィールドか墓地から光属性の機械族モンスターをゲームから除外する事で特殊召喚できる……いくわ！フィールドのサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイをゲームから除外し、サイバー・エルタニンを特殊召喚！」

「エルタニン」の名の通り竜の頭部をモチーフにした巨大な飛行物体……いや、戦艦と言ってもいいようなモンスターが出現する。

《サイバー・エルタニン》

効果モンスター

星10 / 光属性 / 機械族 / 攻 ？ / 守 ？

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上及び自分の墓地に存在する機械族・光属性モンスターを全てゲームから除外した場合のみ特殊召喚することができる。このカードの攻撃力・守備力は、このカードの特殊召喚時にゲームから除外したモンスターの数×500ポイントになる。このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て墓地へ送る。

「サイバー・エルタニンの攻撃力は、召喚時にゲームから除外したモンスターの数×500の数値になる。だからエルタニンの攻撃力は1000しかないわ」

サイバー・エルタニン

攻撃力？ 1000

2体を召喚コストにしたため攻撃力は低い。でも高い攻撃力が目的じゃなく、召喚時の効果が目的だから問題はない。

「サイバー・エルタニンが特殊召喚された時、このカード以外のフ

イールド上に表側で存在するモンスターを全て墓地に送る！コンステレイション・シージュ！」

《サイバー・エルタニン》の周りを飛び回っている小型の飛行物体から発射されたレーザーがリバイス・ドラゴン、そして《銀河眼の光子竜》を貫き、消滅させる。

「リバイス、ごめん」

『気にするな……勝利の為、主の為ならこの身、喜んで捧げよう……』

墓地へ送らなければなくなったりリバイス・ドラゴンに謝罪しながら、あたしは次の行動に移る。

「攻撃力はたった1000でもダメージは与えられる。バトル、サイバーエルタニンでダイレクトアタック！ドラコニス・アセンション！」

先程効果発動に使用した飛行物体に加え、本体の竜の顔の口に設置されたレーザー砲からもレーザーを発射し、黒井君を襲う。……とはいっても攻撃力は1000。派手な攻撃には見合わないダメージ量だ。

壮太Life5900 4900

「ターンエンド！」

ダメーじよりも《銀河眼の光子竜》を撃退できた事の方が嬉しいけど、黒井君は手札をまだ5枚も持っている。攻撃力がたった1000の《サイバー・エルタニン》を倒す事は容易なはず。あたしの手札はたった1枚、次のターンは少し厳しくなりそうね。

美浦Life6000

手札1枚

モンスター

《サイバー・エルタニン》

魔法・罫

伏せ×2

「僕のターンだ」

ドロ―した事で黒井君の手札は6枚、そして墓地にはあのモンスター……。

「スタンバイフェイズ、墓地のミンゲイドラゴンの効果発動！墓地のこのカード自身を特殊召喚する！」

序盤に《光と闇の竜》のリリース要員となった《ミンゲイドラゴン》には自己再生能力がある。この場合フィールドから離れると除外されてしまうけど、ドラゴン族のアドバンス召喚に使用する場合2体分になる効果はそのまま。あの6枚の手札の内に最上級モンスターがあってもすぐに召喚できる。

「このミンゲイドラゴンはフィールドから離れたら除外される……なら遠慮なく召喚コストとして除外できる。フィールド上のドラゴ

ン族モンスター1体をゲームから除外し、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

《ミンゲイドラゴン》が消滅し、代わりに姿を現したのは漆黒の鎧を身に纏ったドラゴン《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》。墓地か手札からドラゴン族モンスターを特殊召喚する効果を持っている……ということは。

「ダークネスメタルの効果発動！墓地か手札からドラゴン族モンスター1体を特殊召喚！三度その姿を現せ、銀河眼の光子竜！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の咆哮により、三度呼び出される《銀河眼の光子竜》。倒しても倒しても蘇るなんて……。

「バトル！ダークネスメタルでサイバー・エルタニンを攻撃！ダークネスメタルフレア！」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》の吐き出した火炎弾が直撃し、炎上した《サイバー・エルタニン》は崩れ落ちる。同時に1800ポイントの戦闘ダメージがあたしに襲い掛かる。

美浦Life6000 4200

「まだまだ！銀河眼でダイレクトアタック！破滅のフォトンストリーム！」

《銀河眼の光子竜》の攻撃力は3000。その高い攻撃力によるダ

メージがあたしに重くのしかかる。

美浦Life 4200 1200

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「くっ……エンドフェイスに伏せカード発動。速攻魔法、サイクロン！今伏せたカードを破壊してもらおうわ！」

竜巻が先程伏せられた《聖なるバリア・ミラーフォース》を飲み込んで破壊する。危ない危ない……あんなカード放置してたら逆転できないじゃないの。

「ターンエンド」

壮太Life 4900

手札5枚

モンスター

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》

《銀河眼の光子竜》

魔法・罫

伏せ×1

《リビングデッドの呼び声》

「あたしのターン！」

意識を指先に集中させ、デッキの鼓動を感じる、あたしがよくお父さんに言われた事。そうしないとデッキとは絶対に分かり合えないって言ってたけど、今なら分かる気がする。このデッキの鼓動が。

「ドロー！」

勢い良く引き抜いたカードを恐る恐る確認する。それはあたしの大好きなカードであり、この窮地を脱する事のできる唯一のカード。

「いくわよ…… 畏発動！異次元からの帰還！ライフを半分にし、除外されている自分のモンスターを可能な限り特殊召喚する！」

美浦Life1200 600

風景の一部が歪み、それを突き破って来る形で除外されていた《サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》がフィールドに特殊召喚される。ライフポイントが3桁になってしまったけど関係ない。

### 《異次元からの帰還》

通常罫

ライフポイントを半分払って発動する。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果で特殊召喚した全てのモンスターはゲームから除外される。

「ツヴァイのモンスター効果発動！手札の魔法カードを相手に見せる事で、自身をサイバー・ドラゴンとして扱えるようにするわ！あたしが見せるのは……パワー・ボンド！」

「パワー・ボンド……！？」

「このカードには、あなたの銀河眼に対する思い入れに負けられないの思い入れがある。あなたのカードに対する思い入れに応える為、あたしはこのカードであんたに勝つ！パワー・ボンド発動！フィールドのサイバー・ドラゴン、そしてサイバー・ドラゴンとして扱うツヴァイを融合！サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！」

2体の機械竜が融合を果たし、誕生したのは2つの首を持った巨大な機械竜。《サイバー・ドラゴン》の進化系の1体、《サイバー・ツイン・ドラゴン》。その攻撃力は《パワー・ボンド》によって倍加される。

《サイバー・ツイン・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 機械族 / 攻2800 / 守2100

「サイバー・ドラゴン」+「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

サイバー・ツイン・ドラゴン

攻撃力2800 5600

「攻撃力5600……！でもパワー・ボンドで融合召喚したら、エンドフェイズに融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けるはず！このターンで倒せないと君の負けだ！」

「倒せないなら、ね。でもあたしは倒す。バトルよ！サイバー・ツイン・ドラゴンでレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに攻撃、エヴォリューション・ツイン・バースト！」

2つの口から光線を放とうとしている《サイバー・ツイン・ドラゴン》の攻撃力は5600。攻撃力2800の《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を戦闘で破壊してもダメージは2800。4900のライフポイントを削り切れない。でも……あたしに残されたたった1枚のカードはそれを可能にする。

「速攻魔法、リミッター解除を発動！機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

「リミッター解除！？それじゃあサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力は……」

「5600の倍……11200よ！」

サイバー・ツイン・ドラゴン  
攻撃力5600 11200

《リミッター解除》の効果、それに《パワー・ボンド》の効果で攻撃力が4倍となった《サイバー・ツイン・ドラゴン》の光線が《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を飲み込み、破壊したこ

とで攻撃力の差分、8400の戦闘ダメージを与え、勝敗は決した。

壮太Life 4900 - 3500

「やれやれ……参った、君の勝ちだ」

Dゲイザーを外し、黒井君は握手を求めてくる。

「いいデュエルだったわ。何度冷や冷やしたことやら」

苦笑いを浮かべながらも、握手に応じるあたし。いや、ホントに一歩間違えたら即仕留められ兼ねないから……人の事言えない？何の事？

「約束よ。精霊界に行く為に協力してもらおうから」

「分かってるよ。多分あの精霊も……納得してくれるよ」

そう言いながら黒井君が取り出したカードを見て、あたしはそのカードの名前を呟く。

「水霊使いエリア……」

「僕が精霊界で出会ったのはこのカードの精霊……僕とエリアはこのカードを通して出会ったんだ」

じゃあそのカードが……。

「このカードが、精霊界へと導いてくれるはずだ」

そういえば龍士達が精霊界に向かう時もカードを持っていたような気がする。人間界と精霊界を結ぶ鍵は、案外身近な所にあったのね……。

あたしは『サイバー』デッキを入れていたのとは違うもう1つのデッキケースを黒井君に投げて渡す。中に入っているのは数十枚のカードの束と、龍士に渡したのと同じ真つ白いカード。

「お礼よ。あんたにならきつと使いこなせるはずよ。その白いカードは、あんたを認めたらきつと力になってくれる」

「このカード達は……!？」

中身を確認して黒井君は驚愕する。それもそのはず、そのカード達は限られた人間の手にしか渡らない貴重なカード達だもの。でもカード達にとっては、レアカードと言われ無駄に丁寧に扱われるよりは自分達に相応しい使い手の元で暴れ回る方がいいに決まってる。

「じゃあね。精霊界に行く準備ができたらまた連絡するから」

これであたしの目的は果たされた。後は精霊界に行くだけ……そこであたしのやるべき事を熟す、それがあたしにできる事よ。

## 2.2・竜の頭の名を持つ機械竜（後書き）

ウィン「今回の最強カードはサイバー・エルタニンです！」

《サイバー・エルタニン》

効果モンスター

星10 / 光属性 / 機械族 / 攻　　？ / 守　　？

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上及び自分の墓地に存在する機械族・光属性モンスターを全てゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力・守備力は、このカードの特殊召喚時にゲームから除外したモンスターの数×500ポイントになる。このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て墓地へ送る。

ウィン「フィールドか墓地から光属性の機械族を全て除外して特殊召喚され、除外した枚数で攻撃力が決まります。たくさん除外することで高い攻撃力を得ることができるとも魅力ですが、追加効果も見逃せません。特殊召喚できれば自分以外の全てのモンスターを墓地に送ってしまう効果は強力で、攻撃力にさえこだわらなければ1体でも光属性の機械族がフィールドか墓地にいるだけで相手モンスターを除去できます。破壊や対象を取る効果に対する耐性を持つモンスターは結構いますが、墓地に送る、対象を取らない効果に強いモンスターはそう多くはありません。攻撃名はドラコニス・アセンション、効果名はコンステレイション・シージュです」

ウィン「サイバーデッキやXYZデッキみたいな光属性の機械族

が多いでは切り札になれるカードだけど本限定のカードで絶版だから入手するなら遊戯王のシングルカードを扱っているお店か友達と交換しないと駄目だね」

次回のキーカード

「リチュア・エアリアル」

ウィンダ「私たちガスタの敵、リチュアのカードね。……ってあれ、ウインは？」

### 23・リチュア・エアリアル(前書き)

前回のおさらい

ウィン「凄いですね……どちらも一歩も退かないデュエルですが、見事美浦さんが勝利を収めました！実は美浦さん、これまでのデュエルは全て1ターンキルで終わらせてるんですよ。実はマスターより強いんじゃない……」

## 23・リチュア・エアリアル

ウィンSide

『風が気持ちいい……』

頬を撫でるように吹くそよ風が気持ちいい。私の好きな風です。見知らぬ場所に来た時はいつもこうやって散歩をします。そうする事でその場所について勉強できますし、何よりその場所特有の風を感じられるんです。普段は気付かないものですが、心を落ち着かせ、心を落ち着かせる事で風の個性が分かります。そう、私達と同じように風にも個性があるんです。それを感じるのが私の何よりの楽しみなんですよ。

『ガスタの里にはべっぴんさんがめっちゃおるんやて聞いたで。楽しみや』

『もう……プチリュウはまた女の人の事ばかり……』

どこに行ってもプチリュウは考える事が同じ。本当に仕方ない使い魔です。

でも確かにカームお姉さん……でいいかな、あの人がかなり美人だったし……。私もあんな人になれたらいいんですけど。いかにも大人というような雰囲気醸し出す女性って憧れます。

『時にウィン、龍士はんから聞いたで。何や妙な記憶があるって』

『記憶……妙かどうかは分からないけど、あるよ?』

そういえば精霊界ではあの変な夢を見ません。何か大切な事があの夢の中にあるはずなんです。夢自体を見られないのではどうしようもありません。

『プチリュウ、何か分かるの?』

『いや、分からん』

ですよ。プチリュウが何か知っているはずありませんよね。聞くまでもありませんでしたけど、聞かないのもダメだと思って聞きましたけど案の定です。

『いやでもな、ワイにも分かる事はあるで』

『分かる事?』

『せや。どんな記憶だろうと、ワイがウインの使い魔を辞める事はないって事や。ウインはウインやからな』

プチリュウ……。

『……ありがとう』

『なんや……別に礼言われる程の事言うてへんやろ。それに』

『それに……?』

『それに使い魔やないと遠慮してスカートの中にも入れへんからな』

……少しでもプチリユウの言葉を嬉しく思ったのは間違いでしたね。でも……記憶の正体が何であれ、私が《風霊使いウイン》である事は絶対に変わらない、そうでありたいと思います。そうじゃなきゃ……私はマスターと一緒に居られないかもしれません。

『ずっとマスターと居られたらいいな……』

『……とことんまで温いのね、ウイン』

突然聞こえたその声には聞き覚えがあります。澄んだ水色の長い髪を揺らし、その声の主は私の目の前に現れました。

『エリア……ちゃん？』

『エリア……？フッフ、今の私はリチュア・エアリアル。生温い頃の私の名前で呼ばないでくれる？』

昔のような明るさはなく、他人を突き放すような冷たい口調、優しさ宿さなくなつた虚ろな瞳……かつてのエリアちゃんの面影はありません。

『人間なんてものは私達精霊を簡単に捨てる。ずっと居られるなんてこと……あるわけないのよ』

『嘘だよ！だってマスターは言ってくれたもん！ずっと一緒にいてやるって……！』

『それが甘いだよ。そんな言葉……信じられるわけないでしょ！』

その時、虚ろだったエリアちゃんの瞳が一瞬潤んだように見えまし

た。ほんの一瞬でしたが、私はその僅かな変化を見逃しません。

『エリアちゃん……誰かに捨てられたの……？』

『っ！？嫌い……嫌い嫌い嫌い！』

エリアちゃんは手にしていた杖を振り上げ、私を殴り付けようとしています。その時の表情は怒ったような口調とは裏腹にどこか悲しげでした。振り下ろされた杖を私も杖を取り出して受け止め、さらにエリアちゃんを問い詰めます。

『どうしてこんな事するの！私の親友のエリアちゃんはこんな事しないでしょ！』

『嫌い……！私はもうエリアなんかじゃない！私はリアルなのよ！』

杖ごと押され、私はバランスを崩し転倒します。その隙を見逃す事なくエリアちゃんは容赦なく杖を振り上げます。

『待てや待てや！ワイが見とるのに何勝手な事しよるんや！』

『くっ………！』

エリアちゃんが杖を振り下ろす前にプチリュウが腕に体当たりし、その衝撃でエリアちゃんの手から杖が離れた隙に私は起き上がり、杖を構えます。

『目障りなのよ………使い魔なんて』

舌打ちをしながらプチリュウを睨み付けるエリアちゃん。以前なら絶対そんな事をしなかったのに……。

『おい……あんさん使い魔はどうしたんや。霊使いやったんならおるはずやろ』

『使い魔……そんなものどつくの昔に儀式の生贄になったわよ。信じてた人に裏切られ、絶望しながら消えてったあいつの顔、傑作だったわ』

『酷い……』

『酷い？私が？そうね、酷いわ。でも私はあの人にやられた事と同じ事をしただけ……信じてた人を裏切ることを』

気が付くと私は杖を強く握りしめていました。もう以前の優しさは微塵も残っていない残酷なエリアちゃんに、怒りを覚えていたのです。

『どうするんやウイン。今のあんさんの親友はゲスの極みや』

プチリュウも怒っていました。同じ使い魔が酷い仕打ちをされたと知れば、怒るのも無理ありません。どうしてそうなってしまったのかはわかりませんが、でも私がする事は……。

『私が……エリアちゃんの目を覚まさせる。エリアちゃん、悪い夢を見てるだけだから』

『面白い冗談ね……やってごらんなさい！』

落とした杖を拾うと、再びエリアちゃんは杖を振り上げ、私に殴り掛かります。でも振り下ろされた杖は私に届く事はなく、その行方は1本の杖によって塞がれていました。それは私の物ではない……別の誰かの物。

『……………止める。これ以上の攻撃はこの私が許さん』

『くっ……………ガスタの賢者……………!』

エリアちゃんの攻撃を受け止めた杖を握っていたのは、フードを被った緑の髪の見知らぬ男性でした。その男性は杖で攻撃を受け止めたまま、エリアちゃんを睨み付けています。

『……………まあいいわ。探す手間が省けた』

『何?』

『停戦協定を結びに来たのよ。ヴァイロンからの協力の要請があった、インヴェルズを始末しなくちゃいけないから』

『成る程な……………厄介なインヴェルズから潰す為に不本意ながら一時的にガスタと協力したい、というわけか』

『そういうことになるわね。まあ私達リチュアからすれば先にガスタを潰しても構わないけど』

『……………いいだろう、停戦協定を結ぶ』

『フッフ……………話の分かる賢者様は素敵よ』

『思ってもいない事を。用が済んだのなら早々に立ち去れ』

精霊界の事情を把握できてない私が事情を理解するよりも早く2人は会話をし、エリアちゃんはその目的を果たしたのか帰ろうとしています。待つて、と声を掛けようとしたが、男性が「これ以上刺激をしてはいけない」と囁いてきたので止めました。私の方を振り返る事なく、自分の帰るべき場所に帰っていくエリアちゃん。どうしても彼女はあそこまで変わり果ててしまったのか、私には分かりません。

それよりも私を助けて下さったこの男性にお礼を言わなければ……と私が頭を下げるよりも早く男性は私を小脇に抱え、歩き出します。

「あ、あの!」

「余り騒がないほうがいいんじゃないのか? 目立つとまずいだろう?」  
そういえば私、ガスタの里では禁忌の存在なんでしたよね……。さっきの事もあるし、これ以上は目立たないようにしたほうがいいみたいです。

龍士Side

「……………」

『……………』

カームが用意してくれた紅茶と和菓子をゆっくり味わおうとしているんだが……落ち着かない。というのも先程から、カームが俺の方を何か言いたげにじっと見つめているのだ。視線を合わせると顔を赤くして目を逸らす、視線をはずすと再びこちらを見つめ始める、この繰り返しだ。

「……………はあ、あいな」

『……………はい？』

なんとなく気まづくなり、とりあえず何か話をしようと声を掛ける。

「なんでさっきから俺の事を見てるんだ？何か俺の顔に付いてたりするか？」

『その……………そうじゃないけど……………』

心なしか頭から煙が出ているような……………何故だ？と、考えている内にカームが目を回して倒れ込む。煙を出し、顔を真っ赤にしたまま気絶してしまっただらしい。……………ますます意味が分からない。

『あーあ……………お姉ちゃんっいたら気絶しちゃって』

このやり取りをどこからか見ていたのか、ウインダが呆れたような表情をしながら来て、赤くなったカームの顔を指でつつんと突いている。

『あ、ホントに気絶してる。大袈裟なんだから』

「ウィンダ、どうしてカームは気絶したんだ？」

『乙女の辛い宿命……かな』

「はあ……？」

乙女の宿命……ウィンダの言っている事は俺にはよく分からないな。そもそも理由の説明になっていないような気がするんだが。

気絶したカームをベットに寝かせた直後、家の扉が開く音がした。散歩に行っていたウィンが帰って来たのだと思っただが、足音は明らかに2人分。誰かを連れて帰って来たのだろうか。

『今帰ったぞ！』

『あ、お父さんが帰って来たみたい』

聞こえて来たのは男の声。それを聞いたウィンダはそう言っただけで玄関に向かつて走っていった。父親が帰って来たのが嬉しいのだろう。ウィンダの父親……という事はファルコンの言っていたウィンダールという男だろうか。なら今会っておかないわけにはいかない、俺はウィンダの後を追う。

『お父さん、お帰りなさい！』

『おっ……抱き着いてお出迎えとはウィンダもなかなか大胆だな』

『あの……そろそろ私を降ろしてもらえますか？』

ウインを片手で抱えながら抱き着いてきたウインダの頭を撫でる男……この男がウインダールなの……か？

『おお、君が龍士君か。ウインダから話は聞いている。私がウインダール、ガスタの賢者と呼ばれている』

『は、はあ……どうも』

ウインダを撫でていた手を離し、今度は握手を求めてくる。ガスタの民から賢者と呼ばれているだけあってか、やはり社交的で良い人という印象を受ける。ウインやウインダ、カームの父親というのも納得できる人物だと一目見ただけで感じた。

「あなたに聞きたい事が山ほどある。特に……ウインの事だな」

『……分かった。すまない、少し龍士君と話がしたい』

俺が何を聞こうとしているのか察したのだろう、ウインダールはウインとウインダにそう言っていると別の部屋で待っているように言った。

『……応接間で話を聞こう。そこでなら遠慮なく話ができる』

### 23・リチュア・エリアル（後書き）

ウィン「今回の最強カードはお休みです。ところで……そろそろメインキャラとなる人を増やすらしいのですが、デッキは何になるんでしょうね」

ウィンダ「TG代行！」

カーム「つまらないわよ……」

ウィン「やっぱりどちらかと言えば味方になるジェムナイトとか、X・セイバー……でしょうか」

次回のキーカード

「ガスタの賢者 ウィンダール」

ウィン「デュエルしないのにキーカードというのも変ですね」

ウィンダ「まあいいんじゃない？この人が活躍しますよー、みたいなのも」

ウィンダール「私の解説をしてくれ……」

## 24・理由(前書き)

前回のおそろい

ウィン「エリアちゃん……どうしてそんなことするの、ねえ！」

ウィンダ「ああー…ウィンは今それどころじゃないか」

## 24・理由

龍士Side

『ほう、ウインの記憶』

「ウインが人間界に現れて、ある男と関わってから様子がおかしくなった。霞の谷のファルコンに話を聞くとあなたがウインの記憶の秘密を握っていると言った。俺がこの里を訪れたのは、あなたにその事を聞く為でもあるんだ」

「ううむ……と顎に手を当てながら唸るウィンドール。真実を言うべきか悩んでいる、といったところだろうか。」

『……あの記憶がある限り、あの子は……ウインは幸せにはなれない、父親として娘を想うが故の苦渋の選択だった』

「……その様子だと、知っているんだな」

『ああ、知っているとも』

ウィンドールは静かに頷き、少しずつ語り始めた。

『ウインダが産まれた時……』

## ウィンダールSide

ガスタの巫女の誕生する日というだけあり、ガスタの里の民が皆注目していたあの日、事件は起こった。カームからウィンダが無事産まれたと知らされると同時にその事は知らされる。

『ガスタの巫女が双子とは……非常にまずい』

巫女の物として備わる力が、双子になる事で分散されてしまい本来の役割を果たしづらくなる。その為巫女にとつての双子はガスタの里の中では禁忌の存在となってしまう。だが私が焦る理由は他にもあった。

『だが何故突然……以前までは双子として産まれるなどとは一言も言われなかった!』

ウィンダと同時に産まれた赤ん坊は本来なら存在しなかったはずの存在だった。というのも、これまで何度か医者を確認させたが、双子であるという事はなかった。それが何故出産直後になって双子になったのか、その理由がまるで分からなかった。

とにかく民に巫女が双子である事を公表するわけにはいかず、やむを得ず霞の谷で暮らすファルコンの元に、ウィンダの名前を肖り『ウィン』と名付けた赤ん坊を預けた。後にすくすくと育っているとこの連絡を受け、父親としてその姿を見たいと思った私は霞の谷まで出向き、ウィンの様子を見に行ったのだが、そこで予想だにしない事件に遭遇する事になる。

『離して！助けに行かないと……お兄ちゃん！』

そこで私が見たのは、いるはずのない兄を助けに行こうとするウィンと、訳が分からぬままそれを止めようとするファルコンの姿だった。

だが問題はそれだけではなかった。ウインは更に『ある言葉』を稀に口にしたり、それを聞いた不審な人物に付け狙われたりと厄介な事が連続して起こっていた。ただならぬ事態である事を察した私とファルコンは、本来あるべきでない記憶をウインが持っている事を知り、ある決意をする。

『ウインダール殿、ウインの記憶をどうするつもりですか。このままではあの子は苦しむだけです』

『分かっている……だがどうする事もできないだろう……！』

苦悩の末、ウインの謎めいた記憶の正体を探らずに、催眠術による記憶喪失状態にしてその記憶を封印する事にしたのだった。放っておけば間違いなく彼女は苦勞する、そう考えての決断だった。

『その後はウインダのはやとちりもあり、ウインと再会する事になったわけだな』

「はやとちり……ああ、あの時のあれか」

まさかいきなり龍土君とウインに襲い掛かっていくとは……そんな事をして力を取り返そうとしても意味がないというのに……私の教育が甘かった証拠だな。

「だが……これで分かった事がある」

『分かった事？それはなんだね』

「世の中は意外と単純だつて事さ」

龍士Side

ウインダールの話を聞く限りでは、あいつの仮説が本当の事になる可能性が高い。初めは冗談だろうと考えていたが、ここまで来ると冗談ではなくなりそうだ。

だがウインダールの話の中でまたしても謎が生まれた。ウインが時々口にしていたという謎の言葉……そしてそれを聞いた不審な人物に襲われる……単にウインの事を考えて記憶を封印しただけとは考えにくい。恐らく……ウインダールはまだ何か隠している。

「一つ質問してもいいか」

『何かね』

「話の中に出てきた、ある言葉というのはどついつ言葉だ？」

この『ある言葉』というのに何か秘密があり、それを守る意味でも

ウインの記憶を封印した、そう考えられなくもない。そしてそれがウインの正体を明らかにする為の重要な手掛かりになる可能性も低くはない。

『ふむ……何せ昔の話だ。実は私も少々記憶が曖昧で、詳しくは思いつけない。だがそれを聞いてウインを狙って来た者がいるほどだ、恐らく何か重要な秘密が隠されていると私は思う』

「詳しく思いつけないか……それは本当か？」

俺は椅子から立ち上がり、ウインダールの前に立ちながら話を続ける。

「あなたのような人物を疑うのは不本意だ。でも妙だと俺は思うな。ああ、これでも俺は嘘を見抜くのは得意な方なんだ。少しでも穴があればたちまち事の真偽が見えてくる。まあそれはいいんだ。ただ……当時ウインが言った言葉を覚えておきながら、その言葉の一部だけを忘れる……取るに足らない事ならまだしもその記憶を封印しなきゃならない程の事だ、簡単に忘れろとは思えないな」

根拠と呼べる物かは微妙なところだが、重要な秘密が隠されていると思うと言っておきながら、何故それを簡単に忘れられるのか。それがガスタの里、あるいは霞の谷にとつて害を及ぼすものであるならば尚更忘れてはいけない、決して曖昧になどならないと考えてもおかしいところはないように思える。本当に忘れたのであれば、それはそれで賢者として里を守る事ができるのかという意味で疑わしくなる。……まあそれはあくまで理屈でしかないわけだし、そんな物はない。

「……この里を愛しているか？」

『突然何を……愛しているに決まっている』

何の関係もない質問のように思えるが、それは間違い。理屈などでは説明できない、ウインダールが嘘をついたという証拠がここにはある。

「里を愛する人が、里を危険に晒すような事を簡単に忘れられるか？」

『……………』

大切なのは里を愛する気持ちがあるかどうか。その気持ちさえあれば、里の平和を守る為危険な事は覚えていられるはず。ウインの記憶の封印を決断したのも、そういった気持ちもあつたからに違いない。

『……………やれやれ、本当に嘘を見抜くのが得意らしいな』

「ということは何か知っている、ということか？」

ウインダールは頷いて答える。

『竜の雄叫び、竜王の目覚め、溪谷に突き刺さる剣を抜き振るえば、世界を動かす力となるだろう……この言葉は霞の谷に伝わる竜王伝説の中に記された物と同じ言葉だ』

「竜王伝説……………」

『大剣を持ち、翼を広げ敵を討つ……………その竜王と呼ばれるモンスター

「君なら知っているはずだ」

「まさか……レヴァティン！」

俺はデッキから《ドラグニティアームズ・レヴァティン》を抜き出し、机に置く。それを見たウィンドールは目を見開き、カードを手取る。

『このカードは……』

「俺の父親の形見だ。少なくとも人間界で発見された1枚だと俺は聞いている」

『……なるほど、1枚は君が手にしていたのか』

手に取っていたカードを机に置き、ウィンドールはさらに話を続ける。

『精霊界ではカードを剣と表現する事が稀にだがあるんだ。それを踏まえて言葉の意味を考えた時、ある予測ができる』

「溪谷にもう1枚レヴァティンのカードがある、ということか」

『そう、そしてその溪谷がどこを指しているのかは、既にわかっているだろうっ』

「竜の溪谷……ドラグニティ達の住む場所か」

レヴァティンのカードはたった2枚しか存在しないとされているが、精霊界に1枚存在していたとは考えもなかった。

『このカードには強力な力が秘められていると言われている。良からぬ事を考えた者がこのカードを手にしよつとして、その在り方を探る為にウィンと接触していたのだらう。その事があって、私達はウィンの記憶をその言葉ごと封印したんだ』

「なるほどな……」

ウィンの記憶を封印せざるを得なくなった理由を聞き、納得した。そのままではウィンも、ドラグニティ達も危険な目に遭う可能性が高い、そこまで考えたうえでの行動を決意したこの男、ウィンダールはやはり賢者と呼ぶに相応しい男だと思う。

「……ところでその記憶の封印、解く事はできるのか？」

事情を知ったうえで、俺はその事を聞いた。確かにウィンダールの考えは間違いではないし、その封印がなければ悪い方向に進んでいたかもしれない。だがその封印された記憶に悩まされているウィンを見ていると、その記憶を封印したままではいけないのではないか、という気になってくる。それが必ずしも良い事に繋がるかは決して言えないが……それでも知らなければいけない事もあるはずだ。

『一応可能だ。しかしその記憶の封印を解いてしまえば間違いなくウィンは苦勞する』

「そんな事は……」

『龍士君。君はウィンがウィンでなくなつたとしても、受け止めてやることはできるか？』

「ウインがウインでなくなる……」

『そうだ。封印した記憶は間違いなくウインの物ではないだろう。それを彼女が受け入れた時……彼女はその記憶の本来の持ち主の全てを取り戻す事になるんだ。そうなった時、果たしてウインはウインであり続ける事ができるだろうか』

「それは……」

『何よりもウインが記憶を取り戻すという事はレヴァティンを手に入れる為の手掛かりが現れるということになる。いくらウインの為とはいえリスクが大きすぎる』

確かにそのままではわざわざ記憶を封印した意味がない。しかし俺も何も考えずにそんな事を考えたわけではない。

「なら……俺が先にレヴァティンを手に入れてしまえばいいんじゃないか？」

レヴァティンのカードを狙う奴から守るには先に手に入れる、竜の渓谷からカードが無くなったと知れば恐らく諦めるだろう。単純な考えだがそれが一番確実だと思う。

『しかしウイン本人の事が……』

「なら本人に聞けばいいだろう……なあ、こそこそするなよ、ウイン」  
微妙に開いているドアに向かって俺は言う。しばらくするとそのドアの隙間から申し訳なさそうな表情でウインがひょっこりと顔を出す。

『ウイン…お前……』

『あ、あの…ごめんなさい。お話、全部聞いちゃいました……』

ウインはぺこりと頭を下げながら謝罪する。遅かれ早かれいずれは話す事を聞いただけなのでそれほど謝らなくてもいいように思うが。

『あ……私、本当の事が知りたいです。そうする事でどれほど苦勞するかわかりませんが、それでも私は私の全てを知りたい……』

『ウイン……』

『怖くないといえば嘘ですけど……大丈夫です。どうなっても私にはマスターがいますから』

そう言つて微笑みながら、ウインは俺の方を見る。

「……というわけだ。俺もウインも決意表明は済ました。後はあなたただけだ」

『……はははは！まったく、龍士君には敵わんなあ！』

突然大声で笑い出すウインダール。

『分かった。君がレヴァティンのカードの確保に成功したあかつきには、必ずウインの記憶を解放する、約束しよう』

「分かった。俺もそれで構わない。それにレヴァティンほどのカードが2枚あれば、きつとあなた達の力にもなれるだろうからな、好

都合だ」

俺はウィンドールと握手を交わし、頷きあう。互いに了承しあった何よりの証だ。そのやり取りを見ていたウインは目を輝かせている。

『ふええ……これぞ男の友情、ですね』

『男の友情……はははは！ウインは良い事を言うなあ！』

『ふえっ！？あ、あんまり頭を撫で回さないで下さいい！？』

ウィンドールがあまりに激しく頭を撫で回すのでウインの髪がくしやくしやになっっている。まさに父と娘、という構図で俺は何となく安心した。初めウインはガスタの里では禁忌の存在だと言われたので心配していたが、ウィンドールもカームもウインを暖かく迎えてくれた。それだけで安心できた。が、ここで1つ問題がある事に気付く。

「……そういえば竜の溪谷まではどう行けばいいんだ？場所はわからないし」

『それなら私が溪谷の者に手紙を送ろう。私の自慢の相棒、イグルに配達させればすぐだ』

ウィンドールにもウインダと同じように相棒となる鳥がいるらしく、その鳥に手紙を運ばせ、ドラグニティの民に迎えに来させるつもりらしい。それはとてもありがたい、前のように迷子になってしまっでは堪らないからな。

その後はウィンドールの厚意で、今日のところはこの家に泊まらせてもらい、出発まで待機することになった。精霊界での3度目の夜、

その日はいつもより清々しかった。何か心の中にあったもやもやが消えたような、そんな感じだった。

『マスター』

窓から人間界とさほど変わらない月を眺めていると、ウィンが声を掛けて来た。

『さっきの話……本当ならやっぱり私は』

「何も言つな。その時になったらはつきりするからな」

『……そうですね』

その後は互いに話をせずただ月を眺めているだけだったが、突然後頭部に枕が襲い掛かって来た事でその静寂は壊される。

『人間界では枕を投げ付けて遊ぶんでしょ？私やってみたくてやってみたくて』

「ウインダ……お前」

俺は目の前に落ちている枕を拾い、構える。

「そこ動くなあ！」

『わわっ！姉妹技、お、お姉ちゃんガード！』

『あら……？何かしはっあっ！？』

あろうことか実の姉を盾にして身を守るウィンダ。そんなことしてカームは怒らないのか……？

『ああ……龍士さんの枕……これで今夜は安心ね……』

……どうやら大丈夫のようだが、別ベクトルで大丈夫じゃなさそうだ。

翌日、出発の準備を済ませ外に出ると、白いドラゴンに乗り俺達を待っている人物がそこにいた。

『風早龍士殿で間違いはないな』

「ああ」

『知ってはいるだろうが、一応名乗らせてもらおう。俺はドウクス。このドラゴンに乗って戦う際はゲイボルグと呼んでもらっても構わない』

今回俺達を竜の渓谷へと連れていってくれるのは、デュエルではもはやお馴染みとなった《ドラグニティ・ドウクス》。ドウクスという名前は指導者を意味しているだけあり、それに恥じない威厳がある。ドラゴンに乗りドラグニティナイトとなればその威厳はより凄まじいものとなることだろう。

『申し訳ない、本来ならば我々ドラグニティの主に対してもう少し喋り方を改めるべきなのだが、職業柄なかなかそうもいかない』

「仕方ないだろ、それは。俺は気にしないからお前も気にすんな。それよりも今日はよろしく頼む」

ドラゴンの背中に乗り目指すは竜の渓谷。俺とウィンは目的を果たすべく大空に飛び立った。

## 24・理由（後書き）

ウィンダ「そういえば解説作ったんだって？」

ウィン「解説じゃない！メモ帳！自爆スイッチの上のボタンを押せば見れます！」

ウィンダ「押し間違えると自爆するんだ……」

ウィン「検索からは除外されていますから、そこらしかアクセスできないはずですが、多分」

カーム「私達留守番……留守番……」

次回のキーカード

「竜の渓谷」

ウィン「ドラグニティが化けた要因の1枚ですね」

ウィンダ「このカードさえあれば実質全てのカードがシンクロモンスターや除去カード、調和の宝札のコストになるよね」

## 25・溪谷の試練（前書き）

前回のおさらい

ウィン「私達はウィンダ達と一度別れ、竜の溪谷を目指します。果たして竜の溪谷で待っているのは何なのでしょうか。……………久々にまともな解説をした気がします」

## 25・溪谷の試練

レヴァティンSide

ガスタの里のウィンダールから連絡を受けた時は驚いた。「あの方はいずれ精霊界を変える救世主が現れる、と言ったが、その時は思いの外早かつたらしい。我々『ドラグニティ』のカードを持つ者……その人物が『あの方』の言う救世主だ。ガスタの巫女いわくガスタの里に現れたという人間は『ドラグニティ』のカードを巧に操り相手を圧倒するらしい。その人間が『あの方』の言った救世主なのだろうか。

『ドウクス、ドウクスはいるか!』

『レヴァティン様、ドウクスは今ウィンダール殿より連絡を受け、人間を迎えに行っております』

『あ、ああ……そうだったな……』

側近であるミスティルに言われ、ドウクスがガスタの里に向かった事を思い出した。

『レヴァティン様、度重なる戦闘でお疲れなのでは……』

『問題ない。それよりも尋ねたい事があるのだ。今こちらに向かっている人間、名は何と言う』

『確か……風早龍士という名です』

『風早……』

風早龍士、その名に我は違和感を覚えた。もしやその人間……………。

『ミスティル』

『はっ、何でございましょう』

我は背中の羽を広げ、立ち上がりながら言った。

『出迎えに向かうぞ。その人間、風早龍士のな』

龍士Side

ドラゴンの背中に乗り空を飛び始めてどのくらいの時間が経っただろうか。見えてきたのは『ドラグニティ』のドラゴン達が飛び交う溪谷……カードのイラスト通りの風景であり、そこが《竜の溪谷》である事はすぐに理解できた。

『着いたぞ。ここが我々ドラグニティの住み処、竜の溪谷だ』

広場らしき場所に着地したのを確認し、俺達はドラゴンの背中から降りる。飛んでいる時は分からなかったが、渓谷には強風が絶えず吹き続けている。そんな中悠々と飛び続けている『ドラグニティ』達がいかに強靱かは言うまでもないだろう。

『ふええ……強風でスカートがめくれそうです』

『何やて！？おい強風！もうちよい強く吹かんかい！』

『……この場所は特に風が強い。くれぐれも飛ばされないように』

「ああ、分かった」

この強風でもやはりドウクスは表情一つ変えず立っている。表情と言っても覆面のようなものを被っている為目元だけしか判断できる要素がないのだが。

『……………？』

歩き出そうとしたドウクスだったが、何か異変に気付いたのか動きを止め、周囲の様子を探っている。強風の中では聴覚で周囲の様子を探るのは困難に思えるのだが、並外れた聴覚を持っているのか、視覚に頼っているのか。

「どうした？」

『……誰が来る』

ドウクスがそう言った途端、空から俺達の目の前に向かって巨大な何かに着地してくる。ただでさえ風が強いのに着地の勢いが合わさ

った事で更に強さが増し、思わず目を閉じてしまつ。しばらくして風が元の強さに戻つたのを感じ、恐る恐る目を開けた俺達の視界が、着地してきた何かを捉える。巨大な羽を折り畳み、オレンジの身体をしたドラゴン、その隣には黄色い身体ドラゴンが立っている。

『ご苦労だった、ドウクスよ』

『レヴァティン様……何故ここに』

『客の出迎えだ。おかしな事ではあるまい』

オレンジの身体をしたドラゴンはやはりレヴァティンらしい。間近で見ればその迫力は凄まじいものだ。ということは隣にいる黄色いドラゴンは《ドラグニティアームズ・ミスティル》だろう。レヴァティンよりも小さいが、それでも俺達よりも大きい。普通の『ドラグニティ』のドラゴンは、ドウクス達がなんとか乗る事ができる程度の大きさだが、レヴァティンやミスティルはそんなレベルの大きさではない。そんなレヴァティンがわざわざ渓谷の広場らしき場所に出迎えとは……。

『お前が風早龍士……だな』

「そつだ」

『……成る程、良い目をしている。闘志に満ち溢れ、カードを手にすれば先の戦略まで見通していそうな……あの方と同じ目だ』

「あの方……？」

意味ありげな言葉を発したが、レヴァティンはそれ以上は語らず、

渓谷の中を案内してやるとだけ言った。

渓谷内を歩いていると、妙に視線を感じる。周囲を見渡すと、『ドラグニティ』達が皆こちらを見ているのに気付く。

『……なんだかこの人達、怖いですね』

『戦争が続いていて皆いらついているのだろう。我々は戦争が続く限り、戦い続けねばならんからな』

「大変なんだな…ドラグニティも」

散々召喚して戦わせているので、何だか申し訳ない気分になってしまふ。特にウィンと出会う前だとまったく『ドラグニティ』を活かしきれていなかったので、さぞ苦労したことだろう。

『……風早龍士、お前がこの渓谷に来た理由はウィンダールから聞いている。我のカード……ドラグニティアームズ・レヴァティンを手に入れるつもりなのだな』

「ああ。先に俺が手に入れれば、他の奴から狙われる事もない。それにレヴァティンが2枚になれば、相当の力を得る事ができる。そうになったら、戦争を止める為の活路が見いだせるかもしれないからな」

『何……？』

レヴァティンは突然立ち止まり、こちらに振り返って言う。

『お前は既に我のカードを持っているのか？』

「持っているけど……ウィンダールからは何も聞いていないのか？」

『いや、聞いてはいたが……カードを見たい、構わないか？』

「ああ、問題ない」

そうやって俺はデッキケースから《ドラグニティアームズ・レヴァティン》のカードを取り出して見せる。目を見開きそれを見つめ、レヴァティンは腕組みをして何かを悩みだす。

『……………風早龍士、お前に見せたい物がある。我の背中に乗れ』

レヴァティンの背中に乗り、連れて来られた場所には1つの石碑だけが建てられていて、他には何も無い。そこに刻まれている文字は見た事のないものなので、恐らく精霊界の文字が刻まれているんだろう。

「これは……………」

『この石碑にはある人物の名前が刻まれている。お前と同じようにドラグニティのカードを操り、精霊界の危機を1度救った男の名前だ』

石碑を優しく撫でながら、レヴァティンは話を続ける。

『男の名は風早龍也。風早龍士……………お前ならその名前に聞き覚えがあるはずだ』

「……………ああ、聞き覚えがあるに決まっている。その人、俺の父さ  
んだからな」

口から出した言葉は、俺自身も驚く程冷静だった。勿論精霊界に俺の父さんの名前が残っている事には驚いた。しかしその驚きをどう表現していいのかわからない、だから口に出した言葉は上辺だけではあるが冷静だったんだろう。

『この石碑は龍也に対しての感謝の気持ちを込めて建てられた物であると同時に、人間と精霊が共にあり続けるというあの方の願いが込められた物だ』

「そうか！お前がさっき言ってたあの方って……………」

『そうだ、我……………いや、我々の主である風早龍也の事だ』

その言葉を聞き、デッキケースに入れられた『ドラグニティ』のデッキを見つめる。石碑を建てられる程『ドラグニティ』に感謝されて、信頼関係を築き上げてきたにも関わらず何故父さんはこのデッキを俺に託したんだろう、今度はそれが不思議に思えてきた。

『あの方は2枚所持していた私のカードの内1枚をこの地に封印した。それをどこから嗅ぎ付けてきて、どうやって来たのかは知らぬが、人間がこの地にやって来てカードを手に入れようとしたが、その度我々がカードを守ってきた。お前もその類の人間であったならば、我はお前を八つ裂きにしてもカードを守るつもりだった。だがその必要はない。あの方の息子がこの地に現れたのは、恐らく何か意味のある事。そしてこの時の為に、あの方は私のカードをこの竜の溪谷に封印したのだろう』

「俺の持っているのも竜の溪谷に眠っているのも、元はと言えば父さんのだったのか……」

『風早龍士。お前がもしあの方と同じように我々を束ねるというのであれば、私のカードを手に入れる為の試練に挑戦する権利を与える』

「試練……?」

『我と戦え。それが私のカードを手にする為の試練だ』

そう言つてレヴァティンが天に向かって咆哮すると、スターダストの時と同じように石版が降ってくる。

『我はあの方と同じデッキで戦う。お前は我だけでなくお前の父親を越える為、この試練に立ち向かうのだ。逃げる事は許されない』

「誰が逃げるか。むしろ面白くなってきた!」

Dゲイザーをセットし、デュエルディスクを展開する。オートシャッフル機能でよくシャッフルされたデッキの上から5枚引き、デュエルの体制に入る。

『ゆくぞ……デュエルだ!』

龍士Life8000

レヴァティンLife8000

レヴァティンは俺の父さんと同じデッキを使うと言っていた。恐らく俺と同じ『ドラグニティ』だ。『ドラグニティ』達の特徴をどれだけ把握しているかが重要になりそうだ。

『我のターン！』

レヴァティンの目の前に石版が降ってきて、手札が6枚になる。

『我はドラグニティ・アキュリスを召喚！召喚時の効果により、手札からドラグニティ・ミリトゥムを特殊召喚し、このカードを装備させる！』

ドウクスと同じように覆面のようなものを被り、短剣を両手に持った女性の鳥人が現れ、アキュリスの上に乗る。

《ドラグニティ・ミリトゥム》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守1200

自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたカード1枚を選択して発動する。選択したカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

『ミリトゥムの効果発動！自分の魔法、罠ゾーンに存在するドラグニティを特殊召喚する！アキュリスを特殊召喚！』

ミリトゥムが飛び立ち、アキュリスの隣に立つ。ミリトゥムとアキュリスが分離し、アキュリスはモンスターとしてフィールドに特殊

召喚される。これでチューナーと非チューナーが揃った。来るか！

『我はレベル4のミリトゥムにレベル2のアキュリスをチューニング！シンクロ召喚！ドラグニティナイト・ガジャルグ！』

赤いドラゴンに乗り、ドラグニティナイトとなったレギオンがレヴァテインの場に舞い降りる。

『ガジャルグの効果発動。ドラグニティ・ファランクスをデッキから手札に加え、その後そのまま墓地に捨てる。我はこれでターンエンド』

『ドラグニティ』の中核となるファランクスが墓地に送られ、レヴァテインのターンは終了する。あのガジャルグを残してしまうと、次のターンには効果でドゥクスやレギオンを手札に加えられる。何としてでも破壊しなくては。

レヴァテインLife8000

手札4枚

モンスター

《ドラグニティナイト・ガジャルグ》

魔法・罫

(なし)

「俺のターン、ドロー！」

手札は悪くない。これなら大丈夫だ。

「手札のファランクスをコストに魔法カード、調和の宝札を発動。ファランクスを墓地に送り、カードを2枚ドロウする」

ファランクスが墓地に送られ、準備が整った。早速次の行動に移る。

「ドラグニティ・ドゥクスを召喚！効果により墓地のファランクスを装備し、さらにファランクスの効果により自身を特殊召喚！」

ドゥクスの隣にファランクス、お馴染みの布陣だが強力だ。

「レベル4のドゥクスに、レベル2のファランクスをチューニング！魔を打ち破る赤槍、騎士と共に戦地を翔ける風となれ！シンクロ召喚！いでよ、ドラグニティナイト・ガジャルグ！」

俺のフィールドにもガジャルグが召喚され、フィールド上で2体のガジャルグが睨み合う珍しい光景になった。

『ほう……ガジャルグを召喚してどうするつもりだ？まさか同士討ちではあるまい』

「そんなはずない！ガジャルグの効果発動！デッキから2枚目のドゥクスを手札に加え、手札から霞の谷の幼怪鳥を墓地に捨てる！」

後続となるドゥクスをサーチする為に手札から捨てられたのは《霞の谷の幼怪鳥》。精霊界に向かう前にデッキに入れておいたカードで、『ドラグニティ』とは関係のないカードだがガジャルグとの相性はとても良い。その訳はもうすぐ分かる。

「墓地に捨てられた幼怪鳥の効果発動！手札から墓地に送られた時このカードを墓地から特殊召喚できる！」

ガジャルグの隣に、小さな鳥が特殊召喚される。このモンスターもチューナー、再びチューナーと非チューナーが揃った。

《霞の谷の幼怪鳥》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 400 / 守 600

このカードが手札から墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「いくぜ！レベル6のガジャルグにレベル2の幼怪鳥をチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「スターダスト・ドラゴンだと!?!」

光の粒子を振り撒き、翼をはためかせながら《スターダスト・ドラゴン》が俺のフィールドに舞い降りる。間近で見れば、その美しさはより一層際立って見える。

『赤き龍の化身すら手にしているというのか。なかなか興味深い』

「そんな事を言っている余裕はあるのか？スターダスト・ドラゴンで、ガジャルグを攻撃する！シューティングソニック！」

『ぐぬつっつ！』

スターダストの口から放たれたプレスがガジャルグを襲い、戦闘破

壊する。その余波、数値にして100のダメージがレヴァティンを襲う。

レヴァティンLife8000 7900

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

スターダストに2枚の伏せカード。後攻としては順調な滑り出しだ。この調子でいきたいところだが相手はレヴァティン。そう簡単にはいかないだろう。

龍士Life8000

手札3枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法・罫

伏せカード×2

『龍士よ……聞こえるか。私だ、スターダストだ』

「スターダスト？」

俺のフィールドで待機しているスターダストが、突然こちらに振り返り話し掛けてくる。

『この戦い、恐らく一筋縄ではいかないだろう。覚悟して戦いたま

え」

「ああ、心配しなくてもそんなことは分かっている。相手はレヴァティンだ。このままじゃ終わらない」

『ふっ……覚悟があるならば良い。私もこの戦いに貢献できるように努力する』

「ああ、頼むぜ」

スターダストがレヴァティンの方に向き直り、デュエルが再開される。レヴァティンの目の前に新しい石版が降ってくる。

『私のターン！私はドラグニティ・ドゥクスを召喚！効果によりフアランクスを装備、フアランクスを自身の効果で特殊召喚！そしてレベル4のドゥクスとレベル2のフアランクスをチューニング！シンクロ召喚、ドラグニティナイト・ゲイボルグ！』

ガジャルグの次はゲイボルグが召喚される。普段は味方の『ドラグニティ』達も今回は牙をむく。だが同時に普段と同じように共に戦ってくれる、複雑な気分だ。

と、そんな事を考えている場合じゃない。ゲイボルグは効果によって攻撃力を上昇させる事ができる。レヴァティンの墓地の鳥獣族は、攻撃力1700のミリトウムと攻撃力1500のドゥクス。つまり最大3700まで攻撃力を上昇させる事ができるというわけだ。スターダストの攻撃力は2500。伏せカードを使い守らなくては破壊されるだろう。

『ゆくぞ、ゲイボルグでスターダスト・ドラゴンを攻撃！』

「畏発動、くず鉄のかかし！相手モンスター1体の攻撃を無効にし、このカードを再びセットする！」

ゲイボルグの槍をかかしが受け止め、再びセットされた状態に戻っていく。

《くず鉄のかかし》は再びセットされ再利用が可能な特性上真っ先に破壊される事が多い。なので破壊効果を無効にできるスターダストとの相性はとても良い。今のように攻撃力を上回るモンスターが攻撃してきても繰り返し返し防御できる可能性が高くなるんだ。

『むう……カードを1枚伏せてターンエンドだ』

伏せカードが現れ、レヴァティンのターンは終了する。

レヴァティン Life 7900

手札3枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

魔法・罫

伏せカード×1

「よし、俺のターンだ！」

ドローしたカードを確認すると、すぐに手札に加える。こういう時に活躍するレギオンは今手札にない。攻撃力が実質3700のゲイボルグが相手ではそう簡単に勝てるモンスターはいない。だが1体だけ、その攻撃力を上回るモンスターがいる事を忘れてはいけない。

「俺は2枚目のドウクスを召喚！効果でファランクスを装備、ファランクスを自身の効果で特殊召喚だ！」

『ドラグニティ』 同士では見飽きてしまうこの光景。だが今は仕方ない事だ。

「レベル4のドウクスにレベル2のファランクスをチューニング！英雄の雷の牙、今こそその姿を現し、仇なす者を打ち砕け！シンク口召喚！轟け、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！」

オレンジのドラゴンの背に乗り、槍を構えているのは先程レヴァテインのフィールドに姿を見せていたミリトウム。ドウクスやレギオンに劣らない風格だ。

「ヴァジュランダの効果発動。シンク口召喚成功時、自分の墓地からレベル3以下のドラゴン族のドラグニティを装備する。装備するのはファランクスだ。そしてこのファランクスを墓地に送る事でヴァジュランダの効果を発動！このターンのエンドフェイズまで、攻撃力を倍にする！」

雷を纏った槍をゲイボルグに向けるヴァジュランダ。攻撃の準備は万端のようだ。

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ  
攻撃力1900 3800

「ヴァジュランダでゲイボルグを攻撃！ライトニングランサー！」

ヴァジュランダがゲイボルグに接近して槍で突こうとしたその時ヴァジュランダの槍が全く別の物に変化し、纏っていた雷の勢いも衰える。

『速攻魔法、禁じられた聖槍。モンスター1体を魔法、畏の効果を受けなくさせる代わりに、攻撃力を800ポイントダウンさせる。このカードをヴァジュランダに対して発動し、さらにゲイボルグの効果発動。墓地のドウクスをゲームから除外し、攻撃力を1500ポイントアップさせる』

### 《禁じられた聖槍》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は800ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罫カードの効果を受けない。

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ  
攻撃力3800 3000

ドラグニティナイト・ゲイボルグ  
攻撃力2000 3500

自分の本来所持している槍ではなくなったせいか、本領を発揮できなくなったヴァジュランダは攻撃力の上昇したゲイボルグに敵わず、返り討ちに遭ってしまふ。

龍士Life8000 7500

ヴァジランダが戦闘破壊されてしまい、他に手は残されていない。手札には伏せる魔法も罫もない。

「ターンエンド……」

スターダストと2枚の伏せカードを残し、俺はターンを終了する。同じ『ドラグニティ』とのデュエルである為、余計に油断ができない。ゲイボルグの効果のコストはまだ増える可能性がある。早く何とかしないと手が付けられなくなるかもしれない。対峙して初めて分かる『ドラグニティ』の強さ、俺はそれを越えられるだろうか。

## 25・溪谷の試練（後書き）

ウィン「今回の最強カードはドラグニティ・ドウクスです！」

《ドラグニティ・ドウクス》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守1000

このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×200ポイントアップする。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

ウィン「召喚時に墓地からレベル3以下のドラゴン族のドラグニティを装備する事ができます。ファランクスを装備してそのままレベル6のシンクロモンスターの召喚に繋げるのがドラグニティの基本戦術ですね。竜の溪谷やクリッターでのサーチも可能で、ファランクスを装備しなくてもフィールドにドラグニティが居れば攻撃力が上昇するのでアタッカーにもなれます。」

ただしファランクスが1度装備カードになる都合上、ドウクスがフィールドを離れる、裏側表示になる、ファランクスに対してサイクロンを発動されるなどというように妨害されやすい為、そうならないようサポートしたりして乗り越えましょう。

普段は顔を隠していますが、素顔はどんな顔なのでしょう。気になるますよね」

次回のキーカード

「ドラグニティナイト・バルーチヤ」

ウィン「マスターがドラグニティ達との結束を示す為召喚したのは  
……」

## 26・結束の力 ドラゲニティナイト・バルーチャ！（前書き）

前回のおさらい

ウィン「2枚目のレヴァティンを手に入れる為、マスターはレヴァティン様の与えた試練に挑戦します！ですがこの試練、一筋縄にはいかなさそうです。マスター、大丈夫でしょうか……」

## 26・結束の力 ドラグニティナイト・バルーチヤ！

龍士Life7500

手札3枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法・罫

伏せカード×2

レヴァティンLife7900

手札3枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

魔法・罫

(なし)

龍士Side

「ターンエンド……」

ヴァジュランダの攻撃は通らず、逆にゲイボルグに返り討ちに遭ってしまい、俺は500ポイントの戦闘ダメージを受けてしまう。伏せカードと《スターダスト・ドラゴン》がフィールドに残っているが、レヴァティンのフィールドには攻撃力が3700にまで上昇できるゲイボルグがいる。さらにここから展開される可能性も十分に

ある事を考えると圧倒的に不利だ。

『ふふ……戦意喪失か？』

戦意を失ったわけではない。だが突破口を見いだせず、悩んでいるのは確かだ。手札は3枚、伏せカードは2枚あるが、この中にゲイボルグ、あるいはゲイボルグの効果のコストとなるミリトウムをどうにかする手段はない。

『マスター……』

俺とレヴァティンのデュエルを見ていたウィンが心配そうに呟く。そう、この試練を乗り越え2枚目の《ドラグニティアームズ・レヴァティン》のカードを手に入れる事はウィンの隠された記憶の秘密を明かす為、つまりウィンの為でもある。ウィンの為を想うなら、このデュエルは絶対に負けられない。

「ウィン、ちよつとこっちに來い」

『ふえっ！？な、何ですか？』

突然俺に呼ばれた事に驚きつつも、ウィンは俺の言葉に頷き、近付いて来る。そこですかさずウィンの頭に手を乗せ、髪がくしゃくしゃになるくらい頭を撫でてやる。

『あ、な、何するんですか！』

「大丈夫。俺は勝つからな」

『こ、答えになってないです、もう！』

怒ったように頬を膨らませながら、くしゃくしゃになった髪を両手で直すウィン。

『……………勝つん…ですよね』

「ああ、嘘はつかない！」

俺の力強い言葉に、ウインは微笑む。ウインに不安そうな顔はさせたくない、その為にも俺はこのデュエル、絶対に勝つ！

『ふふ……………良い目だ。それもその娘のおかげだといったところか』

「ああ。俺には守らなきゃならないものがあるんだ。その為にも俺は絶対に諦めない」

『……………我のターン！』

レヴァテインの目の前に新たな石版が出現し、デュエルが再開される。

『我はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ』

レヴァテインLife7900

手札2枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルク》

魔法・罫

伏せカード×2

攻撃しても《くず鉄のかかし》がある為意味がなく、他に攻撃するモンスターもない為レヴァティンはカードを2枚伏せただけでターンを終了する。

先程は伏せられていた《禁じられた聖槍》を利用され返り討ちに遭った。今回もその類のカードを伏せたのだとしたら、同じ過ちを繰り返さないようにしたい。スターダストがこちらのフィールドにいる為、《聖なるバリア・ミラーフォース》のような破壊系の罠は問題ない。攻撃力減少、除外、手札やデッキに戻す罠ならスターダストは無力な為、警戒すべきものはこれらの罠だろう。さらにこれらの罠を防ぐ事ができたとして、攻撃力が実質3700であるゲイボルグを越えなければならぬ事を考えると、簡単には攻略できそうにない。

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードは《ドラグニティ・ブランディストック》。この状況を打破できるようなカードではない。ここは様子見が必要だな。

「ターンエンドだ」

ブランディストックを手札に加え、そのままターンを終了する。今のままでは動くこうにも動けない、やむを得ない事だ。

龍士Life7500

手札4枚

モンスター

《スターダスト・ドラゴン》

魔法・罾

伏せカード×2

お互いに攻め手に欠けたターンで、優劣も変わらない。だが次のターンからは分らない、いつレヴァティンが動き出すか、動き出せば俺はそれに太刀打ちできるかは全く予想がつかないわけだ。

『私のターン……やっと来たか』

そう言っただレヴァティンは手札から1枚のカードを発動させる。

『フィールド魔法、竜の渓谷を発動！』

《竜の渓谷》が発動され、フィールドが変わる………と思いきや、既に渓谷にいる為か風景は変化しなかった。

それよりも《竜の渓谷》は残しておくとは厄介だ。手札さえ捨てればその手札がドウクスやレギオンに変わってしまうからだ。また普通フィールド魔法は互いに影響を及ぼすのだが、《竜の渓谷》の効果には「自分のメインフェイズ時に」と表記されていて、この場合の「自分」であるレヴァティンしか効果を使用する事ができない。

「そのタイミングで速攻魔法、サイクロンを発動！フィールド上の魔法、罾を破壊する。俺は竜の渓谷を破壊！」

『む……』

《竜の渓谷》の発動にチェインする形で《サイクロン》を発動し、破壊する。

フィールド魔法や永続魔法、永続罾は効果を解決する時にフィール

ド上に存在しない場合その効果が不発となる特性がある。なので《竜の渓谷》の効果発動にチェーンし、《サイクロン》で破壊すれば相手は手札1枚と《竜の渓谷》を失う事になり、アドバンテージを得る事ができる。だが今回の場合は手札を捨てさせるのは危険だった。もし高い攻撃力を持つ鳥獣族モンスターを墓地へ送られた場合、その分ゲイボルグを攻略しづらくなる。だから効果によって手札を1枚捨てさせないよう、発動にチェーンして《サイクロン》を発動した。プレイングミスではなく、意図してやった事だ。

『もう1枚の伏せカードはサイクロンだったか。まあいい、我はそのままターンエンドする』

レヴァテインLife7900

手札2枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

魔法・罫

伏せカード×2

《竜の渓谷》の効果を阻止できたのは大きいが、ゲイボルグはフィールドに存在したまま。不利な事に変わりはない。

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたのは《ドラグニティ・レギオン》だ。これならあのゲイボルグを破壊する事ができる。

「ドラグニティ・レギオンを召喚！」

フィールドに降り立ち、ゲイボルグに向かって拳を構えるレギオン。やる気十分だな。欲を言えば墓地に《ドラグニティ・アキュリス》がいて欲しかったが、いないのなら仕方ない。

「レギオンの効果発動！墓地のファランクスを装備、その後レギオンのもう1つの効果を発動！ファランクスを墓地に送り、ゲイボルグを破壊する！」

レギオンは自分の周囲を飛び回っていたファランクスを掴むと、ゲイボルグに向かって投げ付ける。ファランクスとゲイボルグは衝突すると爆発し、破壊される。これで厄介なゲイボルグはいなくなり、レヴァティンのフィールドにモンスターはいなくなった。攻めるなら今しかない。

「バトルだ！レギオンでダイレクトアタック！」

『ぬおっ………！』

レヴァティン Life 7900 6700

レヴァティンに強烈なパンチをお見舞いするレギオン。与えたダメージは1200、なかなか馬鹿にできないダメージだ。伏せカードは不安だが、スターダストでも追撃しておきたい。

「いけ、スターダスト！ダイレクトアタックだ！」

『承知した！』

スターダストが羽を広げ、レヴァティンに向かって攻撃を仕掛けようとする。だがその時、突如スターダストの目の前に次元の裂け目が現れ、攻撃を仕掛けようとするスターダストを飲み込んでしまった。

『畏発動、次元幽閉。相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターをゲームから除外する』

「……スターダストが防げるのは破壊のみ、除外までは防げない」

#### 《次元幽閉》

通常畏

相手モンスターが攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

警戒はしていたが、少しでも多くダメージを与えようとした結果、想定内の事だ。厄介な畏を使わせる事ができた、そう考える事もできる。

「ターンエンドだ」

スターダストを失ったが、ライフポイントを削る事ができた、それだけで十分だ。

龍士Life7500

手札4枚

モンスター

《ドラグニティ・レギオン》

魔法・罾

伏せカード×1

『スターダストを犠牲にしてまで私の罾カードを使わせにくるとはな……面白い、その策に敬意を示す為、私も切り札を召喚するでしょう。私のターン！』

切り札……？レヴァティンが言うのだから、きっとそれは父さんにとつての切り札でもあるはず、一体どんなモンスターを召喚するのだろうか。

『我は手札抹殺を発動。互いに手札を全て捨て、捨てた分だけデッキからカードをドローする。我は2枚、お前は4枚だ』

《手札抹殺》

通常魔法

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

4枚の手札を墓地に送り、新たにデッキからカードを4枚ドローする。手札交換カード……単なる手札交換だとは思えない。恐らく捨てたカードの中に墓地に送りたいカードがあった、そしてそれこそがレヴァティンの言う切り札の召喚への布石なのだろう。

『ゆくぞ！リバーズカードをオープン、永続罾、リビングデッドの

呼び声を発動！墓地からモンスター1体を特殊召喚する！」

蘇生カード……まさかゲイボルグか！？

『我は先程墓地に送った……我自身、ドラグニティアームズ・レヴァティンを特殊召喚する！』

「なっ……！！」

どうしてゲイボルグじゃないんだ？俺が苦戦していたのを知っているはず、なのに《手札抹殺》を使ってまであえてレヴァティンを特殊召喚したのには何か意味があるというのだろうか。

『レヴァティンは特殊召喚時、自分の墓地からドラゴン族モンスターを選択し、装備する事ができる。我はフアランクスを選択し、装備させる。さらにフアランクスを自身の効果により特殊召喚させる』

モンスターとしてフィールドにいる方のレヴァティンが剣を翳すと、空からフアランクスが出現し、レヴァティンの隣に降り立った。フアランクスを装備し、特殊召喚させて何をするつもりなのだろうか。

『カードを1枚伏せる。……これで準備が整った、レベル8のレヴァティンにレベル2のフアランクスをチューニング！』

「何！？」

レヴァティンとフアランクスが同時に飛び立ち、フアランクスは2つの緑色の輪に変化し、レヴァティンがその中に飛び込む。レベル8とレベル2……レベル10のシンクロモンスター！？

『大地の脈動と共に業火を纏いし3つ首の魔龍が目覚める！全てを焼き尽くせ、シンクロ召喚！トライデント・ドラギオン！』

光と共に現れたのは、3つの首を持った巨大な赤いドラゴン。鋭い眼光で俺を睨み付けてくるその迫力はレベル10のモンスターだけあり凄まじい。Dゲイザーが表示した攻撃力は3000、やはり高い。

『トライデント・ドラギオンのモンスター効果発動。シンクロ召喚に成功した時、自分フィールドのカードを2枚まで破壊する。我は1枚の伏せカードとリビングデッドの呼び声を破壊！』

《トライデント・ドラギオン》はレヴアテインのフィールドに存在していたカード2枚に食らい付き、少しも残さず食べてしまった。

『この効果で破壊したカードの枚数分、トライデント・ドラギオンはこのターンの間だけ通常の攻撃に加え、追加攻撃する事ができる』

「それじゃあ……！？」

『トライデント・ドラギオンは3回の攻撃が可能となった』

攻撃力3000の3回攻撃、全てダイレクトアタックならライフポイントが無傷でもあつという間に削り取られてしまう……何て豪快なモンスターなんだ。

《トライデント・ドラギオン》

シンクロ・効果モンスター

星10 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2800

ドラゴン族チューナー+チューナー以外のドラゴン族モンスター1体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。このターンこのカードは通常の攻撃に加えて、このカードの効果で破壊した数だけ1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

『バトルだ！トライデント・ドラギオンでレギオンに攻撃！トライデント・バースト！』

「畏発動、くず鉄のかかし！1度目の攻撃は無効だ！」

レギオンの前にかかしが出現し、迫り来る炎を受け止める。

『だがトライデント・ドラギオンにはまだ2回の攻撃が残されているぞ！やれ、トライデント・セカンドバースト！』

1度目の時とは別の頭から炎が吐き出され、レギオンを焼き尽くしてしまう。《くず鉄のかかし》が発動できるのは1度だけ、2回目以降の攻撃を止める術はない。

「くづつ………」

龍士Life7500 5700

『まだ終わらぬ！トライデント・ドラギオンの3回目の攻撃だ！ト

ライデント・サードバースト!」

「ぐああああ!」

迫り来る炎を止める術はない、3000の攻撃力を持った炎を浴び、俺のライフポイントは一気に削られてしまった。

龍士Life5700 2700

『ターンエンドだ』

レヴァテインLife6700

手札1枚

フィールド

《トライデント・ドラギオン》

魔法・罫

(なし)

《トライデント・ドラギオン》の連続攻撃効果が適応されるのは召喚ターンのみ、以降は1度のみ攻撃だが……残された俺のライフポイントは2700。攻撃力3000の《トライデント・ドラギオン》の攻撃を受けると0になってしまう。絶対に攻撃を受けられない。

「俺のターン……ドロー!」

俺は……負けられない！

「墓地の風属性をゲームから除外することで、風の精霊ガルーダを特殊召喚！」

墓地からドウクスを取り出し、既に除外されているスターダストを入れてあるデッキケースの中になってしまう。そうして特殊召喚したモンスターは、鳥の顔をした鳥人だ。

《風の精霊 ガルーダ》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1600 / 守1200

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する風属性モンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。相手のエンドフェイズ時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更する事ができる。

「さらに手札からチューナーモンスター、デルタフライを召喚！」

ガルーダの隣に現れたのはワイバーン型の小さなドラゴン。

《デルタフライ》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻1500 / 守 900

1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してレベルを1つ上げる事ができる。

「デルタフライの効果発動！1ターンに1度、自分以外のモンスター  
のレベルを1つ上げる事ができる！俺はガルダのレベルを5に  
するー！」

「レベル8……」

「レベル5のガルダにレベル3のデルタフライをチューニング！  
デルタフライが3つの輪になり、ガルダがその中に入り込む。

「風を纏いし勇士達よ、竜騎士の誇りの元に集結せよ！シンクロ召  
喚！結束の力、ドラグニティナイト・バルーチャ！」

ゲイボルグやガジャルグ、ヴァジュランダよりも巨大な緑の竜を従  
えた竜騎士が、光と共に現れる。

《ドラグニティナイト・バルーチャ》  
シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1200

ドラゴン族チューナー+チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上  
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「  
ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ  
選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。  
このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」  
と名のついたカードの枚数×300ポイントアップする。

バルーチャはフィールドに降り立つと共に、手にしている槍を天に

掲げる。これこそバルーチヤが効果を発動する合図だ。

「バルーチヤのモンスター効果発動！このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、墓地のドラゴン族のドラグニティを任意の数装備する！墓地のファランクス、ブランディストック、ガジヤルグ、ヴァジュランダを装備する！」

『ブランディストックだと？そんなカードいつ……』

「お前が手札抹殺を発動した時に墓地へ送られたんだ！ファランクス、ブランディストック、ガジヤルグ、ヴァジュランダ！お前達のを貸してくれ！」

バルーチヤの周りにファランクス、ブランディストック、ガジヤルグ、ヴァジュランダが出現したかと思うと、緑色の光となりバルーチヤの槍に吸い込まれていった。

「バルーチヤの攻撃力は、このカードが装備しているドラグニティのカード1枚につき300ポイントアップする。バルーチヤが装備したのは4枚、よって攻撃力は1200ポイントアップし、3200だ！」

ドラグニティナイト - バルーチヤ  
攻撃力2000 3200

仲間の力を受け継ぎ、パワーアップしたバルーチヤの攻撃力は3200。《トライデント・ドラギオン》の攻撃力3000を上回った。

「俺にとってバルーチャはドラグニティを束ねる騎士。俺はこいつのようにドラグニティ達と一緒に戦って、守りたい者を守り抜く！その為にもレヴァティンの力が必要なんだ！」

『……………』

「バトル！バルーチャでトライデント・ドラギオンを攻撃！ユナイテッド・スピアー！」

俺の指示を聞きバルーチャは《トライデント・ドラギオン》に果敢に向かつていく。3つの頭から炎を吐き出しバルーチャを近付けないようにするも、その中をかき潜り接近したバルーチャが《トライデント・ドラギオン》の腹部を槍で貫いた。腹部を貫かれた《トライデント・ドラギオン》は力尽き崩れ落ちる。

レヴァティン Life 6700 6500

「バルーチャはブランディストックを装備しているから、2回攻撃が可能だ！いけ、バルーチャ！ダイレクトアタック！」

《トライデント・ドラギオン》を撃破したバルーチャはそのまま勢いをつけてレヴァティンに体当たりする。体当たりを受けたレヴァティンは少しバランスを崩すも、すぐにまた立ち上がる。

レヴァティン Life 6500 3300

「よし、ターンエンド！」

ライフを大きく削り、なんとか差を縮める。しかし安心はできない、俺のライフポイントはいつ削り切られるか分からないという事には変わりないんだからな。

龍士Life 2700

手札3枚

モンスター

《ドラグニティナイト・バルーチヤ》

魔法・罫

伏せカード×1

《ドラグニティ・フアランクス》

《ドラグニティ・ブランディストック》

《ドラグニティナイト・ガジャルグ》

《ドラグニティナイト・ヴァジュランダ》

『やはりあの方の息子だ。あの方がこの試練に持たせた意味を既に理解している』

「意味？」

『そうだ。あの方は、私のカードを手にする人物はカードとの絆を大切にし、守るべきものの為に力を奮う、そのような人物にしたいと願い、この試練を考案したのだ。それを理解するとはな』

「父さんが……そうか」

父さんはこうなる事を予期して、俺にドラグニティ達を託し、あの言葉を俺に言ったのかもしれない。大切なものはとことん守れ……か。

『……………私のターン、我は大嵐を発動。フィールド上の魔法、畏力ードを全て破壊する』

暴風が伏せられている《くず鉄のかかし》と装備カード状態のドラグニティ達を吹き飛ばし、破壊する。それによってバルーチアの攻撃力は元に戻ってしまった。

ドラグニティナイト・バルーチア  
攻撃力3200 2000

『さらに我は魔法カード、死者蘇生を発動。墓地から特殊召喚するのは我の墓地に眠るゲイボルグだ！』

疾風と共に、ゲイボルグが再びレヴァテインのフィールドに姿を現す。

『ゲイボルグでバルーチアを攻撃だ！そしてそのダメージステップ時、ゲイボルグの効果を発動！ミリトウムを墓地から除外し、攻撃力を1700ポイントアップさせる！』

ドラグニティナイト・ゲイボルグ  
攻撃力2000 3700

力を高めたゲイボルグの前にはバルーチヤも無力、呆気なくやられてしまう。

龍士Life2700 1000

『我はこれでターンエンドだ』

レヴァテインのフィールドに蘇ったゲイボルグ、恐らく《手札抹殺》の時に鳥獣族モンスターが墓地に送られているはず、それを考慮した上で俺がやるべき事は限られている。

レヴァテインLife3300

手札1枚

フィールド

《ドラグニティナイト・ゲイボルグ》

魔法・罫

(なし)

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを見て、俺は無意識の内に笑みを浮かべていた。このタイミングでの最高のドローだったからだ。

「俺は3枚目のドウクスを召喚！効果により墓地のファランクスを装備、ファランクスは自身の効果で特殊召喚！レベル4のドウクス

にレベル2のファランクスをチューニング！」

俺のエクストラデッキに残された相棒、それを召喚する時が来た。

「疾風纏いし魔槍の竜よ、邪を貫き天を舞え！シンクロ召喚！薙ぎ払え、ドラグニティナイト・ゲイボルグ！」

俺のフィールドに舞い降りた白の竜騎士、ゲイボルグはレヴァアティンのフィールドにいるゲイボルグと睨み合う。

「いくぜ、バトル！ゲイボルグでゲイボルグを攻撃！」

槍を構え、自分自身に向かっていくゲイボルグ。互いに激しい攻防を繰り返す中、両者の槍が同時に緑色の光を放ち始める。

「ゲイボルグの効果発動！手札抹殺の時に墓地に送られた霞の谷のファルコンをゲームから除外し、攻撃力を2000ポイントアップだ！」

「ならば我もゲイボルグの効果により、墓地の霞の谷のファルコンをゲームから除外する事で攻撃力を2000ポイントアップさせる！」

ドラグニティナイト・ゲイボルグ

攻撃力2000 4000

ドラグニティナイト・ゲイボルグ

攻撃力2000 4000

互いに《霞の谷のファルコン》を墓地から除外した事で攻撃力が4000となったゲイボルグがすれ違い様に槍で突く。互角の勝負だったが、最後には相打ちで両者が倒れる事となった。これで互いにフィールドはがら空き、だがまだ俺のターンは続いていて、手札が3枚残されている。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

俺のライフポイントは1000。この伏せカードが頼みの綱となるわけだ。

龍士Life1000

手札1枚

モンスター

(なし)

魔法・罨

伏せカード×2

『私のターン！我はドラグニティ・アキュリスを召喚！』

レヴァテインが召喚したのはアキュリス、攻撃力は1000。攻撃を受ければ俺の負けだ。

『止めだ！アキュリスでダイレクトアタック！』

「まだ終わらせない！速攻魔法、月の書を発動！モンスター1体を裏側守備表示にする！」

攻撃をしようとしたアキュリスが姿を消し、裏側守備表示になってしまう。これで攻撃がキャンセルされ、ライフポイントを守る事に成功する。

### 《月の書》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

### 『ターンエンド』

レヴァテインLife3300

手札1枚

フィールド

セットモンスター（ドラグニティ・アキュリス）

魔法・罫

（なし）

「俺のターン、ドロー！俺はデブリ・ドラゴンを召喚！」

スターダストをデフォルメ化させたようなドラゴンを召喚する。

「デブリ・ドラゴンの効果により……」

効果の発動宣言をしながら、ウィンにアイコンタクトを送る。それ

を受け取ったウインは満面の笑みで頷きながら、俺のフィールドに向かって来る。

「墓地から風霊使いウインを特殊召喚！」

ウインもまた《手札抹殺》の際に墓地に送られていたカード。またしても《手札抹殺》を利用する形となった。

『マスター！』

「分かってる。俺と戦ってくれるのはドラグニティ達だけじゃない。俺は風霊使いウインとデブリ・ドラゴンを墓地へ送り、デッキから憑依装着 - ウインを特殊召喚！」

ウインもまた俺と共に戦ってくれる仲間だ、俺はそう思っている。だから……。

「いくぞ、ウイン！裏守備モンスターを攻撃だ！憑霊術 - 鎌鼬！」

『が、頑張ります！てえい！』

霊術で作り出した空気の刃が、姿を現したアキュリスを切り裂き破壊する。

「憑依装着をしたウインには貫通能力がある。アキュリスの守備力は800、よって1050のダメージをお前に与える！」

『ぬじっ……』

レヴアテインLife3300 2250

アキュリスを破壊し、戦闘ダメージも与えた。これで勝ち筋が見えてきた！

「リバースカードオープン、リビングデッドの呼び声！墓地からゲイボルグを特殊召喚！」

残されていた伏せカードは《リビングデッドの呼び声》。これを発動してゲイボルグを特殊召喚した事で、勝利が確定した。

「ゲイボルグでダイレクトアタック！ダメージステップ時、墓地のドウクスを除外し攻撃力を1500ポイントアップ、終わりだ！ストーム・ランス！」

ドラグニティナイト - ゲイボルグ  
攻撃力2000 3500

緑色の光を纏ったゲイボルグの槍がレヴアテインを突き、ライフポイントを奪い切る。このデュエル、俺の勝ちだ！

レヴアテインLife2250 - 1250

『良いデュエルだったぞ、風早龍士。お前は見事試練を乗り越えた。約束だ、私のカードを渡そう』

そう言うとレヴァティンは石碑を押し始める。押された石碑が後ろにずれ、石碑のあった場所には窪みがあった。そこに入れられていたのは小さな箱、この中にレヴァティンのカードが入っているのだろうか。早速開けてみると、確かにそこにはレヴァティンのカードが収められていた。

「これが2枚目の……ん？」

箱からカードを取り出そうとすると、レヴァティン以外にも何かカードが入っている事に気付く。気になって取り出してみると、レヴァティンの後ろにもう1枚、カードが重なっていた。

「これは……トライデント・ドラギオン？」

『恐らくお前が手に入れる事を予期して、レヴァティンと共にこの中に入れたのだろう』

レヴァティンの後ろの白いフレームのカードは、父さんの切り札だったシンクロモンスター《トライデント・ドラギオン》だった。何故父さんがこのカードを入れたのかは分からない。だがここにある以上は何かしらの意味があるに違いない、そう思った俺は2枚目のレヴァティンと共に《トライデント・ドラギオン》をデッキケースに入れた。

『試練を乗り越えたお前は我々の主と認められた。あの方と同じようにな』

「ああ。そして俺は……」

『……………！危ない、マスター！』

俺の言葉を遮るようにウィンが叫ぶと、レヴァティンが剣で何かを切り裂いた。真っ二つになっていたのは小さな悪魔、俺を狙って来たのだろうか。

「おやおや……流石は溪谷の龍王、反応が早い」

『お前は……！』

「に、人間！？」

掛けている眼鏡をくいと上げながら、見知らぬ男が俺に近付いてくる。

「ふふ……驚きでしょう。自分以外の人間が精霊界にいる事が」

「お前は…誰なんだ？さっきの悪魔はお前がけしかけたのか？」

「1度に2つ質問するのは感心しませんねえ。まあいいでしょう、答えて差し上げましょう」

男は不気味な笑みを浮かべながら言う。

「私の名前は神名轟貴。魔轟神を統べる者です」

「魔轟神……！？」

『龍士、そいつから離れる！我の剣で真っ二つにしてやる！』

俺が制止する前にレヴァティンが男、神名轟貴に向かって剣を振り下ろす。このままでは言葉通り真っ二つになってしまっ、そう思ったが実際にはそうはならなかった。

『ば、馬鹿な。我の剣が指1本で……』

「物騒なものを振り回すのはいけませんよ？フッフ……」

自分の背丈の何倍もある剣を指1本で止めてしまっ……常人だとは思えない。どうなってるんだ……？

「もうじき魔轟神が侵攻を始めます。今日はその為の宣戦布告を」

『宣戦布告だと……？』

「ええ、ですからそのおつもりで。今日のところはそれだけです。何もせずに退きましょっ」

『ま、待て！』

レヴァティンが呼び止めようとするが、神名は『魔轟神』と思われる悪魔に掴まり、どこかへと飛び去っていった。あの男……一体何者なんだ。

## 26・結束の力 ドラグニティナイト・バルーチャ！（後書き）

ウィン「今回の最強カードはドラグニティナイト・バルーチャです！」

《ドラグニティナイト・バルーチャ》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守1200

ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたカードの枚数×300ポイントアップする。

ウィン「仲間の力を借りて、高い攻撃力を得るドラグニティの騎士です。レベル8と一見ドラグニティで出しやすいように見えますが、チューナーはドラゴン族、それ以外は鳥獣族の指定があるので実はなかなか出しづらいモンスターです。

装備するドラゴン族のドラグニティにレベル指定はないので、ドラグニティナイトの仲間も装備できます。装備したカードはミリトウムなどで利用する事も可能なので、召喚さえできれば戦略の幅が広がりますね。

ちなみにドラグニティナイトで唯一ウルトラレアでないカードで、並べるとやや不遇に見えるのが残念です。英語版なら逆にヴァジュランダにだけシークレット仕様がなかったりしますけど」

次回のキーカード

「魔轟神獣ケルベラル」

ウィン「あ、ワンちゃんですね！このワンちゃん顔が3つあって表情豊かです。そういえばフウちゃん、元気でしょうっか……」

## 27・機械天使と少女（前書き）

前回のおさらい

ウィン・ドラグニティ達と結束し、試練を乗り越えたマスターは2枚目のレヴァテインを入手しました！しかしそこに現れる謎の男性。一体この男性は何者なのか……気になりますけど今回はまた別の話です！」

## 27・機械天使と少女

美浦Side

あたし達が精霊界に向かう日が来た。黒井君が言うには、精霊界では自分の持つデッキが武器になる事もあるという。どういう意味かはよく分からないけど、あちらの世界でもデッキは最高の相棒となりうると思うのが正しいと思う。『サイバー』デッキは勿論、予備となるペンギンデッキの調整も念入りにする必要があった。強力なナンバーズを相手にいつも一緒に戦ってくれる『サイバー』モンスター達、今度はどんな相手と戦うか分からないけど、この子達と一緒になら負ける気がしない。

『主、そろそろ時間ではないのか？』

「あ……そうね。行かないと」

腰のデッキケースにデッキを収め、出発の準備をする。でも家から出る前に、私にはやる事がある。

家の和室にある仏壇の前で正座し、手を合わせる。

「お父さん……ちょっと出掛けてくるから」

少しでも長い間出掛ける時はいつもこうやってお父さんに向かって手を合わせる。お母さんが再婚した今もお父さんの事は絶対に忘れないでいる習慣よ。

『主……』

「分かってる。行く」

最後にもう1度手を合わせ、仏壇の前から離れる。

「あら、こんにちは」

家から出て黒井君の家に向かう途中、あたしは籠土のお母さん、達子さんに出会う。この間ウインが連れて来たという犬を散歩させているらしい。流石に犬まで精霊界に連れていくわけにはいかなかったんだろうか。

「ごめんなさい達子さん、あたし急いでるんで！」

「あら、そうなの。悪いわね、引き止めちゃって」

「いえ、それじゃあ！」

達子さんに軽くお辞儀し、あたしはもう1度走りだす。

「……………わん！わん！」

「あら、フウちゃんどうかしたの？」

荒川さんに頼まれ、精霊界に向かう事になった。ただそれは簡単に決めた事ではなく、デュエルする事で決められた事。エリアとの約束があつたが、デュエルを通して決めた事なら、カードの精霊である彼女も納得してくれるだろう。

記憶が正しければ、力のあるカードで人間界と精霊界を繋ぐ事ができるはず。僕の場合それはこの《水霊使いエリア》のカードだったけど、今回もあの時と同じようにこのカードで精霊界に行く事ができるのだろうか。

「エリア……頼む」

エリアのカードを眺めていると、家の呼び鈴が鳴る。荒川さんが来たようだ。僕は準備をして、玄関へと向かっていった。

荒川さんを家の庭に連れて来て、精霊界に向かう為の準備を着々と進めていく。エリアのカードを取り出し、宙に掲げるだけの単純な動作、でもこれで精霊界への道が開かれるはずだ。

「……本当に精霊界に行く事ができるの？」

「僕とエリアとの絆が失われてなければ……」

祈るようにしてカードを掲げ続けるも、精霊界への道が開かれる様子は無い。やっぱりあの時のようには行かないのだろうか……諦めかけたその時、家の庭に犬の鳴き声が響く。家には犬はいない、一体どこから……。

「え、あの子……龍土の家の犬よ！」

「何だつて!？」

驚く僕達をよそに、犬は庭に入り込んで来て遠吠えを始める。すると突然空間が捻曲げられ、次元の裂け目が作り出され、さっきまで少しも開く様子を見せなかった精霊界への道が開かれたんだ。突然やってきて精霊界への道を開いた犬の正体を探る前に、犬は裂け目の中に飛び込んでしまう。

「来いって事……?」

「行こう、荒川さん。あの犬の正体が何であれ、精霊界への道を開いてくれたんだ。行くしかない」

「ええ、そうね！」

迷う暇はない、犬の開けた裂け目の中に僕達は飛び込んだのだった。

数年ぶり、2度目の精霊界。しかしその雰囲気は以前とは比べ物にならないくらいぴりぴりとしていた。そんな中僕達がたどり着いたのは《天空の聖域》と呼ばれる、天使族の多く住む場所。天に浮か

ぶそこはまるで地上の世界から隔離されたような場所だった。

「天空の聖域か……龍土君は居そうにないけど」

ドラグニティ、そしてウインとは何の関係もない場所である事を考えられるとこの場所に龍土君がいる事は考えにくい。とすれば僕達がこれからやるべき事はたった1つ、龍土君のいる場所を見つけ、合流する事だけだ。

「あ、あれ！」

荒川さんが指差した方向を見ると、1匹の犬がこちらを見ていた。犬と言っても普通の犬ではなく、顔が3つある『ケルベロス』と呼ばれる大型のモンスターなんだけど、まるで僕達を待っているかのようにじっとこちらを見たまま動かないでいる。

「こんなところに犬なんて……まさか龍土の犬じゃないわよね？」

「そんな馬鹿な。龍土君の犬はどう見ても普通の犬だった。あの犬のように顔が3つもなかったはず」

「でもここに犬がいるのは明らかに場違いだし、それならそれで龍土の犬はどこに行ったのよ」

「分からない。でももしあの犬が龍土君の犬なんだとしたら、どうして僕達をここに連れて来たんだろう」

そう考えているうちに、今まで動かなかった犬が突然動き出し、どこかへ向かっていき始めた。あの犬がもし龍土君の犬でさつき精霊界の道を開いた事も踏まえて考えると、僕達を案内しているように

思えてくる。信用できるかどうかは分からないけど、頼ってみる選択をするのも悪くはないかもしれない。僕は荒川さんの了承を得て、犬の後を追う事にした。

僕達が後から付いて来ているのを確かめるように振り返りながらも、犬はどこかへと向かい続けている。天使達で賑わう通りを抜けたりにしているうちにやがてその犬はある1つの神殿のような建築物の前で立ち止まり、鳴き始める。どうやらここがこの犬が案内しようとしていた場所のようだ。

「あれ、ケルちゃん！」

『わんっ！』

神殿の中から出てきたのは驚く事に人間、しかも小学生くらいの女の子だった。女の子は犬を抱き抱えると、僕達の方に向かって律儀にもお辞儀をする。

「お兄ちゃん達、この子に連れて来られたんだよね？」

「そうだけど……君は一体」

『光、初対面の人にはまず自己紹介をしるといつも言っているだろう』

女の子の背後に突然現れたモンスターはそう言って女の子を注意した。

そのモンスターは《天空の聖域》にいるくらいなんだから天使族のモンスターなんだろうけど、その姿は僕達人間が抱く天使のイメージとは掛け離れた、機械を思わせる姿であり、ギリシャ文字のオメガ（ $\omega$ ）を彷彿させる。

「私は名本光！ヴァイロン達の友達なの！」

『ヴァイロン・オメガだ。ある事情で光の面倒を見る事になったが……それは話す必要はないだろう』

「あたしは荒川美浦。で、こっちが黒井壮太、よろしくね、光ちゃん」

自己紹介くらいは自分でするつもりだったのに、荒川さんにまとめて紹介されてしまった。

それにしてもこの小学生の女の子、《ヴァイロン・オメガ》が側にいる事を考えると、『ヴァイロン』使いだろうか。

「あ、後この子は魔轟神獣ケルベラル！」

『わんっ！』

見慣れない姿だったけど、この犬もれっきとしたモンスターだったようだ。しかし見る限りでは天使族ではなさそうで、《天空の聖域》では浮いて見えそうだ。

「ってこんな事してる場合じゃなかった！龍土君と合流するなら一先ず地上に降りないと！」

呑気に小学生と自己紹介をし合っている場合ではない。一刻も早く龍土君と合流しなければならず、その為に龍土君のいる場所を知らなければならぬ。しかし手掛かりも何も無い状態で、広い精霊界を捜すのは無謀だ。

「りゅーし……あ、その人知ってる！ドラグニティ使ってるインヴェルズや魔轟神と戦おうとしてる人だよね！」

「君、龍士君を知ってるのか!？」

「うん！えつと……その人確か今竜の渓谷にいるよ！」

《竜の渓谷》……可能性としては十分にある。でも何で彼女が龍士の事を知っていて、しかも居場所まで特定できるのか。

『この神殿の奥にある鏡からは地上の様子が伺える。光はその龍士とやらが気に入ったのか、その鏡から様子を見ていたのだろう。悪くは思わないでほしい』

「いやいや、むしろありがたいくらいよ！ねえ、黒井君！」

「え、ああ、うん。ありがたいのは確かだけど……問題はまだ解決されていない」

むしろ1番の問題点だとも言える事、それは地上に降りる為の方法。天使族のモンスター達は自分で降りる事ができる為、わざわざ何かしらの方法を用意する必要はない、つまり僕達人間がここに来た場合は、降りる手段がないということになる。目的地は分かっても移動する手段がないならどうしようもない。

「ここから地上に降りるにはどうすればいいんだろうか。まさか飛び降りるわけにもいかないし」

「くすつ……お兄ちゃん、おかしな事言うね」

そう言つて光は無邪気に笑つてみせる。

「オメガ、この人達を乗せて地上に降りること、できるよね？」

『可能だ』

成る程、《ヴァイロン・オメガ》の力を借りて地上に降りる事ができるならこれ以上ありがたい事はない。ぜひとも協力してもらいたいとは思つけど……。

「でも、ただではない」

「あ、ばれちゃつた？うん、代わりに私からもお願いがあるの」

そのお願いの程度次第では、考え直す必要があるかもしれない。でも又とないチャンスなのでそうならない事を祈りたいところ。一体何を頼まれるんだろうか。

「私とデュエルして！ここじゃ誰も相手してくれないから退屈なの！」

「デュエルか……」

勝ち負けはこだわらないようで、要求はただデュエルをするだけ。なら迷う必要はない。

「分かつた。デュエルしよう」

「やった！お兄ちゃんがデュエルしてくれるの？」

僕が頷いて答えると、光は全身で嬉しさをアピールする為かぴよんぴよんと跳びはねる。新デッキのテストプレイも兼ねて、相手をしてあげるのも悪くはないだろう。

デッキケースからデッキを取り出し、セットする。光もやる気満々だし、いいデュエルができるといいな。

「私、強いからね！あつという間にお兄ちゃんを倒しちゃうかもよ！」

「それは凄いな。でも……やるからには負けない！」

オートシャッフルが完了し、完全に準備が整う。さて、小学生デュエリスト、光の実力はどれほどのものだろうか。

「さあ、デュエルだ！」

## 27・機械天使と少女（後書き）

次回予告的な何か

ウィン「小学生デュエリスト、名本光さんはヴァイロンを巧みに使いこなして攻めていきますが、黒井さんも負けてはいません！新たなカード達で対抗します！」

次回のキーカード

「ヴァイロン・シグマ」

ウィン「攻撃力は低めのシンクロモンスターですが、その効果は強力です！光さんはこのモンスターでどんなデュエルをするのでしょうか」

## 28・星の観測者（前書き）

前回のおさらい

ウィン「地上だけじゃなく天上にも世界は広がっているんですね…  
…そこにいるのはヴァイロンと呼ばれる、地上では神に等しい存在  
の天使達。彼らを操るのは小学生の女の子だそうですけど、その実  
力はいかに、です」

## 28・星の観測者

壮太Side

デッキの上からカードを5枚引き抜き、1枚1枚確認していく。組んだばかりのデッキなので手札事故が心配だったけど、問題なかった。

「僕のターン、ドロー！」

先攻なので、その後追加でさらにドローし手札は6枚。やることはすぐに決まった。

「召喚僧サモンプリースト、召喚！」

年離れた召喚僧がフィールドに現れ、すぐに守備の体制に入る。

《召喚僧サモンプリースト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻 800 / 守 1600

このカードはリリースできない。このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、自分のデッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻撃する事ができない。

「サモンプリーストは召喚に成功した時、強制的に守備表示になるんだ」

低い攻撃力を晒す事なく、効果を活かす事ができるのは大きなメリットだ。そしてその効果もかなり強力なものを持っている。

「サモンプリーストの効果を発動。手札の魔法カードを1枚捨てる事で、デッキからレベル4のモンスターを特殊召喚できる。僕はデッキから終末の騎士を攻撃表示で特殊召喚！」

サモンプリーストが呪文を唱え魔法陣を作り出すと、そこから鎧を纏った黒い騎士が出現し、剣を構える。

#### 《終末の騎士》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1400 / 守1200

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから闇属性モンスター1体を選択して墓地に送る事ができる。

「終末の騎士の効果発動。デッキから闇属性モンスター1体を墓地に送る。僕はデッキからハウンド・ドラゴンを墓地に送るよ」

「ハウンド・ドラゴン？」

#### 《ハウンド・ドラゴン》

通常モンスター

星3 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻1700 / 守 100

鋭い牙で獲物を仕留めるドラゴン。鋭く素早い動きで攻撃を繰り返すが、守備能力は持ち合わせていない。

《ハウンド・ドラゴン》は見ての通り何の効果も持たないただの通常モンスター、あまり強力なようには見えないけどこのデッキでは結構重要なモンスターだ。早い段階で墓地に送っておくと後の展開が楽になる。

「そして僕は、レベル4のサモンプリーストと終末の騎士をオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

2体のモンスターを吸収し、光の渦の中から現れたのは剣の形をしたオブジェ。やがてそのオブジェは変形し、1体の剣士の姿となる。

「No.39 希望皇ホープ！」

「ほ、ホープ！？黒井君、そのカード……」

荒川さんが心配そうに見ているけど問題ない。このカードからは以前までのように僕の暗い心に呼び掛けるような声はしてこない。今では頼れるカードの1枚だ。

「ターンエンド！」

壮太Life8000

手札4枚

フィールド

《No.39 希望皇ホープ》（素材2）

魔法、罫

（なし）

ホープはエクシーズ素材を1つ取り除いて攻撃を無効にする効果がある。様子見をするという意味でも活躍できるだろう。

「私のターン、ドロー！」

さて、光のデッキがどんなものか、このターンでわかるだろうか。

「私はモンスター、カードを1枚ずつセットしてターンエンドだよ」

光の場に2枚のカードが伏せられる。まだ手の内を明かすつもりはないみたいだ。

光Life8000

手札4枚

モンスター

セット×1

魔法・罫

セット×1

「僕のターン、ドロー」

前のターンで準備ができている為、このデッキの本来の動きが今か

ら可能になる。これは荒川さんから貰ったカード達を使った僕の新たなデッキ、そのデッキを今から見せる事にする。

「召喚、サイバー・ダーク・ホーン！」

ドラゴンの頭部をモチーフにした機械族モンスターが現れる。「サイバー」の名を冠するモンスターだけど、荒川さんのモンスターとは違い色が黒っぽいのが特徴の「サイバー・ダーク」。これが僕の新たなデッキだ。

《サイバー・ダーク・ホーン》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていけば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

「サイバー・ダーク・ホーンの効果発動！墓地からレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を装備し、その攻撃力の数値分攻撃力をアップさせる！ハウンド・ドラゴンを装備し、ホーンの攻撃力は1700ポイントアップだ！」

出現した《ハウンド・ドラゴン》に《サイバー・ダーク・ホーン》のコードが繋がれ、装着される。これで《ハウンド・ドラゴン》は

ホーンの装備カードとなり、攻撃力をアップさせる。

サイバー・ダーク・ホーン

攻撃力800 2500

「800の攻撃力が一気に上級モンスター並に……」

「バトル！ホーンで裏守備モンスターに攻撃、ダークスピア！」

ホーンが裏守備から表側になり出現した《シャイン・エンジェル》  
に向かつていき、攻撃を仕掛ける。守備力がホーンの攻撃力に劣る  
《シャイン・エンジェル》は為す術なく破壊される。

《シャインエンジェル》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1400 / 守 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の光属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「ホーンが守備モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える！」

「うっっ！」

光Life8000 6300

《シャイン・エンジェル》の守備力は800と低めな為、攻撃力2500のホーンが与えた貫通ダメージも1700とかなり多い。

「でも戦闘で破壊された事でシャイン・エンジェルの効果は発動！自分のデッキから攻撃力1500以下の光属性モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できるの！来て、ヴァイロン・チャージャー！」

《シャイン・エンジェル》の効果で召喚されたのは《ヴァイロン・チャージャー》。攻撃力は1000、攻撃表示で召喚される為ホーンに攻撃されると1500のダメージを受け、破壊されてしまう。

《ヴァイロン・チャージャー》  
効果モンスター

星4/光属性/天使族/攻1000/守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターの攻撃力は、このカードに装備された装備カードの数×300ポイントアップする。

ここで2体目の《シャイン・エンジェル》を出しておけばダメージは受けても後続は残っていた。単なるプレイミスに思えるが、1枚目で《ヴァイロン・チャージャー》を出した意味がなんとなく理解できた。

「ホープでは攻撃しない。カードを1枚伏せてターンエンド」

「お兄ちゃん、攻撃しないの？」

「しない」

首を傾げる光。どんなかわいらしい仕草でもデュエル中ならわざとらしく見える事もある。攻撃力2500のホープを前に低い攻撃力を晒し、さらに《ヴァイロン・チャージャー》が光属性である事を考えると、彼女の手札に《オネスト》がある可能性は十分にある。ダメージステップまでいくとホープの効果は発動できず、攻撃をキャンセルする事もできない。ここは慎重に動いていくべきだ。

壮太Life8000

手札3枚

モンスター

《No.39 希望皇ホープ》（素材2）

《サイバー・ダーク・ホーン》

魔法・罫

《ハウンド・ドラゴン》（ホーンが装備）

セット×1

「じゃあ私のターンだね、ドロー！私はチューナーモンスター、ヴァイロン・キューブを召喚！」

箱型の機械天使が召喚される。このモンスターはチューナー、いよいよ『ヴァイロン』の本領が発揮されるのだろうか。

《ヴァイロン・キューブ》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 光属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

このカードが光属性モンスターの場合、自分のデッキから装備魔法カード1枚を選択し、手札に加える事ができる。

「レベル4のチャージャーにレベル3のキューブをチューニング！  
地上に光を齎す為、武器を手にし闇を浄化せよ！シンクロ召喚！輝  
け、ヴァイロン・シグマ！」

空中に黄色の輪が現れ、その中からシグマの大文字の形をした機械  
天使が姿を現す。身体周りにはシグマの小文字を象った装飾が浮  
遊している。

《ヴァイロン・シグマ》

シンクロ・効果モンスター

星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1800 / 守1000

光属性チューナー+チューナー以外の光属性モンスター1体以上  
自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない場合、  
このカードの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分のデッキから  
装備魔法カード1枚を選択し、このカードに装備する。

「シンクロ素材になったキューブの効果発動！光属性シンクロモン  
スターのシンクロ素材になった時、デッキから装備魔法を1枚手札  
に加える事ができるの！私はデッキから魔導師の力を手札に加えて、  
発動！そのままシグマに装備するよ！」

装備カードの力が与えられ、《ヴァイロン・シグマ》の攻撃力が上

昇する。

### 《魔導師の力》

#### 装備魔法

装備モンスターは攻撃力・守備力は、自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚につき500ポイントアップする。

ヴァイロン・シグマ

攻撃力1800 2800

装備カードを装備しても攻撃力は2800。ホープやホーンの攻撃力を上回った。

「バトルだよ！シグマで希望皇ホープを攻撃！」

攻撃対象はホープ。このままなら300のダメージだ。

「この時シグマの効果が発動！このカードの攻撃宣言時、他にモンスターがいない場合デッキから装備魔法を1枚選択し、このカードに装備できる！」

これで攻撃力を上昇されればホープは破壊され、さらに大きなダメージを受ける。ここで守りの要となるホープを失うわけにはいかない。なら……。

「希望皇ホープの効果発動！このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、自分、もしくは相手の攻撃を無効にする事ができる！ムー

ンバリア!」

両肩のシールドを展開し、《ヴァイロン・シグマ》の攻撃を防御する体制に入る。

「くっ……私は閃光の双剣・トライスを選択し、シグマに装備!」

2本の剣を装備した《ヴァイロン・シグマ》はホープに切り掛かっていくもシールドに阻まれ、攻撃は失敗する。

「トリスを装備したモンスターは2回攻撃が可能になる!もう1度ホープに攻撃!」

#### 《閃光の双剣・トリス》

##### 装備魔法

手札のカード1枚を墓地に送って装備する。装備モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。装備モンスターはバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

モンスター効果によってデッキから装備された為発動コストがなく、また《魔導師の力》の効果でさらに攻撃力が500上昇した為攻撃力ダウンのデメリットも帳消しとなり、攻撃力の増減は2800かからない。しかも2回攻撃が可能という事は、再び《ヴァイロン・シグマ》の効果が発動する。

「ホープの効果発動!エクシース素材を1つ取り除き、攻撃を無効にする!ムーンバリア!」

「でもシグマの効果も発動するよ！デッキから2枚目の魔導師の力を装備！」

2枚目の《魔導師の力》が装備され、光の魔法・畏ゾーンのカードはセットカード、2枚の《魔導師の力》、《閃光の双剣・トリス》の4枚。《魔導師の力》は魔法・畏ゾーンに存在するカード1枚につき500ポイント攻撃力を上昇させる為1枚で2000ポイントアップする。そしてそれが2枚なので4000ポイントアップし、トリスのデメリットで500ポイントダウンするので上昇する攻撃力は合計で3500。1800から3500をプラスするとその攻撃力は……。

ヴァイロン・シグマ

攻撃力2800 5300

「攻撃力5300……！」

「これが私のヴァイロン達のだよ！ターンエンド！」

既にその攻撃力は《F・G・D》の元々の攻撃力、5000を越えている。そう考えればどれだけ大きな数値なのかよく分かる。

光Life6300

手札4枚

モンスター

《ヴァイロン・シグマ》

魔法・畏

《魔導師の力》×2

《閃光の双剣・トライス》

セット×1

次のターンも《ヴァイロン・シグマ》は2回攻撃ができる。ホープはエクシーズ素材がない状態で攻撃対象になると破壊されてしまう。そうすると攻撃対象がホーンに変更され、連続攻撃を受けてしまう。でも攻略法は単純、そしてその為のカードも既に手札にある。

「僕のターン、ドロー！……このカードは、自分フィールドの攻撃力2000以上のモンスター2体をリリースする事で特殊召喚できる！」

ホープとホーンの姿が消え、僕の目の前に赤い十字架に似た物が出現する。それがひとりで空中に飛び立つと、やがてそれは光を放ちながら1体のドラゴンを出現させる。

「銀河の果てより現れる……銀河眼の光子竜、特殊召喚！」

翼を広げ、咆哮する《銀河眼の光子竜》。デッキが変わろうとこのカードが僕の相棒である事に変わりはない。むしろエクシーズ素材が無くなると自壊してしまうホープや、攻撃力を自身の効果で上昇させるサイバー・ダーク達との相性は良いと思うくらいだ。

「さらに僕は、サイバー・ダーク・キールを召喚！」

黒い蛇のようなモンスターが《銀河眼の光子竜》の隣に現れ、ホーンと同じように出現した《ハウンド・ドラゴン》を拘束し、自身をパワーアップさせていた。

「キールもホーンと同じように、墓地のレベル3以下のドラゴン族を装備する効果がある。ハウンド・ドラゴンを装備し、攻撃力を2500にまでアップさせる！」

《サイバー・ダーク・キール》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに300ポイントダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

サイバー・ダーク・キール

攻撃力800 2500

「バトルだ。銀河眼の光子竜でヴァイロン・シグマに攻撃！」

「攻撃力3000のモンスターで今のシグマに攻撃？自爆するつもりなの？」

「それはどうかな？」

《銀河眼の光子竜》が《ヴァイロン・シグマ》を掴むと、共にフィ

「ルドから姿を消した。」

「銀河眼の光子竜は、戦闘を行うバトルステップ開始時、戦闘する相手モンスターと自身をバトルフェイズ終了時までゲームから除外する事ができるんだ」

そして《ヴァイロン・シグマ》がフィールドから離れた事で、装備されていた3枚の装備魔法は同時に破壊される。

「装備カードは手軽に攻撃力を上昇できるけどデメリットもある。装備対象となつたモンスターがいなくなるだけで破壊されてしまう、例えばそれが一時的なものであったとしても、破壊されればモンスターの攻撃力は戻ってしまふ。装備カードに頼つて攻撃力を補助する場合、装備カードが破壊された時に厳しくなるものさ」

「それに今壁になるモンスターが……」

「サイバー・ダーク・キールでダイレクトアタック！ダーク・ウィップ！」

細長い身体を鞭のように奮い、光にダイレクトアタックを仕掛ける。

「速攻魔法発動、月の書！モンスター1体を裏側守備表示に変更する！私はサイバー・ダーク・キールを対象に選択するよ！」

攻撃を仕掛けていたキールは裏側守備表示になつた事で姿を消し、装備していた《ハウンド・ドラゴン》も破壊され墓地へ送られた。

「バトルフェイズ終了時、除外されていた2体のモンスターはフィールドに戻ってくる。僕はこれでターンエンド」

フィールドに《銀河眼の光子竜》と《ヴァイロン・シグマ》が戻ってきたのを確認すると、僕はそのままターンを終了する。

壮太Life 8000

手札 2枚

モンスター

《銀河眼の光子竜》

セット × 1

魔法・罫

セット × 1

「私のターン、ドロー！」

さて……ここからが彼女の腕の見せ所、どう逆転するか……見させてもらうことにするよ。

## 28・星の観測者（後書き）

ウィン「今回の最強カードはヴァイロン・シグマです！」

《ヴァイロン・シグマ》

シンクロ・効果モンスター

星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1800 / 守1000

光属性チューナー+チューナー以外の光属性モンスター1体以上  
自分フィールド上にこのカード以外のモンスターが存在しない場合、  
このカードの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分のデッキから  
装備魔法カード1枚を選択し、このカードに装備する。

ウィン「攻撃宣言時に自分しかない場合、デッキから装備魔法を  
装備してパワーアップできます。この効果で装備する場合は発動コ  
ストがあるものでもコストを踏み倒して装備できるのが魅力的です  
ね。攻撃する度に発動できるので、2回攻撃を可能にし、このカー  
ドの効果でデッキからコスト無しで装備できる閃光の双剣・トライ  
スは相性抜群のカードですね！弱点は攻撃力が低いので必然的に装  
備カードに頼る事になるという所でしょうが、そこは自身の効果で  
カバーしましょう」

次回のキーカード

「鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン」

ウィン「サイバー・ダークのモンスターが合体した姿で、切り札と

なるモンスターです。下級のサイバー・ダークが合体して得た力は  
どれほどのものなのでしょうか……」

## 29・黒い機械竜（前書き）

前回のおさらい

ウィン「やっぱり黒井さんは強いですねー……えっ？最近私の出番が少ない？そんなことないですよ、多分」

## 29・黒い機械竜

壮太Life 8000

手札2枚

モンスター

《銀河眼の光子竜》

セット×1

魔法・罫

セット×1

光Life 6300

手札4枚

モンスター

《ヴァイロン・シグマ》

魔法・罫

(なし)

美浦Side

「僕はこれでターンエンド」

『サイバー・ダーク』……通称裏サイバー流と呼ばれるそのカード達はドラゴンを装備する事でパワーアップする、黒井君の持つカード

ド達との相性は良いと考えて譲ったけど、流石あたしの見込んだ通り。もう自在に操っている。

モンスターの攻撃力を5300までアップさせて攻めた光ちゃんだけど、黒井君のライフポイントを減らす事は出来ていない。しかも黒井君はその攻撃力を難無く攻略し、攻め手を緩めずにいる。明らかに黒井君が有利なこのデュエル、でもどうなるかは最後まで分からない。光ちゃんがとんでもない逆転劇を繰り広げる可能性もきつとある。

「私のターン、ドロー！」

カードをドローした事で手札は5枚になった。フィールドにはレベル7の《ヴァイロン・シグマ》が残っている。もし手札にレベル1のチューナーが居ればシンクロ素材になる可能性もある。攻撃力は下がってもシンクロ素材になる事はできる。

「永続魔法、ヴァイロン・エレメントを発動。ヴァイロンと名の付いた装備カードが破壊されたら、その数だけデッキからヴァイロンのチューナーを特殊召喚できるの！」

『ヴァイロン』専用の展開カードね。でも装備カードを破壊するカードがないと特殊召喚する事ができないから意味がないんじゃないだろうか。

《ヴァイロン・エレメント》

永続魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「ヴァイロン」と名のついた装備カードが破壊された時、破壊された数と同じ数まで自分のデッキから「ヴァイロン」と名のついたチューナーを自分フィールド

上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターをシンクロ素材とする場合、「ヴァイロン」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「そして私は手札から装備カード、静寂のロッド・ケーストとヴァイロン・マテリアルを発動！シグマに装備！」

《ヴァイロン・シグマ》がロッドを手にし、構える。しかしもう一方のカードは装備される様子はなく、それどころかすぐに破壊されてしまう。

《静寂のロッド・ケースト》

装備魔法

装備モンスターの守備力は500ポイントアップする。装備モンスターを対象にするこのカード以外の魔法カードの効果を無効にし破壊する。

《ヴァイロン・マテリアル》

装備魔法

「ヴァイロン」と名のついたモンスターにのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は600ポイントアップする。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた場合、デッキから「ヴァイロン」と名のついた魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「ケーストは装備したモンスターを対象とする魔法カードの効果を無効にし、破壊するの」

「ヴァイロン・マテリアルが破壊されただけ……いや、違う！」

「そ、ケーストのお陰でヴァイロンの装備カードが破壊された、つまりヴァイロン・エレメントの効果が適応される！しかもヴァイロン・マテリアルはフィールドに表側で存在する時に破壊されたら、デッキからヴァイロンと名の付いた装備魔法を手札に加える！」

それじゃ、デッキの『ヴァイロン』の装備魔法の数だけチューナーを特殊召喚できるじゃない！

「私は2枚目のヴァイロン・マテリアルを手札に加えて、デッキからヴァイロン・スフィアを特殊召喚！そしてもう1度ヴァイロン・マテリアルを装備して、破壊！装備魔法、ヴァイロン・セグメントを手札に加え、ヴァイロン・テトラを特殊召喚！」

フィールドに現れた2体のチューナー……でもチューナー同士では基本的にシンクロ召喚はできないし、『ヴァイロン・シグマ』を素材にしてもどちらかは残るはず。どうするつもりなんだろう。

《ヴァイロン・スフィア》

チューナー（効果モンスター）

星1/光属性/機械族/攻 400/守 400

このカードがモンスターカードゾーン上から墓地へ送られた場合、500ライフポイントを払う事で、このカードを装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。また、装備カード扱いとして装備されているこのカードを墓地へ送る事で、自分の墓地から装備魔法カード1枚を選択してこのカードの装備モンスターに装備する。

《ヴァイロン・テトラ》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 900 / 守 900

このカードがモンスターカードゾーン上から墓地へ送られた場合、500ライフポイントを払う事で、このカードを装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。このカードの装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する事ができる。

「お兄ちゃん達に面白いものを見せてあげる……レベル7のシグマにレベル1のスフィアとレベル2のテトラをダブルチューニング！」

「に、2体のチューナーを使ったシンクロ召喚!？」

2体のチューナー、そしてそれ以外のモンスターのレベルの合計は10。そんな高レベルかつ召喚難易度の高いモンスターは一体……。

「天より舞い降りし機械天使を統べる神よ、全ての悪しき者に肅清を下せ！シンクロ召喚！降臨せよ、ヴァイロン・オメガ！」

《ヴァイロン・シグマ》と同じように天に現れた黄色の輪から降り立ったのは《ヴァイロン・オメガ》。その威圧感は他のヴァイロンとは比にならないレベルで、離れて見えていても感じられる。

《ヴァイロン・オメガ》

シンクロ・効果モンスター

星10 / 光属性 / 天使族 / 攻3200 / 守1900

チューナー2体+チューナー以外の「ヴァイロン」と名のついたモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する通常召喚されたモンスターを全て破壊する。1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ヴァイロン」と名のついたモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。効果モンスターの効果が発動した時、このカードに装備された装備カード1枚を墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

「シンクロ素材となったスフィア、テトラの効果発動。ライフポイントを500ずつ払って、自分のモンスターに装備する。私はオメガに装備させる！」

『来るがよい、我が同胞よ！』

光Life6300 5300

シンクロ素材となったチューナー達が再び姿を現し、分離したかと思うと全てオメガに装着された。攻撃力が上昇した様子はないけど、どういふ効果なんだろう。

「装備カードのスフィアの効果発動。このカードを墓地に送って、墓地の装備魔法を選択し、装備モンスターに装備させる。私はオメガに魔導師の力を装備。さらにオメガは1ターンに1度、墓地のヴァイロンを装備できるの。私はこれでスフィアを装備させ、もう1度効果発動！ヴァイロン・マテリアルを装備させる！さらに私はさ

つき手札に加えたヴァイロン・セグメントをオメガに装備！装備モンスターは相手の罠、効果モンスターの効果の対象にはならない！」

### 《ヴァイロン・セグメント》

#### 装備魔法

「ヴァイロン」と名のついたモンスターにのみ装備可能。装備モンスターは相手の罠・効果モンスターの効果の対象にならない。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキから「ヴァイロン」と名のついた魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

ヴァイロン・オメガ

攻撃力3200 6300

「攻撃力6300……」

光ちゃんはまたしてもとんでもない攻撃力のモンスターを生み出した。でも装備カードに頼っている限りは《銀河眼の光子竜》に無力化され続ける。どういづつもあり……？

「バトル！オメガで銀河眼の光子竜を攻撃！裁きの雷！」

「銀河眼の光子竜の効果は相手が攻撃してきた時にも有効だ！銀河眼の光子竜の効果発動！」

このままでは《ヴァイロン・シグマ》の二の舞になってしまう……でも光ちゃんは表情を暗くするどころか、むしろ笑みを浮かべてい

る。

「オメガの効果発動！装備カードを墓地に送って、効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する！私はヴァイロン・マテリアルを墓地に送って、銀河眼の光子竜の効果を無効にして破壊する！」

『神に背いた事を後悔しながら滅びるがよい！』

《銀河眼の光子竜》が《ヴァイロン・オメガ》と共に除外されようと接近してくるけど、それに対して《ヴァイロン・オメガ》は装備していた《ヴァイロン・マテリアル》を投げ付けて《銀河眼の光子竜》の身体を貫き、破壊してしまった。

ヴァイロン・オメガ

攻撃力6300 5200

《ヴァイロン・マテリアル》を失い攻撃力がダウンしたけど、まだまだ攻撃力は高い。しかも《ヴァイロン・マテリアル》が墓地に送られた事で再びサーチ効果が発動する。

「私は墓地に送られたヴァイロン・マテリアルの効果で3枚目のヴァイロン・マテリアルを手札に加える。そしてモンスター数が変わった事で戦闘の巻き戻しが発生、攻撃対象を裏守備モンスターに変更し、再びバトル！」

《ヴァイロン・オメガ》の発した雷が裏守備になっていた《サイバードーク・キール》を貫き、破壊する。守備表示の為戦闘ダメージは発生しないけど、仮に貫通ダメージを与える効果があったらと

思うとぞつとする。

「私は3枚目のヴァイロン・マテリアルをオメガに装備して、ターンエンド」

ヴァイロン・オメガ

攻撃力5200 6300

攻撃力6300、効果モンスターの効果を無効にして破壊し、罨や効果モンスターの効果の対象にならない……まさに神に等しい能力を持った《ヴァイロン・オメガ》に対抗する手段は限られてくる。そんなモンスターを相手に黒井君はどう戦うつもりなんだろう……。

光Life6300

手札3枚

フィールド

《ヴァイロン・オメガ》

魔法・罨

《ヴァイロン・テトラ》

《魔導師の力》

《ヴァイロン・セグメント》

《ヴァイロン・マテリアル》

《ヴァイロン・エレメント》

《ヴァイロン・オメガ》……装備カードと自身の効果が合わさりともない能力を持ったモンスターになっっているこのカードを突破するのは至難の業だ。モンスター効果を無効にする効果は1ターンに何度でも発動するようなので、後4回はモンスター効果を無効にされる事が分かる。『サイバー・ダーク』のモンスター達はどれも召喚時に効果を発揮し、パワーアップしなければステータスが低いまま、攻撃力6300の《ヴァイロン・オメガ》にはとてもじゃないけど太刀打ちできない。あのモンスターを突破するには、一先ずとてつもない耐性と攻撃力を付加させている装備カードを全て破壊して、圧倒的な制圧力をどうにかする必要がある。もしくは対象を取らない罨や、除去魔法で《ヴァイロン・オメガ》自身をどうにかするしかない、その為のカードをデッキから引き当てるのは簡単な事じゃない。

僕のフィールドに伏せられているのは《リミッター解除》。機械族モンスターの攻撃力を一気に倍にできるけど、倍にして対抗するには最低でも3150の攻撃力が必要。モンスター効果を使わずにその攻撃力を引き出すのは難しい。

「くっ……僕のターン、ドロー！」

ドローしたカードを見ても、突破口を切り開く事のできる可能性を見出だす事はできない。

「……モンスター、伏せカードを1枚ずつセット、ターンエンド」

裏守備モンスター、そして伏せカードが1枚ずつフィールドに伏せ

ただでターンを終了させる。

壮太Life 8000

手札1枚

モンスター

セツト×1

魔法・罫

セツト×2

「へへん、私のターン、ドロー！バトル！オメガで裏守備モンスターを攻撃！裁きの雷！」

オメガの放った雷が、表側になった《サイバー・ダーク・エッジ》を貫き破壊する。

《サイバー・ダーク・エッジ》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

「私はこれでターンエンド！」

光 Life 6300

手札4枚

フィールド

《ヴァイロン・オメガ》

魔法・罫

《ヴァイロン・テトラ》

《魔導師の力》

《ヴァイロン・セグメント》

《ヴァイロン・マテリアル》

《ヴァイロン・エレメント》

魔法・罫ゾーンは全て埋まり、光は伏せカードをセットする事ができない。しかしフィールドには伏せカードによるサポートが無用な程の耐性、攻撃力を持った《ヴァイロン・オメガ》がいる。突破口を見いだせない、ここまでか……そんな諦めの感情が僕をサレンダーへと導こうとしていた。でもデッキの上に手を置こうとしても置けない、まるでデッキがサレンダーを拒否しているかのように、手が動かなかった。

「このデッキは……まだ戦おうとしている……」

カード達に感情があるかは分からないけど、もし感情があるのならはまだ諦めないはず、そんな気持ちが僕の心のどこかにあったからサレンダーできなかつたのかもしれない。なら最後の最後まで諦めない、ライフポイントが尽きるまで戦ってみせる！

「僕のターン……ドロー！」

ドローしたカードを見て、思わず目を見開いてしまう。そんな都合の良い事があるわけない、そうは思っただけでも現実を見てしまうと何も言えなくなる。やっとの想いで口を開き、出した言葉は1つ。

「諦めないで良かったよ……魔法発動！大嵐！」

「えっ!？」

「フィールドの魔法・罨カードを全て破壊する。つまりヴァイロン・オメガに装備されたカードは全て破壊だ！」

嵐がフィールドの魔法や罨を破壊し尽くし、《ヴァイロン・オメガ》の攻撃力も元の数値に戻る。

ヴァイロン・オメガ

攻撃力 6300 3200

「だ、ただ破壊されたセグメントとマテリアルの効果で、新しいセグメント2枚を手札に加える！それにこのターン中にオメガを倒せないとまた攻撃力が上がっちゃうよ！たった1枚の手札で何が…」

「できるさ、このカードなら。魔法カード発動、サイバー・ダーク・インパクト！」

魔法カードを発動させると、墓地にいるはずの3体の『サイバー・

ダーク』のモンスター達がフィールドに現れ、空中に飛び立つ。

「このカードは自分の手札、フィールド、墓地のホーン、エッジ、キールをデッキに戻し、エクストラデッキから鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンを融合召喚扱いで特殊召喚する！」

《サイバーダーク・インパクト!》  
通常魔法

自分の手札・フィールド上・墓地から、「サイバー・ダーク・ホーン」「サイバー・ダーク・エッジ」「サイバー・ダーク・キール」をそれぞれ1枚ずつデッキに戻し、「鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン」1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

飛び立った3体の『サイバー・ダーク』が合体し、1体の巨大な機械竜が誕生する。

「融合召喚、鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン！」

《鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン》……『サイバー・ダーク』の真の姿であり、このデッキの切り札となるモンスターだ。

《鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 機械族 / 攻1000 / 守1000

「サイバー・ダーク・ホーン」+「サイバー・ダーク・エッジ」

+「サイバー・ダーク・キール」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。また、このカードの攻撃力はフィールド上に存在する限り、自分の墓地のモンスターの数×100ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

「サイバー・ダーク・ドラゴンのモンスター効果発動！墓地からドラゴン族モンスターを装備し、その攻撃力の数値分攻撃力をアップさせる！僕は銀河眼の光子竜を装備し、攻撃力を3000ポイントアップさせる！」

墓地から現れた《銀河眼の光子竜》がサイバー・ダーク・ドラゴンに装着され、力を与える。

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン  
攻撃力1000 4000

「攻撃力4000!?!」

「まだだ！サイバー・ダーク・ドラゴンは墓地のモンスター1体につき攻撃力を100ポイントアップさせる。僕の墓地にはサモンプリースト、終末の騎士、希望皇ホープ、ハウンド・ドラゴンの4体がいる。よって攻撃力は400ポイントアップし、その合計は4400!」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン  
攻撃力 4000 4400

「4400……オメガがやられちゃう！」

「バトル！サイバー・ダーク・ドラゴンでヴァイロン・オメガを攻撃！フル・ダークネス・バースト！」

「ダメー！」

サイバー・ダーク・ドラゴンが《ヴァイロン・オメガ》を攻撃しようとしたその時光が突然叫び、サイバー・ダーク・ドラゴンは攻撃をするのを止める。よく見ると彼女はデッキの上に手を置き、サレンドーの意思表示をしていた。恐らく自分の世話をしてくれている《ヴァイロン・オメガ》が負ける様子を見たくなくなかったんだろうと僕は思うけど、何だかあまり後味の良くない形で勝利してしまった。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。サレンドーしちゃって……」

怒るつもりはないけど、複雑な気持ちだ。こんな形での勝利でも、約束は守ってくれるんだろうか。

「光、すぐにサレンドーするのは止めると言っただけだ」

「でもオメガがやられちゃうのを見るの、嫌だもん！」

「光……」

本当にこの精霊は光に愛されている、それがよく分かる。

『すまない、約束通り地上には連れていく。だから光を許してやってはくれないか』

「怒るつもりなんて毛頭ないわ、黒井君だってそうでしょ」

「もちろんさ。それよりも光はかなりの実力で、相手をしていて冷や冷やしたよ。小学生でありながらこれだけの実力なんて……きっと親がデュエルをすればもっと強いんだろうな」

『……………』

その時の《ヴァイロン・オメガ》の表情が僅かに変化した事、そしてその意味を僕達はまだ知らなかった。これがどんな意味を示していたか、全く想像が付かなかった。

とにかく地上に降りる手段を手に入れた僕達。後は龍土君と合流するだけだ。

## 29・黒い機械竜（後書き）

ウィン「今回の最強カードは鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンです！」

《鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 機械族 / 攻1000 / 守1000

「サイバー・ダーク・ホーン」+「サイバー・ダーク・エッジ」

+「サイバー・ダーク・キール」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。また、このカードの攻撃力はフィールド上に存在する限り、自分の墓地のモンスターの数×100ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

ウィン「3体のサイバー・ダークモンスターが融合して誕生したサイバー・ダークの切り札です。下級のサイバー・ダークとは異なり装備するドラゴンにレベルの指定がありません。またサイバー・ダーク・インパクト！やオーバーロードフュージョンを使う事で手札1枚から召喚する事も可能なのでフィニッシャーとしても強力なカードです。しかし装備カードが破壊されると攻撃力が低くなるので注意が必要ですね。……ところでどうしてヴァイロン・オメガが最強カードじゃないんでしょうか」

次回のキーカード

「魔轟神獣ユニコール」

ウィン「ついに襲い掛かるインヴェルズ達、それを指揮するのは渓谷で出会ったあの男性、隙を突いてマスターはデュエルを挑みますが……」

### 30・悪魔の侵攻（前書き）

前回のおさらい

ウィン「釈然としませんが、一応サイバー・ダークの力を借りて黒井さんがデュエルを制し、地上に降りる手段を確保しました。ですがその時、侵略者による侵攻が始まるようになっていました……！」

### 30・悪魔の侵攻

ウィンダSide

ついにインヴェルズによる侵攻が本格的に開始された。ヴァイロン達の加勢もあるけど、インヴェルズと同時にリチュアと戦う必要もなくなった為少しは楽になったと思う。とはいえ相手は倒しても倒しても絶える事なく出現してくるから、厄介な事に変わりはない。

『どっから沸いて来るのよこんなに!』

ガードにより高い場所まで上昇させ、インヴェルズ達が来ないうちに策を練る事にした。大群を1度に殲滅できる方法があるなら問題はないんだけど、そんな方法は思い付かない。

時間は掛かっても1体1体確実に仕留めるしかない、私が杖を構えようとする、突然何者かに弾かれ、杖を落としてしまう。インヴェルズの下級モンスターじゃここまで来れないはず、なら一体誰が……。

「おや、唯一の武器を落としてしまいましたか……残念ですね」

『に、人間っ!?!』

精霊界に干渉できる人間はそう多くない。でも目の前で《魔轟神獣ユニコール》に跨がって空中を浮遊しているのは紛れも無く人間の男だった。

「申し訳ありませんが、私の理想の為……ガスタの巫女には犠牲になつていただきます」

男が指を鳴らすと、あっという間に私の周りを無数の魔轟神が取り囲んでいた。ガルドはさつきまでのインヴェルズとの戦闘で体力を消耗してしまつている。魔轟神の相手ができる程の余裕もなく、かといつて逃げ道もない。万事休すか、と思われたその時、どこからともなく現れた巨大な剣が魔轟神達を一気に切り裂き、墜落させていった。

「ウインダ、無事か!？」

「ちつ……来ましたか」

剣を構えた《ドラグニティアームズ・レヴァティン》様の背中に乗つているのは、《竜の渓谷》に向かったはずの龍士とウインだった。

「急いで戻ってみれば、やっぱり侵攻は始まつていたんだな。ウインダ、お前は逃げる」

『に、逃げろつて……龍士は!？』

「俺か?俺は……」

デュエルディスクを展開し、男に向かって構える龍士。

「潰さなきゃなんねえ奴がいるから、そいつを潰してから行く」

『龍士……うん、わかった』

「その前にやっとなきゃいけない事がある。ウィン！」

『な、何ですか？』

「お前もウィンダと一緒に逃げる。このままレヴァティンの背中に乗っているとお前も巻き込まれるぞ」

これからするデュエルは危険を伴う可能性が高いと判断したのか、龍士はウィンにそう言っていた。今なら私と一緒に逃げる事ができる……けどウィンはそんな気はなさそうだった。

『マスター……私はあなたの精霊です。どんな危険なデュエルをしようとして、私はあなたと一緒に戦うつもりです！』

「ウィン……」

危険は承知だったと思う。ウィンは目を逸らすことなくただ強い意志を持った瞳で龍士を見つめていた。それがどういう意味か、そんな事は考えなくても分かる事、特に龍士にとっては。

「……分かった。一緒に戦おう」

『はい！』

ウィンの力強い返事を聞き、私は何も言わずガルドに乗って龍士達から離れた。龍士の言った通り、1度退いて体制を立て直す為でもあるけど、1番の目的は応援を呼ぶ事。龍士の身に何かあってもすぐに対応できるようにしておかないと駄目だと思っただけの行動だ、と考えている。

『龍士……頑張つてよ』

地上に降りながら、私は心の中で龍士の無事を祈った。

龍士Side

ウインダが地上に向かっていくのを見届けると再びデュエルディスクを、目の前でモンスターに乗っている男、神名轟貴に向けて睨み付ける。

「この侵攻、お前の指示なんだろう？インヴェルズも魔轟神も、お前が動かしている、違うか」

「いや……貴方の読みは正しい、確かにこのインヴェルズ、そして魔轟神の司令塔は私。私が倒されれば有利になるのは間違いないでしょう。だが……貴方にそれができますか？出来ない事は言うのはあまり好きではありませんね」

この男の邪悪な笑みを浮かべる様は怒りを覚える。だが今は怒りを覚えるだけで終わらせてはならない。

「奇遇だな。俺も『出来ない事を言う』のは嫌いなんだ。だから言うてやる、お前は絶対潰す」

「……いいでしょう、なら相手して差し上げます！せめて退屈凌ぎ程度に抗ってみせなさい！」

モンスターに跨がったまま、神名はデュエルディスクを展開してデュエルの準備をする。

「いくぞ……デュエル！」

ディスクが対戦相手を認識したのを確認すると、デッキからカードを5枚引きデュエルを開始する。

龍士Life8000

轟貴Life8000

「先攻は私が頂きます……構いませんね？」

「好きにしる」

「フフ……ではドロー！」

先攻は譲った。相手のデッキの特性を掴む事を優先した上での判断、間違いではないと思いたい。

「手札の魔轟神獣ガナシアを捨て、手札から魔轟神獣チャワを特殊召喚します」

自らの手札を1枚捨て召喚したのはチワワに似た犬のモンスター。

《魔轟神獣チャワ》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / 獣族 / 攻 2000 / 守 1000

自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。手札から「魔轟神」と名のついたモンスター1体を捨て、このカードを手札から特殊召喚する。

特殊召喚されたのは低ステータス、低レベルのチューナー。しかしこれでは終わらない。

「手札から捨てられたガナシアの効果を発動。このカードが手札から墓地に捨てられた場合、攻撃力を200ポイントアップさせ、特殊召喚できます」

チャワの隣に出現したのは2足で立ち上がっている像のモンスター。よく見ると小さな悪魔を1体踏み付けている。

《魔轟神獣ガナシア》

効果モンスター

星3 / 光属性 / 獣族 / 攻 16000 / 守 10000

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚したこのカードの攻撃力は200ポイントアップし、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

魔轟神獣ガナシア

攻撃力 1600 1800

「もうシンクロ召喚の為の素材が揃ったか……」

「レベル3のガナシアにレベル1のチャワをチューニング。……白馬が戦地を駆け回る時、あらゆる力は我に平伏す……シンクロ召喚！私の手の上で踊るが良い、魔轟神獣ユニコール！」

ガナシアとチャワがフィールドから姿を消したにも関わらずシンクロモンスターは姿を現さない。しかし確かにそのモンスターは召喚されていた。

「私の乗っているモンスターは今召喚した魔轟神獣ユニコール。今回はこのユニコールに戦っていただきましょう」

「自分の乗ったモンスターをフィールドに……？破壊されると一たまりもないぞ！」

今俺達はモンスターに乗ってデュエルしている。神名が乗っているユニコールが破壊されてしまうと奴は飛行手段を失って地上に真っ逆さま、にも関わらず奴はユニコールをモンスターとしてフィールドに出す事を選んだ。

「ご心配なく、あなたはユニコールは破壊できません」

「たいした自信だな……でもそれはいつまで続くかな？」

「さあ……私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

轟貴Life8000

手札2枚

フィールド

《魔轟神獣ユニコール》

魔法・罾

セツト×2

シンクロモンスター1体に伏せカードが2枚、平凡なフィールド。にもかかわらず奴のユニコールに対する自信は何だ？

「俺のターン！」

「あなたのドローフェイスに罾発動、ダスト・シユート！」

………！厄介な罾を！

「ダスト・シユートは相手の手札が4枚以上の時に発動できる罾。相手の手札を見てその中のモンスターカードを1枚デッキに戻します」

《ダスト・シユート》

通常罾

相手の手札が4枚以上の場合に発動する事ができる。相手の手札を確認してモンスターカード1枚を選択し、そのカードを持ち主のデッキに戻す。

「さあ、手札を見させていただきますよ」

「ちっ……」

ドローフェイズにドローしたカードを含めた6枚の手札を渋々見せる。

《竜の渓谷》

《調和の宝札》

《ドラグニティ・レギオン》

《ドラグニティ・アキュリス》

《霞の谷のファルコン》

《聖なるバリア・ミラーフォース》

「ふむ……ならばドラグニティ・アキュリスをデッキに戻して下さい」

「……分かった」

言われた通り《ドラグニティ・アキュリス》をデッキに戻し、デッキをシャッフルする。

《調和の宝札》のコストを戻して発動できないようにしたつもりだろうが、奴は《竜の渓谷》を見落としている。これがある限り手札1枚がドラグニティのモンスターになる為、《調和の宝札》のコストを確保する事は簡単だ。《ダスト・シュート》で戻したところで関係ない、すぐにアキュリスを墓地に送って伏せカードごとユニコーンを破壊してやるつもりだ。

「俺はフィールド魔法、竜の渓谷を発ど……」

「私は畏カード、マインドクラッシュを発動！」

俺の行動を遮るように、神名のもう1枚の伏せカードが発動される。

「私のカード効果の処理は終わりました。ですが誰もメインフェイズに移行していいとは言っていません。マインドクラッシュの効果は、カード名を宣言して、そのカードが相手の手札にあれば全て墓地に送ります。ない場合は自分の手札をランダムに1枚捨てることになります……手札をあらかじめ見えますから間違えません。私が宣言するのは竜の渓谷！」

「……………！」

《マインドクラッシュ》

通常罫

カード名を1つ宣言して発動する。宣言したカードが相手の手札にある場合、相手はそのカードを全て墓地へ捨てる。宣言したカードが相手の手札に無い場合、自分は手札をランダムに1枚捨てる。

当然俺の手札には《竜の渓谷》が1枚ある。その1枚は《マインドクラッシュ》によって墓地へ送られ、俺の手札はメインフェイズに移行する前に4枚にまで減っただけでなく、軸となる《竜の渓谷》も1枚失ってしまった。

「俺はモンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンド」

龍士Life8000

手札2枚

フィールド

セットモンスター×1

魔法・罫

セット×1

手札のモンスターでは無理だが、伏せたのは《聖なるバリア・ミラーフォース》。攻撃してくればこのカードで《魔轟神獣ユニコール》を破壊できる。神名はこのカードの存在を《ダスト・シュート》で知った為迂闊には攻撃できないだろう。その間に手札を整えて一気に攻めてやりたいところだ。

「私のターン、ドロー」

さあ、どうする……？

「……カードを1枚伏せ、バトルフェイズに移行。ユニコールでセットモンスターを攻撃します。やりなさい、ホーンスピーアー！」

《魔轟神獣ユニコール》が神名を背中に乗せたままセットモンスターに接近してくる。だが……！

「罫発動！聖なるバリア・ミラーフォース！相手フィールドの攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

セットモンスターの前方にバリアが出現する。これにぶつかった瞬間ユニコールは破壊される！

「甘いですよ……この瞬間、ユニコールの効果が適応されます」

ユニコールの角がバリアに接触する。しかしユニコールは破壊されず、それどころか角がバリアを貫通し、逆に破壊してしまった。

「ユニコールは自分と相手の手札が同じ枚数の時、相手が発動したあらゆるカード効果を無効にし、破壊します」

神名が2枚の手札を広げ、俺に見せる。俺の手札も2枚……奴と同じ枚数だ。

《魔轟神獣ユニコール》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣族 / 攻2300 / 守1000

「魔轟神」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、相手が発動した魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

《聖なるバリア・ミラーフォース》が無効化された事でバトルが成立し、セットされていた《ドラグニティ・レギオン》が表になる。腕をクロスさせユニコールの突進に耐えようとするも失敗し、破壊されてしまう。守備表示なので戦闘ダメージはないが……《魔轟神獣ユニコール》、とんでもなく厄介な効果を持ったモンスターだ……。

「ユニコールの効果、これ乗り越えなければあなたは私を倒す事

はおろかユニコールを倒す事すらできませんよ……なあ、どつどつ  
すか風早龍士！」

### 30・悪魔の侵攻（後書き）

ウィン「今回の最強カードは魔轟神獣ユニコールです」

《魔轟神獣ユニコール》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣族 / 攻2300 / 守1000

「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、相手が発動した魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

ウィン「自分と相手の手札の枚数が同じなら相手の発動したカード効果を無効にできます。このモンスターの強力なところは、永続効果の為相手のカード効果にチェーンして手札を増減させて同じにする事ができれば無効にできる点、チェーンに乗らないので天罰などに無効にされない点です。カード効果としても珍しいタイプですし、癖が強いですが使いこなす事ができればこれほど強力なモンスターはなかなかいませんね！」

次回のキーカード

「サングラー・ブレイク」

ウィン「手札を1枚捨てて、相手のカードを破壊する罫カードですね。手札コストは必要ですが使いやすい罫カードの1枚です」



### 31・ユニコールの脅威(前書き)

前回のあらすじ

ウィン「ユニコール……とても強力なモンスターです……しかしマ  
スターは負けない、私は信じています！」

### 31・ユニコールの脅威

龍士Life8000

手札2枚

フィールド

(なし)

魔法・罫

(なし)

轟貴Life8000

手札2枚

フィールド

《魔轟神獣ユニコール》

魔法・罫

セット×1

龍士Side

《魔轟神獣ユニコール》を破壊しようとして発動した《聖なるバリアミラーフォース》は思わぬカード効果によって無効にされ、セットしていた《ドラグニティ レギオン》も戦闘によって破壊されてしまった。フィールドには何も残らず、あるのはわずか2枚の手札のみ。そして相手、神名轟貴のフィールドには、互いの手札の枚数

が同じという場合のみではあるがあらゆるカードの効果を無効にしてしまうシンクロモンスター《魔轟神獣ユニコール》とセットカード1枚。状況は圧倒的に不利だ。

「バトルフェイズを終了、このままターンも終了しましょう……」

神名はセットカードを追加することなくターンを終了する。

「俺のターン、ドロー！」

ドローフェイズにカードをドローした事で手札は3枚。今はユニコールの効果は適応されないものの、何かカードを発動すれば手札は2枚になり、ユニコールの効果が適応するようになる。ユニコールを突破するには、手札が同じにならないようカードを発動し、攻撃力を上回るモンスターを召喚して戦闘で撃破するか、効果で破壊するしかない。そうなると問題になるのはたった1枚だけセットされたカード。ユニコールを破壊から守る為のカードであるのは間違いないだろう。

俺は改めて自分の手札を確認する。コストがない為発動できない《調和の宝札》、攻撃力がユニコールに劣る《霞の谷のファルコン》、そして今ドローした《くず鉄のかかし》……どれもユニコールを破壊することはできない。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

思いきって手札を0枚にしてターンを終了する。次のターンの神名の手札は3枚になる。そこから0枚にするには手札が全て魔法や罠でない限りは難しいはずだ。

龍士Life8000

手札0枚

モンスター

セットモンスター×1

魔法・罾

セツト×2

「私のターン、ドロ―……………さて、手札は0枚ですか」

3枚の手札を0枚にするには全て魔法、罾か、1枚がモンスターで残り2枚が魔法、罾か……………あるいは何かしらの効果で手札を捨てるしかない。

「なら私は魔轟神クシャノを召喚」

インテリ学者風の悪魔が、分厚い本を手にしたままフィールドに現れる。

《魔轟神クシャノ》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 光属性 / 悪魔族 / 攻1100 / 守 800

手札から「魔轟神クシャノ」以外の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を墓地へ捨てて発動する。自分の墓地に存在するこのカードを手札に加える。

「そしてカードを1枚伏せ……………バトル！ユニコールでセットモンス

ターに攻撃、ホーンスパアー！」

ユニコールがセットされた《霞の谷のファルコン》を攻撃しようと接近する。奴の手札は1枚残っている、ならここでこのカードを発動しない理由はない。

「畏発動、くず鉄のかかし！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！お前には手札が1枚残っている、ユニコールの効果では無効にされない！」

「……………やはりですか」

神名のその言葉と共に、奴のフィールドに伏せられていたカードが発動される。

「くず鉄のかかしにチェーンして畏発動、サンダー・ブレイク！手札を1枚捨てる事で、フィールド上のカード1枚を破壊する！私が破壊するのは、くず鉄のかかしの隣にセットされているカード！」

「くっ……………！」

《サンダー・ブレイク》

通常罠

手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。選択したカードを破壊する

雷撃がセットしていた《調和の宝札》を貫き、破壊する。これ自体はブラフ、破壊される事は痛くも痒くもない。だが問題はそこじゃ

ない。

「手札が0枚に……！」

「そうです、手札の枚数が同じになった事でユニコールの効果が適応され、くず鉄のかかしは無効」

セットモンスターを守るようにユニコールの前に現れた《くず鉄のかかし》だったが、ユニコールの角に突かれると呆気なくばらばらになってしまった。

「さらにサンダー・ブレイクのコストで手札から捨てた魔轟神クルスの効果を発動。このカードが手札から墓地に捨てられた時、墓地から魔轟神を1体特殊召喚します。蘇りなさい、魔轟神獣チャワ！」

### 《魔轟神クルス》

効果モンスター

星2 / 光属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守800

このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分の墓地に存在するこのカード以外のレベル4以下の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

ユニコールのシンクロ素材となり墓地に送られていた《魔轟神獣チャワ》が特殊召喚され、守備の体制になる。

「そしてバトルは続行、ユニコールよ、セットモンスターを攻撃しなさい！」

セットされていた《霞の谷のファルコン》が表になり、ユニコールの攻撃を防御する間もなく破壊されてしまう。

「そしてクシャノでダイレクトアタック！」

クシャノが接近してきて、本を使って殴ってくる。

龍士Life8000 6900

ダメージは微々たるもの。しかしこのバトルフェイズで一気に3枚もカードを破壊され、しかも手札は0枚……。

「この圧倒的な差を埋めることなどできませんよ、ターンエンド。さあ……抗ってみてください」

轟貴Life8000

手札0枚

フィールド

《魔轟神獣ユニコール》

《魔轟神クシャノ》

《魔轟神獣チャワ》

魔法・罫

セット×1

戦況は有利になることはなく次第に悪くなっていった。奴のフィールドには3体のモンスターと1枚の伏せカード、対する俺はと言

えば手札は0、フィールドにも何も無い。しかもユニコールの効果により魔法、罠、モンスター効果の発動は無効にされてしまう。この状況を覆すカードなんてあるのだろうか。

『龍士よ……まさか諦めるのではないだろうな』

「レヴァティン……!?」

今まで俺を背中に乗せたまま黙って飛行していたレヴァティンが、突然語りかけてくる。

『ここで諦めては、守るべきものも守る事はできん。試練を乗り越えドラグニティ達に認められたのだ……絶対にデッキは裏切らん。ならばお前もデッキを裏切ってはいけない』

「デッキを……」

『さあ、カードを引け！お前の想いが本物なら、デッキが答えを導いてくれるはずだ！』

後ろを振り向くと、ウィンが不安そうにこちらを見ていた。そうだ……俺は俺が守るべきものの為に戦っているんだ。俺が諦めてしまえば何もかもが駄目になってしまう……！

「俺のターン……ドロー！」

ドローしたカードを確認すると、すぐにモンスターカードゾーンにセットする。

「俺はモンスターを裏守備表示でセットして、ターンエンド！」

龍士Life6900

手札0枚

フィールド

セットモンスター×1

魔法・罨

(なし)

頼みの綱はもはやこのカードのみ……頼むぜ。

「私のターン、ドロー。壁モンスターを用意するのが精一杯というわけですか……惨めですねえ」

「そう思うなら攻撃してみろよ」

「……っ！いいでしょう、バトル！ユニコールでセットモンスターに攻撃、ホーンスパアー！」

ユニコールが突進を始めると共にセットされていたモンスターが表側になる。そのモンスターは翼を使いユニコールの角を受け止め、破壊されないよう耐えている。

「セットしていたのはシールド・ウィング！このカードは1ターンに2度まで戦闘では破壊されない！」

《シールド・ウィング》

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

ユニコールの効果は確かに強力。あらゆる効果の発動を無効にすることができるが、あくまで「効果の発動」のみ。常に効果が適応されている「永続効果」の場合は効果が発動しているわけではなく、無効にする事はできない。《シールド・ウイング》の戦闘破壊耐性は永続効果。ユニコールで無効にすることはできない。

「ユニコールの効果の穴を突かれるとは……だがそんな弱小モンスターで何になる！ 次のターン、シールド・ウイングの守備力を上回るモンスター3体で攻撃してしまえばそんな壁……」

「果たしてそう上手くいくかな？ その過程で俺はカードを1枚ドロ―しているんだぜ？」

「くっ……ターンエンド……！」

ユニコールに対して絶対的な自信があったためか、動揺を隠せないでいるようだ。手札を1枚残しているところを見ると伏せカードが先程と同じように《サンダー・ブレイク》の可能性はある。だがそれならば《シールド・ウイング》に対して発動し、突破してくるはず……つまりあれがブラフである可能性もある。

「俺のターン、ドロ―！」

ドロ―したカードは……よし、これなら……！

「チューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚！」

《スターダスト・ドラゴン》をデフォルメ化したようなドラゴンが《シールド・ウィング》の隣に現れる。これでシンクロ召喚の準備が整った！

「レベル2のシールド・ウィングにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！魔を打ち破る赤槍、騎士と共に戦地を翔ける風となれ！シンクロ召喚！いでよ、ドラグニティナイト・ガジャルグ！」

赤いドラゴンに乗った竜騎士、ガジャルグが召喚される。その攻撃力は2400、攻撃力が2300のユニコールを倒すことができる！

「いくぞ、バトルだ！ガジャルグでユニコールを攻げ……」

『むっつ！？』

俺の攻撃宣言を妨害するかのようにレヴァティンに攻撃を仕掛けてくる大勢の魔轟神達。自分達の主である神名が俺と戦っているのを知って、俺の妨害をしに来たのだろうか。

『龍士、いくら我であろうとお前達を乗せた状態では奴らの相手を仕切れないぞ』

「こうなったら……ガジャルグ！」

ユニコールを攻撃しようとしていたガジャルグを呼び、魔轟神達と戦ってもらわないと倒しきれそうにない。ガジャルグもそれが理解できたのか、すぐにこちらに来て魔轟神達を倒し始めた。

「おや……？デュエルを放棄するつもりですか？」

「お前……自分が魔轟神達に俺を襲うように指示しておいて」

「勘違いしてもらっては困ります。私は何も指示をしてはいません。私がこのデュエルで勝利することなど容易だったのですから」

そう言っただけはセットカードを表にし、発動する。するとガジャルグがどこからか発生した雷撃を受け、破壊されてしまった。

「サンダー・ブレイク……お前まさか」

「このカード……そしてユニコールの効果の事も忘れていたわけはありません。わずかな希望をあなたに与える為……そしてそれを一瞬で砕く為あえて発動しなかったのです」

「ということは……それじゃあ初めから勝てる見込みはなかったのか……?。」

「まあ退屈凌ぎにはなりました。が、いつまでも相手をして差し上げるほど私も暇ではありません」

「待て！逃げるのか!？」

「後はその魔轟神達に相手してもらいなさい」

そう言うと奴はユニコールを走らせ、どこかへと消えていってしまふ。しかしそれを追おうにも魔轟神達が邪魔をする為追うことはできない。

『マスター、私をモンスターとして召喚して下さい!』

「ウイン……やれるのか？」

『分かりません……けど私だって戦いたいです！』

ウインが憑依装着したところで攻撃力は1850。何かしらの補助を付けたとしてもその攻撃力を上回ってくるモンスターもいるはずだ。むやみにウインを戦いに参加させるのは気が引けるが……。

「よし、ウインをしようか……」

『その必要はない』

聞き慣れない精霊の声が聞こえたかと思うと、突如発生した雷が魔轟神達を次々と貫いていき、撃退していく。

「ウイン……すげえ」

『い、今のは私じゃないです！あんな攻撃、攻撃力が3000はな  
いとできませんよ！』

「じゃあ一体誰が……」

『龍士、あれを見る』

レヴァティンに促され、上を見上げてみるとそこには光り輝く巨大な機械天使の姿……そしてその背中には……。

「龍士、無事みたいね！」

「まったく、僕達に黙って精霊界に行こうだなんて……心配になるじゃないか」

「美浦……それに黒井！」

『どっしてここに……？』

「決まってんじゃない！助太刀よ！あたしの力、嘗めないでよね！」

そう言つて美浦が指を鳴らすと、デュエルディスクにカードをスキヤンさせて2体のモンスターを呼び出した。

「リバイス・ドラゴン、ヴォルカザウルス！あんた達ナンバーズの力、見せ付けてやりなさい！」

『承知した！』

『龍士、あの者達が魔轟神共を殲滅している内に我々はこの場を去るぞ』

「レヴァティン……？」

『お前は先程のデュエルで体力を消耗している。下手に干渉してはかえって足手まといになるだけだ』

足手まといか……確かにここは心を落ち着かせて、休んだほうがいいかもしれない。

「……ここは任せていいか？」

「勿論。僕達がこのモンスター達を倒しておくから任せてくれ」

「悪い。……レヴァテイン、行くぞ」

レヴァテインは頷くと、そのまま猛スピードで地上に向かっていった。

### 31・ユニコールの脅威（後書き）

ウィン「今回の最強カードはサンダー・ブレイクです！」

《サンダー・ブレイク》

通常罠

手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。選択したカードを破壊する。

ウィン「普通に発動すればディスアドバンテージですが、フリーチエーンである点を活かして使えます。今回のようにユニコールの手札調整は勿論、マインドクラッシュで宣言されたカードをコストにして狙いを外させたり、手札から捨てられたことで発動する効果のトリガーにしたりと利点は様々です。手軽には使いづらいカードではありますが、強力なカードでもあります」

次回のキーカード

「洗脳解除」

ウィン「ついに解き放たれる私の記憶……そこに眠る秘密とは……？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3380u/>

---

薫風と一緒に

2011年12月24日19時51分発行